
女の子たちは居候？

カレーライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女の子たちは居候？

【Nコード】

N6005M

【作者名】

カレーライス

【あらすじ】

最近感想の返事はしたほうがいとよく指摘されます。なので最初に書きますが感想の返事はいつもメッセージでしていません。

いつのまにか100万PVアクセス突破しました！
みなさんありがとうございます！

「あと5分だ！あと5分がんばれ！なんかテンションあがってきた

！」「フラグの回収に来たよ」『お前みたいのがいるから俺たちは女の子に見向きもされないんだ』「フリーターだつてやればできるつてところを見せてやる！」「亮くん……臓器売るしか道は残されてないんじゃないかな？」「亮さんは女の子になつたわけじゃありません。ちゃんと男の娘ですよ」「俺は義妹いもつとが大好きです。妹じゃありませんよ？義妹いもつとです！」「麻雀のルールもしらない俺が代打ちの人に勝つてしまつお話なんてどうだ？」「倍プッシュだ……」「お前らには敵わねえな……サヨナラホームランだ」

第1話 女の子たちがやってきた？

顔も普通。

性格も普通。

……だと思っ。

恋愛経験は一切なし。

そんななにもかもが普通な俺、『上園亮』^{うえそのりょう}の唯一普通じゃないところといえば親が旅好きで家に帰ってこないということ。

どうやって稼いでるのかは知らないが毎月生活費が送られてくるから金銭面では苦勞していなかった。

問題は生活面だった。

親が出ていったのが中1の頃。

あの頃は本当に辛かった。

1ヶ月の金の振り分け、家事などまったくできなかつた。

そして高2になった今でも飯はコンビニに頼ってしまったている。

そんな生活をおくっていた4月のある日……

両親が死んだ。

原因は病死。

なんの病気で死んだのかはわからない。

とにかく親父たちには一言言いたいことがある。

「ざまあみる」

俺を放っておくから天罰がくだったんだよ。

……まあ死んだからって生活が変わるわけではないが……

俺を引き取ってくれるって言う親戚もいたが迷惑はかけたくないから断った。

葬式が終わり俺は家のソファに座ってポーツとしていた。

親父達が死んで残ったのは多額の保険金。

これだけあれば金銭面は苦勞しないはずだ。

「親父たちが死んでもどうせ生活は変わらないしな」

そんなことを言っていた時だった。

ピンポン

「ん？誰だ？うちに用事なんて……新聞はお断りだぞ？」

そんなことを言いながらインターホンに取り付けられているカメラの画面を見る。

「……………誰？」

画面を見るとそこには知らない女の子が3人……

『本当にここで合ってるの？』

茶色がかった黒い髪をポニーテールにした女の子がカメラを覗きこみながら言う。

『うーん……………私に言われてもね〜結衣どう思うっ？』

他の2人より一回り小さい女の子が言う。

この子は栗毛色の長い髪の毛をそのままおろしている。

この子は歳下っぽいな……………

『なんで私に聞きますかね……………』

今度は眼鏡をかけ、胸がすごいことになっている結衣と呼ばれる人が言う。

この人も黒くて長い髪の毛をおろしている。

『それよりも……………応答がないんだけど』

『留守かな〜』

『お葬式の時はいましたよ?』

葬式のことを知ってる?

じゃあ親族?

いや、こんな子達はいなかった。

とりあえず応答するか……

「はい」

『出るのが遅い!』

いきなりポニーテールの人が言ってくる。

つてか第一声から『出るのが遅い』って言われるとは思わなかった
……

「どちら様ですか?」

『ええつと……あの……』

小さな女の子がもじもじする。

『とりあえず中に入れてもらえませんか?』

眼鏡をかけた巨にゆ……げふん……眼鏡をかけた女の人言ってくる。

いきなり知らない人を家に入れろって言われても……

『あなたのお父様から伝言を預かっています』

「親父から？」

俺はそれを聞いて家のドアを開ける。

「あんた出るのが遅いのよ！！」

いきなりポニーテールの人にそう言われる。

「それが初対面の人に言う言葉か？」

「おっと……ごめんなさい。私は沢田優里さわたゆうり。よろしくね亮

俺の名前を知ってるってことは親父と知り合いつてことは本当なんだろうな……

「私は塚本円つかもとまどかっ！よろしくね！亮君！」

今度は小さい子が自己紹介をする。

「私は駒崎結衣こまざきゆういです。結衣って呼んでくださいね亮さん

「あっ！私も下の名前で呼んで！」

「私は別に下の名前じゃなくてもいいけどあんたがどうしてもって言うなら呼んだっていいわよー！」

シンデレレ？

「と……とりあえず上がれば？」

「」「」おじやまします！」「」

そして3人は家に入ってくる。

俺はリビングに通ず。

「で？親父からの伝言って？」

俺は早速気になっていたことを聞く。

「これをどうぞ」

結衣が俺に一枚のDVDを渡してくる。

俺はそれをDVDプレイヤーに入れる。

画面に親父が映しだされる。

『なあ母さんネクタイ曲がってないかな？』

『ちょっとあなた！始まつてるわよ！？』

『え！？待つて！！撮り直し！！』

そこで一回画面が暗くなる。

「なあ……見なくてもいい？」

「だ……だめですよ！」

結衣が慌てて言う。

次に映しだされたのはかつこいいと思ってつけたのかサングラスをかけた親父……

「本当に見なきゃだめ？」

「亮君！」

「はい……」

『おほん……最愛なる我が息子よ』

その息子を放置しといてよくそんなこと言えるな……

『きつとお前がこれを見るとときには父さん達は死んでるだろう。そこで息子に頼みがある』

死んだのに頼みかよ……

『そこに女の子が3人いるだろう？その子達を預かってほしいんだ。事情はその子達が話すまでは聞かないでやってくれ。みんないい子だからよろしくね。じゃあまたね』

親父は笑顔で手を振る。

そして映像は終わる。

死んだんだからまたもなにもないだろ……

それよりも……急に来た女をうちに居候させると？そうゆうことなのか？

なんであんな親父の頼みを聞かなきゃいけないんだよ。

ここは丁重にお断りを……

「あの……3人共帰ってもらっても……」

「亮……だめなの……？」

「亮君……私達もうここしかないの……」

「無理なことを言ってるのはわかります！でも……！もうここしかないんです！！」

彼女達は涙目で言ってくる。

いきなりそう言われても……

「俺は君たちのことよく知らないし……」

「私は知ってる……！あなたのお父さんからたくさん聞いたから！」

「私も！」

「私もです！」

他人から見ればこんな女の子と同棲するなんておいしいイベントを逃しちゃいけないんだろうけど言われてる本人からしたら正直迷惑だ……

でも……

彼女達は本気だ。

その気持ちはすごく伝わってくる。

事情があると親父は言っていた。

彼女達は帰る場所はまだここしかないとも言っていた。

そんな子達を俺は放っておくのか……？

それじゃ親父と一緒にじゃねえか……！！

あんなやつと一緒にになるくらいなら……俺は彼女達と共に暮らす道を選ぶ。

「事情はよくわからないけど……すこしの間なら……」

そう言った瞬間彼女達の顔が一気に明るくなる。

「ありがとう！亮君！」

いかなり円が飛び付いてくる。

「わっ!!」

俺は飛び付かれた衝撃で後ろに倒れる。

「ちょっと!円なにやってるのよ!」

「そうですよ!円がやるなら私も!」

いきなり結衣も俺に抱きついてくる。

そんなことされるとあなたの胸が……!胸がああああ!!

俺は鼻血が出そうになるのをなんとかこらえる。

それから俺と彼女達との同棲生活が始まった。

第2話 女の子たちの寝る場所確保？

「まずは寝る場所だな」

俺は3人に言う。

「親父とおぶくろの部屋がそれぞれあまってるけどどうするっ…」

「私は亮君の部屋でもいいよ？」

円がいきなりそんなことを言い出す。

「円なに言ってるの!？」

それに優里が反応する。

「そうですね。円じゃなくて私が亮さんの部屋で寝ます」

「じゃあ私よ!?!」

「なんで3人共俺の部屋なんだよ……」

「「さみしいから」「

円と優里はそう答える。

しかし結衣は……

「襲いやすいから……」

「「「!?!?!」」」

いきなり襲うとか言いましたよこの人……

しかしそれもそれでラッキーな気が……

「あんたラッキーとか思っていないでしょうね?」

「お………思っ
てねえよ……!」

「亮君あやしい………」

「思っ
てないっ
て……! 結衣もそんなこと
言わない……! 中学生が
この中
にいる
んだか
ら……!」

「「「中学生?」」」

「え? だ
って…… 円
って中
学生
じゃ………」

「亮君………酷い………」

「え………?」

「私もみんなと同じ年なのに………」

「みんな
同じ年?
ってこ
とは結
衣も同
い年?」

「はい」

「発育よすぎだろ！！」

「はう……………！！！」

「それよりも亮君酷いよ……………」

「う……………うめん……………」

「謝っても許さないもん……………」

「じゃあどっすねば……………」

「亮君の部屋で私を寝かせて」

「田ぢずるい……………」

「そうですよ……………田ぢずるい……………」

「さあ……………亮君どっすなの……………」

「……………わかったよ。でも今日だけだからな……………」

「うん……………」

「うわ……………」

田が俺に飛び付いてくる。

さっきはとっさのこととで気がつかなかったが田にもす……………しの胸の膨らみがあるわけ……………

飛び付かれて密着されるとそれが俺に当たってるわけで……
理性を保っていられなくなりそうなわけで……

「円離れて……」

「そんなっ！亮君は私のこと嫌いなの!？」

「そうゆうわけじゃなくて……ほら、円も一応女の子なんだし少しは恥じらいというものを……」

「あっ！亮君私に抱きつかれてドキドキしたんだ」

「してない!」

「そこまで否定しなくても……しゅん……」

「そ……それよりも！部屋は優里が親父の部屋で結衣はおふくろの部屋でいいか？明日からは円が優里と寝るってことで」

「うん!」

「あんたに命令されるのもなんか納得いかないけどね」

「それでいいです……（亮さんと寝たかった……）」

「結衣どうしたの?」

「なんでもないです……」

「？」

「じゃあ夕飯にしましょー！」

優里が立ち上がる。

「じゃあコンビニ行かないと……」

俺はそう言う。

すると……

「あなたなに言ってるの？女の子がこんなにいるのよ？手料理を食べさせてあげるに決まってるじゃない！」

優里は笑顔でそう言う。

手料理か……

中1から食べてないから4年振りか？

「じゃあよろしくな」

「任せて！さっ！円！結衣！作るわよ！」

「優里！私料理できないよ？」

「私もです」

「へ？」

優里が驚く。

「なんで作れないのよ！もういいもん！私が1人で作るから！」

そう言っつて優里は料理にとりかかろうとする。

……が

「なんで冷蔵庫になにもないのよー！」

「飲み物はあるぞ？」

「そうゆう問題じゃない！！みんなで買い物にいくわよー！」

「えー」

「えーじゃないー！」

「はい……」

優里は家族に例えるとおふくろの位置にいるな。

そんなことを俺は思った。

第3話 女の子たちとお買い物? 〳食べ物〳

「歩きにくいんだけど……」

夕飯の材料を買ったためにデパートに向かう俺たち。

なぜか3人は俺にくつついてくる。

優里は服をつかんでるだけだが……

「亮君あつたかいんだもんっ!」

「円と同意見ですう」

「いや、でも周りの視線が……」

「気にしたらそこで試合終了だよっ」

「それ諦めたらだから……」

そしてやっとデパートにつく俺たち。

「りよ……亮はなにか食べたいものある?」

優里に聞かれる。

「俺か?俺はなんでもいいよ」

「そうゆうのが一番困るんだけど……」

「じゃあオムライス？」

「オムライスね。楽しみにしなさいよ！」

そう言っつて買い物を開始する。

「あれ？円は？」

買い物をしている途中に円がないことに気がつく。

「確かにいませんね……」

結衣も辺りを見ながら言っつ。

「あっ……いた」

俺は円を見つける。

「円その手に持つてる物は？」

「お……女の子は甘い物が生きていくのに必要なのっ！」

円の手には大量のお菓子が抱えられていた。

「……太るぞ」

俺は小さな声で呟く。

「女の子に太るっつて言葉は禁句なの！！それに少しづつ食べるから

「いいもん！」

「そ………そうなのか………」

俺は円に圧倒されてしまう。

「ほら、会計に行くわよ」

優里にそう言われて俺たちは会計を済ませる。

「あつ………デパート来たついでにさお前たちの服買わないか？」

「「「え？」「」」

「持つてるの少ないと女の子なんだし不便だろ？」

「でもいいの？」

優里が心配そうに聞いてくる。

「別にいいって。親父たちの保険金があるし。それに一緒に暮らすから俺からのプレゼントだ」

俺がそう言つと3人共涙目で俺を見てくる。

「？」

俺は首をかしげる。

「「「ありがとう！」「」」

「うわっ!?!」

3人がいきなり俺に飛び付いてくる。

「いいんだよ。さっ!早く行こっ」

俺たちは服を買いにデパートの二階に向かった。

第4話 女の子たちとお買い物? く洋服と…??

「亮君どうかな!？」

試着を終えた円が俺にたずねる。

うん。

ロリな円には似合ってるファッションだ。

「かわいいよ」

「ありがとう!」

「亮……どうかな？」

今度は優里が恥ずかしそうに俺にたずねる。

「似合ってるよ」

俺は優里にそう言う。

「ほ……ほんと？」

「ああ」

「じゃあこれにする!」

優里は嬉しそうに笑う。

「亮さん!どうでしょう!？」

「ぐはっ!」

結衣が選んだ服は胸が強調されていて露出が激しい……

「ちょっと……それは……」

「似合っていないでしょうか……?」

「似合ってるけど……目のやり場に困るっていうか……」

「結衣酷いよ!胸が小さい私へのいやがらせだ!」

円が言う。

「そんなことないですよ円。それに胸が大きいと不便ですよ?肩はこるし、男の人の視線はやらしいし……」

「視線って気づくものなのか?」

俺はたずねる。

「男の人は気がついてないと思ってるんでしょうけどバレバレなんですよね。女性にアンケートをとった結果でも気づくのが多数です」

「そ……そうだったのか……」

次からはもっと気を付けなければ……

「私は亮さんになら見られてもいいですけどね」

「私も亮君ならいいよ!」

「私も亮だったら……」

みんなして何言ってるんだよ……

「服、ありがとう」

服を買ってから優里が言ってくる。

「どういたしまして」

「ねえ……すこしだけわがまま言ってもいいかな……?」

「ん?」

「下着も欲しいんだけど……」

「別に構わないぞ?」

俺たちは下着売り場に向かう。

「亮君!入ってきなよ!」

「そつよ!亮に選んでほしいんだから!」

「恥ずかしいだろ!?!」

「どうせ亮さんは今夜見ることになるんですから!」

「結衣はなに言ってるんだ!」

「ほら早く!」

俺は無理やり手を引っ張られてしまつ。

「ねえねえ!亮君はこの水玉のとこっちのお花のどっちがいいと思
う?」

「……」

「目閉じてたら見れないよ!」

「いやだ!」

「もう!」

ふゝ……

「ひゃあ!」

俺は耳に息を吹き掛けられて変な声を出してしまつ。

「あはは!亮君かわいい!」

「びっくりするだろ!?!」

「ごめんごめん。それでどっちがいいと思う？」

円が俺の目の前に下着をかかげる。

……まあ円の身長が低くて俺の目の前まで届いてないが……

「み……水玉？」

「そっか、亮君は水玉が好みか？」

「亮！」

「ん？」

「亮は水色とオレンジどっちがいいと思う？」

「オ……オレンジ？」

「亮は私にオレンジの下着をつけてほしいのね」

「すみません……もうすこし大きいのは……」

結衣が店員さんにそんなことを聞いていたのは見なかったことにし
よう……

そして会計を済ませて俺たちは家に帰った。

第5話 女の子たちとお風呂に入る？

「……いただきます」「」「」

俺たちは優里が作った夕飯を食べようとする。

久しぶりの手料理だ。

味わって食べよう。

俺はオムライスを口に運ぶ。

「ど……どっっっ」

優里が心配そうに聞いてくる。

「うまい！」

「ほんと！？」

「ああ！うまいよー！」

「やった！」

優里が笑う。

それからみんな話しながら夕飯を食べる。

「あれ……？」

なぜか俺の頬をなにかが濡らす……

「どうしたの亮？」

「亮君が泣いてる！？」

「あわわ……ほんとですう……！」

「どうしたんだらうな……？久しぶりに手料理なんか食べたから涙
なんか出てきたのか？」

俺は流れてくる涙を自分の袖で拭う。

「きつと……」

「？」

「きつとこうやって人と食べるからよ」

優里がそんなことを言う。

「そうかもな……」

ん？でも待てよ？学校では人と昼飯食っても涙なんか出なかったぞ？

まあいつか……

そして俺たちは夕飯を済ませてテレビを見る。

「誰か風呂入ってきてもいいぞ?」

俺は3人に言う。

「なら……私がむぐつ」

結衣が優里の口を手でふさぐ。

「どうしたんだ?」

「な……なんでもありません!亮さん先に入ってください!」

「?」

「ほら!早く!」

「じゃあお言葉に甘えて……?」

なんなんだろう?と思いつつも俺は風呂に入る。

その頃3人は……

「優里!あなたは馬鹿なんですか!?」

「な……!!」

「優里が先に入ったら優里は亮さんとお風呂に入れななんですよ!」

「!?!」

「わかったら準備してください。円、亮さんはお風呂に入りましたか？」

「大丈夫だよ！」

「じゃあ行きますー！」

なにも知らない亮は……

「はあ、風呂はいいね。風呂はリリンの生み出した文化の極みだね」
そんなことをエ アンゲ オンのカ ル君風に言ったその時だった。

「亮さん！」

「亮君！」

「りよ……亮……」

いきなりタオルだけを巻いた3人が風呂に入ってきた。

「うわっ！！なんだおまえら！？」

「背中流しますー！」

「亮君洗って〜」

「えっと……その……」

3人はそんなことを言う。

まあ優里は顔を赤くしてるだけだけど……

「待つんだおまえら！落ち着け！」

「もう私は止まりません！！亮さんのエクスカリバーを見るまでは絶対に出ませんから！！」

「なに言ってるんだよ！！」

「亮君洗って〜」

「恥じらいをもて！！」

「……」

「プシュー……」

優里は頭から蒸気をだしていた。

「このままじゃ優里が逆上せちまう！！」

俺は優里を風呂から出す。

「亮さんのエクスカリバー素敵……」

「亮君……すごい……」

「え？」

俺は下を見る。

そして自分がタオルを巻かないで浴槽から出たことに気づく……

「うわあああー!」

俺は急いで風呂から出る。

「うっ……ひっく……もうお婿に行けない……」

俺は体操座りでいじけていた。

「じ……ごめんね？亮君？」

「ひっく……」

「だ……大丈夫！私が亮君をもらってあげるから!」

この子に恥じらないのか？

「それよりも亮君！そろそろ寝よ！今日は一緒に寝てくれるんだよねっ?」

俺は円に手を引かれて部屋に行く。

「亮君あつたかいね……」

ベッドに2人で入っていると円がいきなりそんなことを言う。

「急にどうしたんだ？」

「私はこのぬくもりを知らないから……」

「？」

「な……なんでもないよ！さっ！早く寝よ！…」

そして俺たちは眠りについた。

第6話 女の子たちは転校生？

今日は月曜日。

俺は学校に行くために重いまぶたをあける。

右を見ると昨晚一緒に寝た円がいた。

そこまではよかった……

左腕に心地よい感触……

左を見るとそこには俺の腕を自分の胸に挟んだ結衣が……

足元には優里がいた。

どうゆう状況だ？

俺はそんなことを考える。

待て……これは今まで女の子と触れあってこなかった俺がいきなり女の子と触れあってしまったためもつと欲がでてしまった……

つまり俺がつくりだした夢だ。

ほら、一旦目を閉じてまた目を開けたら一緒に寝た円だけが隣に……

「夢じゃなかった……」

結局目をもう一度開けても結果は変わらなかった。

俺はみんなを起こさないように起きる。

そして部屋を出ていこうとするが。

ガシッ！！

「ひっ………！」

いきなり腕と足をつかまれる。

後ろを見るとそこには昨日から居候している女の子達が……

「どこ行くの亮君？」

「朝ごはんなら私が作るわよ？」

「おはよつのキスがほしいです」

「ほら、今日は学校だし………」

「」「」「あっ」「」「」

みんなも思い出したようだ。

でもみんななどこの学校に行くんだ？

俺はその疑問を朝食時に聞く。

「ん？まだ編入手続きが終わってないから今日は学校ないわよ？」

「じゃあ早く起きることなかったんじゃ……」

「亮の朝ごはんがないでしょ？」

「ありがとな」

俺は朝食を食べ家を出ようとする。

「いつてらっしゃい」

「いつてきますのキスだよ！亮君！」

「私もほしいです！」

「馬鹿なこと言ってないで早く着替えるよ？じゃあいつてきます」

俺は家を出て歩いて学校に向かう。

俺の行く学校は『私立橘学園』

生徒の意見を尊重するとかで生徒会が中心の学校となっている。

生徒会が修学旅行はハワイに行くと言えば修学旅行はハワイになる。

そんな自由な学校だ。

「亮！」

後ろから俺を呼ぶ声がする。

「ん？彰か」

声の主は『佐々木彰』ささきあきら

俺の親友だ。

正直バカなんだけどすごくいいやつ。

「バカはよけいだよ」

「紹介に口出しするな」

「それよりも！今日さ転入生が来るらしいんだよ！」

「へ〜」

手続きが終わってないって言ってたからあいつらじゃないよな？

「それで？男？女？」

「女の子らしいんだよ！かわいい子がいいな〜1人でも彼女になつてくれないかな〜」

「1人でも？」

「なんでも転入生は3人らしいよ？」

ま……まさかな……

「亮どうしたの？顔色悪いよ？」

「なんか嫌な予感が……」

学校に着きHRが始まる。

担任の『斎藤さいとうはじめ』が前に立つ。

斎藤先生はだるそうにあくびをする。

「えっと……えー……何言っか忘れちゃった」

あんなそれでも担任か？

「先生！転入生は来ないんですか!？」

「それは他クラスだ」

その言葉を聞いた瞬間俺の心は軽くなった。

「……と言いたいところだが、入ってきていいぞ」

先生が廊下にいる生徒に声をかける。

「男子共よかつたな〜女の子だぞ〜」

「ひゃっほい!〜!」

「キター〜!〜!〜!〜!〜!〜!〜!」

そして転入生が入ってくる。

正直来るのは1人だけだと思ってた。

それなのに……

「3人同時に来やがった……」

入ってきたのは俺がよく知る少女達。

そしていま俺の家に居候している少女達だった。

第7話 女の子たちは男子にモテる？

3人は俺を見つけると顔を明るくさせた。

「じゃあとりあえず自己紹介頼む。チャンスは一度だからな？」

ワンチャンスかよ……

「えっと……沢田優里ですよろしくおねがいます」

「塚本円です！よろしくね！」

「駒崎結衣です。よろしくおねがいます。ちなみにスリーサイズは「そんなこと言っちゃだめ！」」

円が結衣の爆弾発言を止める。

「じゃあ3人は上園の後ろな」

「俺の後ろ……だと……」

なんか怖くてたまらないのだが……

起きたときのあいっすら怖かったし……

「（なんで今日転入してくること言わなかったんだよ）」

俺は小声で話す。

「（亮をびつくりさせようと思って。それよりも同じクラスになるなんてね〜）」

「（きつとこれは運命の赤い糸だよ!）」

「（そして亮さんと私たちは裸のお付き合いを……）」

「（結衣は一回そのエロい思考を取り除こうか）」

俺は結衣の発言に注意する。

そしてHRが終わり優里たちはすぐにクラスメイトに囲まれる。

「どこから来たの!？」

「今はどこに住んでるの!？」

「兄弟は!？」

「3人って知り合いだったの!？」

「俺と付き合っグフツ!！」

「かわいいね!モデルかなにか!？」

「いや〜人気者だな〜そう思わないか?彰?」

遠くに避難した俺は隣にいる彰に話しかける。

「っっていねえ!？」

さっきまで彰は隣にいたはずなのに俺の隣からいなくなっていた。
よく見ると優里達の取り巻きの中にいた。

「はあ……あいつらも人気だな……」

「質問はあいつが答えるわ」

優里がいきなり俺を指差す。

みんなが一斉にこっちを向く。

「へ？」

「おい！上園！！一体どうゆう関係だ！！」

男子が一斉に俺のもとに来る。

「亮！！信じてたのに！！」

彰が涙目で言ってくる。

「なにを信じてたんだよ！？」

「さあ！！どうゆう関係なんだ！？」

「亮さんと私達は……」結衣待て！！」

結衣がなんか危ないことを言おうとしたから俺はそれを阻止する。

しかし阻止するときに名前を呼んだのが間違いだった。

「おい！！こいつ今駒崎さん呼び捨てにしたぞ!？」

「縄で結んで拷問だ!！」

「お……おまえら落ち着けええええ!！」

「逃げたぞ!！」

「追え!！」

男子達は教室から出ていく。

「ごめんね。バカばかりで」

「おもしろいからいいよ!！」

「ところで沢田さん達って上園君とどうゆう関係なの?。」

「えっと……」

優里達3人は顔を近づけて相談を開始する。

「(ここは正直に言って亮を困らせるか嘘をついて亮を困らせるかのどちらかね)」

「(困らせるしかないの!?)」

「（嘘ついて許嫁とか言っておけば学校公認のカップルです!）」

「（ここは親戚とか言っておこうよ。きっと亮君を困らせたなら亮君に嫌われて追い出されるかもよ?）」

「（それはだめ!）」

「（もう追い出されるのは嫌です!）」

「（じゃあ親戚ってことで）」

「私達亮とは親戚なの!」

「そうなの!？」

「うん! そうだよ!」

「従兄弟同士なんです!」

「そうだったんだ〜でも似てないね?」

「でもモテそうなところは似てない?」

「言えてるかも!」

「（亮がモテる!?）」

「（亮君が誰かに取られる可能性が!?）」

「（大変です!）」

「亮ってモテるの?」

優里はできるだけ動揺していることがバレないようにする。

「モテるよ〜男子にねっ!」

(だ……男子!?)

(男の子同士で……)

(駄目です!不健全です!)

「そんなに驚かなくていいよ〜どうせ嘘だから」

「なぜ……わかった……」

「あなたの言うことだもん」

「酷っ!」

(よかった……)

(見てみたかった……)

(安心したですう……)

「でも上園君って優しいよね〜」

「あっ!それ言ってる!」

「そうなの？」

優里は聞いてみる。

「うん！すごく優しいんだよ！」

（そっか亮は他の人にも優しいんだ）

（他の人にも？）

（なんか嫉妬します）

なぜか3人の心が通じあっていた。

「あっ！授業始まる！」

クラスメイトが自分の席にもどる。

数分後ぼろぼろになった亮が教室にもどってきた。

「（亮？あんた他の女にも優しいんですってね？）」

「（亮君は私達にだけ優しくければいいのに！）」

「（今夜たっぷり優しく触って……）」（下ネタ言ってんじゃねえよ）」

「（せめて私達があんたのために嘘をついてあげたんだからご褒美くらいちょうだいよ！）」

「（嘘？）」

「（亮君が困ると思って私達の間係を従兄弟にしたんだよ）」

「（それは助かるな）」

「そこじゃべるな」

先生に注意されて俺たちは授業に集中した。

第8話 女の子たちと帰り道？

放課後。

「亮帰ろうぜ！」

「ああ」

俺は彰と帰ろうとする。

ガシッ！

俺の手がつかまれる。

手をつかんだのは例の3人。

「ご褒美……」

「まずは一緒に帰って！」

「そしてそれから……」「それ以上言つな」

「彰もいるけどいいか？」

「彰？」

「やつほ」

彰が俺の後ろから手をふる。

「ああ！佐々木くんね！」

「1日で名前覚えてもらえるなんて俺感激！！」

「泣くほどか？」

「だってこんなかわいい子達に名前を覚えてもらったんだぞ！？お前はうれしくないのか！！」

「それは……………」

チラッと優里達を見るとなぜか期待の眼差しで見られていた。

「う……………嬉しいけど……………」

「だろ！？」

嬉しいと言った瞬間優里達の顔が明るくなった。

「と……………とにかく帰ろうぜ」

俺たちは学校を出る。

「沢田さん達ってどこに住んでるの？」

「下の名前がいいよ」

「亮〜この子達いい子だね……………」

「なんで泣くんだよ」

「どこに住んでるかって言われても……」

優里が俺のことを見てくる。

俺は目で言っていていいと指示する。

「実は亮の家に……」

「なっ……！！亮今日久しぶりにお前の家に泊まりに行きたく……」

「下心見え見えだぞ？」

「だってしょうがないじゃないか！！こんなかわいい子達と同棲なんかしやがって……！！」

「そ……そう言われても……」

「あははっ！彰君っておもしろいねっ！」

「円笑い事じゃないって……」

俺は彰と無理やり別れ家に帰った。

第9話 女の子たちとファーストキス？

「さあ亮！！ご褒美の時間よ！！」

「え？なにかくれるのか？」

「ちがーう！！あなたが私達にあげるの！！」

「そう言われても……なにがほしいんだ？」

「亮さんの太い」一回その思考は捨てようか

「亮君のキスなんかどう？」

「え……」

「私は賛成です！」

「わ……私は……」

「優里素直になる！！」

「私も……ゴニョゴニョ……」

「さあ！！亮君のファーストキスをちょうだい！！」

「いや……ちょ……待って！！おまえらはそれでいいのか！？」

「」「？」「」

3人が首をかしげる。

「だから俺なんかキスされて嫌じゃないのかよ!?!」

「嫌じゃない(です)」「」

「さっ!私のファーストキスだよ!」

円が俺に迫ってくる。

「む……」

俺は円の頬にキスをする。

他の2人にも同じ様にキスをする。

「ファーストキスは自分が好きなやつにしてもらえ!」

今の俺の顔は真っ赤だろう。

「わかってない!」

「まあ亮君らしいんじゃない?」

「亮さんシャイですねっ!」

「ひるむ……」

「さっ!夕飯の支度するからテレビでも見てて」

俺たちは優里に言われた通りテレビを見る。

見てるのは某音楽番組。

「アニソンが一位か……タモさんもびっくりだよなー」

「アニメブームなのかな？」

「亮さんはアニメ好きってどう思います？」

「俺？俺は……」

言えない！！俺が結構アニメ好きだったなんて言えない！！

「まあ好きなものは人それぞれだし偏見はないよ」

「（よかったです）」

「？」

「な……なんでもないです！」

「？」

「できたわよー」

俺たちは優里が作った夕食を食べる。

「うまいよ」

「あ……………」

(亮って「じゅじゅ」とおぼろげと言いつのよね…………)

「亮君あーん！」

隣にいる円が料理を俺の口にいれようとする。

俺は言われた通りに口を開ける。

「にゅふふっ」

円が嬉しそうにする。

「ずるい！私も！亮！…！口開けなさい！」

「「らら」行儀悪いぞ？」

「私じゃ……………だめ？」

「うっ……………」

くそっ！

一瞬ドキッとしたじゃねえか！

結局その後結衣もやってきて俺は自分のおかずを食べれなかった。

第10話 女の子たちとお昼ご飯？

「ん……」

俺は目を覚ます。

「なんでまた俺の布団にいるんだよ……」

布団を見ると俺の家に居候している3人がいた。

「亮……」

「亮君……」

「亮さん……だめっ……あっ……そんな強引に……！」

結衣はどんな夢見てんだよ……

「ほらお前ら起きろ。学校だぞ」

俺は3人を起こす。

「んっ……」

まずは優里が目を擦りながら起きる。

「おはよう優里」

「おはよう……」

「まだ寝ぼけてるだろ？顔洗ってこい」

「は〜い……」

本当に寝ぼけてるな……

「亮さん」

「うわっ！結衣！？いつのまに！？」

いつ起きたのか結衣が俺に抱きついてくる。

「亮さんこのまま襲ってもいいんですよ？亮さんのあれも元気そうですし」

「それは朝だからしょうがないの！！」

「むにゃ……どうしたの……？っ！！結衣！！朝から亮君を襲わないの！！」

「亮さんから襲ってもらうんです！！」

「亮君はそんなことしないもん！」

「亮さんだって男の子ですから私の胸を押し付けければ理性なんか吹っ飛ばはずです！！」

勝手に決めないですよ……

「あああああ！！」

「」「優里の声？」「」

急に下から優里の声が聞こえた。

なので俺たちは下に降りる。

「どうしたんだ？」

「ご飯が……」

「飯がどうしたんだよ？」

「ご飯炊くの忘れちゃった……」

「それってそんなに驚くことなのか？」

「だってご飯ないとお弁当作れないのよ！？」

「買って行けばいいじゃん」

「うっ……それもそうんだけど……」

「なんかヤバイのか？」

「お金がかつちゃうなって……」

「まあ1日くらいいいだろ」

それから俺たちはパンを食べて家を出る。

「購買で買いたいだと？」

「うん！」

「まあ好きにしろ。俺はコンビニで買って行く」

俺は途中コンビニに寄って学校に向かう。

昼休み。

「亮！！なによあれ！！」

「亮君もしかして知ってたね！？」

「亮さん酷いです！！」

彰と一緒に昼飯を食っていた俺は3人に文句を言われていた。

多分購買の混雑で昼飯を買えなかったのだろう。

「コンビニで買わないお前らが悪い。ちなみにあげないからな？」

俺はそう言って昼飯を再開する。

「沢田さん達昼飯買えなかったの？俺のでよかったら分けるよ？」

「あっ！俺も！」

「俺も！」

男子達が3人に集まる。

「モテると得するんだな。そう思わないか彰？」

俺は3人から彰に視線をもどす。

すると……

そこには彰の姿はなかった。

「またいねえ……」

3人に集まっている男子達をよく見るとその中に彰の姿を確認できなかった。

それから午後の授業も終わり俺たちは下校する。

「この学校の男の子達って優しいのね、亮とは違って」

「亮君酷かった……」

「これはなにかしてもらわないと……」

「そうだぞ亮。お前も俺みたいに昼飯あげればこんなことにはならなかったんだぞ？」

「彰……」

「ってことでゲーセンにいかないか？」

「なにがどうなってそうなったんだよ……」

「ゲーセン!？」

「行ってみたい!」

「行くです!」

なぜか俺たちはゲーセンに行くことになった。

なにも起こらなきゃいいけど……

第11話 女の子たちとゲーセンで？

「ここがゲーセン……」

「すごいね」

「初めて来ます……」

「お前ら初めてなのか!？」

「うん」

「来たことないよ?」

「初めて来たからびっくりしてるんです」

ゲーセンに来たことない人がいるなんて考えたこともなかった……

「じゃあ優里ちゃん達初めてのゲーセン楽しもうよ!」

彰がそう言い俺たちはゲーセンに入る。

「亮!あれとつて!」

「ん?どれだ?」

俺は優里に手を引かれる。

「ぬいぐるみ?」

「うん……だめ？」

「そんなことないよ」

俺は優里が欲しいと言ったぬいぐるみをとるため集中する。

自慢ではないが俺はUFOキャッチャーは得意なほうだ。

俺はぬいぐるみをとって優里に渡す。

「ありがとう亮！」

優里が抱きついてくる。

「どういたしまして」

俺は優里の頭を撫でる。

「落ちた〜!!！」

「とれないですう!!！」

他の2人が騒いでいる。

俺たちは2人のもとに向かう。

「彰どうして涙目なんだ？」

「べ……別に泣いてなんか……!!！」

「彰君もう一回!!」

「私もお願いします!!」

「はい……」

彰は財布をだして金を入れる。

「彰……金は返さないからな？」

「亮はそう言うと思ったよ……」

「2人はなにをとろうとしてるんだ？」

俺は2人がとろうとしてるものを覗きこむ。

円は初音 クのフィギュア……

結衣はハ ヒのフィギュア……

「なんで2人ともフィギュアなんだよ!？」

「これがほしいの!だってなんかかわいいもん!」

「私もほしいんです!」

円はただ純粹にかわいいからという理由で初音_ニ は知らなそうだ。

でも結衣はなんかとろうとしてる熱意がちがう。

多分ハル 自体を知っててとりたいつて感じた。

な はシリーズのフィギュアがあったら俺も頑張ってたかもしれな
い……

とくにフェ トな!!

おっとそんなことを考えてる場合じゃない。

彰の金が減っていく姿をを楽しまなければ。

「彰君!!」

「私もです!」

「はい……」

彰意外に金持ってるな

「2人とも?彰君に迷惑だよ?」

「優里ちゃん!」

ちっ……

これで2人は彰の金を使わなくなっちまう……

「使つなら亮のお金使わなきゃ」

「なに！？」

「亮君！」

「亮さん！」

「2人とも待つんだ！！俺がとる！！それじゃだめか？」

そう言ったら2人は自分たちじゃとれないからと俺に任せてくれた。

よしこれで俺の金の消費は最小限に抑えられる。

「おっと！手がすべった！！」

急に彰がボタンを押してしまう。

「ごめんな」

こいつ……わざとやりやがった……

そんなに俺に金を使わせたいか？

お前の思い通りにはさせない！！

彰がボタンを押してしまったせいでもう横には動いてしまったがここからとってみせる！！

俺はなんとかUFOキャッチャーの爪でフィギュアの箱の端をとらえる。

するとフィギュアの箱が回転し取り出し口に落ちる。

「亮君ありがとう!」

「どづいたしまして」

「ちっ……」

「お前の思い通りなんかになると思っなよ?」

それから俺は結衣にもとつてやり帰宅する。

「楽しかったね!」

「亮大事にするから!」

「私も箱から出さないで飾るとききます!」

結衣それはちよつと……

「ん?優里どうした?」

優里が俺の目の前に来る。

チユツ……

「お……お礼!」

「優里ずるい!私も!」

「私もです！」

なにが起きたかわからず俺は放心状態になってしまった。

3人にキスされた……？

どうして……？

訳がわからない……

「ちょっと！？亮どうしたのよ！？」

「亮君！？」

「シヨートしちゃってますう！」

俺が最後に聞いたのは3人の悲鳴に似た声だった。

第12話 女の子たちからの告白？

「ん……」

「亮大丈夫!？」

「急にどうしたの!？」

「心配したですう」

俺が目を覚ますと優里達が心配そうな顔で俺を見ていた。

「ああ。ごめんごめん」

「よかったあ」

「本当にどうしたの？」

「なんかびっくりしちゃってさ」

「」「」「びっくり?」「」

「急にキスなんかしてくるんだもん」

「す……」

「す?」「」

「好きなんだもん!キスしちゃいけない!？」

「は？」

「みんな亮君が好きなんだよ？」

「？」

「ここに来る前から亮さんのお父さんに亮さんのこと聞いててそれだけで気になって亮さんが亮さんのお父さんが言った通りの人で好きになったんです！」

「……………」

「ああ！？亮！？」

「また！？」

「ダメですう！！」

「はっ！！」

「……………」

「俺なんかが好き？」

3人は頷く。

「今日はエイプリルフルじゃないから嘘はついちゃダメだぞ？」

そう言っている俺はいつも嘘をついてるが……

「嘘じゃないわよ？これが証拠よ」

優里がキスをしてくる。

「優里ずるい！！」

今度は円……

「じゃあ私も！！」

結衣も……

「舌をいれようとするなよ！？」

「……………しゅん……………」

「とにかくわかった！？私達はあるあなたが好き！！」

優里の顔が赤い。

これは本当のことを言っているのだろう。

でも3人に告白されて俺は誰を選べばいいんだ？

第13話 女の子と水族館？

3人の告白から3日……

「どこ行くんだ？」

「いいからっ」

土曜日の朝、俺は休日だからゆっくり寝てようと思ったのだが円に無理やり起こされ起床。

そしてすぐに着替えると命令されて外に連れ出された。

今は円と2人つきり。

優里達はまだ寝ていたので書き置きを残しておいた。

もう約1週間も一緒に暮らしていて告白までされたんだからあいつらの性格を理解しとけばよかったと思ったのは家に帰ってからだった……

それよりも今は……

「遠くに行くのか？」

「うんっ」

俺と円は電車に乗る。

しばらくして円の目的の駅に着き電車を降りる。

「水族館？」

「一度行ってみたかったのっ」

「水族館も来たことないのか？」

「うん！」

ゲーセンといい水族館といい……

まあ水族館は来たことなくてもおかしくないがなんか変じゃないか？

このままだと動物園も行ったことないとか言い出しそつだ。

「ほらっ！亮君早く！」

「あ……ああ」

俺は円に腕を引かれ水族館に入る。

「こうしてればカップルに見えるかなっ？」

そう言って円は俺の腕に抱きついてくる。

カップルというより兄妹だ……

これで同い年だもんな……

胸もぺったんこ……

「む……亮君失礼なこと考えなかった？」

「め……滅相もない!!」

「そっ?ならよかったっ!」

危なかった……

「わあ!ペンギン!」

円はペンギンを見てはしゃぐ。

「かわいい!」

「っと電話だ」

俺は携帯を取り出す。

「家から?優里達かな?」

俺は電話にでようとす。

「あっ!円!!」

円に携帯を奪われる。

そして電源を切られる。

「亮君……今優里達からの電話にでると絶対に怒鳴られるからだめっ！」

「た……確かに……！」

「そういえば3人共携帯持ってなかったな。」

「今度買いに行くか。」

「そんなことを思った。」

第14話 女の子がイルカに触る？

「あつちでイルカに触れるらしいよ！行こっ！」

円が走る。

「走ると危ないぞ？」

そう言っつて俺は円を追う。

イルカに触るために俺たちは順番を待つ。

そして俺たちの番。

「どうぞー」

係員さんが言っつてくる。

触られるイルカも大変だよな……

「ん？円触らないのか？」

「りよ……亮君から触っつていいよ」

「？」

俺はイルカに触る。

「ほら円も」

「か……噛まないよね？」

「噛まないだろ？もしかして怖いのか？」

「そ……そんなこと」

そう言っつて円は震えながらイルカに触ろうとする。

「ほらこれなら安心だろ？」

俺は円の手を握ってイルカに触らせようとする。

そして円がイルカに触る。

「わあっ」

円はイルカを撫でる。

円の顔がどんどん笑顔になっていく。

それから俺たちは水族館を出た。

「楽しかったねっ」

「そうだな」

「また来ようねっ」

「ああ」

俺は携帯の電源をいれる。

「うげっ……………」

「どっしたの？」

「不在着信35件……………それも全部家から……………」

「うわ……………」

「帰りたくない……………」

「私も一緒に謝るから？ね？」

「うん……………」

俺たちは家の前にたどり着く。

そっとな家のドアを開ける。

「た……………ただいま……………」

俺は小さな声でそう言いそっとな部屋に逃げよじりずる。

「おかえりなさいっ！亮！円！」

「亮さん！円！どっ行ってたんですかっ？」

まずい2人共笑ってるのに目が笑ってない……………

「あはは……ちらばー!!」

俺は走って自分の部屋に逃げ込む。

そしてすぐに鍵をかける。

「あっ!!ちょっと亮!!待ちなさい!!」

「亮さん!!」

2人が部屋の扉を叩く。

「嫌だ!!」

ギイイイイ……

「亮?」

「亮さーん?」

「なっ……!!?どうやって扉を開けた!?!」

「そんなの本気の私達にかかれば朝飯前よ」

ガチャリ……

部屋の鍵が閉められる。

「拷問の時間よ?」

「ギヤアアアアア！」

俺の悲鳴は密室に虚しく響いていた……

第15話 女の子たちと水遊び? 〈開幕〉

「戦争だ!」

「」「」

男子達が騒いでいる。

「おー!」

その中に円もいるから男子だけじゃないんだけどな……

「上園君は興味ないの?」

1人の女子が話しかけてくる。

「こつゆう行事も楽しいと思うよ?でも……もうすこし暖かくなるまでこつゆうことするなよ!」

時は朝にさかのぼる。

俺たちは普段通り登校する。

「ん?なんか校門が騒がしいな?」

「えっ!?亮さんの肛門が!」

「漢字が違う!それに肛門が騒がしいって何事だよ!」

俺たちは校門に近づく。

「あ……楽しいことならなんでもやりたい我が儘生徒会長だ」

『誰が我が儘生徒会長だ!!』

生徒会長が拡声器を使って言うてくる。

この人は生徒会長の後藤真美^{ごとうまみ}

「今日は何事ですか?」

『よくぞ聞いてくれました上園君!!今日はみんなで遊びましょう』

「!!」

「!!」
「!!」
「!!」

会長ファンクラブの方々が盛り上げる。

『詳細は朝のHRで聞いてねっ』

そう言うて会長は去っていった。

「不思議な会長ね……」

「おもしろそうな人だった」

「なんか敵になりそうですう……」

3人がそれぞれ感想を言う。

「まあ……いい人だと思うよ?」

それから俺たちは教室に向かう。

朝のHR。

「上園。これ読んでくれ」

うちの担任がダルそうに俺に紙を渡す。

「なんで俺なんだよ……」

「視界に入ったから」

「理不尽だ……」

俺は紙に書かれたことを読み上げる。

「えっと……みなさんどうもこんにちはっ! みんなの生徒会長ですよっ!今日はみんなで水遊びをしましょう!1人1人にTシャツと水鉄砲を配ります。クラスごとにチームとなって優勝したクラスには1人1人に小型冷蔵庫とノートパソコンを贈呈しちゃいます!もちろん後藤グループ製だぞっ!Tシャツは濡れたら色がつくので色がついたら体育館に来てもらいますっ!最後までみんな頑張るんだぞ!もちろんずるとかは……だ・め・だ・ぞ!これを読んだ人恥ずかしくなかった?(笑)うがああああ!」

俺は最後の(笑)にムカついて紙を破る。

「だそうだ」

「あんた絶対に視界に入っただから俺にやらせたんじゃないだろ!？」

「うん(笑)」

「ああああ!！」

「まあお前ら頑張れよ?俺にも賞品でるらしいから」

そう言っただけは担任は教室を出ていった。

「亮かわいかったわよ?」

優里がからかい気味にやって来る。

「うるさい……もう黒歴史だ……」

「ほらほらそんなこと言わない。頑張りましたよ?」

そして開始10分前……

それが今だ。

まあ……ノートパソコン欲しいし頑張ろうかな……??

第16話 女の子たちと水遊び? 〈戦術〉 (前書き)

どうも……

起きて、くどわふやって、生徒会行って、くどわふやって……

とそんな生活を送っているカレーライスです。

最近家族にくどわふが見つかるという悲劇…… (16歳です)

思春期だからしょうがないといったら許してもらえたのでたすかりました。

もうすぐDIVA2が発売ですね。

期待します。

第16話 女の子たちと水遊び? 〈戦術〉

「あれ? 亮どこ行くの?」

「ちよつとな」

「ちよつ! もう始まるわよ!」

「大丈夫大丈夫」

俺はそう言っただけで教室を出て行く。

向かった先は生徒会室。

生徒会室に入る前に開始のチャイムが鳴る。

「あら? 上園君どうしたの? もう始まってわよ?」

「隠れてようと思ひまして。クラスが全滅したら俺がですよ」

「ずいぶん自信たっぷりね?」

「戦術は戦略には負けないってことを証明したいですからね」

「?」

「なんでもないです」

「でもここに隠れるなら私が倒しちゃわよ?」

「何言ってるんですか会長？もう濡れてますよ？」

あれ？

なんか卑猥……

「ぬ……濡れてなんか……あんっ……」

会長ものるなよ……

恥ずかしくなる……

「まあ変な冗談はおいといていつの間に私を打ったの？」

「やだな〜入った時に決まってるじゃないですか。会長があんな文読ませるからすこし本気になっちゃいました」

「あれあなたのクラスはあなたが読んだのね。まあとにかくやられちゃった。さて、早いけど体育館行くなっ！」

そう言っただけで会長は生徒会室を出ようとする。

「あつ。この場所は言わないから安心していいわよ」

そう言い残して会長は体育館に向かった。

「電話？彰からか」

俺は電話にでる。

『あつ！亮！！あんた今どこにいるのよ！！早く私を助け！人違いです』

俺はそう言って電話を切る。

やっぱり携帯持たせるのやめようかな……………？

その頃優里達は…………

「あいつ切った！！！」

優里は彰に携帯を返す。

「私があいつを倒す……………」

「優里ちゃん亮も仲間だからね！？！」

彰がツッコミをいれる。

「うちのクラスのアイドルを守れ！！！」

「「「おう！！」「」「」

男子達が優里達を囲む。

「気持ちは嬉しいけど……………」

「私は他のクラスの人を倒しに行ったほうがいいと思います……………」

「みんな頑張ってる」

「「「おおー!!」「」」

男子達は走っていく。

「おもしろいねっ」

円ははしゃぐ。

「そうだね。こんな毎日が楽しいのって初めてだもんねっ」

「普通の学校生活楽しむですう!」

優里達も男子に続いて走り出した。

亮は……

「さて、俺も少しは手伝うかな」

亮はそう言って生徒会室の窓を開ける。

そして迷わず大量の水風船を投げる。

「うわっ!!」

「手榴弾だ!!」

「総員退避!!退避だ!!うわ!!」

ふっ……

弱いな……

俺1人でも全校生徒に勝てる気がするぜ……

しかし駒は必要だ。

俺の駒となって動け!!

「いや〜コード アスっておもしろいよな〜」

俺は生徒会のパソコンを使ってコー ギアスを見ていた……

俺があんなセリフ言うわけないだろ？

キャラ崩壊にもほどがある。

『残り10人となりました。みんな頑張つて〜』

会長の声が放送で流れる。

あと10人つてことはもううちのクラスのメンバーは残っていない
だろう。

そろそろでるか。

少しは活躍しないとみんなに文句言われるからな。

俺は生徒会室を飛び出した。

第17話 女の子たちと水遊び? 〔決着〕

俺は生徒会室から飛び出して目に入った人から撃っていく。

「うわっ!」

「早い!」

「赤い彗星!」

誰だ今ガ ダムネタ言ったやつ……

「残り何人だ?」

俺は目立つ校庭に行く。

「いた!」

また1人やって来る。

後ろからも足音が……

「優里と円と結衣!?!お前ら残ってたのか!?!」

「あんたさつきはよくも電話切ったわね?」

「ちっ!4対1か!」

1人の男子生徒が言う。

4対1なら余裕だろ……

『さあ！！残り5人のラストバトル！！4対1なら余裕か！？』

会長……… 実況しなくても………

「ふっ……… そうね4対1なら確実に殺れるわね。覚悟しなさい亮？」

「亮君なら私達のこと守ってくれると思っただけだな………」

「亮さん酷かったです」

「ちよつとまでお前ら！今はそんなことよりもその名もない男子生徒を殺ることが先だろ！？」

「なんでお前らは殺すって感じを使っただよ！？」

男子生徒が涙目で言う。

「うるさい！！さあ！！覚悟しなさい！！」

「ちっ！！」

俺は水鉄砲を構える。

最初にきた優里に気をとられすぎていた。

「チェックメイトです亮さん」

いつの間にか後ろに回り込んでいた結衣に水鉄砲を突きつけられる。

「やめるんだス ク!!」

「誰がスザ ですか!!」

「俺が死んだら俺に仕掛けられている爆弾が爆発……」

パンツ

容赦なく撃ちやがった……

「バカだな……」

「色が変わらない!？」

「要はTシャツが濡れなきゃいいんだよ」

そう言っただけ俺は布をはがす。

「お前らに殺られるくらいなら自爆する!!」

俺は持っていた水風船を全て上に投げる。

「黒の騎士団万歳!!」

そして俺と優里と円と結衣は濡れてしまう。

『優勝は名もない男子生徒君のクラス!!』

帰り道。

「お前らが攻撃してこなきゃ勝てたのに……」

「あんたがあんなの使うのが悪いんでしょ!？」

「でも楽しかったね!」

「はいです」

「亮も大変だったな」

「ああ……」

あの後クラスの男子に責められた。

女子は庇ってくれたけど……

うちのクラスの女子優しい……

そう思った。

第18話 女の子たちのわがまま？

「ん？なに見てるんだ？」

3人が1つのチラシを見ていたので俺はたずねる。

「な……なんでもないわよ！」

「そつだよ！亮君は気にしないで！」

「亮さんはテレビでも見ててください！」

なんか怪しいな……

「あー！……あんなところに……！」

俺はなにもないところを指差しながら言う。

3人が指を差した方向を見る。

そして見た際に俺はチラシを取り上げる。

「……あつ！」「」

「携帯のチラシ？」

そこには携帯の新型情報が載っていた。

「なんでもないの……！」

「別に欲しいとかじゃないから！」

「円なに言ってるんですか！それじゃあ欲しいみたいなのに聞こえちゃいます！」

3人は慌てる。

「欲しいなら欲しいって言っていていいんだぞ？俺たち家族みたいなものだろ？わがまま言ったっていいんだよ」

俺は3人に言う。

「「「……ありがとうございます」」」

3人はお礼を言ってくる。

まあ携帯は買おうと思ってたし……

それにわがままとか言ってもらわなきゃ距離感っていうかなんか仲良くないみたいに感じてしまう。

あれ？俺ってそんなにも優里達の存在が大事になってる？

そんなことを俺は思った。ってことで携帯ショップにいる俺たち。

「どんなのがいいんだ？」

俺はたずねる。

「そう聞かれても……」

「私達よくわからないし……」

「ただ亮さんといつでも連絡とれたらいいな……って思ってただけで……」

「いつも一緒にいるから意味ないか!？」

そんな会話をしながら機種を選ぶ。

「作者と俺の携帯の会社がd o o m oだからd o c c o oな」

俺は3人に言う。

「わかったわ。じゃあ私はこれにしようかな」

「じゃあ私はこれ!」

「私は……これですかね」

3人がそれぞれの携帯を選ぶ。

「よし。じゃあ契約しちまおうぜ」

携帯の契約をして俺達は帰宅する。

「ありがとう亮」

「大事にするね!」

「これで亮さんといつでも連絡が……」

3人は嬉しそうにする。

まあこんなに嬉しそうに姿みれるならなんだったってしてもいいかな……

俺はそんなことを思った。

第19話 女の子と夢の国？（前書き）

ストックがあるとなぜかどんどん更新したくなる……
きつとその気持ちは僕だけじゃないはず……

第19話 女の子と夢の国？

ある日俺は優里に無理やり起こされて駅に来ていた。

あれ？なんかデジャブ……

そういえばデジャブってデジャブ？それともデジャヴ？

まあいつか……

それよりも……

「えっと……優里さん？」

「なによ？」

「俺はどうしてここに居るのでしょ？」

「私がつれてきたからでしょ？」

「ですよー」。

「一体今日はなにを？」

「あ……アンタが円とデートしたんだから私ともデートしてもらおうと思っ……」

優里は最後の方ゴニョゴニョとなってしまうていた。

「つまりデートしたいと？」

「そ……そんなわけ……！」

「じゃあ帰って寝ようぜ」

俺は帰ろうとする。

キュッ……

服がつかまれる。

「ま……待って……！」

「ん？」

「その……あの……デート……」

「ん？よく聞こえない」

俺は優里を見る。

優里は涙目だ。

すこしいじめすぎたかな？

「亮……私と……」

俺は優里の頭に手をのせて優里を撫でる。

「わかったよ。優里デートしないか？」

「あ……アンタがそう言うならしてあげてもいいわよ！」
素直じゃないな〜とか思いつつ俺たちはデートを開始する。

「どこか行きたいところとかあるのか？」

「う〜ん……わ……私は亮と一緒にいければそれで……」

優里が顔を赤くしながら言う。

一瞬ドキツとしちまったじゃねえか……

「遊園地でも行くか？」

「いいの……？」

「もちろん」

まあ優里とかは遊園地も行ったことないって言ってたからな。

そして俺達は遊園地へと向かう。

「わあ〜」

優里が目を輝かせながらあたりを見回す。

俺達が来た遊園地は浦安にあるにも関わらず最初に東京とつく夢の国だ。

そこには中に人が入ってるなんて言っちゃいけない動物たちがいっぱい……

「なにか乗りたいものとかあるか？」

「あれ！」

優里が最初に選んだのはス ラッシュ ユンテン。

「まじで……？」

「うん！」

優里のこんな笑顔見たら断れねえ……

俺……ジェットコースターとかだめなのに……

「亮！早く早く！」

優里が俺の手を引く。

……

「…死ぬかと思った」

「楽しかった！」

「ん？電話？」

俺は携帯が鳴っていることに気がつき携帯をだす。

「円か……」

前回は失敗したが今回は失敗しないぜ。

「もしもし?」

『あ! 亮君!??どこにいるの!?!?』

ここで優里というなんて言ったら前回の二の舞だ……

「彰と遊んでるんだよ。お前らも来たかったか?」

『嘘だツ!?!』

「へ?」

『彰君ならいまここにいるもん!?!』

「なっ
なっ……!?!」

『どつせ優里に朝無理やり起されて今は……そうね……音からすると遊園地かな?遊園地なんて行ったことないのに……テレビでしか見たことないのに……!?!』

すいじ……

すいすい……

『私も1回同じことしたからちゃんと正直に言えば許してたのに…
…亮君は私に嘘つくんだね…』

「ま……待つんだ円!!」

『帰ってきたらおしおきだよっ』

「待つ……!!」

ツーツー

切れた……

帰りたくない……

「どうしたの？」

「帰りたくないな……優里。一緒にどこかに逃げないか……?一緒に平穩に暮らそう……」

「えっ!?!えっと……その……プロポーズ？」

優里の顔は真っ赤だ。

「へ?」

そこで俺の頭も元に戻る。

「あれ?俺なんか言った？」

「りょ……亮のバカー!!」

俺は優里に殴られる。

「な……なんで俺は殴られたんだ!？」

「なんでもない!!次の行くわよ!!」

そう言っつて優里に手を引かれて次の乗り物へとむかう。

辺りがもう暗くなってきた。

「もう帰ろっか」

「うん!楽しかったよ!」

「それはよかつ……」

そこで俺の口はふさがれてしまう。

俺の口をふさいでいたものが俺の口から離れる。

「亮……好きだよ」

優里が頬を紅潮させながら言っつ。

なんか反則だよ……

「さっ!帰りましょ」

優里が自分の指を俺の指に絡ませる。

俺達は並んで家に帰った。

「ギヤアアアアアアアアアア！」

その日の晩俺の悲鳴が響いた。

第20話 男の子の許嫁？

「亮」

「ん？」

「俺、彼女をつくろうと思う」

ある日彰がうちに来たと思ったたらこんなことを言い始めた。

「お前はつくろうと思っててもできないだろ？なに言ってるんだよ。寝言は寝て言え」

俺は彰に冷たく言い放つ。

「亮酷い……」

「なに？彰君好きな人でもできたの？」

「教えてっ!!」

「気になりますう」

恋愛の話が好きそうなる人が来る。

まあうちに住んでる3人なんだけど……

「俺が好きなのは優里ちゃんたちだけだよ」

「「「きつと彰君にはもつといい人が見つかるよ」「」

「3人に同じ理由でふられた!!」

彰が俺に泣きついてくる。

「で?なんで急に彼女がほしくなったんだ?」

「お前がいつの間にか彼女みたいな存在を手にいれていたから」

「手に入れてなんかないが……?」

彰は無言で優里たちを指差す。

「あー……あれだ。うん」

俺はなんとかごまかそうとする。

「亮ばかりずるい!!俺も彼女がほしい!!」

彰が泣き叫ぶ。

「うーん……あっ」

「なにか思いついたのか!??」

「ああ。ちょっと待ってろ」

俺はいったんリビングから出る。

「えっと……沢田優里です」

「塚本円です！」

「駒崎結衣ですう」

3人も挨拶する。

「彰！！亮に聞いたよ！？彼女が欲しいとか言ってるんですけどね
！！！」

「ま……待つんだ！話せば分かる！！！」

彰は弁解する。

「問答無用！！！」

杏奈が彰に襲い掛かる。

襲っつて言っただってエロい意味じゃないからな？

「亮、杏奈さんとの関係って？」

「彰の幼馴染で俺の友達だな」

「亮！！助け……あああああ！！！」

「浮気は許さないんだから！！！」

「なんか仲良しだねっ！！！」

円が言う。

「まあなんだかんだ言っても彰も杏奈のこと好きそうだしな」

30分後……

「見苦しいところを見せました……」

「いつも通りだろ？」

「まあ……ね」

杏奈が顔を赤くする。

「仲いいんですね」

結衣が言う。

「そう見てもらえてうれしいです！」

「杏奈、その敬語気持ち悪いんだけど」

彰が倒れながら言う。

「なんですって？」

「じめんなさい……」

「まあ……たしかに私に敬語は似合わないわね……」

杏奈が考える仕草をする。

「優里！」

「はい!？」

杏奈が急に優里を呼んだので優里が驚く。

「円！」

「はい！」

「結衣！」

「はいです！」

これになんの意味が……？

「よし！これで友達ね！私は敬語つかわなくておっけ」

名前呼んだだけで友達かよ……

「3人も敬語つかわなくていいよ」

杏奈が3人に言う。

「私は敬語が染み付いてますのでそのままです……」

結衣が言う。

「そっか」

「でも杏奈ってなんで今頃登場？なかなか主要キャラになりそうだけどね」

優里が爆弾発言をする。

「きつと作者が後で思いついたからよ」

「杏奈ちゃん後付キャラ……可愛いそう」

「円……」

なんか俺が会話に入れない……

「（亮……おぼえてるよ……）」

そんな声が聞こえた気がした。

「彰なんか言ったか？」

「……」

返事がない。ただの屍のようだ。

「杏奈。彰が愛してるだって」

「ほんと！？じゃあ今すぐ結婚よ！……」

「亮！お前はなんてことしてくれたんだ！？」

そうして彰は杏奈に引きずられてうちを去って行った。

「あんなのに憧れるわね……」

「優里いいこと言っねっ！」

「私達も亮さん……」

うちに居候している3人がそんなことを言っていたのは聞かなかったことにしよう……

第21話 男の子の頼みごと？

「亮!！」

放課後。

俺が帰る準備をしているといきなり彰に声をかけられる。

「なんだ？」

「またテストの季節がやってきてしまった!！」

「お前は作者並に頭悪いもんな」

(ちなみに作者は校内順位下から数えたほうが早いです。)

「勉強教えてください」

彰が頭を下げてくる。

そして隣にはもう1人頭を下げてる人が……

「会長なにやってるんですか……」

「またこの時期がきちゃったから勉強教えてもらわなきゃな」って

会長が笑顔で言う。

「俺が教えましょうか!？」

「いや！！会長には俺が！！」

「上園ばっかずるいんだよ！！」

男子達が騒ぎ出す。

「みんなの気持ちは嬉しいんだけど……みんな上園君よりも勉強で
きないでしょ？」

ちなみに俺の校内順位は1位な。

「「「うっ！！」「」」

男子達はいつせいに固まる。

「人生のバカヤロー！！」

「上園なんかが頭いいのが悪いんだ！！」

そんなことを言いながら男子達は走ってどこかに行ってしまう。

「会長も頭いいくせになに言ってるんですか……」

会長だって決して頭が悪いわけではない。

1度教えれば絶対に忘れないからテストなんて簡単なはずなのに……

「あれ？私にだってわからないことはあるよ？」

「例えば？」

「保健の実技」

「……………」

俺と彰は固まる。

「彰、勉強はうちでいいか？」

「ああ」

「じゃあ帰ろう」

「優里ちゃん達はいいいのか？」

「そういえばあいつらどこ行ったんだろっな……………」

「無視するなー！ー！」

会長が叫ぶ。

「ふっふっふ……………無視するならそれでいいわ。その代わりこの子たちがどうなってもいいの？」

会長は黒服のお兄さん達を呼んで優里たちをそのお兄さんに連れてきてもらう。

「上園君。君の情報はすでに調べさせてもらってるわー！ー！」

会長がそんなことを言い出す。

「亮。助けなかったらどうなるかわかってるわよね？」

「亮君は助けしてくれるって信じてるからっ！」

「亮さん……できれば早くしてもらいたいです……」
「ごっちゃって束縛されてると……」

結衣がまずいな……

いや、俺の命もまずい……

「わかりました。会長のこと無視したりしませんよ」

「やった」

会長は嬉しそうに笑う。

優里たちが開放される。

「亮、浮気？」

「亮君覚悟はできてるよね？」

「もうすこしあのままでもよかった……」

あれ？

選択肢をちゃんと選んだはずなのに……

そっか……あれはどっちを選んでも死亡エンドだったんだ……

「ぎゃああああああー!!」

俺の悲鳴が放課後の学校に響いた。

第22話 女の子たちとテスト勉強と……？（前書き）

ストックがああ！！

調子に乗りすぎた……

反省……！

第22話 女の子たちとテスト勉強と……？

さて、勉強会です。

カリカリカリカリ……

集中して俺は勉強する。

「亮……ここは……？」

彰が指差したのは中学生でもできる因数分解……

「お前高2だよな？」

「へ？」

なんで俺はこいつと同じ高校に通かよってるんだらう……

「上園君そろそろ……」

「亮さん……」

会長と結衣が俺を呼ぶ。

「なんですか？」

「そろそろ実技のほうを……」

「初めてが3人っていうのも緊張しますが……」

「なに言ってるんだ!？」

俺は2人がなにかする前にイスに縄で固定してしまう。

「上園君は『S』か……」

「初めてなのいきなり縄でなんて……亮さんのえっち……」

この2人はもうだめだ……

それに……

だめなのがもう1人……

「亮君暇だよお」

円だった。

「円も勉強しようなー」

「勉強嫌い!」

「勉強したらご褒美にアイス買ってあげるから」

「ほんと!?!?だったら頑張る!?!」

そう言って円は勉強を始める。

なんかこの流れだと優里も……

そう思い優里を見る。

「…………あれ？」

「ん？なによ？」

「いや…………ちゃんと勉強してるな…………」

「私は勉強好きだもん」

「勉強が好きなのよ…………って本当にいたのか…………」

俺は啞然としてしまう。

「私は癖がついちゃっただけよ。勉強しなくちゃいけない癖が。それでいつのまにか好きになってたの」

「なんで癖なんか？」

「あんたは気にしなくていいのよ」

そう言っつて優里はまた勉強を再開する。

(私は…………常に一番じゃなきゃだめだったから…………)

優里は心の中でそうつぶやいた。

そしてテストが終わり返却日。

「平均95か……下がった……」

俺はテストを見て肩を落とす。

あいつらのせいだな……

会長と結衣は騒ぐし、円は集中はしてたけど俺のひざの上でやるし、彰は馬鹿だし……

「亮くどうだった？俺は赤点回避できたぜ」

「それはよかったな……」

「なんか元気ないな？点数落ちたのか？」

「ああ……」

「落ちて平均95!？」

「よく計算できたな」

「まあな。でもこの点数ならどうせまた学年トップだろう？」

「そつだといいいんだけどな」

俺は順位が掲載されている掲示板に向かう。

俺の名前は……っと

俺は自分の名前を探す。

順位は……『2位』

「なっ……」

俺は驚く。

俺が2位だったことに驚いている訳ではない。

俺が驚いている理由は優里が1位だったことに驚いているのだ。

「優里!?!」

「あはっ! 勝っちゃった」

優里が笑顔で俺に言う。

「予想外だったぜ……平均は？」

「98ね」

「俺の前回よりいいじゃねえか……」

「ねえ亮？」

「ん？」

「ご褒美ちょうだい」

「なんで？」

「一番になったから」

「なんでだよ……」

「なでてくれるだけでいいから……」

「む……今じゃないとだめか？」

「うん」

「でも人がいっぱいいるし……」

「じゃあ帰ってからでいいわよ」

そう言って優里はどこかに行ってしまった。

帰って俺は優里のことをなでる。

「亮の手おっきいね」

「そりゃどつとも」

優里はなにか思い出すようにしながら無言で俺になでられていた。

第23話 女の子たちとGW前？（前書き）

タイトルが糞だな……

第23話 女の子たちとGW前？

テストも終わり俺たち学生はGWに突入するところだった。

「亮くGWってなんかいいよねくなんたってゴールデンだもんねく」

彰がアホ面で俺に話しかけてくる。

「彰、なに言ってるんだ？GWの『G』は地獄の『G』だぞ？」

「マジか!？」

「作者の塾の先生がそうやって笑顔で言いながら大量の宿題をだしてた」

「考えるだけでもゾツとするな……」

「で？GWがどうかしたのか？」

「どこか行かないか？」

「は？どうせお前は無理だろ？」

「ふっ……去年は無理だったが今年は大丈夫だ」

「ほっ？その自信はどこから？」

「去年はGW初日に家にいたのが間違이었다」

「それで今年は？」

「亮の家に隠れる」

「あきらめろ」

「どうしてさ！？俺は去年みたいないやだよ！？」

「……だってさ杏奈」

「彰が……そんなこと思ってたなんて知らなかった……」

杏奈が涙目で俺の後ろから出てくる。

「あ……杏奈！？どうしてここに……！！亮！！裏切ったな！！」

「裏切るもなにも俺は杏奈の味方だ」

「GWになるまで私が部屋に監禁してあげるから覚悟しなさい」

杏奈はそう言っつて彰を連れてどこかに行ってしまった。

「彰君ってなんであんなに嫌がってたの？」

優里が話しかけてくる。

「GWに彰の家族と杏奈の家族で旅行に行くんだよ。それで去年杏奈に襲われそうになったらしい」

「それは大変ね……」

「優里たちはGWどこか行きたい所とかあるか？」

俺は一応聞いてみる。

正直家でゴロゴロしてたほうが俺的には楽なんだけど……

「私？うん……亮とはいつもいるしな……」

「私は亮君と寝たい！」

どこからか円が出てくる。

「円、そんなこと言ってるけどいつの間にか俺のベッドにいるじゃねえか……」

「あはっ！」

円が無邪気に笑う。

「結衣は？」

「へ？私ですか？」

「うん」

「強いて言うなら……私だけ亮さんと2人つきり出掛けてないな
くって思いました」

「」「あ……」

「ゆ……結衣はいいんじゃない？」

「優里の言う通りだよ！」

なんか2人が酷いな……

「そりゃ私は人気ないかもしれませんが……？でも……亮さんとデートがしてみたいんです。いいですよね？」

あれ？結衣の背中から黒いオーラが……

そしてクマさんが見えるよ？

セキ イでもNO・88のセイレイがこんなオーラを……

「はい……！！！」

おお。

この2人がこのオーラに圧倒されてデートを許したよ。

でも俺が許さなきゃ意味ないよね。

まあ断るなんて酷いことはしないけどさ。

今回は2人の公認だし痛い目には合わないだろう。

そう信じたいよね。

第24話 女の子と秋葉原？

GWです。

そして初日から結衣とデートです。

「どこか行きたいところとかあるのか？」

「えっと……秋葉原に……」

「マジで？」

「一度行ってみたかったです……ダメ……ですか？」

「いや、別にかまわないよ」

秋葉原に行くならもうちょっと金持ってくるべきだった……

俺たちは電車に乗って秋葉原へとむかう。

「ここ……ここが……聖地秋葉原……！！」

結衣が興奮気味に言う。

やっぱり結衣もなかなかのオタク？

「どこか行きたいところとかあるのか？」

「とら あなに……」

「18歳になってから行くのかな」

「……しゅん」

結衣は肩を落とす。

「アニメトにでも行くか？」

「はい！」

俺たちはア メイトにむかう。

「ビル一個分アニメイトなんですか……？」

「ああ。どこから見る？」

「下から見ませんか？」

「別にかまわないよ」

「じゃあまず地下1階を……」

「地下はダメだ」

だって地下はアダルトコーナーだもん……

「？」

「18歳になってからな」

「行きたいですー!!」

「ダメだ」

俺は結衣を引きずる。

アニメ トを一通り見てから次はゲー ーズにむかう。

「ゲーマー ですか……」

「どうかしたのか？」

「いや。アニメ トにそっくりだな。って思って」

「そんなことないんじゃないか？ゲー ーズには本とかカードが多いから」

「そう言われるとそうですね」

それからゲーマー を一通り見る。

それから秋葉原を適当に見てから家に帰宅する。

今日の戦利品は……

ふっふっふ……

「ただいま」

「ただいまです」

俺たちは家に入る。

「亮君！さみしかったよ」

円が飛びついてくる。

俺は円の頭をなでる。

「おかえり。亮、結衣」

「ただいま優里」

俺たちはリビングに行く。

「なあみんなババ抜きやらないか？」

「ババ抜き？」

「罰ゲームありで」

「罰ゲーム……」

「内容によるよね」

「亮さんまさか」

「罰ゲームは1位の人の言うことを聞く」

「「「やる」「」

そして俺たちはババ抜きを開始した。

勝ってみせる……！

夢のために！！

第25話 女の子たちとトランプと猫耳と？（前書き）

アマガミSSSを見てみました。

みてるこっちが恥ずかしくなる／＼／

第25話 女の子たちとトランプと猫耳と？

俺はトランプをシャッフルしてから配る。

「……………」

俺たちは無言でカードを捨てていく。

俺はカードを捨て終わる。

残りカードは6枚……

その中にババがある。

3人は3枚づつ……

「なんで俺だけこんなに残ってるんだよ……………」

「始めよう……………最初で最後の本気の勝負!!」

円がいきなり言い出す。

な は？

円はなの なんかわらないはずだよな？

「亮君どーぞ」

円が俺にカードを引かせるために手を伸ばしてくる。

「よし！」

俺は揃ったのでカードを捨てる。

円が結衣からカードを引く。

「揃わないな……」

円は肩を落とす。

「揃いました！」

結衣がカードを捨てる。

これで結衣の1位が決定した。

「……はあ……」

結衣以外の3人が肩を落とす。

「まだやるの？」

優里が聞いてくる。

「まあ暇だしな」

俺は優里の前にカードを出す。

「亮早く離しなさいよ……」

「いやだ……!!」

「もういいわよ!これにするから!」

優里がカードを引く。

そのカードの名前はジョーカー。

ババ抜きの中ではババ。

「ああー!!」

「諦めなきゃよかったのにな」

「亮のバカ!」

「なんとも言え!俺は勝つためならなんでもやるぞ!」

「亮君、結衣が1位だから勝っても意味ないよ?」

「はあ……」

俺は再び肩を落とす。

それからババ抜きを続けた結果1位が結衣、2位が円、3位が俺、4位が優里となった。

「さあ、なにを命令しましょう……」

「ああ……俺の野望があ」

「はあ……亮に掃除当番1ヶ月頼むつもりだったのに……」
優里が勝たなくてよかった……

「私も亮君とデートしようと思ってたのに……」

なんで俺だけにしか命令するつもりがないんだ？

「決めました」

結衣が言う。

「亮さんが買ったものを2人が寝るまでつけてください」

「「亮（君）が買ったもの？」」

「いいのか？」

「今日付き合ってもらいましたからね」

なんと!!

俺の野望が叶うのか!?

俺は買ったものを持ってくる。

ちょっと出すのが恥ずかしくなってきた……

俺はゆっくりと『ある物』を出す。

「猫耳？」

「お……おっ」

やっぱり恥ずかしい……

2人の視線が痛い……

「い……いやよー」

「猫耳かわいいな」

優里は嫌がり、円は喜んでつけた。

「どうかな!？」

萌えの一言に尽きる。

「かわいいよ」

「私も亮さんにかわいいって言われたいです!」

そう言いながら結衣も猫耳をつける。

「どっつですか!？」

猫耳でメガネで巨乳……

もう死んでもかまわない……

「鼻血がでそう……」

「さあ！あとは優里だけですよ！」

「優里！」

2人が猫耳を持って優里に近寄る。

「ち……いや……」

「「ぶつぶつぶつ……」

「ちー！ー！」

装着中。

「「……これは……！」

「優里かわいいー！」

「猫耳に涙目上目遣い……これは最強ですね」

優里の猫耳は最強だった。

「うう……」

「優里かわいいよ」

「ほんと……？」

「ああ」

それから結衣の命令通り3人は1日猫耳で過ごした。

俺が萌え死にしそうなことも知らずに……

第26話 女の子たちと会長と？ くピッキングく（前書き）

お気に入り件数100件突破だぁ！

今作は前作に達成できなかった200件突破したいな

第26話 女の子たちと会長と？ ～ピッキング～

GW2日目。

朝、俺は彰からのメールで目を覚ます。

「あいつ……こんなに早くからなんだよ……？」

俺は怪訝な顔で携帯を開く。

そしてメールを読みながらリビングにむかう。

なぜリビングに向かったかって？

ベットにあいつらがいたからだよ……

メールの内容はこうだった。

『今日ホテルを抜け出す。それでGW中は亮の家に泊まらせてくれないか？』

あいつ……

俺が杏奈の味方だって言ったの忘れてるな？

さて、杏奈にメールしておくか。

これで彰も抜け出せないだろ。

「うん。いいことだ」

「偉いね」

「そうかな？ってうわっ！！」

「そんなにびっくりしなくてもいいでしょ？上園君」

「なんで会長がここにいるんですか！？」

「いや〜。暇になっちゃって」

「暇になっちゃってじゃないですよ！！それよりも鍵がかかってたでしょ！？」

「そんなの朝飯前よ」

最近の女の子ってすごい……

優里たちもつかってたよな？

「それで？今日はなんの用ですか？」

「お買い物に付き合っってっ」

会長が笑顔で言う。

「優里たちに無言で買い物に付き合ったら俺が殺されます」

「じゃあ言うてから行けばいいじゃない」

「言ったら行けません」

「じゃあ優里ちゃんたちも連れて行けばいいんだ！」

「俺が行きたくありません」

「も〜つれないな〜」

会長が頬を膨らませる。

「男の子だったらすぐにつれるのに」

「俺をあんなやつらと一緒にしないでくださいよ」

「む〜」

「それに会長はそんな簡単に男をつつてないでしょ？」

「わかる？」

「会長の性格ですからね」

なんで俺が会長のことをよく知っているのかというとただ単に生徒会が一緒だったからというだけだ。

俺が1年の時、俺は部活に入っていないなくて暇だから入ったっただけだった。

そして今の会長が俺にいろいろ教えてくれた。

まあそうやって一緒にいる内にわかったってだけなんだけどね。

「亮おはよう……」

優里が目をごすりながら起きてくる。

「おはよう優里」

「おはよう優里ちゃん」

「か……会長!?!」

「あら。優里ちゃんまで会長って呼ばなくていいんだよ?」

「じゃあ……後藤先輩?」

「私上の名前あまり好きじゃないの」

「じゃあ真美先輩?」

「うん!」

会長は嬉しそうに笑う。

「上園君も下の名前で呼んでもいいのよ?」

「会長のほうが呼びやすいからこのままでいいです」

「なんだ残念」

会長が舌をチロツとだす。

これが男にモテる理由だろうな。

普段は会長という役職で真面目でクールって印象があるのに会長はそんなイメージがない。

誰とでも話せてちゃんとやるときはやる。

そこは見習いたいところだった。

「ん？どうしたの？」

「いえ。なんでもないです」

俺は無意識に会長の顔を見てしまっていた。

「真美先輩は朝ごはん食べました？」

「まだなのよね」

「じゃあ私つくりますよ」

「ほんとー!？」

「はい」

「ありがとう」

そしてその後円たちも起きてきて朝食を食べた。

「今日買い物行くんだけどあなたたちもどう？」

会長が提案する。

「買い物……ですか……」

「ちなみに買い物するお店は後藤グループのお店だからお金はいらないわよ？」

「「「いいんですか？」」」

「もちろんっ」

しまった……

そんなことを言われたら優里たちがいかないわけない。

優里たちはうちの金をつかうのをまだためらっている。

しかしその金をつかわないならよろこんで付いて行ってしまっ。

そして当然俺も無理やり連れて行かれるわけ……

「会長さすがです……」

「私の勝ち」

会長が笑顔で言う。

ってなわけでもGW2日は買い物に行くことになった。

第27話 女の子たちと会長と？ ～有名ブランド～

「ここも有名ブランド……」

会長に連れて行かれたのは有名ブランドのお店ばかり……

そして男が決まっていたはいけない場所……

いるのはカップルの男くらいだ。

「さっ！上園君ここからにしましょー！」

「え？俺は外で待っててもいいんじゃないんですか？」

「なに言ってるのよ？もしも入ってくれないならタダにしないわよ？」

そう言った瞬間優里たちが涙目で俺を見てくる。

「わかりましたよ……」

「素直でいいわね！」

俺は渋谷店の中に入る。

『なにこの人？』みたいな目で客だけでなく店員にまで見られる。

「優里ちゃんかわいい下着着けてるのね」

「えっ！？ちよつと真美先輩！？」

「結衣ちゃんすごい！なに食べたらそうなるの？」

「ちよつ！触らないでください……！あっ……！！」

「円ちゃんはそのままでいいと思うよ？」

「気にしてるのに……」

「貧乳はステータスだ。希少価値だ。って誰かが言ってたよ？」

「そうですかね？」

「でもね、私個人の感想としては貧乳で開き直ったら負けだと思っ
のよ」

「？」

「貧乳を恥ずかしくてこそ貧乳に価値があると思っの」

「真美先輩……」

「円ちゃんがんばってね」

「はい……」

中で一体なにが起こってるんだろ……

変な想像してしまう……

ってかなんでみんなで試着室入ってるんだ？

狭くないのか？

店員さん苦笑いだよ……

「どっ？」

試着して俺に見せてくる。

「似合いますよ」

「ほんと！？」

「はい」

「じゃあこれ買っ」

それから何度も俺は『似合っ』『や』『かわいい』という言葉を使った。

それが自分の首を絞めることになるなど考えもせず。

「じゃあ上園君が似合っって言ったもの全部買おっか」

「え？」

会長は店長になにか言って試着した全ての服を袋にいれさせる。

これは『買っ』『どっ？』というやりも『もらっ』だ。

店長さんのことよく見てあげて会長……

涙目だよ……

そしてその荷物を全部俺が持つことになる。

あんなに似合うなんて言わなきゃよかった……

第28話 女の子たちと会長と？ くぬいぐるみ（前書き）

ストックがなくなった……

第28話 女の子たちと会長と？ くぬいぐるみ

「そろそろお昼にしようか」

会長が提案する。

「でもどこで食べるんですか？」

「うーん……その辺のファミレスかなんかに入ればいいんじゃない？」

そう言っただけで俺たちは学生のお財布に優しいサイリヤに入ることにする。

「ほんとサイゼ やって学生の味方だよな」

「作者がバイトしてるのはガス だけだね」

「さて、なに食べよう……」

俺はメニューを見ながら考える。

まあここは本当にミラノ風ドリアだろ。

安いし。

そして俺たちは注文を終える。

注文したものは俺以外全員パスタだった。

え？俺だけ仲間はずれみたいな感じ？

そして料理が運ばれてくる。

俺はミラノ風ドリアを食べる。

そこまではよかった。

問題は会長が俺にパスタを巻いたフォークを俺の口に持ってきたことだ。

会長がやるならとうちに居候している3人も当然俺の口に運んでくる。

そしてただでさえ周りからの視線が痛かったのにさらに痛く……

「地獄だった……」

「次はゲーセンよ……！」

会長が歩き出す。

俺たちはゲーセンに行く。

「亮〜これとって〜」

「亮君私これ欲しい〜」

「亮さんこれとりましょー！」

みんなそれぞれ欲しいものを言う。

「お前ら自分でとる努力もしろよ……」

「「「お金がもつたいない（です）」「」」

俺は3人が希望するものをとる。

「あれ？会長は？」

俺はあたりを見回す。

会長はぬいぐるみをとるために頑張っていた。

うーん……

俺は会長の隣で会長がとうとうとしていたぬいぐるみをとる。

「上園君ずるい〜」

「会長も頑張ってくださいよ」

「む〜」

会長は頑張ってたとうとうとする。

それでも無理だと悟ったのか会長はあきらめた。

「欲しかったな……」

なんかしゅんと肩を落としてる会長が可愛いな……

「会長」

「ん？」

「これあげますよ」

「いいの？」

「まあもともとあげるつもりでとりましたから」

「ありがとうございます！」

会長は笑顔になる。

すごくドキツとした。

やっぱり会長つてモテるんだな

まさかこの1日で2回もこう思うなんて思わなかった……

やっぱり俺も健全な男子つてことかな？

俺たちは会長と別れて帰路につく。

「楽しかった」

優里が笑いながら言う。

「そうだな」

その時俺の携帯が鳴る。

「ん？彰からメール？」

『お前の家誰もいないんだけど』

まさか……

あいつ抜け出すことに成功したのか！？

そして俺の家にGW中彰が泊まることになった。

第29話 女の子が男の子を愛しすぎると？（前書き）

この話から2日に1話更新させていただきます。

なぜかというと1日1話更新（1日1話でやってたか？）がうざい
と思う人もいるかもしれないからです。

第29話 女の子が男の子を愛しすぎると？

家に帰ると彰が俺たちの家の前にいた。

「おっ！おーい！」

彰が俺たちを見つけて手を振ってくる。

「どうやって抜け出したんだ？」

「俺の布団の中にクッションをつめて俺がいると思わせた」

「そこまでして抜け出したいのかよ……」

「もちろん」

「杏奈ちゃんは？」

優里が彰にたずねる。

「俺のことを縛って襲おうとしてきたやつのことなんかしるか……」

彰が涙目で言う。

大変だったんだな。

「杏奈ちゃんかわいそうだね」

「そうですっ」

円と結衣が唐突にそんなことを言う。

「ところで彰、お前はなにしに来たんだ？」

「え？亮の家に居候させてもらおうと……」

「亮と私たちの愛の巣を邪魔する気！？」

「彰君酷いよ！」

「そんな人だとは思わなかったです！」

え？愛の巣ってどこ？

俺そんなの築き上げた覚えはないよ？

まあ彰を居候させるのはいやだな……

ん？あそこにいるのは……

「俺だつて愛の巣に入れてくれたつていいじゃないかよー！！」

「「「いや(です)」「」」

「酷い！」

「そんなに愛の巣を作りたいならそこにいる女の子と作ればいいじゃないか」

俺は隠れていた少女を指差す。

俺が指差した先をみんなが見る。

「あ……杏奈？」

「も〜。亮言っちゃだめだよ〜」

「ごめんごめん」

「せつかく睡眠薬を染み込ませたハンカチ用意したのに」

「やめてよ!?!」

彰が本気でおびえる。

「心からごめんなさい」

俺は杏奈に頭を下げる。

「なんで亮はそんなに頭を下げるの!?!俺はむしろ助かったよ!?!」

「そこまで言うならゆるしてあげる。さて、彰?どうして抜け出したの?」

「怖いから」

「じゃあ私が怖くないって体に教え込まなきゃねっ」

「え?」

「お父さんたちならまだ旅行先だから2人つきりだよ」

「ちよっ……やめ……その縄しまって……」

「さっ！私の家に行こうか」

「やめてええええええ！！」

彰は杏奈に連れ去られて行った。

結局彰居候しなかったな……

まあそう仕向けたのは俺だけだ。

「杏奈ちゃんが出てくると私たち空気よね……」

「キャラが濃いんだよ……」

「シンデレとロリと巨乳じゃヤンデレには対抗できないですっ……」

第30話 女の子たちとGW最終日？

「GW最終日はゴロゴロするに限るよな」

俺はそんなことを言いながらソファーに寝転がる。

さて、俺はゴロゴロしてるけどそんなこと居候している人たちは許してくれるわけなくて……

「亮遊ぼつよ〜」

「亮君暇だよ〜」

「亮さんベットに行きましょうよ〜」

とりあえず結衣は無視しよう。

「遊ぼつって言われたってな……じゃあゲームでもするか?」

3人は嬉しそうに首を縦にふる。

プ ステは出さないようにしよう……

たしかギャルゲーが入ってた気がするから……

俺はゲーム ユーブをだす。

え?なんでゲー キューブなのかって?

それは作者がゲーム ユーブのほうが好きだからだよ。

あんな動かなきゃいけないW iとかは嫌いなんだよ。

「まあとりあえずス ブラでもやるか」

俺がゲームをテレビにつないでる間優里たちは必死に説明書を読んでいた。

「ふん！亮なんか一瞬で蹴散らしてくれるわ！」

「最後に勝つのは私だよ？」

「まあ本気でもだしますかね」

そして俺たちはスマ ラを開始する。

俺が選んだキャラはリク

妥当だよな。

優里が選んだのはカーイ。

ピンク色のあれな。

円が選んだのはピカユウ。

あれって雷うざいよな……

結衣が選んだのはス。

2文字で片方が隠れると分かりにくいな……

ネだよ、ス。

あれって初心者には扱いにくいけど結衣のやつ大丈夫か？

試合開始。

1人5機のサバイバル制。

俺が最初に狙ったのはピチュウ(円)。

「亮君こないで！」

あれ？なんかショック。

俺がピカチウ(円)に攻撃しようとしたところでカビィ(優里)に吸い込まれる。

コピー能力うぜー。

そしてカーィ(優里)にリン(俺)が吐き出される。

吐き出されたところを狙いネ(結衣)がスマッシュ技をきめてくる。

まだダメージが蓄積されてなかったから吹き飛ばされずにすんだ。

「俺ばっか狙ってないか!？」

「亮甘いわね」

「強い人から倒すのは常識だよ？」

「亮さんさつさと倒れるですう」

この3人酷い……

リン（俺）は3人の攻撃をよけながら落ちたら復帰が難しいネ
（結衣）を端に追い込む。

そして必殺で落とす。

これで初心者ネ（結衣）は落ちるはず……

「まだです！」

ネ（結衣）がうまく戻ってくる。

それだけじゃなくリン（俺）に攻撃をあてて上に飛ばす。

それだけならまだ死ななかったがリン（俺）の下にピカチュ
（円）が入り雷をつかう。

そして吹っ飛ばされる……

「お前らのコンビネーションが怖い……」

リン（俺）は1対3という不条理な戦いをなんとか切り抜け、残

り3機の状態で残り4機のネ（結衣）と一騎打ちとなる。

「亮さんなにか賭けませんか？」

「え？」

「私が勝つたら一緒に風呂に入ってください」

「なっ!？」

「亮さんが勝つたらなんでも言っこと聞きます」

「そんな賭けのれるか！」

「初心者に負けるのが怖いんですか？」

「そんなこと……!」

「じゃあこれでいいですね」

そう言っつてネ（結衣）は自分から落ちる。

「これで3対3の公平な試合になります。これでもまだ負けるのが怖いんですか？」

「そこまで馬鹿にされたら黙ってられねえな……後悔してもしらねえぞ！」

リン（俺）は戦った。

時には矢を飛ばし。

時にはボムを使い。

時には剣で相手を斬った。

リン（俺）は頑張って戦った。

これが私の全力全開！ってくらい戦った。

『K・O・！』

やっと……

やっと戦いが終わった。

俺はもう戦わなくていいんだ……

「亮さん私の体ちゃんと洗ってくださいねっ」

ネ（結衣）の完全勝利。

リン（俺）はネ（結衣）のことを1回も殺せなかった。

「結衣ばっかずるい！」

円が騒ぐ。

「負け犬の遠吠えですか」

「うっ……」

「優里はなにも言わないんだな」

俺は隣にいる優里に話しかける。

「私は裸はちょっと……」

このとき俺はただ単に優里は恥ずかしがってると思っていた。

「ずっと隠しているのは無理ですよ」

「(でも亮が見たらきつと嫌われちゃうもん……)」

「(亮さんのことを信じてもいいと思うんですけどね……)」

「(亮は嫌わないうってわかってるんだけど……怖いもん……)」

「(まあ私も優里のことは言えませんがね。言いたくなったりときでいっておじさまも言っていました)」

「(うん)」

この会話はもちろん俺には聞こえていなかった。

「優里、お腹すいたよ」

「俺も」

「今作るから待ってて」

優里は夕飯を作り始めた。

さて、今夜の風呂はどうしよう……

第30話 女の子たちとGW最終日？（後書き）

なんかすこし重そうな雰囲気ですが前作みたいな死亡エンドにはしない予定なので安心してください。

第31話 女の子とお風呂と鼻血と？

「やっぱり入らなきゃだめ？」

「はい」

俺は今、結衣と脱衣所にいます。

そんな状況普通の男の子なら嬉しくてたまらない状況なんだけど……
相手がちよつと危ないもんな……

「やっぱり嫌だ……」

「ゲームで負けた亮さんがいけないんです」

「うう……」

普通「うう」のって女の子が嫌がるものなんじゃないのか？

「さっ！亮さん脱いでください！」

「ちよつ！なんでパンツに手をかけるんだよ！」

「早く早く早く早く早く早く早く早く早く早く早く早く早く」

「怖いから！円！助けてくれ！」

「助けを呼んでも無駄です！円のことは眠らせてあります！」

「何者だよ!？」

「さあ!亮さんのエクスカリバーを見せてください!」

「わ……わかった……結衣は先に風呂に入っていてくれ……俺も後で入る」

「入らなかったら今夜亮さんのこと襲います」

「神に誓って入らせていただきます」

俺は一旦脱衣所から出て自分の部屋にむかう。

そこで水着と目隠しを持って風呂に戻る。

「これをつけて入るなどと言われてないからな」

俺は風呂に入る。

「亮さ……なんですかその格好」

「ん?なにか?」

「ちょっと失望しました」

「わるいな」

俺は手探りでシャワーを探す。

「（亮さんが目隠しをしたのはむしろラッキーです）」

「シャワーシャワー……」

むにょん。

むにょん？

「あんっ！亮さんったら大胆」

「へ？」

「亮さんが触ってるもの……それは！」

結衣が俺の目隠しをとる。

目に映るのは結衣の大きなマシユマロを触っている俺の手……

あっ……

もう我慢できない……

理性じゃないよ？

「ぶはっ！」

「亮さん！？」

俺は鼻血を盛大にだし風呂に倒れた。

後に結衣はこう語る。

「亮さんにはまだ刺激が強すぎましたね。自業自得だからしょうがないんですけど……お風呂掃除が大変でした……」

第32話 女の子たちと中学生の女の子？（前書き）

前話を見直してみただけどひどいな……

第32話 女の子たちと中学生の女の子？

GWから何日かが経った。

もうGWのだらけきった雰囲気は抜けて一部の人は期末試験にむけて頑張っているようだ。

まあ俺は頑張っていないんだけどね。

「彰いいかげん元気だせよ」

「身体のおちこちが痛い……」

彰はGW中なにかすごく怖い目にあったらしくGWが終わっても身体が震えている。

「亮帰ろう」

「亮君！晩御飯の買い物行かなきゃいけないんだって」

「だから早くするですう」

「わかった」

俺は席から立ち上がり帰ることにする。

「じゃあな」

「ああ……」

彰に別れを言って俺たちは教室を出た。

俺たちは帰りにデパートに寄る。

商店街じゃないのはまあ現代っ子だからかな。

そしてそこで俺たちは夕食の買い物を買わせて帰路につく。

「期末試験どうしよう……」

帰り道、円と結衣が頭を抱えながら言う。

「ちゃんと勉強すればできるだろ」

「そつだよ」

俺と優里が2人に言う。

「2人は勉強ができるからそんなこと言えるんだよ！」

「そうです！ 私たちとは頭の造りが違うんです！」

「はいはい。ん？」

俺は家の前に中学生くらいの子を見つめる。

「えっと……うちになにか御用ですか？」

俺はとりあえずたずねてみることにした。

「あっ！お兄ちゃん！」

「お兄ちゃん？……ってうわっ！」

いきなり中学生くらいの子が抱きついてくる。

「亮！なにやってるのよ！」

「亮君浮気！？」

「ちょっとおしおきが必要ですかね？」

なんで3人共俺を責めるの！？

「ちょ！離れて！」

「え？なんで？」

「3人に俺が殺されちゃうから！」

「お兄ちゃん死んじやいや！」

そう言っつて中学生くらいの女の子は俺から離れる。

「っつか君誰？」

「私？私は詩織。山崎詩織」

「……誰？」

「うっくん……わからないなら……あっ！そうだ！パパにこれ渡せって言われたんだ！」

女の子から渡されたのは1枚のDVD……

「なんかすごく嫌な予感するんだけど……」

俺は女の子を一旦家に入れてみんなでDVDを見る。

『ういっす！』

「うわ……」

「おじさまだ！」

円が言う。

円が言った通りだった。

テレビに映ったのは俺の親父……

『えっと……これはお前はいつ見るんだろうっな？母さん分かるか？』

『私の予知によると5月の中旬ね』

当たってるよ……

おふくろ何者……

『さて、もう1人女の子が来たと思うけど……その子も預かってくれない?』

俺は詩織を見る。

詩織は満面の笑顔だ。

『ちなみにその子はお前のことをお兄ちゃんと呼ばせてるから。嬉しいだろ?』

こいつ……

『あんた!まだその教育してたの!?あんたにパパなんか呼ぶあの子が可哀想でしょ!』

『ちょ!やめ!その包丁しまつて!』

そして映像は途切れた。

親父大丈夫か?

「優里なにか親父から聞いてた?」

「円と結衣のことなら聞いてたけど……」

「優里お姉ちゃん。これからよろしくおねがいします」

「礼儀正しい!この子も今日から家族!」

優里が勝手に決める。

まあ今更一人増えようと関係ないよな……

「今日からよろしくな詩織」

「よろしくですう」

「よろしくおねがいます。亮お兄ちゃん。結衣お姉ちゃん」

「私は？」

「円お姉ちゃんは私より胸ないもん」

そう言っつて詩織は胸をはる。

「な……」

まあ確かに円よりはふくらみが……

っつていかんいかん。

「詩織。目上の人にはちゃんとしなくちゃだめだぞ」

「はい」

なかなか聞き分けのある子だ。

「円も年上なんだからすこしは我慢しなくちゃ」

「はい……」

そして俺の家にもう1人居候が増えた。

今は俺たちの家に家族が増えたのほづがいいのかな……？

ま、いつか。

第33話 女の子たちとつり橋効果？

詩織がうちに居候することになってから何日かが経った。

円と詩織はちよっとじゃれあって（喧嘩してるとも言っが）俺たちの中では詩織と一番仲がいいのは円だろう。

さて今、俺はリビングにいるんだけどどうちに居候している女の子たちが見当たらない……

いつもなら絶対に1人は俺のそばにいるのに。

なぜだ……

なんか俺さみしいなんて思ってる。

4月になるまではずっと独りだったのにも関わらずさみしいなんて思ってる。

「いつのまにかこの生活が慣れてるんだな……」

俺はそんなことをつぶやいてしまっ。

そして俺はソファーに寝転がり眠りについた。

そのころ居候している女の子たちは……

「みなさん聞いてください」

結衣が3人の前にでる。

「どうしたの？」

「なにかするの？」

「それよりもここお兄ちゃんの部屋だけどいいのかな？」

「亮さんの部屋だからこそです！」

「なに？亮のいかがわしい本でも探すの？」

「それはそれで楽しそうだね」

「えっ！？お兄ちゃんがそんなえっちな本持つてるなんて思えないよー！」

「甘いわよ詩織」

優里が詩織に近づく。

「優里お姉ちゃん？」

「亮も年頃の男の子なんだから一冊くらいはでてくるはずよ」

「違います！」

結衣がすこし大きな声で3人を制する。

「今日はすこし話し合いたいことがあります」

「「「？」」」」

3人が首をかしげる。

「私たちが亮さんに告白してから1ヶ月が経とうとしています」

「「！」」

「？」

優里と円は反応したが詩織はわからないようだった。

「本当は詩織ちゃんはいらないんですが仲間はズレにしたらかわいそうなので一応呼びました」

「お姉ちゃんたち告白したの!？」

「反応が遅い……」

誰かが小さな声でつぶやいた。

亮がいたら絶対にこの声の主は亮だっただろう。

「亮さんは私たちが告白したのにも関わらずなにも行動を起そうとしてくれません。そこで私は考えました」

3人が結衣に注目する。

「つり橋効果です!」

「……つり橋効果?」「」

一応補足説明。

つり橋効果とは危険な目にあつた時にドキドキし、自分が恋愛しているという事を認識するというもの。

「そう!亮さんをびっくりさせたり危険な目にあわせてそこで亮さんをドキドキさせる!そして私たちが近くにいれば完璧ですう!」

「……おお」「」

3人が感嘆の声をだす。

「しかし……この作戦には欠点があります」

「……欠点?」「」

「つり橋効果で恋人になつた男女は別れやすいらしいです……」

「そ……そんなの私たちの愛があれば……!」

「そつだよ……!私たちと亮君の間に別れるなんて文字存在しないよ!」

「お兄ちゃんは私たちを捨てないよ!」

「じゃあ作戦開始ですう!」

第33話 女の子たちとつり橋効果?? (後書き)

セリフが多くてごめんなさい……

第34話 女の子たちとつり橋効果?? (前書き)

やばい……

目標のお気に入り件数200件がもう完結した作品で達成しそうに
なってる……

第34話 女の子たちとつり橋効果？

「さて、つり橋効果でベタなのはつり橋の上で危険な目にあうというシチュエーションですがそれは無理なので家の中で実行したいと思います」

結衣が女の子3人に言う。

「1人1人ごとに危険なシチュエーションをつくって亮さんとラブラブな展開を目指しましょう」

「あゝ」

「はい詩織ちゃん！」

「それって私も参加していいの？」

「もちろん！」

「やった！」

詩織は嬉しそうにする。

「結衣しつもん」

「なんですか円」

「1人1人ってことは成功した人は亮君を独占できるってこと？」

「まあ結果的にはそうなっちゃいますね」

「順番はどうするの？」

優里が言う。

「まあそれはくじ引きで決めましょ」

順番はこうなった。

1番 詩織

2番 優里

3番 結衣

4番 円

「勝つのは私よ」

優里が不敵に笑う。

「そう言った人って負けるよ？優里お姉ちゃん」

「うっ……うるさい！」

「じゃあ詩織ちゃんから行くですう」

結衣にそう言われて詩織は亮のいるであろうリビングへむかった。

〈詩織視点〉

うっ……私から……

正直なにしたらいいかわからないよ。

とりあえず亮お兄ちゃんのところに行ってみよう。

「あれ？」

亮お兄ちゃん寝ちゃってる。

寝顔かつこいいな

はっ！いけないいけない。

見とれちゃってたよ！

「亮お兄ちゃん起きて」

私は亮お兄ちゃんのことをゆする。

「っ……」

亮お兄ちゃんが目を覚ます。

危険な目に……危険な目に……

「亮お兄ちゃん！！宇宙人が侵略してきたよ！！」

「へっ？」

「えっと……あの……」

「詩織？」

「やっぱり無理！」

私は走ってリビングから逃げ出した。

「なんだったんだ？」

亮はなにがあつたかわからなかった。

「やっぱり私には無理だよ……」

「あれが全力だったらすこし詩織ちゃんを疑うですう……」

「次は私ね」

（優里視点）

さて……亮がドキドキするようなシチュエーション……

まず大きな音をだして亮をびっくりさせて私が泣きつくそして亮は
ドキドキ……

なんか嫌ね……

プライドを捨てる感じだわ……

でも大きな音でびっくりさせるとのはいいかもしれないわね。

私は爆竹を用意する。

爆竹がどこから出てきたのかは禁則事項ですつ。

ん？なにこのセリフ……

まあいいわ。

そして爆竹を亮の近くにばら撒く。

バン！バン！バン！バン！

「うわっ！？」

亮は飛び跳ねる。

「亮大丈夫！？」

私は亮に身体を密着させる。

「あ……ああ」

亮の心臓の音すごい……

そんなに驚いたんだ。

私はつい笑いそうになってしまつ。

「優里？」

「な……何もしてないわよ！」

「もしかして……今のはお前がやったのか？」

亮が私の顔を覗き込む。

私はつい目をそらしてしまう。

「優里！」

「ごめんなさい！」

私は走ってリビングを抜け出した。

「ふっふっふ……優里もまだまだですね」

「悪かったわね」

「今度は私の番です！」

〈結衣視点〉

私はもうストレートにいくですう。

亮さんはソファアームに座ってる。

よし。

私はそっと亮さんに近づく。

「結衣？」

「バレた!？」

まさかバレるとは思わなかったですう。

こうなったら……! !

ガッ!

「えっ？」

ポフッ!

「ちょ!結衣!？」

さて、効果音だけで亮さんを押し倒すことに成功したですう。

私は亮さんにまたがる。

「結衣!?!いきなりなにやってるんだよ!？」

亮さんがなにか叫んでいますけど聞こえないことにしましょう。

え?つり橋効果じゃないんじゃないかって?

亮さんの貞操が危険な目にあってるからおっけーですう。

「結衣!今ならまだ間に合う!やめるんだ!」

「やめません！……痛っ！」

後ろから叩かれた？

「結衣なにやってるのよ！」

「結衣だけ抜け駆け？」

「結衣お姉ちゃん酷い……」

「お前達……助けてくれるのか！」

私は3人に引つ張られてリビングから退場したですう……

「もう！結衣つたら！最後は私ね」

〈円視点〉

危険な目にあわせればいいんだよね？

「亮君っ」

「ん？ま……円さん……？そそその手に持っているものはなにに使うんですか……？」

亮君は振り返ると私にたずねてきた。

「ん？この包丁のこと？」

亮君は無言で首を縦に何度も振る。

「これはね……亮君を危険な目にあわせるために使ったよ?」

「ま……待つんだ円……俺が悪いことしたならすぐに謝るから……」

「亮君は悪いことなんてしてないよ?」

「じゃあなんで!？」

「亮君は今ドキドキしてるよね?」

「もう心臓が破裂しそうなくらいに」

「そのドキドキが私への恋愛感情だって誤認してくれるまで私は包丁をしまわない」

「怖い怖い怖い!! つか無理だよね!? そんな包丁を俺に向けてる人に恋愛感情を抱くなんて誤認でも無理だよね!？」

「あつ……」

「だから包丁しまおう? な?」

「うん」

「よし、いい子だ」

亮君が私の頭をなでてくれる。

「ずるい! 私もなでてお兄ちゃん!」

「あつ！詩織！」

「優里も行くなら私も行くですう！」

3人が出てきた。

〈亮視点〉

「で？つり橋効果を利用したと」

「「「はい」「」「」

「うん……これは俺が原因で起こったことだし……怒れないよな
あ……」

でもな……

二股とか最低なことはしたくないしな……

二股とかしたらスクール イズみたいになるかもしれないし……

それだけはなんとしてでも避けたい……

でも俺は今の生活が気に入ってるし……

そんな1人に依存するってことはできない。

でも二股とか最低なことは（以下略）

「なあ、今のままじゃだめなのか？」

「え？私は別にかまわないけど？でも……亮がもう少しき……キス……とかしてくれたらなあ……って」

「私は亮君に抱きしめてほしい！」

「私はちよつと身体が寂しいなあ……って」

「結衣お姉ちゃん！？」

結衣の発言はまだ中学3年生の詩織には毒だ……

「結衣のは置いといて」

「置いとかないでください！」

「まあ……みんなにも失礼だし……俺もできる限りのことは……する……かな？」

「」「」「ほんと)ですか)！?」「」「」

「で……できる限りだぞ!？」

「」「」「うん(はい)！」「」「」

これは……俺たちの距離が縮まった……のか？

第35話 男の子が女の子に嫌われる？（前書き）

この小説1文に1行あけていますが見やすいですかね？
見難いようだったら2行あけようと思うんですけど……
メッセージかなにかで書いてもらえるとたすかります。

第35話 男の子が女の子に嫌われる？

「喧嘩したあ？」

俺は彰にたずねる。

「いや……喧嘩っていうか……一方的に嫌われたっていうか……」

彰が言うには昨日を境に杏奈と喧嘩したらしい。

もう杏奈を忘れてる人もいるかもしれないから一応説明しとくけど彰の許嫁な。

「杏奈がお前のこと嫌いになるわけないだろ？」

「あれは俺がクドわ をやっている時だった……」

「なんでクド ふなんかやってるんだよ……」

「まあいいから聞いてくれ」

「長くなる？」

「いや、そこまで長くはならないと思う」

（以下回想）

「ちょ！回想って長くする気満々じゃねえか！」

「うるさい！以下回想って書いてあるんだからちゃんと回想に入らせろよ！それにこの作者が長くするなんてむりだろ！？」

「それもそうか……」

「じゃあ今度こそ……」

↳以下回想（彰視点）↳

「今日もわふーって言ってくれて俺はうれしいな〜」

俺はパソコンの前でクドわ たーをやっていた。

「ク は本当にかわいいな〜……でも俺はそつちの世界にいけない……」

こんな悲しいときはこの歌に限る。

「彰……？」

「あ……杏奈！？」

いつの間にか俺の部屋のドアに杏奈がいた。

「なに……やってるの……？」

「こ……これはクドわ たーって言って……」

「なんで……なんでそんなことやってるのよ！！彰のバカッ！もう知らない……」

杏奈は部屋を走って出て行った。

「なんだったんだ……？」

それから俺は杏奈に口をきいてもらえなかった……

く回想終わりく

「短かっただろ？」

「あ……ああ」

よかった……

あいつらが来てからギャルゲーなんかやらなくて……

まああいつらがいるからそんなもの必要ないんだけどな。

あいつらがかわいいし……

ってなに言ってるんだ俺！

「あいつ……涙目だったんだよな……」

「だから今日杏奈学校来てないのか。それに好きな人がそんなものやってたらそりゃ悲しくなるだろ」

「うん……」

「ってかやっぱりお前杏奈のこと好きなんだな」

「なっ……」

「好きじゃないのか？」

「嫌いでは……ない……けど……」

彰が顔を赤くしながら言う。

男がそんな顔赤くしたって気持ち悪いだけだぞ……

「まあとにかく原因はクド ふであってるんだな？」

「多分……」

「じゃあ今日俺杏奈の家行ってみるよ。お前もくるか？」

「俺が行ってもきつとだめだから……頼む」

「そっか」

放課後。

俺は杏奈の家に行ってみた。

優里たちには先に帰ってもらった。

「おじゃまします」

俺は杏奈の家に入る。

「なにかあったのか？」

俺は杏奈に聞いてみる。

「だって……彰が……」

「ギャルゲーやってたのがそんなにショックだったのか？」

「そうじゃないの……彰がなにやるつと私は彰のこと好きだもん……」

「じゃあ何で……？」

「その日は……私の誕生日だったの……亮たちは覚えててくれたのに……」

あいつ……！

「あっ！亮たちの誕生日プレゼントベッドに置いてるよ？」

俺は優里たちと一緒に杏奈にぬいぐるみをあげた。

「それはよかった」

「でも……彰はなにも……その日は一緒に出掛けようって約束してちゃんと待ち合わせの場所で待ってたのに……私その日のために新しい服買ったりとかしてたのに……」

杏奈は泣き出してしまった。

「杏奈。俺にまかすとけ」

俺は杏奈の頭をなでる。

「亮〜」

「ほら、もう泣くな」

「うん……」

あいついくらバカだからってこれは許されないぞ……

俺は杏奈の家を出て彰の家に向かった。

え？なんで電話じゃないのかって？

それは……まあ……雰囲気的に家に行かなきゃだめなんじゃなかったのかな。

どうせ彰の家近いし。

第36話 男の子の本気の告白？

「彰！！」

「ん？亮？どうしたんだ？」

「お前嫌われた理由クドわ たーのせいじゃねえじゃねえか！！」

「え？」

「お前杏奈の誕生日なに約束したよ？」

「一緒に出掛けようって……あっ……」

やっと彰も気づいたみたいだ。

「ど……どっしよう……俺取り返しのつかないことを……」

「いいから今すぐに謝って来い！！」

「お……おっ！」

彰はすぐに杏奈の家に向かう。

「え？俺の出番これで終わり？俺主人公だよ？」

〈彰視点〉

杏奈になんて謝ればいいんだよ……！！

なんで俺はそんなに大切なことを忘れてたんだよ……！！

せっかく誕生日プレゼントも買っておいたのに……！

でも俺はなんでこんなに必死なんだ？

杏奈のことそんなに好きだったのか？

いや、違う……

俺は心地よかったなんだ……

杏奈がそばに居てくれる。

そんな日常が好きなんだ。

そして俺が杏奈に嫌われてしまったことでその日常は崩れたんだ……

俺はそれが本当に嫌なんだ……

俺は緊張しながらも杏奈の家のインターホンを押す。

『はい』

「あ……杏奈？俺だけど……」

『開いてるから入っていいよ』

俺は杏奈の家に入る。

「あ……杏奈……本当にごめん!!」

俺はまず杏奈に頭を下げた。

「お……俺絶対に忘れちゃいけないこと忘れてた!!遅れたけどこれ……!!」

俺は杏奈のために用意した誕生日プレゼントを渡す。

杏奈はなかなか誕生日プレゼントを受け取ってくれない。

「俺……!杏奈から嫌われて気づいたんだ……!杏奈がそばにいる日常が好きだったことに……!!だから……ずっと俺のそばに居てくれ!!」

俺はそう言ってから顔を上げる。

杏奈の顔は真っ赤だった。

「あ……彰……?それって……」

「俺は杏奈が好きだ!!」

杏奈の目から涙がこぼれる。

「わ……私……独占欲強いよ?私わがままだよ?それでもいいの?」

「俺は杏奈が好きなんだ!!」

「私が……私が彰のこと嫌いになるわけじゃない！」

杏奈がそう言った瞬間俺の唇にやわらかい感触が伝わる。

「私も彰が好きだよ」

杏奈は笑顔でそう言ってくれた。

それからすこし落ち着いた頃。

「ねえ、プレゼント開けてもいい？」

「もちろん」

「ネックレス？」

「杏奈そういうのつけてないなって思ってな」

「嬉しいよ」

「さて、遅いかもしれないけど今から約束果たさないとな」

「約束？」

「一緒に出掛けるんだろ？」

「うん！」

「この小説って彰が主人公じゃないよな？」

「亮がもつと私たちを愛せばこんなことにはならなかったんじゃないの？」

「亮君安心してもいいよ！きっと次の話からは亮君が主人公だから！」

「亮さんが私たちを襲えばいまから主人公なんですけどね」

「結衣はちよつと黙ろうな？」

「亮お兄ちゃんこれつけければ大丈夫っ！」

詩織に渡されたのは『あんたが主人公』って書かれた襷たすき……

「俺が……主人公……だよな？」

第37話 女の子があの子であの子が女の子で……?? (前書き)

今回の題名酷いww

まあそれは置いといて……急に『俺があの子と同棲!?!』の夏希と
優輝の高校生の話を書きたくなってきた……

もういつそのことこっちの作品に出しちゃえば……
なんて考えてる作者です。

第37話 女の子があの子であの子が女の子で……???

「円！つまみ食いはダメだって言ってるでしょ！..」

「おいしそうだったんだもん！..」

とある金曜日の夕食前。

せつかく一週間の学校が終わって明日は休みなのに元気に優里と円が追いかけてっこをしている。

「元気ですね……」

「まあ元気なのはいいことだぞ？」

「お兄ちゃん……眠い……」

「少し寝ててもいいぞ？」

「うにゅ〜」

詩織が俺の膝を枕にして眠る。

普通膝枕って男がしてもらうんじゃないの？ねえ？

「つまみ食いくらいいいじゃん！優里のケチ！」

「わっ！円急にこっち向かないでよ！..」

「ちよつ！優里！？」

ゴンツ！

あ、いい音。

「なかなかいい音でしたね」

「そうだな」

俺と結衣はのんきにそんなことを話す。

「いたた……」

「円つたら急にこつち向くから……」

「2人とも大丈夫か？」

俺は2人のほうを向かず声だけで呼びかける。

「なんか身体が重い……」

「なんか今まであつたものがないような……」

「「ふえ？」」

2人は向かい合う。

「こんなところに鏡なんてあつたっけ？」

「まさか……」

「いやあああああああ！！」

「「「!?」」」

2人の悲鳴を聞いて俺と結衣だけじゃなく寝ていた詩織も驚く。

「どうしたんだよ」

俺は2人のもとにむかう。

「りよ……亮……私の身体が……」

「あれ？円って俺のこと『君』^{くん}付けて呼んでたよな？」

「円は私だよ？」

「優里はなに言ってるんだよ……ってまさか……入れ替わった？」

「「多分……」」

へえ。こんなことあるんだ。

「さて、テレビでも見るか。詩織なに見ようか？」

「お兄ちゃん!？」

「亮さんが現実逃避を……」

「亮君！見捨てないでよ〜！！」

俺は円？でも優里の身体だし……

優里（円）でいいか。

俺は優里（円）に手をつかまれる。

「こんなお腹にお肉がついてる身体嫌だよ」

「なっ！なんですって！？私だってこんなつるぺたな身体嫌よ！」

「優里酷い！」

「あんたが先に言ったんでしょ！」

2人が喧嘩（？）を始める。

「ほらほら一旦落ち着け」

「そうですね。優里？その身体で1回体重計に乗って感動してくる
ですう」

「！」

円（優里）はすぐに風呂場に向かって行った。

「円？あなたはその胸を堪能するですう」

「！」

優里（円）は自分の胸をもみ始める。

これは目の保養に……いやいや！見ちゃダメだ！！

「亮さん？ 私たちも入れ替わって……」

「絶対に嫌だ」

「しゅん……」

「お兄ちゃん」

詩織が俺の服を引っ張ってくる。

「どっした？」

「テレビでも見ようか」

「そっだな」

さて、どっししようか？

第37話 女の子があの子であの子が女の子で……?? (後書き)

さて、この入れ替わりのお話が終わったらどんなお話を書こう……

第38話 女の子があの子であの子が女の子で……???

優里と円が入れ替わった日の夜。

俺はもう寝よつとしていた。

「亮〜」

「うわっ！優里！？じゃなくて円！？」

優里（円）が俺に馬乗りしている。

そして身体をくっつけてくる。

胸が……！胸が当たってる……！

「円じゃないよ？もう戻ったよ？」

「本当か！？」

「うんっ。それよりもどうかな？」

「な……なにが？」

「私の胸」

「なっ………！」

くそ……

きっと今の俺の顔は真っ赤だろう。

パンツ!!

俺の部屋のドアが勢いよく開かれる。

「円!! 私の身体でなにやってるのよ!!」

円が入ってきたのになに言ってるんだ?

円は自分だろ?

戻ったって優里も言ってたし……

「優里気づくの早いな。もう寝たと思ってたのに」

あれ?

「も……戻ったんじゃないのか?」

「そう簡単に戻るわけじゃないっ」

だ……だまされた……

「円がそんなことするなら私はあんたの身体で裸になって外走ってくるわよ!!」

「優里がそうするなら私もするもん!! それで優里の『初めて』は知らない人に奪われちゃうんだ!!」

「円なに言ってるんだよ!？」

「裸で歩いてたら奪われちゃうよ？」

「そりゃそうだけど……2人とも一旦落ち着こう。な？」

「「む……」

「身体が戻るまで2人はおとなしくしてること。わかったか？」

「「はい……」

「わかったなら寝なさい」

「「」」」で寝る」

「は……？」

「だって亮が見張ってないと私たちいつ喧嘩するかわからないわよ？」

「優里の言う通り」

「お前らいつもあまり喧嘩しないでせによく言っな」

結局2人は俺の布団で寝ることになった。

「亮君の匂いがする」

「心地いいわね」

「お前らいつも入ってるだろ……?」

「起きたらいつの間にか亮君の布団に入ってるんだよ」

「私も」

恐ろしいよ……

朝、起きるとすでに円（優里）が朝食を作っていた。

「おはよう。まど……優里」

「あなた一瞬円って呼びそつになったでしょ?」

「まあ……」

「もうすぐできるから待ってて」

俺はテレビを見ながら待つことにする。

「んっ……!んっ……!」

「どうしたんだ優里?」

「この身体だと届かない……!」

円（優里）は必死に手を伸ばして上の棚に入ってるなにかを取ろうとしてるらしい。

「俺が取るよ」

「あ……ありがとう……」

「で、なにを取ればいいんだ？」

「あそこにあるみそ取って」

「はい」

「小さい身体も不便ね」

「まあそれがわかったら円ができないこととかやってやることだな」

「考えておくわ」

「それよりもどうやって戻したらいいんだ？病院に行っても信じてもらえないだろうし……」

「とりあえず頭をまたぶつけてみてみるわ」

「おはよう……いびきます……」

「おはよう……って結衣！？」

「はい……？」

「その顔どうしたんだよ！？」

結衣はそうとうやつれていた。

「ちよこつと発明を……」

「「発明?」「」

俺と円（優里）は首をかしげる。

「これです……!!」

結衣が出したのはボウルになんかホースみたいなのがついててそのホースがもう1つのボウルにつながってるもの……

「私が亮さんと入れ替わるために造った新発明!! 『入れ替わり君です!!』」

ネーミングセンスを疑う……

「さあ! 亮さん!! つけて私と入れ替わりましょう!!」

「嫌だよ!! ってかどうやって造ったんだよ!？」

「ルパ 三世を何度も見て……」

「ん? これがあればもとに戻れるんじゃないか?」

そして優里と円はもとに戻った。

その日『入れ替わり君』は粗大ゴミとして捨てられた。

「オチが酷いな……」

「お兄ちゃんそんなこと言っちゃだめだよ……」

「でも酷いのは事実なのよ？」

「右に同じ意見」

「私の……私の『入れ替わり君』が……」

第38話 女の子があの子であの子が女の子で……?? (後書き)

オチが酷くて本当にすいません……

思いつかなかったんです……

次の話どうしよう……

もういつその事優里の過去をやってしまおうかな……

第39話 女の子の辛い過去？ ～優里編～（前書き）

結局過去編にしてしまった……

第39話 女の子の辛い過去？ ～優里編～

私はいつも1番じゃなくちゃいけなかった。

「亮ー！！もうすぐ期末テストだよー！！」

彰が俺に泣きついてくる。

「お前勉強してないもんな」

当然毎日コツコツと勉強している俺は余裕だ。

今度こそ優里に勝ってみせる！

そんなことを心に決心していた俺。

「亮……今回も勉強を……」

「杏奈に教われよ。付き合ってるんだろ？」

「杏奈に勉強なんか教わったら保健の勉強になるだろ！？」

彰も苦勞してるんだな……

「俺は今回こそ学年で1位になるから無理だ」

「亮のケチ」

「ケチだと？お前がちゃんと勉強してれば俺は教えなくてもよかつたんだぞ？」

「ごめんなさい」

「上園君」

「会長……」

会長が教室に入ってくる。

それだけで男子の目を引く。

「今回こそ実技を……」

「一人でがんばってください」

「ひ……一人で！？う……上園君はそういうプレイが……」

「ちょっと！！変な誤解受けるでしょ！！その女子も『上園君はそういうタイプ？』とか言うな！！」

会長が来るだけでこんなにも大声だすことになるなんて……

「とにかく俺は今度こそ学年で1位になるので！それじゃ」

俺は足早に教室を出ようとする。

ガッ

「へ？」

不意に俺の腕がつかまれる。

「亮？私たちのこと忘れてない？」

「セリフがなかったから忘れられてもしかたないけど……」

「自分はセリフ多いからって酷いです」

「ほ……ほら……なんていうか……俺がセリフ多いのは主人公というスペックが……」

「「「私たちは正ヒロインだよ（！！）」「」」

「……」

ダッ！

俺はすぐに下駄箱に向けてダッシュする。

「「「あつ！」「」」

俺は走った。

一生懸命走った。

「俺……男の子なのに……」

優里に追いつかれた……

「私は運動神経だつていいんだから」

「うう……まあとにかく早く家に帰らないか？」

「そうね」

俺たちは家に帰る。

「うう……テストが……テストがあ……」

「円？『テスト』ってひらがなで書くとなんか和みますよ」

結衣はそう言つて『てすと』と紙に書く。

「本当だ……和むね……このままテストなんかなくなればいいのに」

「本当ですね」

円と結衣が遠くを見つめる。

「お前ら現実逃避してんじゃねえよ……」

「「だつてえ……」」

「優里、今回は負けないからな」

「ふん！やってみなさいよ！」

そして時は過ぎテスト返却日……

「学校行きたくない……」

「円、そんな警沢言っちゃいけません……」

「結衣だつて行きたそうに見えないよ？」

「それは言わないで下さい……」

「ほらお前ら行くぞ？」

俺たちは学校に向かう。

テストは一気に返ってくる。

しかも帰りのHRに……

つてことはテストの点数が悪い人にとってはこの1日は最悪な日である。

え？なんでいまさらこんなこと言うかだつて？

それは作者が今考えたからだよ？

まあそれは置いておいて帰りのHR。

「上がったあああああああ……」

きたよ！

きましたよ！

平均98!!

これはもらったな!!

「あれ？彰が……」

彰は机に突っ伏して周りから黒いオーラをだしている。

あの様子だとダメだったのだろう。

「あれ？結衣も……」

この流れだと円も……

「円は嬉しそうだな」

「だって意外にいい点数だったんだもん」

「さて……優里！平均は何点だ!!」

「97よ。落ちちゃったわ」

「勝ったああああああ!!」

「え！？嘘！？」

優里は俺のテストを覗く。

「まさか……私が……1番じゃ……ない……？」

「ふははははは……は……は……？」

俺が笑っていると優里は教室を走って出て行ってしまった。

まるでなにかから逃げるように……

第40話 女の子の辛い過去？ ～優里編～（前書き）

『優里』のことちゃんと『ゆり』って読んでもらえてるかな……

第40話 女の子の辛い過去？ ～優里編～

「あいつどうしたんだ？」

「きつと……」

円が優里の出て行った扉を見ながら言う。

「円何か知ってるのか？」

「知ってるといえば知ってるけど……私からはちょっと言えないかな……」

「？」

「まあ亮君がちゃんと優里に信用されて話されるのを待つしかないよ」

俺ってまだ優里に信用されてなかったのか……

「いま信用されてなかったのか……って思ったでしょ？」

「なぜ……わかった……」

「亮君そんな顔してるもん」

「そうか？」

「うん。優里は亮君を信用してるけど嫌われないか心配なんだよ」

「俺が優里を嫌う?。」

「嫌うことはないってわかってるけどやっぱり怖いんだよ。」

「怖い?。」

「ま〜ど〜か?。」

円の後ろからいきなり結衣が現れる。

「ひっ……………」

「それ以上言うと大変なことになりますよ?。」

「!」…………「めんなさい」

「亮さんは先に帰っててください。優里はきっと部屋にいますから。」

「お…………おっ」

俺は先に家に帰ることにした。

「円?あれは優里が自分で乗り越えなきゃいけないことなんです。」

「わかってるよ…………私だっていつか亮君に話さなきゃいけない……………」

「そうです。それは自分たちで話す。亮さんのお父さんに言われたことです」

「亮君なら大丈夫だよね……？」

「もちろんですう。だって私たちが好きになった人ですもん」

「うん！」

俺が家に帰ると結衣の言っていた通り優里は帰っていた。

「……………」

俺は優里の部屋の前に立つ。

コンコン……………」

俺はそつと部屋の扉をノックする。

「優里？俺だけど……………」

「……………入っていいよ……………」

俺はゆっくりと扉を開けて部屋に入る。

「優里？」

優里に近づくと優里は震えていた。

俺はそつと優里を抱きしめた。

それで優里の震えが止まると思ったから。

「……………!」

抱きしめると優里はビクツと身体を跳ね上がらせる。

「やめて!」

俺は優里に突き飛ばされる。

「今度こそ……………今度こそ1番になるから……………だから……………お仕置きは……………」

「優里……………?」

お仕置きってなんだよ……………

そういえば親父の映ってたDVDで辛い過去がどつこの……………

それがこれに関係してるのか?

「ごめんなさい……………ごめんなさい……………」

「優里!」

もうこんな優里を見てられなかった。

俺は優里の顔をつかんで俺の目を見させる。

「優里！！俺だ！！わかるか！？」

優里は無言で俺を見つめてから安心したのか俺にもたれかかってきた。

それから数分が経った。

優里が俺から離れる。

「落ち着いたか？」

「うん……ねえ……聞いてくれる？私の過去」

第41話 女の子の辛い過去？ 〈優里編〉（前書き）

目標達成まであと10件！

みなさん本当にありがとうございます！

さて……この目標達成したら今度は総合評価を……

第41話 女の子の辛い過去？ ～優里編～

私の家は結構裕福な方だった。

お父さんがお金持ちだったの。

お母さんもすごく優しくかった。

お父さんもお母さんも一人娘の私をすごく可愛がってくれた。

本当に幸せだった。

でもそんな幸せな生活に終止符が打たれたのは私が7歳の時……

お母さんが死んじゃったの……

本当に辛かった。

それからもお父さんは私がさみしくないようにつけて可愛がってくれた。

でも私はお父さんが泣いてるのを知っていたの。

だからお父さんに負担をかけないようにって私は強くなるうとした。

そして私が11歳の頃にお父さんは再婚した。

お母さんがいなくなっしてから辛かったのにさらに辛い生活になってしまった。

新しいお母さんは厳しい人だった。

『何でも1番でなきゃいけない』

そう私は新しいお母さんに言われた。

でも急に1番になるなんて言われても無理に決まってるじゃない……

私が1番になれなかった時私が新しいお母さんにやられたのは『体罰』……

最初はビンタとかだった。

お父さんは新しいお母さんに嫌われたくないから何もしてくれなかった。

結局お父さんはお母さんが死んじゃってから少しおかしくなっちゃった……

決して私よりも新しいお母さんがいいからとかじゃない……

私はそう思わないときつと生きていけなかったからそう思うことにした。

私は体罰が嫌でとにかく頑張った。

そして1番になることが当たり前になったある時私は2番になってしまった。

ビンタは嫌だな……って思っていたんだけど私が新しいお母さんから受けたのはビンタなんか比べ物にならないほどの体罰だった。

『1番にならないなんてことが絶対にならないように』

そう言いながら笑って私の爪と肉の間に針を刺した。あの時の痛みは尋常じゃなかった。

痛みでかなり叫んだと思う。

でもそれだけじゃなかった。

私の背中に火がついたタバコを押し付けたりもした。

「ちょっと見てくれる？」

そう言っつて優里は服を脱いで俺に背中を見せる。

「っ！..！」

俺は驚きで声がでなかった。

優里の背中にはきつと消えることのない火傷の痕。

見るのも辛かった。

「やっぱり……こんな傷ついた女の子嫌だよね……嫌いになるよね……」

「そんなことない!!」

「え?」

「優里の背中への傷がなんだよ!?他の男はそれを見て優里のことを嫌いになる?もし嫌いになるとしても俺は優里を絶対に嫌いになんかならない!!もし優里がその傷のせいで誰とも結婚できないのなら俺がしてやる!!」

優里は驚いていた。

まあ俺がいきなり大声だしたのが原因だろうけど……

「亮……亮お……!!」

優里は俺の名前を呼びながら泣きついてくる。

俺はその頭をそつと撫でる。

いつも優里は強がってるけど今は小さなただの女の子だった。

そのころ結衣たちは……

「あつ!あれ詩織じゃない?」

「本当ですね。詩織」

「あつ！結衣お姉ちゃん！円お姉ちゃん！」

詩織が結衣たちに向かって手を振る。

「詩織く。ちよつと一緒に出掛けない？」

「今から？」

「そうですね。ちよつと公園かなにかに行きませんか？」

「うん……？」

詩織は訳もわからず結衣たちに公園に連れていかれた。

「亮聞いて。その辛かった過去にもある時終止符が打たれるの」

泣き止んだ優里は思い出すように優しくな目で話す。

ある時私の家に2人のお客さんが来るの。

その2人は亮のお父さんとお母さんね。

その人たちはお父さんと何か話してから私のもとに優しく微笑みながらやって来た。

でもね、その時の私はもう死んだような目をしてたんだよ……

なにをやるにしても人形のように無感情な状態だった。

新しいお母さんの体罰にだってもう反応すらしなかった。

亮のお父さんとお母さんは私を遊園地に連れていってくれたの。

まあその時の私はもう中学二年生なんだけどね。

でも亮のお父さんはおもしろいし亮のお母さんはすごく優しくかった。

その日、私は久しぶりに笑った。

笑ったら亮のお父さんもお母さんもすごく喜んでくれたんだよ？

そして亮のお父さんとお母さんは私にこう告げた。

『もうあの家には戻らなくてもいいんだよ？』

私はその時びっくりした。

もうあそこに戻らなくてもいいの？

もうあんな痛い思いをしなくてもいいの？

『まあ優里ちゃんが戻りたいなら別だけどねっ』

亮のお母さんがからかうように言うてくる。

『さあどうする？一緒に来るかい？それともあの家に戻るかい？』

その時私が選んだのは……

『一緒に行く！でも……最後にお父さんに……』

『それはだめだ』

『え？』

『それだとあの家からは離れられない。お父さんに会いたいならあの家に戻りなさい』

そう言われて私はお父さんよりも自分の身体を選んだ。

最後にお父さんに会わない代わりに体罰から脱け出せる。

もう頭はあんな痛い思いをしなくてもいい。それだけでいっぱいになった。

「それでここに来たってこと。円と結衣との出会いはまた3人の時に話すわ」

「そっか……優里……」

「ん？」

「優里は今幸せか？」

「なに言ってるのよ。幸せに決まってるじゃない」

「ならよかった」

「さて、そういえば亮は私のこともらってくれるのよね？」

「え……」

「手始めに一緒にお風呂入ってみよっか」

「ええ！？」

「じゃあ今夜はよろしくねっ」

そう言って優里は部屋から出て行ってしまった。

「……………」

……………

第42話 女の子とお風呂と傷のある身体？（前書き）

どんどんお気に入り登録件数が減っていく……

第42話 女の子とお風呂と傷のある身体？

「「「ただいま（ですう）」」」

「「おかえり」」

「お兄ちゃん！」

「ぐふっ！」

円と結衣と詩織が帰ってきたと思ったたら詩織が急に飛びついてきた。

「ただいま！」

詩織は満面の笑みで俺に挨拶する。

「お……おかえり……」

「にゅふふ〜」

「亮君？そんな中途半端な身体がいいの？」

「へ？」

円から黒いオーラが……

「ちょっとこっち来てお話ししようか？ロリな身体が大好きになるよ
うに」

「ちょー!!待って!!」

「円?そんなことしちゃだめですよ」

「結衣!」

俺は結衣に助けを求めろ。

「円が亮さんにそんな調教しちゃったら私の身体に興味がなくなっちゃうじゃないですか」

「そつち!?!」

あれ?涙が出そうになってきたよ?

「と……とにかくリビングに行かないか?」

そしてリビングに移動。

優里が俺と風呂に入ると自慢。

円と詩織が怒る。

結衣は一度入ったことがあるから落ち着いている。

「亮君!どういうこと!?!」

「お兄ちゃん!?!」

「いや……あはは……」

俺は目で優里に助けを求める。

優里は完璧にスルー……

「「今度一緒に入ってもらってからね!」」

そういうことで締結。

俺にも人権あるよな？

そして風呂……

「な……なあ水着着ないか？」

「ダメよ」

「うう……」

いや……一度結衣とも入ったし……

でもあの時は鼻血で……

「先入ってるわよ」

そう言っつて優里は先に風呂に入ってしまった。

「俺も男だ覚悟を決めて」

俺は自分に言い聞かせ風呂に入った。

「背中洗ってくれる?」

「お……おお」

俺は震えながらも優里の背中を洗おうとする。

よく見ると優里の背中には本当に酷いものだった。

俺は無意識に優里の背中をなでてしまう。

「ひゃあ!」

「あつ……すまん」

「くすぐったいじゃない!」

「ごめんごめん」

「ちゃんと洗ってよね」

「わかってるって」

俺は優しく洗う。

「痛くないか?」

「これは痕だもん。痛いわけないよ」

「そっか」

俺は背中を洗い終える。

「精神的に辛い……」

なにが辛いかつて？エクスカリバーを制御することがですよ。

「さて！今度は私が亮のこと洗ってあげる！」

「え……」

「ほらほら……」

俺は優里に無理やり身体を洗われる。

「亮って部活やってないのに身体引き締まってるよね」

「不思議だよな」

「鍛えてるとかじゃないんだ」

「そんなことやってる姿見たことないだろ？」

「確かに」

その後髪を洗って風呂につかる。

「亮もうちよつとあっち行ってよ」

「お前も入るのか!？」

「あたりまえでしょ」

優里が風呂に入ってくる。

身体が密着して……

女の子の身体って柔らかいよな……

同じ人間だとは思えない。

「亮……」

「ん？」

「ありがとう……」

「へ？」

「な……なんでもない！」

「？」

そして俺たちは風呂からでた。

感想としてはこれなんてエロゲ？

第43話 女の子たちと夏休み？ 7月22日（前書き）

夏休みも終わりなのに小説では今から夏休み…

あと題名の日には普通に飛びます。

第43話 女の子たちと夏休み？ 7月22日

テストも終わって夏休みに突入した俺たち。

とくにやることもなくゴロゴロしてるだけなんだけど……

「暑いね……」

円が寝転がりながら言う。

「そうだな……」

「2人ともそんなこと言うから暑くなるのよ……」

「それでも優里は暑そうです……」

「お兄ちゃん！これやる！」

詩織が持ってきたのは『モノ リー』

ここで『モノ ポリー』を知らない人に説明。

モノポーとはボードゲームの一種です。

40マスで一周でき、一周するたびに200ドル手に入れることができます。

一周する間に土地を買ったりすることができ、自分の土地に相手が

止まると止まった相手から金をもらったりすることができます。

もちろん土地の売買もできます。

自分の手持ちが0になり破産したら負けです。

最後まで破産しなかった人が勝ちとなります。

ここまで大まかに説明しましたが詳しく知りたい人は『Wikimedia』を参照してください。

「まあやってみるか」

俺たちは『モノポリ』を準備する。

「ルールは上参照な」

俺たちは『モノポリ』を開始する。

「じゃあいくぞ」

俺はサイコロを振る。

出た目は合計8 .

「ぞろ目だ」

俺はそのマスの土地を買いもう1回サイコロを振るうとする。

「お兄ちゃんもう1回振るの?」

「ぞろ目がでたらもう1回振れるんだよ」

「ほえ」

俺はもう1回振る。

出た目は合計6……

「またぞろ目だ……」

俺はまたそのマスの土地を買う。

次ぞろ目が出たら刑務所だ……

『刑務所』

3ターンの間なにもできなくなる。

しかしその間にサイコロを振りぞろ目がでるか、50ドル払えば出ることができる。

3ターン目には絶対に50ドル払わなければならない。

「次は私ね」

俺は今刑務所にいます。

ぞろ目をだして刑務所に行ったら4人に笑われた……

まあそんな感じでゲームは進んでいき今は中盤。

土地もだいたいが売れた。

そろそろ家が建ってくる頃だ。

『家』

土地にはそれぞれ色がありその色のカードを独占するとその色の土地に金を払えば建てることができる。(家を建てるのに必要な金はその土地の値段によって異なる)

家が建つことに止まったときにプレイヤーからもらえる金が増えていく。

家が4つ建つとホテルを建てることができる。(家は均等に建てなければならぬ)

「円？交渉しませんか？」

結衣が円に提案する。

「私？いいよー(肯定)」

「この土地をあげるんでその土地をもらえませんか？」

(今回のルールでは交渉している以外のプレイヤーは口出し禁止としている)

結衣も馬鹿だな。

そんな土地の値段が違うもの交換できるはずが……

「いいよー（肯定）」

「なに!？」

「どつしたの亮？」

「な……なんでもない……」

「じゃあ私は家を建てさせてもらつてですう」

結衣の土地に家が建つ。

そして結衣がサイコロを振り終わり次は優里の番。

「詩織?交渉しない?」

「いいよっ!（肯定）」

「この土地とこの土地を……」

「わかった!」

これで優里のところにも家が建った。

「俺の番か……優里交渉しないか?」

「いや」

「……………」

俺涙目……………」

「じゃあ詩織……………」

「ごめんね」

「田……………」

「ごめん」

「ゆ」「すみません」

まさか……………」これは……………」

「いじめ?」

「いじめなんてするわけないじゃない。これは戦略よ。強い人をつぶす。これ常識」

ですよー

こんなのスマ ラで学んだはずなのに。

「いいぜ……………」やってやるよ……………」

俺は4対1という不条理な戦いを開始した。

時には……………」

「またダイジエストかよ……」

時には刑務所に入り。

時には破産ギリギリになったり……

「負けました」

完敗です。

だって1人が破産しそうになると誰かが金あげて助けちゃうんだもん……

最終的な勝者は結衣。

結衣ってゲーム強いよな……

第44話 女の子と男の子の夏休み？7月25日（前書き）

今回は彰と杏奈のお話です。
ちなみに彰視点になります。

第44話 女の子と男の子の夏休み？7月25日

「彰っ！」

杏奈がいきなり部屋の扉を開ける。

「えっ！？杏奈！？」

俺はすぐにノートパソコンを閉じる。

「……なにやってたの？」

「えっと……」

「……」

「あっ！」

杏奈が無言でパソコンを開く。

「佳 多？佳奈 ってなによ。それよりもこれなによ」

「これはリトルバス ーズという野球ゲームで……」

「彰って野球好きだっけ？」

「俺は産まれたときから野球っ子だ！」

「じゃあ行きましょっ」

「どっへん？」

「彰は野球っ子なんでしょ？」

「あ……ああ」

「だったらバッティングセンターに決まってるじゃない」

……ということでバッティングセンターに来ています。

さて、どうしたものか……

俺は野球なんて遊びでしかやったことないぞ……

「彰ならこのくらい打てるよね？」

いきなり120kmですか……

「あたりまえだ！！」

キーン！！

ボールが当たる気持ちのいい音が響く。

ベンチに座っている俺の目の前で……

「意外にあたるものねっ」

「おかしいよ……」

「次行こっ」

「まだいくのか……」

そして俺は杏奈に連れられるままいろんなところに行った。

そして夕方になったころ。

俺たちは帰路についていた。

「そういえば俺がバッティングセンターで打てなかったのなにも言わないんだな」

「だって打てないのわかってるもん」

「酷いな……」

「だって幼馴染なんだから。なんでも知ってるよ」

「そっか。じゃあなんで今日はどこかに行こうとしたんだ？」

「だって……彰と一緒にいたかったから……」

いきなりそんなこと言われると正直恥ずかしい……

「い……」

「い？」

「いつでも一緒にいられるだろ？幼馴染なんだから」

俺は杏奈の頭に手を置いてからそのセリフを言った。

なぜ手を置いたかというと多分赤くなっているであろう顔を見られないようにするため。

「うんっ」

そして俺たちは自分たちの家に帰った。

そして夕食。

「彰あーん」

「なんで杏奈がいるんだよ……」

なぜかうちに杏奈がいた。

「だって一緒にいたいんだもんっ」

そう言われたら拒めないよな……？

第45話 女の子たちと夏休み？ 7月28日～8月3日（前書き）

更新が不定期になります
本当にすいません

第45話 女の子たちと夏休み？ 7月28日～8月3日

「来週は優里の誕生日だよ？」

「そうなのか？ならお祝いしないとな」

「普通にやってもつまらないですよね」

「優里お姉ちゃんには喜んでもらいたいし……」

「そういえば漫画で『誕生日当日までできるだけ関わらない』的なのがあったな」

「じゃあそれにしますか」

「優里お姉ちゃんかわいそう……」

「まあ優里に喜んでもらうためだから」

そして俺たちは優里に喜んでもらうためにできるだけ関わらないようにした。

「亮。買い物行くから一緒に行かない？」

「すまん。俺パス」

「じゃあ円」

「ごめん」

「結衣」

「ごめんですう」

「詩織」

「行……ごめんねお姉ちゃん」

「なんか変ね……」

「ほら早く行ってきたらどうだ？」

「まあそうするわ……」

そう言って優里は家を出て行った。

「優里がいないうちに会場準備するぞ」

俺たちは和室で徹底的に飾りつけした。

そして優里が帰ってきたら平然とする。

その繰り返しだった。

〈優里視点〉

なんか変なのよね……

今週に入ってから亮たちの様子がおかしい……

詩織を買い物に誘ったら絶対についてくるのにまったくついてこないし……

反抗期？

……はないか

うーん……

そういえばもうすぐ誕生日ね……

でもみんな知らないだろうな……

まあお父さんが再婚してからお祝いなんてなかったし別にいつか。

（誕生日当日）

「そろそろ優里が買い物から帰ってくるころだな」

「でもどうやって和室に誘い込むの？」

「ふっふっふ……私に任せてください」

「さすが結衣！」

「ただい……きゃっ！？」

優里が家に入ってきたと思ったたらなぜか下に落ちた。

「落とし穴成功！」

「なにやってるんだよ!？」

「まあまあ。私たちも用意しましょう」

俺たちは結衣に言われるままクラッカーの準備をした。

「きゃーーーーー!!!」

ん?なぜか押入れから声が……

そう思った瞬間押入れから優里が出てきた。

俺たちは焦ってクラッカーを鳴らす。

「」「誕生日おめでとう」

「へ?」

優里は困惑していた。

「な……なによこれ?」

「誕生日おめでとう優里」

「おめでとう」

「おめでとうです」

「おめでとうー！」

「……………」

優里が俯いたまま動かない…………

「あれ？優里さん怒ってる？」

「怒って……………なんか……………ないわよ……………嬉しくて……………」

優里の目からは涙が出ていた。

「はい！お姉ちゃんプレゼント！」

詩織が優里にプレゼントを渡す。

……………ん？プレゼント？

贈り物？

円と結衣もそれぞれ優里にプレゼントを渡す。

プレゼント？なにそれおいしいの？

「さー！お兄ちゃんもおねえちゃんにプレゼント渡さないと！」

「……………」

俺涙目。

「亮？」

優里も涙目。

でも優里の涙目は嬉しくて。

俺の涙目は悲しくて。

そういえばとある漫画でこんなことを言ってたな……

『土下座しかないだろう。日本人なら土下座イギリス人はギロチンでロシア人はロシアンルーレットだ』

「すみません。忘れてました」

俺は土下座した。

ああ……おでこがすれて痛い……

「あれ？私てつきりお兄ちゃんがお姉ちゃんにチューするのかわかっただのに」

へ？

「そ………そうなの亮？」

「あ………ああ！そつだよ！俺からのプレゼントはキスだ！！」

なにこのナルシスト……

俺ってこんなキャラだったっけ？

作者キャラ忘れてんじゃねえの？

「や……優しくしてよね！」

あ、許されるんだ。

俺は優里にキスをした。

「私の誕生日が楽しみだな〜」

「私は亮さんになにしてもらいましょう」

「私がお兄ちゃんとチュー……………」

なんか大変なことになったようです。

第46話 女の子たちと夏休み？ 8月7日

「暇だな……」

「そうだね……」

「亮なんとかしてよ……」

「無理に決まってるだろ……」

「出掛けますか？」

「暑いから却下」

「トランプでもする？」

「もう飽きた……」

夏休みが始まって数日しか経っていないのにこれである。

こんなんで本当に学校が始まるまで耐えられるのか心配だ……

『海はすごい人です』

テレビからそんな声が聞こえる。

「海ねえ……」

海に行つて涼むはずがあんな人がいたら涼めないだろうな。

「海……水着……」

結衣がなにかブツブツ言っている。

「水着ショーをやきましょう」

「……は？」

「せっかく前に真美さんに買ってもらったのに着ないのはなんかもつたないですから」

「優勝賞品は亮さんのキスでいいですね？」

「……うん」

「決定ですね」

「俺はなにも言っていないぞ!？」

「まあまあ」

……というわけで水着ショーをやることに……

本当に大丈夫か？

べ……別に俺はポロリなんて期待してないからな!？

リビングから1人ずつ入ってくるらしいが……

「エ」

詩織が顔をだす。

「ん？最初は詩織か？」

「うん……うん」

詩織が顔を赤くしながら入って……

「ブツ！！」

つい口にいれた麦茶を吹いてしまった。

だって……

スク水だぜ？

「ど……どうかな？」

「えっと……」

いったいこれはなんて言えば……

もう中学生だから一応ロリコンではない……よな？

「やっぱりかわいくないかな……」

「そんなことないと思うぞ……！」

「だってお兄ちゃん目そらすし……」

「ほら……詩織がかわいすぎて直視できないといつか……」

よくこんなセリフがでたな……

「ほんと?」

「ああ。ほんとほんと」

「やった」

そう言っつて詩織は立ち去っていった。

次は誰だ……?

「亮君!」

円か……

円の姿はなんて言っただろうな……

ワンピース?

「どうかかな?」

べつって言われても……

まな板……

「亮君？あとでおしおきね」

「へ？」

円はそう言っつて黒いオーラを放ちながら立ち去った。

ば……………ばれてないよな？

この流れだと次は優里か？

…………… 大当たり

「どっ？」

優里はビキニだった。

「よくビキニ買ったな」

「本当は違つのがよかつたんだけどね……………真美さんが『上園君はど
うせプールとか連れてつてくれないだろっつから大丈夫』つて言つて
……………」

会長……………

「まあよく似合つてるよ」

「ほんっ？」

「ああ」

「よかったあ……」

「やっぱり優里たちはプールとか行きたいのか？」

「会長が連れてってくれるって言ってたよ？」

「は？」

「じゃあ次は結衣が来るから」

「ちょ……！」

優里はリビングから出て行ってしまった。

ちよつと待て……

変なフラグが建ったぞ？

「誰が一番よかったか、か……」

え？結衣の番忘れてないかって？

ほら……あいつのやつちゃうとこの小説もしかしたら18禁になつて消されちゃうかもしれないし……

「詩織……かな？」

「やった！」

詩織はよろこび他は肩を落とす。

「（詩織の出番少なかったしいいだろ？）」

俺は肩を落としている3人にこっそり伝える。

そう言ったらなんとか3人は納得してくれたようだった。

俺はとりあえず詩織にキスをする。

なんか俺もうだめな子な気がする……

これで水着シヨ―は幕を閉じた。

変なフラグを残して……

第47話 女の子たちと夏休み？ 8月10日（前書き）

前作を読み直して思ったことが最初のほう今よりも文が酷い・・・
なんて思いました。

なんか自分が書いた小説読むと恥ずかしいですね（笑）

あ、お気に入り件数の目標がいつのまにか達成されていました。

こんな駄作にお気に入り登録してくれる皆様本当にありがとうございます。

とりあえず文化祭も終わったので更新を頑張っていこうと思います

……たぶん。

これからも応援よろしくおねがいます。

……活動報告でやったほうがよかった……か？

第47話 女の子たちと夏休み? 8月10日

さて、お盆です。

当然親父たちが死んでしまった俺の家にもお線香をあげに親戚の人たちがくるのだが……

知ってる人があまりいない……

そもそもなんでこんなことするのかね?

日本人はわからないなあ……

優里たちは会長とどこかに行っちゃったし……

こんなことになるなら俺も行きかけた……

ほら、また新たな親戚が……

あれ? 1人だ。

しかも俺と歳が近そうな女の子。

黒くて長い髪の毛を揺らしながらやってくる。

「亮……君?」

「へ?」

いきなり名前を呼ばれてびっくりする。

まあ親戚だから知っててもおかしくないんだけど俺はこの子のこと知らないぞ？

「やっぱり……亮君だ……！」

女の子の目に涙がたまる。

そして……

「うわっ！」

いきなり俺に突っ込んできた。

「亮君……！亮君……！」

そして倒れた俺に乗って頬をなすりつけてくる。

「?？」

わけがわからない……

俺この子になにかしたっけ？

ってかこの姿を優里たちに見られでもした……おっと危ない!

こういったセリフを書く絶対に見られてしまうフラグがたつからな……

「亮、その子誰だ？」

「熱いね」

優里たちじゃなくて彰と杏奈だった。

これはこれで危ないような……

「ってかお前らのほうが熱いだろ」

「「わかる？」」

しぎこ……

「とりあえず君もおりてくれない？」

「しぎこ……」

女の子は渋々といった感じで俺からおりる。

「一体この子は誰なんだ……？」

第48話 女の子たちと夏休み？ 8月10日（前書き）

亮君ってセリフなのに悟君って打ってしまっ自分がいる……
続けたほづがよかったかな……

第48話 女の子たちと夏休み？ 8月10日

「一体君は誰なんだ？」

「わ……私のこと忘れたの？あの時あんなに變してくれてたのに……」

「え……？もしかして君は……出会い系で会った……」

「彰、一旦落ち着いてみようか」

彰め……小説で誰が言ってるかわからないからってこんなことやりやがって……

ほら、知らない女の子も一線引いてるよ……

「さて、誰だっけ？」

「忘れちゃったの……？」

女の子が涙目で見てくる。

うっん……

けいん！にでてくる溼に似てるってことくらいしかわからないぞ？

「ごめんなさい。忘れました」

「最悪だな」

「彰に言われたくないんだけど」

「杏奈！亮がいじめる！」

「はいはい」

話が進まない……

「結婚……」

「え？」

「結婚の約束までして忘れるなんて酷いよ……！」

「結婚？」

「けっこん？KEKKONN？結婚？」

「亮って許婚いたんだ」

「私たちと一緒に」

「ちょ！待った！！」

約束した覚えなんてな……くもない気がしてきた……

あれはまだ親父たちがいたころ……

「え？回想するの？」

「彰だつてするだろ？」

「俺のは短いし……」

「俺だつてすぐに終わるさ」

俺は小学6年生の頃におばあちゃんの家に行ったんだ。

そこにいたのはばあちゃんと4年生の女の子。

じいちゃん？

じいちゃんには会ったことないからわからないな。

ばあちゃんはいつも「眠ったように死んでるよ」って言ってたけどよく考えると死んでるんだよな……

まあそんな話は置いといて……

その子は従兄妹の上園ゆき。

たまに会うくらい縁だっただけどその日初めて遊んだんだ。

まあ楽しかったな……多分。

正直覚えてない。

そして帰るときにいきなり。

「大きくなったら結婚して！」

って言われた。

「え〜」

そこで嫌そうにする俺ってまったく相手の気持ち考えてなかったよな……とか思ってしまう。

「結婚して！結婚して！」

俺に抱きついてなんども言ってきた。

「わ……わかった……わかったからおりて……うえ……」

ちよつと首が絞まる形で抱きつかれながら言われたらそう答えるしかないでしょ？

「回想終わり」

「私、今日からここに住む！」

「え……」

「だって亮君寂しいでしょ？」

「いや……それは……」

俺は彰たちに目で救援を頼む。

そうしたら杏奈はなにを思ったのかいきなり電話を始めた。

「あー優里？亮が浮気してるよ」

あ……俺死んだわ。

第49話 女の子たちと夏休み？ 8月10日（前書き）

本当は3連休のときに更新しようとしたんですがポケモンにはまっ
てしまい…

本当にすいません

第49話 女の子たちと夏休み? 8月10日

「最後に言い残すことはある?」

「帰ってきたとたんにこれっておかしいよな!？」

杏奈のあの電話から優里たち(プラス会長)はすぐに帰ってきた。

そして今、俺は磔はりつけにあっています。

「検査官」

「はい。容疑者は浮気をしていたようです」

「彰!？」

「ふむ……では弁護人なにかありますか?」

「なにもありません」

「円!? 弁護する気ないだろ!？」

「では……」

「」「死刑」「」

「怖いよ!?!」

「待って!」

救い……?」

俺の前に立っていたのはゆきだった。

「そついえば……」

「原因は……」

「この子でしたねえ」

「どうしよっか?お姉ちゃん」

「会長的にはやっぱりライバルは減らしたほうがいいと思うのよ」

「え??え??」

ゆきは急にこんなことを言われて困惑しているようだった。

「「死ねえええええええええ!!」」

「お前らちよつと待て!!」

俺はあわてて止めに入る。

「1回冷静になれ!!」

「「冷静に……」」

そう言っつて5人がなにかを話し合う。

そしていきなり俺に攻め寄る。

「」「埋め合わせよろしく)ですっ」「！」

「へ?」

「亮君。今日は泊まらせてもらっね」

「……」

終わらせかた無理やりじゃないか……?」

第50話 女の子たちと夏休み？ 8月10日(前書き)

シロナが倒せない…

第50話 女の子たちと夏休み? 8月10日

「なんでこの子が泊まるのよ……」

円が不機嫌そうに言う。

「俺に聞かれても……」

「よろしくおねがいます!」

一方ゆきは元気よく頭を下げる。

「う……うん。あんたがそこまで言うなら……」

円頼まれて悪い気しないんだろうな

「ゆき。なんで今日1人で来てたんだ?」

「急にお父さんとお母さんが来れないって言うから」

「でも泊まってたって大丈夫なのか?」

「連絡してないからわからない」

「それじゃ心配するだろうから連絡しなさい」

「はい……」

ゆきは電話をするためリビングから出て行く。

「なんか怪しいフラグがたってるですう」

「もしかしてこの家に……」

「詩織。そんなこと考えちゃだめよ」

「真美お姉ちゃんがそう言うなら……」

「で？会長はいつまでいるんですか？」

「私も今日泊まっちゃおうかな」

「冗談はやめてください」

「冗談じゃないもん……」

「え？」

「冗談じゃないもん！わたしだけ仲間はずれなんて悲しいもん！」

会長がなぜか涙目。

「あー……わかりました。会長も泊まるならちゃんと家の人に連絡してくださいね」

「やった」

この笑顔……

さては嘘泣きだったな……？

「亮君。お父さんが電話代われって」

「え〜」

俺は渋々ゆきから電話を受け取る。

『久しぶり〜！』

「相変わらずテンション高いですね……」

さすが親父の弟……

『そうか？まあそれは置いて……本当に泊まってもいいのかい？』

「叔父さんが泊まるんじゃないですけどね」

『そのくらいわかってるわい〜！』

「はいはい」

『じゃあゆきをよろしく』

「うい。じゃあまたゆきに代わりますね」

俺はゆきに電話を渡す。

リビングに戻ると会長はすでに電話を終えていた。

「会長は泊まれるんですか？」

「もちろん！」

「それはよかったですね」

「うん！」

なんか会長が無邪気。

可愛いな……

「なんて思ったり」

「しません」

「シヨック受けちゃうよ？」

「会長は可愛いってよりも美人のほづが似合いますよ」

「ほんと？」

「はい」

「やった」

いや〜

優里たちと暮らしてなんか女心でも理解したかね〜

あんな恥ずかしいセリフ前なら絶対に言えなかったな。

「亮君」

「ん？」

電話を終えたゆきがリビングに戻ってくる。

「今まで触れなかったんだけどこの人たちだれ？」

ゆきは優里たちを指差す。

「「「……」」」

「私は上園君の学校の生徒会長ね！」

会長が真っ先に手をあげた。

「じゃあこっちの人たちは？」

「実は私たちは亮さんに拾われた猫なのですう」

「え！？」

「耳だつて出せるですよ？あつちを見てください」

そう言つて結衣は円を指差す。

そこには前に秋葉原で買った猫耳を装着している円が……

「ほ……本当だ！」

信じちゃだめだよ……！

「わかっていただけましたか？」

「うん！」

「はい。ご飯できたわよ」

優里が料理を持ってくる。

あれ？優里もしかして今のが今回の話で初めてのセリフじゃないか？

まあそれからはとくになにもなくお泊りは終了した。

なにかあったとすれば俺は俺はリビングで1人で寝てたのに朝起きたら
全員そこにいたってことくらいだな……

第51話 女の子の秘密レポート？（キャラ紹介）

亮の家に居候させてもらってから結衣は書いていたものがある。

「ふっふっふ……これがあれば……」

結衣の手に握られていたものは『人間観察レポート』と書かれた一冊のノート。

「今回は特別に公開するですう」

上園亮うえのしょう

身長 174cm

体重 55kg

年齢 16歳（現在）

私たちが居候させてもらっている家の現持ち主ですう。

第1話に『学力も普通』って書いてあるのにもかかわらずテストで高得点を取っている人ですう。

正直指摘されるまで忘れていた作者でしたが焦って

第1話の『学力も普通』ってところを消したですう。

私の目はごまかせませんよ？

中学生の頃から1人暮らしをしているとか……

息子を放っておく親ってどんな親ですか！

まあ私たちはそのおかげで今があるんですが……

おじさまに聞かされた通り優しくいい人です。

自分の息子をここまで誉める親に初めて会いました。なかなか純情シヤイな少年です。

いつになったら私の初めてはもらっていただけるとしていいのでしょうか？
私の大好きな人かそくです。

沢田優里さわただゆり

身長 162cm

体重 乙女の秘密なのです

年齢 17歳（現在）

スリーサイズ？それは言えないですね、
なぜなら設定するのがめんどろだから！
言えることは胸の大きさは中です。

私と同時に亮さんの家に居候させてもらっている人です。

髪型は茶色がかった黒い髪をポニーテールにしています。

正直こんな髪型の設定なんて作者もわすれてるんですけどね。

まあここでみなさんにも思い出してもらいたいって感じですね。

頭もよくて運動もできて家事もできる。

まさに超人！

こんな子がお嫁さんだったらいいですね、

でもこうやって超人になったのには理由があるんです。

まあ本編を読んでもわかることですからここでは説明しないです。
う。

結構優里も純情な部分がありますね。

顔が真っ赤になったときとかかわいいですよ？

一緒に頑張る仲間かそくです。

つかもとまどか
塚本円

身長 143cm

体重 この子の体重が羨ましいです……

年齢 17歳（現在）

胸はまな板……なんて言ったら怒られますかね？

この子も優里と同じく私と同時に居候してる人です。

髪型は栗毛色の髪の毛をそのままおろしてる女の子。

この子の髪型は覚えていたそうです。

頭は残念です。

ロリ体型なのを気にしているですう。

ロリも需要あるのに……

この子にも優里みたいに辛い過去はあるんですがまだ亮さんには伝えてないようです。

この子は親の暖かさを……

おっとこれ以上言うとネタバレになるのでやめておきましょう。

え？もう大体予想できてるって？

まあ忘れてくださいよ。

多分その予想通りですから。

この子も一緒に頑張る仲間かぞですう。

駒崎結衣こまざき ゆい

身長 165cm

体重 こ……これは胸のせいです！

年齢 16歳（現在）

胸は邪魔。

優里たちと同時期に居候させてもらってます。

髪型は黒い髪をそのままおろしてます。

私って黒髪だったんですか……

頭は残念。

あやしい開発ならできるんですけどなんででしょう？

アニメもけっこういけますよ？

私も過去があります。

でも優里たちほどじゃないですね。

あの子たちのを聞いた時涙がでるかと思いました。

正直自分の話をするってのはあまり得意じゃないんでこのへんで。

山崎詩織 やまざきしおり

身長 147cm

体重 この子も結構軽いです。

年齢 14歳（現在）

胸は円よりもありますけど私から言わせればどんぐりの背比べですね。

私たちはちょっと遅れてからの同棲になります。

その間なにしていたんでしょう？

髪型は黒髪のショートカットです。

アマ ミの美 を想像してもらえれば楽だと思つてすう。

頭はどうなんでしょう？

まあ来年からは高校生ですし受験勉強も頑張つて……

勉強なんてしてましたっけ？

夏休み遊んでばかりじゃないですか？

ちよつと心配になるですう。

この子にも辛い過去があるんでしょうか？

まだ聞いてないからわかりませんがおじさまが助けたから多分……

今では一緒に頑張る仲間かぞくですう。

佐々木彰 ささきあきら

身長 170cm

体重 50kg

年齢 17歳（現在）

亮さんの親友みたいな感じでしょうか？

オタクが入ってるようですね。

誰とでも仲良くできる明るい性格ですう。

杏奈さんの許婚ですう。

今ではちゃんとお付き合いしてます。

私たちも亮さんとそんな関係になりたいですね。

白鳥杏奈 しらとりあんな

身長 155cm

体重 わからないですね。でも確実に私より軽い！

年齢 16歳（現在）

胸は中ですね。優里より少し小さいような……？

髪型は茶色の髪の毛をショートにしてるですう。

ヤンデレが少し入ってるような……

結構話やすい性格ですう。

彰さんの許婚です。

羨ましいかぎりです。

いつまでもお幸せに。

後藤真美 ごとうまみ

身長 167cm

体重 なんでこんだけしかないんですか！？

年齢 17歳（現在）

胸は大きいほうですう。

髪型は私と一緒にです。

学校の生徒会長さんです。

よくあんなめんどくさい生徒会なんて入る気になりましたね。

作者なんかいつも愚痴ってるのに……

学校の男子からモテモテ！

私たちの一個上の先輩ですう。

憧れますね〜

後藤グループの1人娘。

お金持ちさんです！

私たちも仲良くさせてもらってます！

この人も亮さんを狙うよき仲間ライバルですう！

上園ゆき うきよの

身長 152cmくらいですかね？

体重 わからないですう

年齢 15歳（現在）

胸は詩織より少し大きめですう。

髪型はけい んの漑と同じ……って私と同じじゃないですか！

亮さんの従兄妹らしいです。

おじさまの弟さんの娘。

従兄妹同士なら間違いは起きない……

そう信じてるですう！

なんか嫌なフラグがたってるんですよね……

うえそのりょうすけ
上園亮介

身長 176cm

体重 ??

年齢 42歳（享年）

亮さんのお父さんですう。

私たちを救ってくれたのもこの人！

なかなかおもしろい人ですう。

亮さんは嫌っているようですが……

私を救うとき一体どうやってあれを……

おっと！

今のは気にしないでください！

うえそのみすず
上園美鈴

身長 162cm

体重 ??

年齢 42歳（享年）

亮さんのお母さんですう。

この人も私たちを救ってくれました！

おじさまとは幼馴染だったそうですよ。

やっぱり人生で大切なのは幼馴染なんですかね……

たけなかなつき
竹中夏希

身長 ??

体重 ??

年齢 17歳（現在）

なんで知らない人の名前がここに書いてあるんですか!?

まさか……このノートが呪われて……

たけなかなつき
竹中優輝

身長 ??

体重 ??

年齢 17歳（現在）

さっきの知らない人と名前がいつしよですね。

年齢も一緒?

まさかもう結婚して……

年齢的に無理ですね。

双子かなにかですかね?

「だれですか……これ……私竹中なんて書いた記憶ないのに……」

第51話 女の子の秘密レポート? (キャラ紹介) (後書き)

大変だった……

第52話 女の子たちと夏休み？ 8月13日

「結衣……俺、もう……」

「亮さん……」

「い……いいかな？」

「亮さんが初めてなら私も嬉しいです……」

「亮、私は？」

「亮君……」

「お兄ちゃん……」

「3人はすこし待っててくれ」

「じゃあ円、詩織私たちは慰め合いましょ？」

「うん……」

優里と円と詩織はそれぞれの指で慰め合う。

「亮さん……早く……」

「いくぞ……？」

「なんだこれは!!！」

「私の夢ですがなにか？」

「なにか？じゃねえよ!!もしこの作品が削除されたらどうするんだよ!？」

「まあまあ」

「まあまあじゃねええええ!!!!!!!!」

「焦らない焦らない」

「なに言ってもダメな気がする……」

「私はこんな夢見たよ!」

く円ver；

「む」

優里が自分の胸に手をあててうなってる。

「優里また胸のことで悩んでるの?」

「だって円と結衣は大きいのに私だけ……」

「詩織がいるじゃない」

「あの子は中学生でしょ!?!」

「大きくなるって」

「そうかなあ……」

「うんうん」

「あゝあ。私も円みたいにスタイルが良かったらなあ……」

「円〱行〱うぜ」

「うん!じゃあ行って来るね」

「亮とまたデート?円だけずるい……」

「今度甘い物おごるからさ」

「ホント!?!」

「うん」

「行ってらっしや〱い」

デート中。

「やっぱり俺なんか円と一緒にいるとつりあわないな……」

「そんなことないよ亮君」

「だって円モデルみたいにかわいいし……それに比べて俺は凡人」

「亮君だってかっこいいよ」

「円……」

「亮君……」

2人はそのまま唇を……

「なんか私損な役割ね」

「優里の夢はどんなだったの？」

「私？私は……」

ボンツ

優里の顔が赤くなる。

「優里？どうしたんだ？」

俺は心配になって聞いてみる。

「な……なんでもないわよ！」

「もしかして……私と内容が似てる夢だったりしません？」

「そ……そんなわけ……！」

「大丈夫。女の子ですから」

「うう」

優里は涙目だった。

「詩織は？」

「私？私はみんなが仲良く笑ってる夢だったよ？」

「「「う……！」「」」

下心丸出しの3人の夢とは大違いだったため3人は呻く。

「詩織はいい子だな」

俺は詩織の頭をなでる。

詩織は気持ち良さそうに目を細めている。

「りよ……亮の夢は？」

「俺は……」

言えない……まさかあんな夢見るとは思わなかったから言えない……！

「俺は眠りが深すぎて見てないな」

「嘘ですね」

「う……………！」

「この嘘発見器の前で嘘をつくことなど不可能なのです！」

「……………ちよつと親父達の夢を……………」

「おじさまの？」

「それだけだ！もうこれ以上はなし！」

「……………え……………」

「こうして夏休みを無駄にしていくんだよね……………と思う今日の頃。

第53話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日

夏休み中あまり家を出ていなかった俺だったが今現在強い日差しのもとで立ち尽くしています。

「暑い……」

もうそれしか言葉が出てきません……

周りにいる人といえば彰だけ……

「亮……どうしようか？」

「俺に聞くなよ……」

「とりあえずコンビニでも探すか？」

「そうだな……」

俺と彰はここがどこだかもわからない。

ああ……どうしてこうなったんだっけ？

事の発端は昨日の会長からの一本の電話。

『海に行こう？』

「は？」

『海よ海。夏の強い日差し。きれいな水しぶき。女の子の水着姿。男の子ならこんなイベントを逃すはずないでしょ？』

「なんか嫌な予感しかしないんですが」

『そんなこと言ったってどうせ優里ちゃんたちは行く気満々だよ？』

「へ？」

俺が優里たちのほうを見ると確かにテンションがあがってる。

『あとは上園君の許可だけなんだけどな〜』

ここで俺が断る。優里たちが悲しむ。なんか死にそう。

「わかりましたよ……」

『じゃあ明日迎えに行くね』

「明日!？」

『善は急げってね』

「男1人じゃ辛いんで彰もいいですかね？」

『どうせそんなことだろうと思ったから誘ってあるよ。もちろん白鳥さんもね』

「助かります」

『じゃあまた明日ね』

ここまででこんな風に男2人で迷子になるフラグはたっていないかっ
たはず……

ではなぜか？

それは会長の別荘に行く途中の車の中で起こった。

これは会長がいけなかったんだ……

「男女が集まってやることといえば……！」

会長が席を立ち上がって言う。

「えっちなこと？」

結衣はなにを言ってるんでしょう？

「乱 ったのもいいんだけどちょっとせまいでしょ？それに男の人
数が足りないわ」

「3…1くらい大丈夫じゃないですか？」

「まあそれにしたって広さが足りないわね」

「しゅ……」

つつこんだら負けだ……！つつこんだら負けだ……！

自分に何度もそう言い聞かせた。

「男女でやることと言ったら王様ゲームよ！」

「合コンか！」

はっ！つつこんでしまった！

「いや〜。ちょうどいいところに割り箸もあるしね？」

会長の手には割り箸が握られていた。

それを一本ずつ取って行く。

「では……！王様だーれだ？」

「ふっふっふ……私ですね」

初っ端から結衣か……

「18禁なのは禁止な」

「もちろん そうですねえ……3番の人が持ってきた水着を着るってのはどうでしょう？」

「私だわ」

3番は会長だった。

会長はもともと下に水着を着ていたらしくそのまま服を脱いだ。

今考えるとこの罰ゲームにあたらなくてよかった。

正直目のやり場に困る……

「（亮……俺、幸せだよ）」

彰が小さな声で言ってきた。

彰には後ろが見えていないらしい。

「目がああ！目がああああああ！！」

天空の城ラ ユタのム カですなわかります。

その後俺は王様にもならず。罰ゲームにもあたらずといった感じで進んでいった。

あたらないとつまらないよな……

まあいいものも見れてるし……？

女の子同士のキスなんかもう……！

そして次に悲劇は起こる。

「私が王様だ！」

円が王様になつたらしい。

「じゃあ1番の人と6番の人が2人でここから別荘まで行く!」

女の子と2人つきりですか。

それはおいしいイベントですね。

でもめんどくさいから……って俺1番かよ……

「6番誰……?」

「俺だ……」

彰が手を挙げる。

「つまんない!」

「王様の命令は絶対だから早く!」

「もう2人なんか知らない!」

……といった感じで車から降ろされてしまった俺達。

電車とか使つていけつて感じだったんだろうけど俺たちは無理やり降ろされてしまったため財布などは持っていなかった。

そして今になる。

さて……どうなるんだ?

第54話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日

「あち」

「言つなよ彰……」

俺たちは何もない道をただひたすら歩いていた。

どのくらい歩いたのだろう？

会長の別荘はもうすぐそこなのだろうか？

そんなことばかり考えてしまう。

「本当になにもないな……」

「とりあえず海に出れば……」

セミの鳴き声がすくすくざい。

「こつちであってるのかな？」

彰がそんなことを言い出す。

「今から戻るのなんて嫌だぞ？」

「はあ……」

俺たちは同時にため息をつき肩を落とす。

「公衆電話もないもんな……」

携帯電話は充電が切れていてアウト。

民家もないから電話も借りられない。

俺たちはかなりまずい状況にあった。

「のどかだな……」

「亮いきなりどうした……」

のどかすぎてなにもいえない……

はあ……魔法が使えたら……

『魔法が使いたいかね？』

「あ……あなたは……？」

『通りすがりの魔道士じゃよ』

「お……俺にも魔法が使えるのか……？」

『もちろん。このデバイスがあれば誰でもできる。さあリリカルマジカルじゃよ』

「え？な は？」

『失われた文明ロストロギアでも探す気がい？』

「まあいつか……リリカルマジカル」

……できたのか？

「ってなんで女の格好なんだよ！」

『ほほう……これは……なかなか……』

「鼻血だしてんじゃないええ！」

『さあ飛ぶんじゃー！』

「そのエロい目つきどうにかならないかな……」

『どうにもならん。だってその女の格好わしの趣味だもん』

「デイバイン……バスター……！！！！！！」

「亮！亮！」

目を開けるとそこには彰の姿が……

「お前大丈夫か？いきなり倒れて」

「嫌な夢見た……」

「もつすこし休むか？」

「いや、いい。ありがとな」

「おう」

俺たちはひたすら歩いた。

陽が消えかかったころやっと俺たちは民家を見つけた。

この時俺たちはよろこんでいたが、まさかその民家にあの人がいるとは俺は思っていなかった……

第55話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日

俺たちはやっと見つけた民家のインターホンを押した。

「はいはい」

民家の扉の向こうから人が走ってくる気配がする。

「どちらさま……あ！」

「げ……」

「？」

彰は俺が「げ……」と言った意味がわからないらしく頭にクエスチオンマークを浮かべている。

「亮君！」

「まさか……ここは……ばあちゃんの家!？」

俺たちが着いたのは俺のばあちゃんの家だった。

そしてそこにいたのはゆき……

「どうしてゆきがいるんだよ!？お前はこんなところに住んでないだろ!？」

「だって夏休みだもん。亮君みたいにおばあちゃんの家に来ない

薄情者じゃないもん」

「う……」

だってばあちゃんの家どうやって行くかわからなかったし……

「亮この子誰だ？」

「俺の従兄妹……」

「へ〜」

へ〜って……反応薄いな……

「まあとにかく電話貸してくれないか？」

「電話？別にいいけど」

そう言ってゆきは携帯を取り出す。

「さて……誰に電話しよう……」

そのセリフを言ったところで俺はあることに気がつく。

「電話番号わからねえ……」

「杏奈のだったらわかるぞっ」

「マジでっ？」

「マジで」

「さすが許婚！」

彰は杏奈に電話をかける。

「あ！杏奈？あのさ、会長に頼んで迎えに来てくれない？」

俺は2人の会話を聞くために電話に耳をつける。

『それよりも彰……今彰の電話番号じゃない番号が表示されたんだけど……』

「そりゃ俺の携帯で電話かけてないもん」

『女の子の携帯？』

「うん」

『彰のバカ!!』

その言葉を最後に電話は切れてしまった。

「なにしてたんだよ彰！」

「俺が悪いのか!？」

「そつだ！お前が全部悪い!!！」

「酷いぞ亮!!！」

「亮君どうしたの？」

ゆきが聞いてくる。

「俺たち今迷子でさ……」

「迷子？」

「ああ……それで迎えも来てもらえなくなっただ……」

「それは悲しいね」

「そうだろ？」

「じゃあとりあえずに泊まっていけば？」

「いいのか？」

「おばあちゃんに聞いてくるね」

そう言ってゆきは「テテテテ……」と行ってしまった。

「泊めてもらえるといいな……」

「ああ……」

第56話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日

「泊まっていつていつてー」

ゆきが玄関にいる俺たちにそう告げる。

「よかったな亮」

「そうだな」

「とりあえず亮君には話しがあるらしいよ」

「え……………」

なんか嫌な予感しかしないんだけど……………

だってあの親父の母親だよ？

「ば……………ばあちゃん……………？」

俺はそつとばあちゃんのいる部屋に入る。

「亮、言いたいことはわかるね……………？」

「いや、まったく」

ゴソッ！

ばあちゃんが投げた本の角が俺の頭にクリーンヒット

「痛っ!!なんでいきなり!?なんのヒントもなしにわかるわけないよね!?今日来たのだって偶然だよ!?!」

「雰囲気つくるためにやってみただけじゃ。正直やりすぎたと思ってるのは言わないでおこう……」

「いや、言ってるから!!おもいつきり口にだしてるから!!」

ツッコミ所が多すぎる……!

「まあ冗談はここまでにして……」

「俺は冗談であんな痛い思いをしたのか……」

「ちょっとよく顔を見せておくれ」

ばあちゃんが手招きする。

俺は無言で立ち上がりばあちゃんのそばに寄る。

ばあちゃんは片手で俺の頬に触れる。

そして空いている手で俺の頬をおもいつきりぶっ叩いた。

「ぐはっ!?!」

「……」

「なんだよばあちゃん!?!」

「最近の若いものは年上を敬わないっていうからナメられないように……」

「普通自分のばあちゃんはナメないよね!？」

「……」

「なにその顔!?!いまさら気づいたの!?!俺さっきから骨折り損!？」

「……あはは」

「わらってごまかすな!！」

「まあまあ」

くそっ……

なんとなくうちに居候してる3人を相手にしてるような錯覚におちいる……

「でもどつしてこんなところにいるんだい？」

「生徒会長の別荘に行く予定だったんだけど……いろいろあって車から降ろされてしまい今にいたる」

「ぶっ……」

「今笑つたる!？」

「そんなことない」

「まあ今晚泊めてもらうだけでいいから」

「おや？おばあちゃんになにもしてくれないのかい？」

「う……肩たたきとかで大丈夫か？」

「大丈夫だ。問題ない」

作者がこれやりたかっただけです。わかります。

そして俺たちはばあちゃんの家泊まり、次の日の朝また歩きだした。

一方その頃……

「やっと着いたね」

「海だ！」

海に着いた優里たちはテンションがあがっていた。

テンションがあがっていると必然的に亮たちのことは忘れられてしまうのである。

とりあえず優里たちは日が沈むまで海で遊んだ。

プルルルル……

「杏奈の携帯鳴ってるよ?」

「あ、ほんとだ。この番号誰だろう?」

杏奈はとりあえず電話に出る。

『あ!杏奈?あのさ、会長に頼んで迎えに来てくれない?』

「それよりも彰……今彰の電話番号じゃない番号が表示されたんだけど……」

『そりゃ俺の携帯で電話かけてないもん』

「女の子の携帯?」

『うん』

「彰のバカ!!」

杏奈は電話を切る。

「彰君なんだって?」

「彰なんか知らない!」

「まあまあ落ち着いて」

「円……」

「今日はとりあえず愚痴でも言い合おうですう」

といった感じで男たちの苦勞はまったく知らないのであった。

第56話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日（後書き）

てすと終わるまで更新できません…

第57話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日（前書き）

みなさんお久しぶりです！

やっとテストが終わりました！

後書きで点数を公開しようと思います！

第57話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日

「とりあえずあっちに行けば海があるらしい」

「それは誰情報？」

「俺のばあちゃん」

「それは信じていいものなのかわからない……」

俺たちはばあちゃんに教えてもらった方角に向かって歩いていった。

「リトル スターズだと筋肉エンド的な感じになりそうな雰囲気だな……」

「それは俺が理 で彰が真 設定か？」

「どっちでもいいさ……このままだとせっかくの夏休みが男2人でむなしく終わってしまうっただけだから……」

「お前！ 人はいいやつだぞ！」

「亮……大丈夫か？」

「もうだめかもしれない……」

「いつもの亮なら『大丈夫だ。問題ない。』って言うのに……」

「ってか俺たちなにしにここに来たんだっけ……」

「たしかに……」

「俺は別に来たくて来たんじゃないはずだったんだけど……」

「俺も家でギャルゲーやってたほうがよかった……」

「「はあ……」」

「そんなこと言っていたらお嬢様たちが悲しみますぞ?」

「俺たちはそのお嬢様たちのせいでこんなに辛い思いをしてるんだけどな……って誰?」

俺たちにいきなり話しかけてきたのはなんか見覚えのある車に乗ったサングラスかけたいかにも『どこかで使用人やってます』って感じの人。

「後藤家の執事をやらせていただいてる井つ……」

「俺たちのこと迎えに来てくれたのか!??」

彰が騒ぐ。

「つてか今自己紹介の途中だっただろ……」

「やっぱりやめようか悩んでいます」

「ちよ!」

「まあ早く乗ってください。お嬢様たちがお待ちです」

俺たちは執事さんの言つとおり車に乗る。

車で揺られること2時間。

歩いて行つてたら何時間かかってたことか……

「う……海だ……！」

「ああ！海だな亮！」

「着いたんだ……！俺たちは海に着いたんだ！」

「暑い中頑張つて歩いた甲斐があつたな！」

「遅い！」

俺たちが喜んでいると後ろから声が聞こえた。

「おお！優里！寂しくなかったか？」

俺は優里の頭を撫でる。

「ふぁ……寂しかったんだから……ってちがう！」

「なにが違つんだ？」

「来るのが遅いのよ……！」

「ごめんな」

「え!？」

俺は海に着けたということで気分がよかった。

そして素直に俺が謝ったから優里も驚いたのだろう。

「遅かった代わりにいっぱい遊んでもらうから……」

「おう!」

この時は俺は海が楽しみでしようがなかった。

まさかまた『あれ』が起こるなんて……

第57話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日（後書き）

数学A	3	2
数学I	7	6
英語I	1	0
国総	3	1
化学I	4	4
地理A	3	2
現社	3	4

理科Bはまだかえってきていませんが最悪だと思います。

いや～……涙目……

第58話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日（前書き）

今回は身体に関係のないところは（ ）と表記していません。

第58話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日

俺と彰が会長の別荘に着き、遊んでいたときに『あれ』が起こった。

俺が海を泳いでいる。

優里も海を泳いでいる。

俺は優里に向かって。

優里は俺に向かって。

そして頭がゴツツン

「いたっ！」

「大丈夫か優里？」

俺は優里を見る。

優里も俺を見る。

「「へ？」」

「ななな……なんで私がそこにいるのよ」

「それはごっちのセリフだ……なんで俺がそこに……」

前にもこんなことがあったような……

「また私!？」

「今度は俺!？」

今のところ誰にもバレていないらしい。

「……………」

「どうしたのよ亮……………急に黙らないでよ……………」

「いや……………女の子の身体だなくって……………」

そう言うと俺（優里）は顔を赤くさせる。

俺って顔赤くなるところなるのか……………」

「み……………見るな!！」

「見るなって言われても……………」

俺は優里（俺）の身体を見てしまう。

「恥ずかしいからやめてよ!！」

俺は見ることをやめる。

「でもどうやって戻る? 前は結衣の発明があったからなんとかな
ったけど……………」

「頭でもぶつけてみる？」

「多分痛いだけだと思っぞ？」

「じゃあ真美先輩にでも話してみる？」

「おもしろがってダメだ……」

「うーん……」

「とりあえず今回も誰にも言わないってことだ」

「それがいいと思うんだけど……」

「？」

「今回入れ替わったのは男女と言う訳で……その……」

「なんか問題でもあるの……はっ！」

「……気づいた？」

「俺が料理を作るのなんて無理だぞ！？」

「そこじゃない……」

「??？」

「私が言いたいのは……ほら……トイレとか……」

「っ!!」

俺（優里）は顔を赤くする。

「大丈夫だ!!見ないから!!」

「見なくても……女の子は……男の子と違って……その……」

「?????」

「ふ……拭かなきゃいけないのよ!!」

「っ!!!!!!!!!!」

これなんてエロゲー？

もしかしてこのイベントはかなりまずいんじゃないか……

事の重大性に今気づく俺。

「そんなこと言ったら風呂も……」

「お風呂は……一緒に入れば……」

「なんとかなるか……?」

「多分……」

優里は自信なとそつに言っ。

「とりあえず陸にもどろうか」

俺たちは陸に戻る。

陸に戻ると結衣は日光浴（その身体をそんな見せ付けけないでほしい……）

円は詩織と会長と海で遊んでいる。

彰は杏奈に……これ以上は言わないでおこう。

「あれ？亮さんと優里帰ってきたですか？」

結衣が話しかけてくる。

「お……」

俺が返事しようとする俺（優里）に叩かれた。

「（あんた少しはしゃべりかた注意しなさいよ！）」

「（わ……悪い）」

「どっしたです？」

「お……俺たちちょっと気分悪くなったから部屋に戻るわ」

「そ……そうなの！」

「大丈夫ですか？」

「少し休んだら大丈夫だと思うから」

「結衣たちは気にせず遊んでて！」

俺たちは少し早足で別荘にもどる。

「これは……かなり大変だぞ……」

第59話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日（前書き）

すみません……熱出して更新遅れました……

え？熱にしては長すぎないかって？……熱出す前はさぼってました

……

はい……本当にすみません……

第59話 女の子たちと夏休み? 8月15日〜8月20日

俺と優里は帰った後とりあえず話し合っていた。

まあ話合っていたかどうかはわからないけど……

「どっしょよっか?」

「どっしょよっかって言ってもな……」

「ってあんたそんな格好しないでよ!」

「え?」

俺はあぐらをかいて頭をかいていただけなんだが……

「え?じゃないわよ!それ私の身体だからね!??」

「あー……すまんすまん。でさ相談なんだが……」

「なによ」

「ブラとっていいか? 苦しい」

ドコォー!ー!

「それが嫌ならもうあんな発言しないでよね!」

「わかったよ……。っ…………!」

「な…………なに?」

「…………と」

「と?」

普通の人ならもうお気づきだろう?

「こ…………これは生理現象だからな…………?社会的に殺さないでくれよ…………?」

「あんたまさか…………」

「じめん」

さてどうしましょ??

俺は急にトイレに行きたくなってきましたよ?

……………

「耳がああああああ!もうやめてええええええええ!」

「しょ…………しょうがないでしょ!っつてこれも聞こえないか」

俺は耳にイヤホンをつけられて大音量で曲を流されています。

手はなぜか結ばれています。

タオルで目隠しまでされています。

「これってちょっと用をたす時だけ大音量にすればいいんじゃないのかな!？」

「あ、そうか」

音量が下がる。

「はあ……はあ……」

「うわ……なんか変態みたい……」

「自分の姿だからな!？」

「いつか私も亮にこんなことされちゃうのかな……」

「しねえよ!？」

「本当?」

「優里を傷つけることなんか出来るわけないだろ!？」

トラウマがよみがえっても大変だしな。

まあそんなことよりも今現在俺に新たなトラウマが植えつけられようとしてるけどな……

「あ……ありがとう……」

「ねえ……トイレまだー？」

「もうすこしよ」

きつとこれ読んでる人はまだトイレについてなかったのかよ!? つて気持ちですよね。

ほんと……作者が馬鹿ですいません。

「さて、ついたわよ」

ついで俺は座らせれる。

「……耳がああああああああ……!!……!!……!!」

そして気づく。

「こんな状況じゃでねえよおおおおおおお!!」

無理だよ!! こんな大音量で曲が流れてるなかでのトイレなんて!!

「耳栓とかないのおおおおおおおお!!?」

「あ」

優里が音量を下げる。

「持ってきてたの忘れてた取って来る」

優里がトイレからでていく。

でも音量も小さいのに放置なんかされたら……

「お待たせ」

優里が戻ってくる。

「……………」

「亮……？」

「じゅめん……………」

「あつ……………あつあつ……………」

きっと優里はいまわなわな震えてるだろう。

俺は攻撃に備える。

「しょうがないね」

「え？」

「まあいつかもっと恥ずかしいのも見られるかもしれないし」

「なんか優里が結衣に毒されてるきがするんだが……………」

「気のせい気のせい」

「そうかなあ……」

この後優里に拭いてもらい（すっげー恥ずかしかった）、なんとか
関門をクリアした。

そして次の関門がやってくる……

第60話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日（前書き）

恋チヨコが店頭回収されてるみたいですね。

まあ店頭じゃ買えないので意味ないのですが…

アマゾンにある恋チヨコの値段が高くて買えないのが最近の悩みです
もうダメだな

第60話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日

「もうすぐ帰ってくるわよあんたしっかりやってよね」

「お前こそ変な発言するんじゃないぞ」

「それはこっちのセリ……」

ガチャ

優里の言葉を遮って扉が開く。

「ただいま！」

「「お……おかえり」「

「俺たちはあいさつする」

「優里ったら亮君と2人つきりでするい」

円が優里（俺）に話しかける。

「そ………そっ？」

「そっにきまってるよ」

「お兄ちゃん！」

詩織が俺（優里）に抱きつく。

「よしよし」

俺（優里）は優しく詩織を撫でる。

「あれ？」

詩織がなにか異変を感じたらしい。

「本当にお兄ちゃん？」

「「っ！！」「」

俺と優里は息をのむ。

「な……なに言ってるんだよ詩織」

優里がなんとかごまかそうとする。

「うーん……なんか撫で方が優里お姉ちゃんに似てたっていつか……」

「気のせいだろ！」

「そうかなあ……」

「みんなお腹すいたでしょ！？ご飯にしない？」

俺が助け船をだす。

「いいね！」

彰が一番反応する。

「じゃあ昨日も優里ちゃんに作ってもらったし今日も作ってもらおうかな」

「ちょ！かいちょ……真美さん！？」

「ん？どうしたの？」

くそ……優里の身体なのに『真美さん』って呼ぶのがはずかしい……それよりも俺が飯なんかつくれるわけ……

「いや〜……ちょっと私は気分が悪いっていうか……」

「え？そつは見えな……」優里は気分が悪そうなので杏奈さんに作ってもらいましょう」

会長の言葉を遮って手をあげてなにか考えていた結衣がそう言う。

「杏奈さんおねがいできますか？」

「別にかまわないけど……？彰のために私がんばるからね！」

じゅっかん杏奈はなにか疑問に思っていたのだがすぐに頭の中が彰に変わった。

「優里、亮さんちょっといいですか？」

俺たちは『バレたか……』と思いながら結衣についていく。

「また入れ替わっちゃったですか？」

人気ひとけのない廊下に行くといきなりそう言われた。

「そうなんだよ……結衣よくわかったな」

「どうにかならない？」

「うーん……帰ってからならなんとかかなりそうですけど……じゃちよっと……」

結衣が残念そうに言う。

結衣のちからでも無理か……

もしかして帰るまでこのまま……？

え？すごく困るんだけど……

トイレとかもう嫌だよ？

なんとかして戻る方法を探さないと……！

第61話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日（前書き）

Re^リwri^トteの発売が楽しみでしようがなかったのにも関わらず
ちのPCのビデオカードが2・0以上でできないということが
わかりました…はあ…
Re^リwri^トteやるためにいくらかけなきゃいけないんだよ…

とりあえず冬なのに怖い話を載せてみました。
ちゃんと読んでね？

第61話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日

夕食を食べ終えた俺たちはだらだら駄弁っていた。

そんなとき会長が唐突にこんなことを言い出した。

「肝試しをやりましょう！」

うわ……またなんかめんどくさそうなイベントが……

「肝試しはちょっと……」

「優里ちゃん怖いの!？」

「そ……そんなこと……!」

「じゃあ決定ね」

しまった……口車に乗せられた……

「(ねえ亮……)」

俺(優里)が話しかけてくる。

「(私お化けとか苦手……)」

「(俺の身体で驚いてなんか変な行動にでたら困るな……)」

「(ぶじっせい……)」

「とりあえず怖い話でもしましょう!」

勝手に話が進んでいく。

電気を消して真ん中にろうそくを一本だけ置く。

なんか雰囲気でるな……

とりあえず優里（俺）は俺（優里）に抱きついておく。

これでなんも変な行動は起さないだろ……

「優里なにやってるの?」

円が少し怒ったように聞いてくる。

「な……なんでもないわよ……」

「亮君もそれでいいの?」

「まあいいんじゃないか?」

「むう……じゃあ私も!」

円が俺（優里）に抱きつく。

「まあはじめましょうか」

「では私から」

そう言って杏奈が声のトーンを落とす。

「実はこれ本当にあつた話なんだけど……」

最初に気付いたのは散らかった部屋を、僕の彼女が片付けてくれた時だった。

僕は物を片付けるのが苦手で、一人暮らしをしている狭いアパートはゴミ袋やら、色々な小物で埋め尽くされていて、結構な状態だったから。

といつてもテレビで出てくるほどのゴミ屋敷ってわけでもなくて、ちゃんと足の踏み場はあるし、掃除だってほどほどにはしているつもりだ。

けど、やっぱり男の一人暮らしは散らかってしまつもので。

結果的に時々アパートに来てくれる彼女が片付けてくれている。

その日も同じように彼女が来てくれて、部屋の掃除を始めてくれた。

僕も彼女と反対側の掃除を始めて、本やら小物を要る物どうかを判断したりして、だんだん部屋が片付いてきた時。

彼女がそれに気付いたんだ。

「ねえ……」

彼女が指差した雑誌やらビデオテープやらで隠れていたコンセント

の中から、かなり長い髪の毛が一本、垂れ下がっていた。

「これ誰の髪の毛よ」

僕の友達に男友達ばかりだった事を知ってる彼女は、ぼくを疑いの目で見た。

僕の髪は短いし、でも彼女の髪もこれほど長くない。

けど僕にだって彼女以外の女性を部屋に入れた記憶はなかった。

あまりにも彼女が僕を疑いの目で見るので、僕はコンセントから出ている髪の毛を掴むとスルスルとそれを引き出した。

プツン。

嫌な感触に僕は思わずその手を離した。

まるで、本当に人の頭皮から髪の毛を抜いたような、リアルな感触。長い髪の毛が掃除された床に異端者のように舞い落ちて、隙間風に揺らめいた。

思わず僕はコンセントの穴を覗き込んだけれど、その先は真っ暗闇で、何一つ見えなかった。

翌日の朝。僕は青ざめていた。

思い出せば昨日はコンセントの事などすっかり忘れて、僕はあの後彼女とカラオケで遊び、そこで飲んだ酒のせいかな、僕は帰ってきた

と勝手に死んだようにだっぷりと眠っていた。

目覚めたときには電車のギリギリの時間、僕は飛び起きると寝ぼけ眼で、大学の準備をしようと放り出してあったカバンを取り上げた。

その時、ちょうど目線に入ってきたコンセント。

真っ暗な二つの穴の一つから長い髪の毛がまた、だらりと力なさに垂れていたんだ。

昨日引き抜いたはずの髪の毛。

長さから見ても同じ人物のようだった。

まるで何かの触手のようにコンセントから伸びているそれがとても気持ち悪くなり、僕はそれを急いで引き抜いた。

プツリ。

またあのリアルな感触。

「気色悪い……」

僕はそう呟くと、その穴に使っていなかったラジカセのコンセントを押し入れ、引き抜いた髪の毛を窓から捨てると、荷物を持って部屋を後にした。

髪の毛は風に乗って、何処かへ飛んでいった気がした。

それからラジカセが大きかった事もあってか、僕はまたコンセント

の事など存在すら忘れて普通の日々を過ごしていた。

部屋はまた散らかりだし、布団の横には漫画が山積みになっていて、また彼女が来ないかな、などと思いながら空いたスペースをホウキで掃くぐらい、ごみ箱はもういっぱい、僕は集めたゴミをゴミ袋の中に直接捨てた。

あれから一ヶ月は経った時だったろうか。

ついに、それは僕に降りかかった。

<ガ……ガガ……ガガ……ガガガ……>

夜中に突然鳴り出した音に、僕の安眠はぶつとりと閉じられた。

「あ……う……？」

苦しそうな声を上げて電気をつけると、放置していたラジカセからビリビリと何か奇妙な音が流れていた。

山積みになった漫画の更にもう裏にあったはずのラジカセが見える、変に思っただけよく見ると、積んであったはずの本は崩れて、周りにころがっている。

まさか、ラジカセの音で崩れるはずは、とも思ったが……それしか浮かばない。

<ガガ……ガガガ……>

ラジカセはまだ壊れたように妙な音を発していて、僕はその電源ボ

タンに手をかけ　そして気付いた。
電源は……すでに切れていた。

オフになっているのに、やっぱり壊れてしまったのだろうか。

僕はラジカセを持ち上げようと、両手で両端を掴み力を込めた。

ぬちゃ……といやな感触がして、僕はそのまま……目を見開いた。

ラジカセの裏から伸びたコンセント、そこに人間一人分ほどの髪の毛が絡みついていたんだ。

コンセントのコードにつるのように絡まって、ギチギチに。

目で追うと、それはコンセントの穴の片方から……伸びているようだった。

……しかも、僕は驚いてラジカセを力いっぱい引いてしまったんだ。

ぶ　ち　ぶ　ち　ぶ　ち　ぶ　ち

ラジカセに絡まっていた何十万本まの髪の毛が頭皮から引き抜かれる感触がした。

同時に、コンセントの向こうから絶えられないほど絶叫が響いたよ。

コンセントの穴から髪の毛が一齐に抜け落ちて、ドロリとした真っ赤な血が、穴から噴出した時……僕は

悲鳴を上げ、気を失った。

血塗れの部屋。髪が散乱する部屋。僕は部屋を綺麗に掃除すると、荷物をまとめて部屋を出た。

あのコンセントからは、また髪の毛が一本触手のように垂れていた……」

ちょっとまってくれ……

これ俺でも怖いぞ？

ほら優里なんて危ないよ？

もう震えることも忘れちゃってるよ？

詩織なんて涙目じゃん。

「どつだった？」

杏奈が笑顔で聞く。

「最初からずいぶん怖いネタを……」

彰が隣からツッコム。

「じゃあ次は詩織ちゃんあたりいってみる？」

「うう……私ですか……？うん……じゃあこれなんかどつでしょっ？」

こんばんは お元気ですか？

ろくな食生活をしていないだろうと

しんぱいしています。

にくだけじゃなく、魚や野菜もとらなきや

いけませんよ？ この手紙が届いた時、私は

くるまでそちらに向かっている頃でしょう。

よるごはんは、美味しい料理を作ってあげますね。」

「「「？」「」

みんな首をかしげている。

「小説ならではなんだけどな……」

詩織はわかってもらえなかったからか肩を落としている。

つてか小説ならではって言っちゃダメでしょ……

でも小説ならでは……？

普通に口にだしたらわからないけど書いたらわかる？

そういついごとか……

詩織が急に怖く見えてきた……

これはPC版じゃなきゃダメだな……

「うんさっきのはよくわからなかったけど……次佐々木君いつてみよつか」

「ふっふっふ……お前ら怖がりすぎて夜眠れなくならないようにな」
「？」

彰の自信のすごさにみんなが息を飲む。

「では……『まんじゅうこわい』」

「」「」「」

これはツッコミ入れたほうがいいんだよな？

「彰君それは怖い話じゃないから……」

「そうなのか!？」

「真美さん次いきましよう」

「そうね……なら次は優里ちゃんいつてみる？」

まさか俺にあたるとは……

「まあやってみます……」

ある村に少年がいました。

母親1人で育てられた少年は母親からたくさんの愛をもらいました。たった2人で、決して貧しくない幸せな生活。

……しかし少年には悩みがありました。

少年は汗をかかないのです。

夏になっても、走っても、お風呂に浸かっても、サウナに入っても。

そんなある日、少年は赤信号で車道に飛び出しました。

冷や汗でもかくのかな？と思ったのです。

車は少年の前ギリギリで止まりました。

……しかし少年から汗は出ませんでした。

「何かないかな……」

その次の日、少年は万引きをしました。

見つかってしまい、追いかけられました。

必死に逃げ、必死に逃げ、

……それでも汗はかきませんでした。

「あ！」

少年は気づいたのです。

汗をかく方法を……

次の日少年は汗を出す方法を早速家で実行しました。

「やった！汗が出たぞ！」

嬉しさのあまりに次の日は家の裏道でやってみました。

「あれ？汗が出ないや」

そう。出なかったのです。

きつとこれからも続くでしょう。

前日に出たのは汗ではなく涙とも知らずに……」

俺は周りを見てみる。

あれ？泣いてる？

そんなに怖かったか？

「かわいそすぎるよお……」

どこからかそんなつぶやきが聞こえる。

「ひつく……とりあえず結衣ちゃんいつてみましょう……」

「はいです……うう……かわいそすぎる……」

「いつまでひきずつてるの!？」

「やってみますよ……」

知り合いが高校生の時、先生に聞いた話ということです。

先生といっても、大学を出たばかりの新任の講師だったそうで、比較的歳が近いことと、時々怖い話をしてくれるので生徒に人気があったらしいです。

その先生（Aとします）が高校生の時、クラスの親しい友人B、Cとバレンタインデーの狂言を企んだのだそうです。

舞台となったのは、とある地方小都市の公立の進学校。

時代なのか、地方小都市の進学校ということによるのか、その先生の高校時代、バレンタインデーにチョココレートを貰えるというのは一部のスター的な生徒に限られていました。

だからバレンタインデーといっても、男子も女子もなんとなくワクワクソワソワしつつも、結局何事もなくその日が過ぎ去っていくというのが、その高校での毎年のパターンだったそうです。

A達三人、そんなつまらない状況を打開すべくと思ったのかどうかはわかりませんが、バレンタインデーが近づいたある日、彼らは連れ立って密かにチョココレートを買に行ったのです。

そう、つまりチョコレートを自分で買って、学校の自分の机に隠し、バレンタインデー当日、

「あれっ！ オレの机にチョコレートが！ いや？まいったなあ？」
「おっ！ オマエにもか？オレもだよ！ いや？まいった。まいった」

「なんだオマエらもかよ。オレも入っててさー。いやーオレ達やっぱもてるんだなあ？」

ってやるつもりだったわけです。

各自のセリフまであらかじめ考えて、それをやったというのだから笑えます。もちろん単なるウケ狙いです。

いつもつるんでいる馬鹿3人組にだけチョコレートがプレゼントされる

なんてことのないというのは、クラスのみんなにはすぐわかります。

まあそんなことでもすること、一年後に迫った大学受験の圧迫をひと時でも忘れ、バレンタインの楽しい気分を少しでも味わいたいというところだったのでないでしょうか。

チョコレートを買ったらAの家で各自ラッピングです。

バレンタインのチョコレートですから、買ったスーパーのレジ袋入りというわけにはいきません。

それぞれ趣向をこらしメッセージまで添えて、もう準備万端

当日が楽しみです。

前日の放課後、各自さりげなく自分の机にチョコレートを隠せば、あとは明日登校する時間の確認です。

早く来すぎるとみんながないし、かといって遅すぎるとホームルームが始まってしまっているので、お楽しみ時間が短くなってしまいます。

しかし、そこは県下でも有数の進学校の生徒。たちまちベストな時間を計算し、いよいよ明日を待つばかりです。

二月十四日の朝。

三人揃って教室に入ります。

いつも通りのだるそうに手を上げるあいさつ。

密かに想いを寄せている女の子には「あ、俺チョコレート一枚でいいからね」なんて哀しい軽口も忘れずに席に着きます。

セリフはA、B、Cの順と決まっていました。

何気なく何気なく、いつも通りいつも通りとまわりの友人に冗談を言いつつ席に着き、何気なく机の中をさぐります。

大丈夫。指先に触れるラッピングの紙。

Aは、セリフが最初なのでかなりドキドキです。

「うん！？ 何だこれ！？ あれっ！ わっ！ オレの机にチョコレートが！… いや？まいったなあ？」

いつせいに、Aの方をちよつと呆気にとられたように見るクラスのみんな……。ほんの一瞬の沈黙の後、驚きの声が沸き起こります。

「マジかよー！」

「うっそおお！」

反応はバツチリです。そして次はBの番。

「なんだよっ！ A、オマエにもかよ！ いやオレもだよ！ いや？まいった。まいった」

Bはそう言って立ち上がり、Aの方に、そしてみんなにチョコレートの包みを見せびらかします。

もう教室中、男子も女子も大騒ぎです。

「えっ何！？ チョコレート！？ 本当??？」

「なんでAとBなんだよー！」

「バーカ！ 信じんなよ。AとBだけ。テメエらでやってるに決まってるじゃん」

どうも早々と見破ったヤツもいるようで、こりゃヤバイとAとBは、Cに視線を走らせます。

なにせ肝心なのはCのセリフなのです。

Cの「いやー、オレ達って、やっぱもてるんだなあ?」「っていつ白々しいかにもなセリフがオチなのです。

ところが……。

その肝心のCが、いつまでたってもそのセリフを言おうとしません。見れば、席に座ったまま何やらぼうつとしているばかり……。

教室の中に渦巻く歓声の中、もうこうなったらとAはCに声をかけます。

「おい！ C！ オレとBは机にチョコレートあつたけど、オマエは？」

言った瞬間、それってなんかバレバレじゃんって気がついた時は、もう間に合いません。

視界の端には「バカ……」と顔をしかめるBの顔……。

「えっ？ ああ、ああ……」

ガタンと席を立ちCが言いました。

「うん……。あっ、いや、えーと……。お、オレも入ってたぜ。いやー、オレ達やっぱもてるんだなあー……」

それはもうほとんど棒読みに近くって……。

もうクラス中大爆笑。

「さっすが！ バカ奴等！ やつてくれるぜ」

「さっすがー！ AクンもBクンもCクンもサイコー！ わたし、来年はチョコレートあげちゃうかもー！」

「おい！ A！ オレんところにもチョコレートあったんだけど、一応言っという方がいいかな？」

クラスを沸かせるという目的はまあ達成できたわけですが、そうは言ってもAもBも納得できるわけありません。

先生が来たこともあり、その場はそこまででしたが、AもBも休み時間になったらCのことをどうしてくれようかと、考えるのはそればかりです。

「てめえー、ちょっと来いよ！」

休み時間になるなりAとBはCを外に連れ出します。

その様子を見ているクラスのみんなは、もうニヤニヤが止まりません。

三人が教室に出た途端、堪えていたものが大爆笑となって廊下にまでこだまします。

「オマエさ、何やってるわけ？」

「あれじゃ、全然面白くねーじゃんよ！」

Cに詰め寄るAとB。

「悪かったって……。たださ、ちょっと変なことがあってさ……」
「なんだよ。変なことって」

「チョコレートの包みがもうひとつあってさ……」
「……………!？」

Cが言ったことを理解するには、AもBも少し時間が必要でした。

「バツカヤロー！　なんだよ！　それっ！　テメエーだけ本当にチョコレート貰ったってことかよ！　ざけんじゃねーよ！」

思わず二人して左右からCに回し蹴りです。

「痛いーなバカ！　話、最後まで聞けよ。そのもうひとつのチョコレートってというのが変なんだよ。それでマジ焦っちまってさ……………。朝の一件は確かに悪かったって。でもさ、ホント変なんだって」

実は、この時のCときたら顔色は真っ白。

話し方もいつもと微妙に違っていたのですが、朝のお楽しみ失敗と、

Cだけチョコレート貰ったということに頭に血が上っているAとBには

そこまで気がまわりません。

「変って、何が変なんだよ？　チョコレートが腐ってたのかよ！」

「チョコレートが腐るかバーカ！　とにかくよ、話をしたら長くなるから昼休みまで待てよ。どういふことなのかオレもゆっくり考えたいんだよ。実はさ……………」

「なんだよ？」

その時になって、やっとAとBはCの感じがいつもと違うことに気がついたのです。

「オマエ、そういえば顔色が変だぜ……。なんだよその顔……」
「うん。とにかく昼休みにしようぜ」

昼休みまでの時間は長かったのか？ 短かったのか？

三人のチョコレート事件のことは、授業中まで話題になりました。

来る先生、来る先生、必ず最初に言うことは「今日チョコレート貰ったか？」だったからです。

そのたんびクラスは大爆笑。

そして誰かが先生に朝の一件を話し再び大爆笑。

もっともそれくらいで凹むようなA達ではないのですが……。

「これなんだよ」

やっと来た昼休み。

CがAとBを連れてきたのは屋上へと続く階段の踊り場。

床にペタンと座ったA B二人の前に出したものは、三人がスーパーで買ったチョコレートとは似ても似つかないかにも本命チョコって感じの小箱……。

「スゲー！ オレもいつかこんなの貰いてーな」

「そついう話じゃねーだろ！ まずはこのメッセージカード見てくれよ」

Cはそう言つてAとBに二つ折りになつたメッセージカードを渡します。

「どれどれ…。えー、『Cぴよんへ』。ハハハ！ なんだこれ！？ Cぴよんへ。ハハハ！ ダメだあー！ 力が抜けるうー！ Cぴよんへつて…。Cぴよんつて誰だよ？ やっぱオマエのことか？ は、は、腹痛てー！」

「Cぴよん」がすっかりハマつたAとBはしばらく笑いが止まりません。

やっと笑いが収まつたAとBですが、よくよく考えてみれば、これはつまり、Cのことを「Cぴよん」などと可愛く呼んでくれる彼女がいるということになります。

「何だよオマエ！ 結局自慢かよー！」

詰め寄るAとB。

「だから、話は最後まで聞けよ。このCぴよんなんだけどよ、俺のことCぴよんつて呼んだヤツは一人しかいねーんだよ。俺は幼稚園まで、D市に住んでただけど、その時近所に住んでいた幼馴染の女の子。その子だけなんだよ」

「てことは何か？ その幼馴染の女の子がこの高校にいるってことか？」

確かにD市ならちょっと遠いものの、この高校に通えないこともありません。A達のクラスにもD市から通っている生徒がいたはずですよ。

「そんなわけねーんだよ。だって、あの子は小学校の時に病気で死にしまったんだから……」

「バーカ。やめろよ。それじゃまるで幽霊じゃねーか……」

「勘弁しろよ。オマエ、幽霊にバレンタインデーもクソもあるかよ！」

Cの話にちよっとゾクツときて、肩をすくめつつAとBが言います。

「お前、そんな話わざわざこんな寒い所で言うなよ。なんだか薄気味悪くなってくるだろ。それでなくっても寒いのによ」

普段は蛍光灯を消している屋上へと通ずる階段の踊り場。

下からの誰かが騒ぐ声が、フィルターでも通しているかのようにはるか遠くに聞こえます。

「誰かさ、やつぱり幼馴染だった他の奴がこの高校にいてさ、そいつが悪戯したんじゃないの？」

「確かにな。俺もそんなところかなあーっとは思っただけどよ、ひっかかるっていうか、変に気味が悪いのがこの住所でさ……」

Cはそう言っつて、今度は箱の後ろの製造明細を記したシールを指差します。

「E洋菓子店 Y県D市 1-2-34。なんだよ？ この住所がどうしたんだよ？」

「この住所、その子の家の住所なんだよ」

「なんだあそれ？ よくわかんねーよ。どうということなんだよ？」

チヨコレートを製造した店の住所と、亡くなったというCの幼馴染の家が同じ住所ということは、その幼馴染の子の家が最近洋菓子屋を始めて、Cにその子の名でチヨコレートを贈ったということなのでしょう？

いや、そんなことがあるわけありません。

AもBもなんだか頭がこんがらがってきました。

「この洋菓子屋の住所見た瞬間さ、これってたぶんあの子の家の住所じゃないか？ って気がしたんだよ。住所覚えてたわけじゃないけどさ、前のオレんちの住所とほとんど同じだからさ。でさ、さっきの休み時間に、この店に電話かけてみたんだよ」

「おっ。なるほど。それで？」

「電話出たの、その子の親だったのか？」

「いや、彼女の家は確かD市の別の所に引っ越したって聞いたから親が出るわけねーんだ。電話に出たの知らない人だと思うし、何よりこのEって、彼女の家の苗字と違うし……」

「そんなこと言ったって、このEが苗字とはかぎらないだろ？」

「だから、それも聞いたんだって。順番に話させろって……」

Cは、その店に客を装って電話をしたのだそうです。

そのチョコレートの商品名を言って、店に買いに行きたいんだけど道順を

教えて欲しいっていう風に。

「以前その辺に住んでいたの、だいたいの土地勘はあるんですけど、この住所だと、たしか以前　さんが住んでいた家の住所だと思っんですけど……」

と、幼馴染の子の苗字をそれとなく言ってみましたが、相手は「さん……？　さあ……？」と言っただけです。

よくよく考えれば変な電話です。

土地勘があるのなら電話で確認する必要もないわけですから。

「ちょっとお待ちください。主人に代わりますんで」

そう言って、相手は主人だという男性の声に代わります。

「もしもし。　さんっていうのはよくわからないけどさ、ウチがここ始める前は牛乳屋さんだったっていうのは聞いたけど、それでわからないかい？」

なにかがガツーンと体を突き抜きました。

幼い頃のことを脳裏に蘇ります。

そう、幼馴染のその子の家に遊びに行っただけ、おやつに商売物のフ

ルーツ牛乳やヨーグルトをご馳走してもらったことを……。

店先に積み上げられた木製の牛乳ケース。

その木製のケースに染み付いた牛乳の発する匂い。

店に入ると金属製の大きな冷蔵庫があつて、幼馴染の子のお父さんがニコニコ笑いながら牛乳をCに手渡ししてくれて……。

その横では、粗末なパイプ椅子に腰掛け、足をブランブランさせながら笑って牛乳を飲んでいる幼馴染のあの子……。

そう、あの子の家は確かに牛乳屋さんでした。

「もしもし、もしもし……」

どのくらいそうしていたのでしょうか？

受話器から聞こえる声に、Cは我に返ると、

「あ、はい。あ、そうそう。うん、牛乳屋です。そう牛乳屋さん。わかりました。ありがとうございます」

「どうします？ 商品お取り置きしときましようか？」

「えっ？ あ、すみません。今日は学校なので、また今度……」

「なんだかわかったようなわからない話だなあ……」

「うん。ただ、チョコレートくれたのがその幼馴染の子だとしてもだぜ、なんで今年なんだよ？」

Cの話を聞き終え、ちよつとため息をつき気味にAとBはそう言い

ます。

「あのさ、こう言っただけを悪くしたんなら謝るけどさ、なんかこう
気味が悪いつていうより、ちょっと気持ちが悪く話だな……」

そう言うAにCもうなずきます。

「うん。そうなんだよ。どう考えたって変だろ？」

「まあさ、わかんねーよ。それより、この後何があるのか？ それ
から、来年もまた貰えるのか？」

Bのその呟きに、思わずビクツと背筋を伸ばすC。

「オマエ、やめろよー……」

そのことに今更ながら気がつくC。

そのCの肩にポンッと手を置きAが言いました。

「まあさ、来年はともかく来月だよ。来月の十四日どうすんだよ？
ホワイトデーはよ？」

結局、Cクンのもとに届いたその謎のバレンタインのチョコレート。
後にも先にもそれ1回きりだったそうです。

ところで、心霊ビデオの有名なヤツに、子供が夜に部屋で他愛ない
トリック撮影みたいなことをしていると、後ろの大きな窓の端に白
い大きな顔が覗くってヤツがあったじゃないですか？

このお話聞いた時、即座に思い出したのがソレ。
妙な悪戯を企んでると、面白がって悪戯好きな何かが寄ってくるっ
てことなんでしょうか……。」

「「「??」」」

「これもどちらかというとなんかいい話に聞こえてくるんだけど？」

「なんか約束でもしたのかな？」

「まあ人によって受ける感性は違いますからね」

結衣がそう言う。

「まあ自分でも『うん……みんな怖いと思ってくれるかな?』と
か思ったんですが……なのでちゃんとしたのを……」

「かなり昔の話です。まだ娘が四歳ぐらいの小さかった頃、一緒に
買い物へ出かけた帰りのことです。

電車に乗って帰っていたのですが、あまり人は乗っていませんでし
た。

でも、なぜか娘も私も座る気になれず立っていました。

すると、電車が急ブレーキをかけたのです。

ギギギッとブレーキがかかり、二人でふらっとしてしまいました。

でも、すぐに電車が動きだしたので、「怖かったねえ?」などと話をしていたのです。

すると、立っている前の座席の下あたりから、カラカラカラ……と異音が。

「ん? なんだろう、この音?」

そう思っていると、娘が言いました。

「……女の子が立ってるよ」

「え?」

でも、娘が指差した先は連結部の外。

「まさか? そこは電車の外よ」

「だって、立ってたんだもん」

と、また、カラカラカラカラ……の音。

しばらく黙っていたら電車のアナウンスが響いて……。

「人身事故がありましたので、この電車は車庫に入ります」

「あの子かな?」娘が言うので、私が「しー」と。

ついてきたら困るから黙ってしようねと、現場を見ないように降りました。

まさか、あのカラカラの音は……」

「カラカラの音ってもしかして……」

「……骨？」

そしてみんなとりあえず1回ずつ怖い話をした。

なんで全部紹介しないのかって？

作者がめんどくさがるからですね。

結局みんな怖くなって肝試しは中止となったとき。

第61話 女の子たちと夏休み? 8月15日～8月20日(後書き)

今回は書くのがすごく大変でした……

冬なのになんでこんなに怖い思いをしなくてはいけないのでしょうか
ね……

詩織のやつは縦読みで『ころしにいくよ』になります。

第62話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日

どうにかして優里と一緒に風呂に入らなければ……！

正直優里の身体を洗うのは俺の理性が大ダメージを受けてしまうので洗ってもらわないと困る。

とりあえず俺から動かなければ……

「じゃあ私お風呂入って来るね」

俺は立ち上がる。

「あれ？優里、亮君と一緒に入らなくていいの？」

「うん」

「あれ？俺ってもう一緒に入ること前提なの？」

「」「あたりまえじゃない」「」

ふっ……「こつ言うてくることはすでに予想できていたから優里にはもともと俺がどついう反応するかは教えてある……」

こんなこと予想できてしまうようになるなんて……

なんか自意識過剰な気もしたけどあたってよかった……

とりあえず俺は風呂に入ろう……

俺は脱衣所に行く。

そしてなにもしないで少し待つ。

（亮（優里）視点）

亮がお風呂に行った。

あとは私もどうにかしてお風呂に行けばいいだけ……

「ちょ……ちょっとトイレ」

私はゆっくりと立ち上がる。

「お兄ちゃん早く帰ってきてね……？」

詩織が泣きそうな目で言う。

きつとさっきの怖い話が怖かったのだろう。

「できるだけ急ぐよ」

私はなんか後ろ髪を引っ張られるような気持ちで脱衣所に向かった。

（優里（亮）視点）

優里のやつまだかな？

「亮？」

優里がやってきた。

「とつとと風呂入ろう」

「え？とつとこ八 太郎？」

「なんで！？どこからそうなったの!？」

「いやとつととなんて言うから」

「優里なんか変じゃない!？」

「きつとこの身体のせいね……」

「俺の身体が今侮辱された気がする!!」

「冗談冗談。じゃあ脱がすわよ？」

俺（優里）が優里（俺）の服を脱がす。

なんか自分が服脱がす姿見てて自分が変態に見えて仕方ない……

「なんで上向いてるの？別に見たっていいわよ？あ、見せる異性は亮だけだからね」

「俺の理性さんへのダメージを最低限に抑えるために見ません」

「もう……一緒に風呂入ったことあるのに」

「それはまだ自分の身体だったから一応距離あったし……」

「はい！終わったわよ」

「じゃあ次は俺の番か……ってか俺が脱がすの下だけでよくな？」

「まあ亮がいいならそれでいいけど」

俺（優里）は服を脱ぐ。

そのままズボンを下ろし。

さて、俺が脱がすか。と思いき動いたが優里はそのままパンツまで下ろした。

「あ」

「あ、じゃね……ムゲッ」

俺（優里）に口をふさがれる。

「ばれたらどうするの！？」

「悪い……ってなんでパンツまで脱がすんだよ！」

「亮顔真っ赤。……なんか自分の顔なのに可愛く思えてきた……」

とりあえず俺たちは風呂に入る。

もちろんタオルは巻いてるぜ？

「じゃあ俺が最初に洗ってやるから」

そう言っつて優里（俺）は俺（優里）の身体を洗う。

うわ……グロ……

あえてなにがとは言わない……

でもこんなに至近距離で見ることなんてないからな……

なんとかして洗い終える。

今度は優里（俺）の番だ。

俺は上を向く。

そして洗ってもらおう。

洗っている途中で俺（優里）の手が止まる。

「どうした？」

「あ、うん……」

なんか元気がないようだ。

「自分の傷が酷いなって……」

「……」

そっか……あまり自分で見ないようにしてたんだろうな……

それで今見せちゃまった……

優里（俺）は俺（優里）のほうに向き直り俺（優里）の頭に手を置く。
く。

自分よりも背の高い人の頭に手を置くななんて思ってなかった……

「優里？前も言ったろ？俺は気にしないよ」

「でも……」

「大丈夫だから」

俺（優里）から涙が出る。

「亮お……」

「大丈夫だぞ……」

優里をあやすように俺は頭を撫でる。

いろいろあったが風呂を終えた俺たちはリビングに戻る。

「あ————！！！！亮君がもうお風呂入ってる！！」

とりあえずみんながうるさかった……

第63話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日（前書き）

恋チヨコに夢中になっていて更新がおろそかになっています……

分岐点がまったくわからない……

まだ千里と皐月と美冬しか終わってないorz

早く終わらせないとリトバスが発売してしまう……！

第63話 女の子たちと夏休み? 8月15日～8月20日

会長の別荘に来てから3日目(俺と彰は2日目)

ん?3日目ってことはまだ17日?

そろそろネタがない気がするよ……?

そんなずつと海で遊んでるわけにもいかないし……

まあその前に俺は元の身体に戻りたいわけで……

「優里どうする?」

「どうするって言われても……」

只今俺と優里は別荘にいます。

ここにいるのは俺たちだけ。

他のみんなは海に遊びに行ってます。

「頭ぶつけてみるか?」

「そうね」

俺と優里は向き合っ。

「い、行くぞ?」

「ゴッッ!!」

「……まあ、こんなことで戻れたら苦労しませんよね？」

「手が出尽くした……」

「もうないの!?!」

「俺の頭だと……もう……!」

「まあ頭ぶつける以外に考えつかないもんね」

「う~~~~~ん……」

「どっ? 思いついた?」

「いや、むじ」

「「はあ……」」

「ってか事情知ってる結衣も遊びに行ったのか?」

「そっみたい……」

「協力してくれたっていいじゃねえかよ……」

「ドラマとかだとキスして治るみたいなのがあるんだけどね……」

「正直自分にキスするなんて嫌だよな……」

「……………」

「え？なんでそこで黙るの？」

「……………」

優里の無言の視線攻撃！

「え？マジで？」

亮は精神に5のダメージ！

「嫌だつて！！俺さすがに男にキスするのは嫌だからな！！女同士ならまだいいかもしれないけど！！」

「男から見たら女はいいかもしれないけど私だつて嫌だなんだからね！？男同士のほうがまだいいでしょ！？」

しかしこれも戻るため……………戻るため……………

亮は自己暗示をかけた！

「俺、目瞑ってるわ」

「あー！ずるいー！」

「じゃあお前も瞑れよ」

「それじゃわからないでしょー！」

「そこはなんとか、さ」

とりあえず俺たちは目を瞑り手探りで肩をつかむ。

「りよ……亮がしてよ……」

「俺が!？」

「男でしょ」

「今はお前が男だからね!？」

「身体だけね」

「俺がしなきゃだめか？」

「男でしょ!」

「わかったよ……」

俺はそつと唇を近づけて……

「案外あっさりだったな……」

「ネタ切れでしょ」

「……」

とりあえず戻ったよ！

第64話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日（前書き）

リトバスが発売しましたね…

積みゲーがあるためまだできませんが…

みなさんも気が向いたらやってみるといいと思いますよ。

あとAngel Beats!のゲームがでるらしいですね。

やっぱりギャルゲーなんでしょうか？

岩沢さんの攻略がしたいですねww

第64話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日

さて俺と優里は元に戻り海を楽しんだ。

そして4日目。

え？3日目はあれだけなのかって？

事情があるんだよ！ツツコまないでくれよ！

「さすがに3日連続海だと飽きるね……」

詩織のこの一言を待っていたかのように会長が反応する。

「じゃあ鬼ごっこでもしましょう！」

「「「鬼ごっこ？」」「」

「鬼じよしにつかまった哀たんしれな人は1日言うことを聞きかなきゃいけない……」

「嫌きらです！！損こするの俺おれじゃないですか！！」

俺は真まっ先に反応する。

「1時間つかまらなかったら逆に言うことを聞きかせられます」

これは彰あきらなら楽やすなんだろうな……

彰のこと狙うの杏奈だけだし……

「男なのに亮君は受けないの？」

円がボソツと言う。

「円お姉ちゃんお兄ちゃんはそんな人じゃないよ」

「そうよね。亮は空気だけは読めるもんね」

「人にはできないことを簡単にやってのける！そこに痺れる憧れるう！です」

こいつら……！

「……受けましょう。ただし条件があります」

「なに？」

「逃げられる範囲を3km圏内にしてください」

「」「広っ！」「」

「3kmってちょっとずるくない？」

「じゃあ1.5でいいです」

「まあそのくらいなら」

「じゃあ今から10分後に追いかけてきてください」

そう言って俺と彰は走りだした。

「いや〜。最近学校でこういうおもしろいイベントなかったからクワクするな！」

「お前は楽でいいよな………」

「あはははは！〜！」

「うぜえ！〜じゃあ俺はこっち行くから」

そう言って彰と別れる。

さて……どこに隠れるか……

その頃

「ふっふっふ……亮さんも甘いですね」

「結衣？どついつのこと？」

円が首をかしげて聞く。

「亮さんは携帯を持って行きました」

「GPSがつかえるわね」

「さすが優里ですう！」

「これは勝ったも同然！あとはみんなで挟み撃ちしてつかまえましょう！」

会長が張り切る。

「みなでつかまえればみんなのおねがい聞かなきゃいけないしね」

「詩織。おぬしも悪よのう……」

「いえいえ。円様ほどでは……」

「くくくくく……」

第65話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日（前書き）

おおっと！！いつのまにか12月ですよ！！

え？更新遅いんじゃないかって？

これでも今頑張ってるほうなんですよ？

明後日からテストでテンションも落ちまくりに…

赤点取ったらまずいつて教科の勉強もがんばってるのに……

本当なら今週の金曜に更新する予定だったのに…

でも…ほら…頑張らないと読んでくれる人いなくなっちゃうし…

え？リトバスのCG回収率が100%なのになに言ってるんだって？

寝てないんですよ！！

寝ないでリトバスやってたんですよ！

アニメだって見ませんでしたよ！！

…と愚痴ってみました

これからもよろしくです

第65話 女の子たちと夏休み? 8月15日〜8月20日

GPSを頼りに動きはじめた結衣たち。

「ふっふっふ……この辺に亮さんはいるはずですよ」

「この木の上とかじゃない?」

「あー。亮君ならありえるかなあ」

「じゃあみんなでかこんでみようよ!」

「詩織ちゃんいいアイデアね」

そうして結衣たちは一本の木を囲む。

「お前は完全に包囲されている!!おとなしく投降しなさい!!ですう」

動きはない。

おかしいと感じた結衣たちは木に近づいてみる。

すると木には……

「……これは……!」

『回収しといて』と書かれた紙が貼られている亮の携帯だった。

〈亮視点〉

「あいつらのことだ……どうせGPSとか使っただろうからな……」

俺は携帯を放置することにした。

まあ会長のプライベートビーチだし大丈夫だろうけど……心配だから木の上に置いとくか……

俺は携帯を木の上に乗せてまた逃げ出した。

俺は浜辺を走っていた。

うっん……体力奪われるな……

俺はちらっと海を見た。

そしてそこにあっただものに目がいく。

「これがあれば無敵だな……」

〈優里視点〉

「亮さんめ……なかなかやりますね……」

結衣が肩をおとす。

私は気づいたことがあった。

「ねえ」

みんながいつせいに私を見る。

「これって亮の足跡じゃない？」

私は地面を指差す。

みんなは地面を見る。

「「「キターーーーーー!!!!!!」」」

私たちはその足跡を追って走り出した。

「疲れたですう……………」

「結衣はやっ！」

「まあ砂のせいで疲れやすいもんね」

「亮さんの体力は化け物ですう……………」

私も疲れてないんだけど……………」

「でもさ……………」

私はまた気づいたことがあった。

「あそこにいる人亮じゃない？」

みんながいつせいに私が指差した方を見る。

「「キターーーーーー！！」」

一気に走り出す。

だがそこにいたのは……

「うまうー！！」

変な仮面被った1人の変態だった。

〈亮視点〉

ふっふっふ……優里たちが来たがこの仮面のせいで誰かわかってないよっだぜ……

今の俺はマスク・ザ・斉藤！！うまうー！

え？リトバスに影響されすぎじゃないかって？

まあ作者はリトバスやった後だから頭はリトバスのことばっかだな……

筋肉、筋肉

そのテンションのまま小説書くのはやめてほしかった……

「亮、なにやってるのよ」

っ!!!

いきなりバレただと!?

優里め……なにものだ……

だが俺はマスク・ザ・斉藤を突き通さなきゃいけない!!

「ホンジャマ!!うまつー!!」

この冷めた視線が痛い……

ダッ!!

俺は走りだした。

ガッ!!

優里につかまる。

なぜか他の人にもつかまれる。

「罰ゲーム決定」

俺は敗北した。

第66話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日（前書き）

お久しぶりです

第66話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日

「彰、なんでお前も捕まってるんだよ……」

「優里ちゃんたちが杏奈の協力をして……お前がすっかり抑えておいてくれれば……」

「人のせいにしてんじゃねえよ」

「だよな……」

「つてことで昨日つかまった俺たちは今現在遊園地に来ております。」

「え？タイトルは20日までであるのにまだ19日なのに遊園地なんかに行つて大丈夫なのかつて？」

「大丈夫ですつて。」

「20日なんて1行で終わらす自信ありますから。」

「今回来た遊園地は『ぬいぐるみ』つて発言はいいのに『きぐるみ』つて発言がだめとか、大きな城には幽霊がでるとか、その大きな城にきれいな石がうめこまれてますがその石の中にダイヤモンドがあつてそれを見つけるともらえるとか、巨大な地下空間があるとかそんなところではありませんよ。」

「そもそも浦安じゃないし……」

「つてか地下空間があるのは本当らしいですね。」

なんでも地下から某キャラクターは出てきているとか……

いきなり気絶とかすれば地下に行けるらしいですよ。

まあそんな話は置いておいて。

さて、遊園地です。

さっき彰と杏奈とは別れてしまいました。

説明してるあいだに行っちゃうなんて酷いや……

そうなるに残るのは俺、優里、円、結衣、詩織、会長となるわけです。

あってるよな……？

男1に女5というのはどうなんでしょう？

ここがリア充だけが集まってる場所だよかった……

街中だったら絶対に殺されてるって……

「とりあえずジェットコースターに乗ろうか？」

会長がそんな提案をする。

みなさん。忘れてるかもしれませんが俺はジェットコースターは苦手です。

優里さんとは1度乗りましたが優里さんは楽しんでて絶対に俺が苦手だってことは知りません。

ほら、なんかあそこでジャンケンしてるよ……

「さっ！上園君行こっか」

会長が俺の手を引く。

ジェットコースターでは会長がとなりに座った。

そして俺は臨死体験をした。

「もうやだ……帰る……」

俺がそう言って帰ろうとすると……

ガシッ！

「」「今日は言うことを聞くんだよ？」「」

「はい……」

俺は涙目になりながらももうなぞくしかなかった。

『お化け屋敷』

そこは合法的に異性に抱きつける場所である。

注 女子に限る。

ん？待てよ？浦安の遊園地で中の人とかやれば合法的に抱きつけるんじゃないの？

つて人もいるかもしれませんがあの中の人全員女性です。

なぜなら男性がやると犯罪になってしまうからだそうです。

差別ですね。わかります。

まあそれは置いて……俺たちはお化け屋敷前にいた。

お化け屋敷なら大丈夫だ。

つてかおととい怖い話して怖くなって肝試しやめたのによく来るな

……

「くじ引きで誰と入るか決めるですう！」

結衣が割り箸をとりだす。

「さあ引いてください！」

俺は割り箸を引く。

3番か……

誰と一緒に入るんだ？

第66話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日（後書き）

次の話から亮と女性1人1話でお化け屋敷の中をやります。
だから時間は戻るわけですね。

あー…説明ヘタだからわかりにくいな……

例えば次の話は亮と優里のお化け屋敷

その次の話は亮と円のお化け屋敷

みたいな感じでいきます。

なんか1人に絞っちゃうと作者の好きなキャラわかつちやうじやないですか（笑）

あ…うざい？そうですね…

まあこの後5話は全部お化け屋敷の話を予定しております。

多分毎日更新できるかな……？

なんかすごく小説書きたいんで多分毎日更新できると思います。

第67話 女の子たちと夏休み？ お化け屋敷 優里 (前書き)

とりあえず優里と円と結衣のお化け屋敷は書き終わりました。

あと2人か……

第67話 女の子たちと夏休み？ お化け屋敷 優里

「亮さんは何番ですか？」

「俺か？俺は3番だ」

「あ、私も3番だ」

俺と一緒に行く人は優里か。

「何で私3番引かなかったんだろっ……」

いや、円さん？引かなかったじゃなくて引けなかったんですよ？

「うう……お化け屋敷なんて大丈夫かな……」

詩織はちよつと心配だな……

まあ他の人もついてるし大丈夫か……

「じゃあ行くか優里」

がしっ

お化け屋敷に入る前から俺の腕をつかんでくる優里。

「これだと歩きづらいぞ？」

「でもこうしてなきゃ私歩けない……」

ああ……優里は幽霊が苦手だったか……

「じゃあこのままでいいよ」

俺たちはお化け屋敷に入る。

昔、1つの村があった。

山にかこまれた村であり外とは関りをもっていなかった。

とくになにごともなくすごしていく村人。

ある時悲劇は起こる。

村人全員がいきなり死んでいた。

それからその村に調査が入る。

しかし調査1日目から調査チームとの連絡は途絶えた。

それからその村に入った人は絶対に帰ってこなかった。

「……という設定らしい」

「亮……帰ろう……出れなくなっちゃう……」

「あれ？俺の最後のセリフ聞いてた？」

「いや、もうなんでもいいから帰ろう」

「いや、もう出れないし」

俺は後ろを指差す。

そこはもうすでに扉が閉まっていた。

「うう……」

「ほら、俺がついててやるから。な？」

「うう……」

俺たちはお化け屋敷を進む。

草陰からいきなり鉈なたをもったゾンビが！！

え？竜宮 ナ？

「キヤアアアアアアアアアア！！」

「うおっ！！」

優里の驚く声に驚いてしまった。

優里は泣きながら抱きついてくる。

「ほらほら、大丈夫だから」

俺は優里の頭をなでる。

「……………ほんとあ？」

涙目＋上目遣い。

攻撃力抜群だ！！

「ああ。大丈夫だから先に進もう」

俺たちは先に進む。

一軒の民家が見えてくる。

「看板に入れて書いてある……………」

俺たちは民家に入る。

「うう……………血が……………倒れてるよ……………」

民家の中には血まみれの死体が倒れていた。

ガシッ！

「っ！！！！！！！！！！！！」

優里の足が死体につかまれる。

これ危なくね？

へたしたら転ぶぞ？

あ、そのための布団か。

死体の前には布団が置いてあった。

きつと転んだ人用だろう。

そういえば優里のやつ叫ばないな……

俺は優里の顔を覗き込む。

立ちながら気絶していた。

「おい！優里！大丈夫か！？」

俺は優里のことをゆする。

「はっ！朝ごはんつくらなきゃ……」

優里が壊れた！

「優里大丈夫か！？」

「亮、今日は起きるの早いね。ちょっと待っててすぐに朝ごはんつくるから」

「いやいやいや、落ち着きましょっ」

「？。落ち着いてるじゃない」

「ここはお化け屋敷」

そう言つと優里の顔はみるみる青ざめていく。

「夢じゃなかった……」

「夢つてことにしたのか……」

「亮お……！ここ怖いよお……！」

「あー……俺が守つてやるから」

うわっ！クサッ！

「亮が守つてくれるなら……頑張る……」

しかし純粋な優里にはけっこう効いたみたいだ。

俺たちはさらに歩を進める。

それから何度も優里は俺に抱きついてきたがその度に俺は優里のこ
とをあやしてなんとか出ることが出来た。

普通なら15分くらいで出れるものを35分もかけてしまった。

本当……もうしわけない……

第68話 女の子たちと夏休み？ お化け屋敷 円 (前書き)

1日1回更新なんて久しぶりだな・・・

70話に予定している詩織 が結構重要な話になってしまったので
亮は全員と入ることにします。

話の最初をちょっと変えるのですこし変かもしれませんが我慢して
もらえたら助かります。

第68話 女の子たちと夏休み？ お化け屋敷 円

「亮くん次私と入ろう！」

「なんでもう1回入らなくちゃいけないんだよー！」

「今日はみんなの言うことを聞くんだよ？」

「う……」

「ってかそうしたらくじ引きの意味ないし……」

「円お姉ちゃんずるい」

「ふっ……詩織。あなたも亮に命令すればいいのよ」

「そっか！」

俺涙目。

「何度もあそこに入らなくちゃいけないの？」

「亮君！早く行こっ！！」

そして俺たちはお化け屋敷に入る。

昔、1つの村があった。

山にかこまれた村であり外とは関りをもっていなかった。

とくになにごともなくすごしていく村人。

ある時悲劇は起こる。

村人全員がいきなり死んでいた。

それからその村に調査が入る。

しかし調査1日目から調査チームとの連絡は途絶えた。

それからその村に入った人は絶対に帰ってこなかった。

「……………」という設定らしい

「設定なんてどうでもいいよ!!亮君私怖い!」

「すっごく信じられない言葉なんだが……………」

「怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い」

「俺はお前の方が怖い!!」

「まあいいから早く行こつ!」

円はどんどん歩を進めていく。

そこに鉈を持ったゾンビ登場。

「……！わー亮君怖い（棒読み）」

そう言いながら円が抱きついてくる。

「本当に怖くないんだな……」

「え？怖いよ？」

「ああ。わかったわかった」

見た目と性格が違いすぎる……

見た目は子供なのに……

「亮君？すごく失礼なこと考えてない？」

「そんなわけないじゃないか」

はっはっは。と笑ってごまかす。

「むう……なんか納得いかないけどいいか……」

そして俺たちは歩を進める。

そして一軒の民家にたどり着く。

「中に入ろう！」

円は中に入っていく。

中には血まみれの死体があった。

「これにはちょっと驚いたよ……」

円が歩を進める。

ガシッ

円の足が死体につかまれる。

「ちょっと!!!!これじゃあ亮君に抱きつけないでしょ!!!!」

おい。なんかおかしいぞ。

死体はすんなりと足を離す。

裏口から出ようとする目の前にゾンビが!!!!

「キヤッ」

円はそう言いながら抱きついてくる。

「あー……大丈夫か? (棒読み)」

「びっくりしたあ…… (棒読み)」

こんな棒読みを繰り返しながら俺たちは外にでた。

「円ってこつというの怖くないのか?」

「うん……なんか子供だましてみたいなのは大丈夫かな」

「じゃあなにがダメなんだ？」

「（……自分の目的しか考えられない人間は怖いよ）」

「え？」

「あつ！なんでもないよ！みんなのこと待たなきゃね！」

そう言って円は笑ってみせた。

俺にはその笑顔が作り笑いにしか見えなかった。

第69話 女の子たちと夏休み？ お化け屋敷 結衣

「亮さん！！次は私と入るです！！」

「えー！！私は！！」

詩織が文句を言う。

「順番的に私です！！」

「順番！？」

「いろいろあるですよ！！もうそういう設定にした後での変更だからしょうがないです！！」

「結衣お姉ちゃんに言ってるかわからないよ！？」

「私的には知らないほうが幸せなことってあると思っんですよ」

「うーん……よくわからないけどわかった」

納得しちゃったよ……

「さ！亮さん行きましょう！」

俺と結衣はお化け屋敷に入ってしまった。

昔（以下略）なんてしませんよ？次数稼ぎのために毎回書きます

よ？

昔、1つの村があった。

山にかこまれた村であり外とは関りをもっていなかった。

とくになにごともなくすごしていく村人。

ある時悲劇は起こる。

村人全員がいきなり死んでいた。

それからその村に調査が入る。

しかし調査1日目から調査チームとの連絡は途絶えた。

それからその村に入った人は絶対に帰ってこなかった。

「……………という設定らしい」

「いや、そんな設定よりも……………」

「ん？」

「暗いと変な気持ちに……………」

「落ち着こう結衣」

「はあはあ」

「いや、その息遣いやめませんか？」

「ひっひふー。ひっひふー」

「落ち着こうよー！ねえ！？」

「冗談です」

「冗談に聞こえなかったんだけど……」

そんな最初からぐだぐだでやっと歩を進める。

草陰から鉈を持ったゾンビ登場！！

「ひっ！」

結衣が俺の腕に顔を埋める。

意外に怖がりなんだな……

そこがまあかわいいところでもあ……

「もし漏らしたらどうする気ですか！！責任とれるんですか！！あ、責任なら亮さんにとってもらえばいいか。ナイスです！！」

鉈を持ったゾンビに結衣が不吉なことを話しかけていた。

「俺の思ったことを取り消しにしてくれ！！」

「どうしたんですか？亮さん」

「悲しくて泣きそう……」

「私が慰めてあげますよ。よしよし」

「結衣の責任なんだけどな……」

「？」

俺たちは歩を進める。

そして民家にたどり着く。

「入れて書いてあるんで入りましょう」

俺は結衣に手を引かれ民家に入る。

「こ……これは……」

「ん？どうした結衣」

俺は結衣の背中から中を覗き込む。

そこには血まみれの死体が……

「死体か……これは怖……」

「布団があります！！布団+夜そして男女！！することは決まっています！！！」

「そつち!?!」

「さあ!! 亮さんはやくしましょー!!」

そう言つて布団に進んでいく結衣。

そして盛大に転んだ。

転んだ?

結衣の足を見してみる。

結衣の足に死体の手が……

円でも転ばなかったのに……

「いひやいれす……」

結衣が布団に顔をつけながら言つ。

そして程なくして死体の手が結衣から離れる。

「もう布団はあきらめました!! 外でしましょー!! ちよつどいい草陰もありましたし!!」

「もういやだああああああ!!」

お化け屋敷。

お化けは怖くなかった。

結衣がすごく怖かった。

第70話 女の子たちと夏休み？ お化け屋敷 詩織 (前書き)

いつのまにか70話になってました……

8月15日～8月20日一体何話やってるのでしょいか……？

え？このままいくと夏に冬の話やってることにならないかって？

安心してください！！冬はあまりネタがありませんので短いです！！

しかも春（小説の中の）からやりたい話だつてあるし……

でも修学旅行の話があるし……

あー！！もう！！ネタがあるっていいなあ！！

第70話 女の子たちと夏休み？ お化け屋敷 詩織

「次は私だよ！！」

詩織が俺に飛びつきながら言ってくる。

「はいはい……」

もう3回も入ってる俺は正直疲れていた。

「最後が会長か……」

「上園君？どうかした？」

「いえ……会長は俺と一緒にいらなくてもいいんじゃないかなーなんて思ってますよ？」

「そこは空気を読んでちゃんと私とも入らなくちゃだめだよ？」

「わかってます」

それよりも詩織とお化け屋敷か……

泣いたりしないか心配だな……

まあ中3だし大丈夫かな？

ってかそろそろ勉強させなきゃ……

「お兄ちゃん？どつしたの？」

「あー……なんでもない」

「？」

「じゃあ行くか」

「うん！」

詩織が俺の手に自分の手を絡ませてくる。

「なんか恥ずかしい……」

「恥ずかしがってたら負けだよ！」

「いや、そう言われても……」

「なにイチャイチャしてるんですか！！とつとつ行ってください！！」

結衣にそう言われてしまったので俺たちはお化け屋敷に入る。

昔、1つの村があった。

山にかこまれた村であまり外とは関りをもっていなかった。

とくになにごともなくすごしていく村人。

ある時悲劇は起こる。

村人全員がいきなり死んでいた。

それからその村に調査が入る。

しかし調査1日目から調査チームとの連絡は途絶えた。

それからその村に入った人は絶対に帰ってこなかった。

「……………という設定らしい」

「なんかどこにでもありそうな設定だね」

「まあそうだな……………」

「それよりも……………うっ、暗いよ……………」

「転ばないように気をつけるよ?」

「そんなドジじゃないよ!」

「初めて会ったときはしっかりしてそうだったけどなんか今はなあ……………」

「む……………お兄ちゃん失礼すぎる」

そう言って詩織は俺の頬を引っ張る。

「いひやいつて!!悪かった!!」

「反省した?」

「はい!!それはもう!!」

「じゃあ許してあげる」

詩織は俺の頬から手を離す。

俺たちはお化け屋敷の中を進む。

すると鉈を持ったゾンビがいきなりでてきた。

「あ……ああ……」

「詩織?」

詩織がそこから動かない。

「やめて……やめて……」

「詩織!?!」

詩織の様子がおかしい。

俺は詩織の肩をつかんでゆする。

「だめ……逃げなくちゃ……」

詩織の目から涙がでてる。

「詩織!?!」

「っ!」

詩織は驚いたように俺を見る。

「お兄ちゃん……?」

「大丈夫か!?!」

「え?」

覚えてないのか?

「変なお兄ちゃん!早く行こっ」

詩織は俺の手を引く。

さっきの詩織の様子はあきらかに変だった。

しかも本人はそれをまったく覚えていない?

一体どうなってるんだ……?」

そうやって考えながら歩いているうちに一軒の民家にたどり着く。

「うわ……なんかいかに怪しい雰囲気だしてるなあ……」

詩織が民家を見ながら言う。

「ね？これどう思っっ？」

「どっつて言われても……とりあえず入らないと」

「そっだね」

俺は詩織に手を引かれながら民家に入っていく。

中には血まみれの死体があった。

それを見た瞬間詩織の足が止まる。

「詩織？」

「あ……ああ……いやあああああああああ……！」

「詩織！？」

また詩織の様子がおかしくなっていた。

「どっしたんだよ詩織……！」

「お父さん……お母さん……」

「詩織………？」

「よくも………よくもおおおお……！」

詩織が俺の首を絞めてくる。

「うぐっ……詩織……?」

「お父さんとお母さんを返せ!!返せええええええ!!」

これは本当に詩織か?と思わせるほどの殺気だった。

「詩織!!離してくれ!!」

俺は必死に叫ぶ。

「っ……あれ?お兄ちゃん?」

詩織が手にこめてた力を緩める。

「ごほっ!!はあ……はあ……」

「お兄ちゃん!?大丈夫!?!」

「し……詩織こそ……大丈夫……か……?」

「なんで私の心配なんてしてるの!?なんで私あんなこと……」

詩織が心配そうな顔をする。

「俺は大丈夫だから……」

俺は詩織の頭を撫でる。

「本当に……？」

「ああ。俺が嘘ついてるように見えるか？」

「うん」

「信用ないな……」

「本当に大丈夫なの？」

「大丈夫だから。早く出よう」

俺は詩織を心配させないように笑顔をつくる。

「うん……」

詩織はその後変な様子にはならなかった。

ただどあれは一体なんだっただろう……

詩織の過去となにか関係してるのか……？

第71話 女の子たちと夏休み？ お化け屋敷 会長（前書き）

石原都知事の条例が可決されてしまいましたね…
生きていけるか心配です。

まあそれはおいておいて前作だとまだ71話目だと夏休み前だった
のに気がつきました。

前作：どんなペースで最後進めていったんだよ

第71話 女の子たちと夏休み？ お化け屋敷 会長

「最後は私だね」

「もう入りたくないんですが……」

「怖いのか？」

会長がからかうように聞いてくる。

「いえ、内容がわかってつまらないです」

「えー」

「それに疲れるし……詩織のことだって……」

俺は詩織を試してみる。

「？」

詩織は首をかしげている。

「一緒に入らないと泣いちゃうぞ……」

「え……？」

「上園君はみんなとは一緒に入って私とは入ってくれないんだ……
ひっく……」

会長の目に涙が浮かぶ。

「ちよ！？会長！？」

「う……なによ……」

「行きます！！行きますから！！」

「最初からそう言っていたのよ」

会長は笑顔で言ってくる。

「嘘泣きかよ……」

「えー？なんのことー？」

そう言いながら会長は俺の手を引く。

「早く行こっ！」

会長が無邪気な笑顔で言ってくる。

そのとき普通にかわいいと思ってしまった。

会長がモテるのも納得だよな……。

昔、（以下略）なんてしませんよ？次数稼ぎのために毎回書きまますよ？

昔、1つの村があった。

山にかこまれた村であり外とは関りをもっていないかった。
とくになにごともなくすごしていく村人。

ある時悲劇は起こる。

村人全員がいきなり死んでいた。

それからその村に調査が入る。

しかし調査1日目から調査チームとの連絡は途絶えた。

それからその村に入った人は絶対に帰ってこなかった。

「……という設定らしいですよ？」

「……ってかこの文覚えてきたな……」

「おととい話した怖い話の方が怖いわね」

会長があきれたように言う。

「まあそんなこと言わないでください」

「上園君が言うなら納得してあげる」

俺たちは歩を進めていく。

「あ、もうすぐ鉈を持ったゾンビがですよ」

「あー！！なんでそうネタバレしちゃうかなー！！」

「ほら暇だし」

「暇だからってそんなことするなんて酷いよ！！私お化け屋敷初めてなんだから！」

「初めてなんですか！？？」

「そうよ！初めてよ！！初体験よ！！」

なんか卑猥……

「あー………すいません」

「ん 許す！」

会長は笑顔で俺を許してくれた。

それにしても会長がお化け屋敷初めてなのにはびっくりだな……

その後俺が言った通り鉈を持ったゾンビはでてきたわけです。

出てくるのがわかっていたので会長はそこまで驚いていなかった。

「でもこっぴ暗いとなにもなくても怖いね」

「転ばないでくださいよ？」

「転ばないように上園君の腕につかまってるっ」

会長が俺の腕に抱きつく。

「歩きづらいですよね？」

「いいのっ」

「会長もモテるんですから俺なんかにもそう……抱きついていいんですか？」

「私上園君のこと好きだから別にいいよ？」

「そう言われると照れるんですが……」

「ふふっ」

会長は笑顔になる。

「で？返事は？」

「え……？」

会長にそう言われて俺は戸惑う。

「告白の返事よ」

「それは……えっと……」

なんて答えればいいのだろう……

俺が迷っていると会長は笑い出した。

「か……会長？」

「私はヘタレで優柔不断な上園君に答えなんて期待してないわよ」

「からかったんですか……」

「だって反応がおもしろいんだもん！」

「うう……」

「でも……」

「？」

「私が好きって言ったのは嘘でもなんでもないよ。『亮くん』」

「あれ……？」

「さー！早く行きましょー！」

俺は会長に手をひかれてお化け屋敷を出た。

第72話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日（前書き）

OCEIでの補習が決定してしまいました…

まあそんなことは置いておいて！

最近衝動買いが激しいです…

ゲマズのポイントとかメイトのポイントがいつの間にか貯まっています…

あれ？これいつ買ったんだっけ？

なんで同じのが二つあるんだ？

とかが最近多いです…

第72話 女の子たちと夏休み？ 8月15日～8月20日

遊園地から帰り、夜になるとみんなは早くから寝てしまった（彰は帰ってきたときから眠っていたが……）。

まあこの5日間はしゃぎっぱなしだったから眠くなってあたりまえだろう。

まあこれであとは帰るだけだし。

長い夏休みももう終わりだろう。

あー……詩織に勉強させなきゃな……

詩織といえば今日のお化け屋敷で様子がおかしかったよな……

円も最後なにか言ってたようだし……

会長もなんか変だったし……

優里は怖がってただけか……

結衣は……あー……いつも通りだな。うん。

これは詩織の過去を聞きだすのが先か？

でも過去なんて聞いてどうするんだろう……

優里のは成り行きで聞いたし……

あのクソ親父が言うには事情があるらしいけど……

別に聞かなくなたって今の生活が続けばいいんじゃないか？

最初は同棲するなんて反対だったけど今じゃこれだもんな……

自分が恥ずかしいな。

まあ俺にできるのは結局みんなのことを見守るくらいかな。

そんなことを考えているうちに俺は眠りについてた。

「ん……」

俺が目を覚ますとそこは家だった。

「……………」

あれ？

俺は確か会長の別荘で寝たよな？

全部夢？

え？夢オチって最悪だよ？

夢オチのギャルゲーとかあったよな……

「あ、亮さん起きたんですか？」

「結衣！今何日だ！？」

「へ？今日ですか？8月21日ですけど？」

あれ？時間は進んでる？

いや、むしろ進みすぎてる？

俺の8月20日は？

「あれ？会長の別荘に行ったよな？」

「行きましたよ？」

「いつ帰ってきた……？」

「亮さん寝てましたから」

「あれ？俺は起きなかったの？」

「……ぼっ」

「なんでそこで頬を染めるの！？」

「亮さん激しかった……」

「え！？俺なにをしたの！？」

「まあ嘘は置いておいて」

「嘘かよ……」

嘘だっつてわかってたよ……？

「亮さんのこと起しても起きなかったからこのまま寝かしてあげようという事になってそのまま帰ってきたんです。そういえば彰くんも寝てましたね」

彰は気絶でもしてたのだろうか……

「疲れてたんですよきつと」

まあ、これで旅行も終わりかな。

本当に8月20日はすぐ終わったな。うん。

第73話 女の子たちと夏休み？ 8月22日（前書き）

いつのまにか前作の総アクセス数が100万を越えていました。
嬉しい限りですね！

こっちはまだ50万…

第73話 女の子たちと夏休み？ 8月22日

会長の別荘で夏休みも満喫したし、宿題も終わったし、あとの夏休みは久しぶりにギャルゲーでも……ってそれは無理だよな……

だって居候してる人がいるし……

「お兄ちゃん……休憩させてよ……」

「だめ」

「ケチ」

「受験勉強してなかった詩織がわるい」

「むう……」

今現在詩織は受験勉強しています。

まあ俺が無理やりやらせなかったらやらなかっただろうけど……

でもちゃんと宿題はやってあるんだよな。

そこは評価すべきだろう。

それに比べて……

「優里写させてよー！ー！ー」

「このとおりです……！」

宿題も終わってなく、写させてもらおうとしている……

「お前ら詩織の前で……プライドとかないのか……？」

「背に腹はかえられないんです……！」

「亮くんが写させてくれないから優里に頼んでるんだよ……！」

「あんたたちがちゃんとやってないのが悪いんですよ……！」

「……」「……」

ピンポン

「ん？」

家のインターホンが鳴ったので俺は立ち上がる。

そして外付けカメラの画面を見る。

「彰？」

む……こいつも宿題パターンだな……

杏奈に写させてもらえばいいのに。

『杏奈に勉強なんて教わったら保健の勉強になるだろ……？』

というセリフを思い出す。

ああ……だから俺のところに来たのか。

まあこいつには自分でやってもらおう。

ドンドンドン……

ドアが叩かれる。

「亮！！お前が家にいるのはわかってる……出てきなさい……」

「お前は借金取りか……」

とりあえずツッコミをいれる。

「やっぱりいたな……早くドアを開けろ……」

「どうせ宿題だろ……自分でやれ……」

「う……」

「お前が来るとめんどろなことになる……とつとと帰れ……」

「お前……それが親友に対する言葉か……」

「これが俺の優しさだ……」

「りよ……亮のバカヤロー……」

ふっ……優しい親友に感謝するんだな……

結衣たちが杏奈に写させてもらおうと杏奈のことを家に呼んでたからな……

俺はリビングに戻る。

「なんているんだよ!？」

「結衣ちゃんたちに入れてもらった!」

「お前は後悔することになるぞ……」

「へ?」

ピンポーン

とりあえず彰を捕縛する。

そして彰をひきずりながら玄関に行く。

「亮……なんで俺のことこんなことするんだよお……」

「まあまあ」

俺はドアを開く。

「杏奈、ちよっと早い誕生日プレゼントだ」

「ほんと!?!？」

「ああ」

俺は笑顔で彰を差し出す。

「亮!？」

「ありがとう!」

「好きに遊んでいいぞ」

「うん!」

杏奈は嬉々とした様子で俺とリビングへ向かう。

「救世主が来たよー!」

杏奈はそう言いながらリビングへ入った。

「「救世主様メシア!」!」

すぐに円と結衣は杏奈に泣きつく。

「ん、よしよし」

杏奈は2人を撫でる。

「そもそも宿題に作文なんてあるのがおかしいんですよ!」

結衣が文句を言う。

うちの学校では夏休みの作文がある。

なんで作文なんてあるのかが謎だけどそのおかげで国語の宿題がかなりすくなくなってる。

「ふっ……2人とも作文なら大丈夫だよ」

「「？」」

なにやってるかわからないけど暇だから詩織の様子を見ながら優里と話してるか。

「優里」

「ん？どうしたの？」

「暇だよ」

「じ……じゃあ私の膝で寝る……？」

ん？今なんと？

優里が正座をする。

「どっぞ」

こ……これは……

なんて魅力的な……

優里の肌ってきれいだなー

あ、身体が勝手に……

「「こ、これはー!」「」

いきなり円と結衣が大きな声を出す。

「なにになに?」

優里が行ってしまった。

膝枕……

俺も一応見に行ってみる。

詩織も勉強の手を止めて見に行く。

どうやらそれは作文のようだった。

『しょうらいのゆめ』

題名はそう書かれていた。

そして名前欄には……

『うえそのりょう』

「って俺の作文かよー!」

「このおもしろ……じゃなくてすばらしい作文をみんなにも見せてあげなくちゃ」

「あー、あれは笑わせてくれるよなー」

いままでなにもしゃべらなかつた彰がいきなりしゃべる。

「お前は黙ってる」

「亮が酷い……」

そして俺の作文の音読がはじまった。

第74話 女の子たちと夏休み？ 8月22日（前書き）

クリスマス用の物語を書いてみたのですがやっぱり複線をはらないとうまく書けませんでした……

なので掲載はしませんよ。

え？今まで複線なんてなかったじゃないかって？

そ……それは……えっと……

小中学生は今日から冬休みかな？

みんな冬休みを楽しもうね！話を逸らしますた

第74話 女の子たちと夏休み？ 8月22日

「しょうらいのゆめ うえぞのりょう」

杏奈が読み始める。

俺は止めようとしたんだよ……？

だけど取り押さえられちゃって……

「ぼくのしょうらいのゆめはけいさつかんになることです。

けいさつかんになってみんなをまもっていきたいとおもっています。ぼくがけいさつかんになりたいのはかつこいいからです。

いまでもヒーローになりたいとかいってるひともいますが、というよりもだちのあきらのことですが、もっとげんじつをみてほしいとおもっています」

「けいさつかんですか。亮さんかわいいですね」

「亮くんこのころから彰君に酷かったね」

「亮は小さいころから心が歪んでたのね」

「なんか円と優里酷くね!？」

「お兄ちゃん小さいころから酷い……」

「詩織まで!？」

「じゃあ次いこうか」

杏奈が他の作文をとりだす。

「将来の夢 上園亮

俺は将来『エコーオブデス残響死滅』になりたいです。

なぜなら残響死滅兄さんはすごいからです。

いきなり人の周りに死体とか出すんですよ？すごいじゃないですか。空間移動でもなく、時間超越でもなく、次元を操ったわけでもないや、そんな小さな能力ではないんですよ!?

そんなにすごい人になりたくないわけじゃないですか!?!」

「「「……」」」

みんな無言。

「ねえこれっていつの作文？」

「5年生……」

「小学5年生でこれは酷いですね……」

「亮くんのこと好きなのにこれは引くなあ……」

「お兄ちゃん……」

「1年のころ俺には現実を見てほしいって書いてあったのに……ぶっ……」

「彰つるせえ!!次だ次!!」

「将来の夢 上園亮

俺は将来ちゃんとした職に就いて両親に楽をさせてあげたいです。まだ具体的には決まっていませんがとりあえず今のうちから勉強しておこうと思います。

そして両親に迷惑かけないように国立の大学に行ったりしてここまですて育てくれたので俺は両親に恩返しがしたいと思っています。」

「中1の頃の作文か……」

俺は無意識につぶやいてしまう。

「じゃあこのときに亮のお父さんとお母さんは……」

「まあいいや次……はやめておこう次は飛ばしてその次にいこう」

「順番に読むよ」

杏奈は俺をからかうように言う。

いや……次の作文はまずいって……

「未来の俺 上園亮

とりあえず中学を卒業したら俺は自由に生きます。俺をとめられるやつはだれもいません。

もうフリーダムっていうの？そんな感じです。

とりあえず改名して『つえそのりょう餓慧園凌』みたいになります。かっこいいでしょ？

そもそも俺はいるだけで世界を平和にできちゃうから正直なにもしなくていいんですよ。

だから俺は未来では自由に生きます」

「うわぁ……中2病全開ですね……」

「だから読まれるの嫌だったんだよ……」

「これが最後だね。そういえば亮は高校の作文はどこにおいてあるの？」

杏奈が聞いてくる。

「あれ返ってきたら捨てちゃうからないぞ？」

「資源を無駄にするな！！」

「リサイクルされてるからいいんだよ！！」

「まあいいや。じゃあ読むよ？」

「将来の夢 上園亮

将来の夢なんて大それたことではありませんが俺は優しい親になりたいです。

みんながいつまでも笑顔でいられる家庭をつくっていつも家族のそばにいる、そんな人間になりたいです。

俺はそのためならなんだってしたいと思います」

「亮は優しいね」

優里が俺を見ながら言うてくる。

「な……なんだよいきなり……」

「もうみんな笑顔の家庭つくれるよ亮君」

「円の言う通りです亮さん」

「お兄ちゃんはいつもみんなと一緒にいてくれるもん！」

「み……みんな……」

「このまま感動のエンドを迎える……そんな雰囲気だったけど……」

「それでも宿題は自分でやれよ？」

「」「」「」

とりあえず今日中に円と結衣の宿題は終わらなかった。

第75話 女の子たちと夏休み？ 8月25日（前書き）

この話から1話1話の長さを長くしようと思います。

なのでちよつと更新が遅れるときもあるかもしれませんがよろしくおねがいます。

もうすぐ10万文字だ……

この総合得点ならピックアップされるかな……？

第75話 女の子たちと夏休み？ 8月25日

「亮〜！」

「亮くん！」

「亮さん！」

「お兄ちゃん！」

居候している4人が俺の腕を掴んで俺を揺らす。

「絶対ごちゃごちゃしてるから嫌だ」

「亮のケチ」

「行こうよ行こうよ〜！」

「家にいるなら亮さんのこと襲いますよ？」

「お兄ちゃん、受験生には息抜きも必要なんだよ〜！」

どんなに言われたって行きたくないものは行きたくない。

「大体、なんで祭りなんかに行かなくちゃいけないんだよ」

そう、居候している4人は今祭りに行きたいと言っているのだ。

「だって……」

「私たち……」

「お祭りとか……」

「初めてだし……」

リレーして話すな。

怖いから。

正直祭り自体は俺も好きだ。

でもあんなに人がごちゃごちゃしているところが嫌いなんだよな……

俺は頭のなかに天秤を用意する。

『初めて祭りに行って楽しむ優里たち』VS『ごちゃごちゃしている祭り』

よし、勝負開始だ。

優里たちのターン！

『浴衣』を発動！

亮の心が傾く！

ごちゃごちゃのターン！

『嘘だッ！！』を発動！

うちには浴衣がない！

亮の心が目を覚ます！

優里たちのターン！

奥義！『笑顔』を発動！

『まあこんなに嬉しそうな姿みれるならなんだってしてもいいかな

……（第18話より）』

自分のセリフが頭をよぎる！

亮の心が一気に傾いた！

ごちゃごちゃのターン！

もう何もできない！

『優里たち』WIN！

俺の回想終了。

「しょうがない……行くか……」

そう言った瞬間4人の顔は笑顔になる。

「でもうち浴衣なんてないぞ？」

「浴衣なんてなくなっちゃって亮くんと一緒に行ければいいんだよ」

円が上機嫌な様子で言う。

とりあえず俺たちは家を出る。

歩いているとだんだんお祭りの雰囲気になってくる。

「楽しみだね優里」

「そうね」

「いったいどんなものがあるんでしょうか」

「りんご飴食べてみたいな」

お祭りも行ったことないなんてこいつらがどんな生活をおくってきたか想像がつかない。

とりあえず俺ができることはこいつらの過去を忘れられるくらいの幸せを提供してあげること。

正直祭りに行くことは渋ってはいたが結局連れて行ってやるつもりだった。

こいつらは幸せにならなくちゃいけないから。

「亮！なにやってるの！」

いつの間にか俺と優里たちの距離は離れていた。

考え事をしていたせいで歩くペースが遅くなっていたらしい。

まああいつらのテンションが上がって歩くペースが速くなっていたのもあるだろうが……

俺は小走りで優里たちに追いつく。

そして祭りの会場にたどり着く。

4人の目は輝いていた。

比喻とかじゃなくてマジで輝いていた。

「なにか食べたいものでもあるか？それともなにかやるか？」

俺は4人に訊く。

「お兄ちゃん！あれ……！あれ……！」

詩織が必死に指差す。

「りんご飴か？」

詩織は必死に首を縦に振る。

「優里たちも食べるか？」

そう訊くと優里たちもうなずく。

俺たちはりんご飴を買いに行く。

「おっ！兄ちゃん両手に花どころか腕にも花か？」

りんご飴の屋台のおっちゃんがそう言ってくる。

「そうなんですよ。モテる男は大変なんですよ。だからちょっと
まけてくれたり……」

「兄ちゃん……モテる男は全世界の男の敵だ」

「くっ……」

俺は普通にりんご飴を4本買う。

「まいど〜」

俺は買ったりんご飴を優里たちに差し出す。

「あれ？亮は食べないの？」

「俺はいいよ」

そう言うと優里はりんご飴と俺の顔を交互に見る。

「一口食べる？」

優里の上目遣い。

「じゃ……じゃあもらおうかな」

優里はなぜか口をつけたほうを俺に向けてくる。

「は……早く食べなさいよ」

「お……おっ」

なんか恥ずかしかったが俺は一口もらっつ。

「あー！優里がー！！」

円がいきなり騒ぎ出す。

「抜け駆けですか！？」

「優里お姉ちゃん酷い！！」

円につられて結衣と詩織も騒ぎ出す。

「亮くん私のも食べて！！」

「亮さん！！」

「お兄ちゃん！！」

3人がりんご飴を俺に向ける。

「いや、優里に一口もらったからお前らで食べるよ」

「亮くんはそう言うと思ったよ……………」

「わかってたことですね……………」

「お兄ちゃんだもんね……………」

3人は肩を落とす。

「ほら、歩いてまわるつげ」

俺は肩を落としている3人を促す。

そしてくじ引き屋の前で結衣がなにかを思い出したように俺のほうを向く。

「亮さん、あの中にほしいものはありますか？」

結衣はくじ引き屋を指差す。

「特賞に温泉旅行なんてあるのかよ……」

しかもペアチケットじゃなくて家族用だし……

あの屋台すごいな……

ん？家族用っていったら4人じゃないか？

なのにあれは5人になってるよ？

誰かの作為を感じる……（まあ犯人は作者だろうが……）

「温泉旅行！それでいいですね！」

結衣はくじ引き屋に歩き出す。

俺たちはそれについていく。

「1回おねがいするですよ！」

「300円な！」

結衣はポケットを探る。

「亮さん……」

「あー……なんにも言っな」

俺は300円を店のおっちゃんに払う。

「それ！」

結衣は勢いよくくじを引く。

そしてくじを開く。

「特賞です！」

結衣は引いたくじを上にかかげる。

そこにはたしかに『特賞』と書かれていた。

「マジかよ……」

そもそも『特賞』なんて入ってないと思ってたのに……

はら店のおっちゃんも啞然としてるよ……

「姉ちゃんやるねー！ほら！持っていけ！」

『特賞』と書かれた封筒を受け取る結衣。

「すごいじゃない！結衣！」

「なんで当たったの!？」

「結衣お姉ちゃんかっこいい！」

「ふっふっふ……当たるのは必然だったのですよ！」

「「「え?」「」」

みんなが結衣の発言に驚く。

「今回私が作った超アイテム!『悪魔の運喰らい(ラックイーター) Ver.1.02』!!」

結衣はポケットから出したお守りをかかげて見せる。

「これは1人1人の運をちょこつとずつ集めることができる超アイテムなんですよ!いや〜お祭りにこんな人が居てくれて助かりました」

「すすぎる……」

「これ特許とれるぞ……」

「だけどちょこつとって具体的にどれくらいなんだ?」

もしもそのせいで怪我などするようだったら今すぐ破壊しなければ

……

「例えば卵を割ったときに黄身がふたつであるはずなのがひとつしかでなかった程度です」

「なんかわかりにくい……」

「このお祭りで100円拾うという運命だったけど拾えなくなったみたいな感じでわかります？」

あ、わかりやすい。

「……って本当にちよこつとだな……」

「人の運を取りすぎると死んじゃいますからね」

「そうなのか」

「まあこのアイテムは今回限りで封印です」

「どうして？」

「運ってというのはその人だけのものです。それを取るなんてだめです」

「じゃあ今回はどうして？」

「それは……亮さんをよろこばしたかったから……」

じゅっ……

なんだこの健気な態度……

これは効果抜群だぞ……

「亮さん？」

「ななななんでもないぞ!？」

「まあ今度みんなで行きましょうね」

その後普通に祭りをまわって家に帰った。

第75話 女の子たちと夏休み？ 8月25日（後書き）

うああああ……！

なんかおとなしいキャラがすごく書きたい……！！
もしも優里がおとなしくなったら……

優里「どうしたの……？？」

優里が首をかしげる。

亮「いや、優里がかわいいなって」

優里「ばか／＼」

亮「ちょ！叩くなよ！」

優里「照れ隠し／＼」

男「言ったら意味ないだろ……」

みたいな感じ！

前作の夏希みたいなキャラがすごくほしい！

夏希をだしたとしても前作の最後明るかったから書けないし……

でもこれ以上ハーレム要員を増やすと大変だし……

ゆきのフラグ回収もしっかりしないといけないし……

おとなしいキャラは次の作品にまわすか……

第76話 女の子たちと新学期？（前書き）

積み重ねたゲーム（erogも含む）と漫画とラノベがどうしても消費出来ません…

それどころか逆に増えてるような…？

とりあえず一番簡単な漫画からいくか…

第76話 女の子たちと新学期？

「夏休みって前半は長く感じるけど後半は短く感じるよな……」

俺は重い足取りで学校に向かう。

「私は無事に宿題も終わったし、よかったよかった」

「私もですう」

円と結衣の足取りは軽かった。

「ほら、亮もうちよつと早く歩きなさいよ」

俺は優里に手を引かれる。

優里の足取りはいつも通りだった。

そして学校にたどりつく。

教室に入り、クラスメイトに挨拶をしながら自分の席に着く。

「亮……俺の夏休みが終わってしまった……」

彰が俺の席にやってくる。

「2学期のイベントは……」

「文化祭に体育祭に修学旅行だな」

「それと全校生徒合同クイズ大会か」

「亮……そんな言い方してもテストはテストだろ……」

む……彰のためにちょっと隠したのに。

テストという言葉聞いた瞬間円と結衣がビクツツとした。

「ぶ……文化祭楽しみですね〜円」

「そ……そうだね結衣」

あ、話逸らした。

「まあ楽しみなのは確かよね」

3人は文化祭初めてだろうから楽しみなのは当たり前だろう。

担任が教室に入って来て朝のSHRが始まる。

そして始業式が終わり、各教室でHRが始まる。

そのHRでは文化祭の出し物について話し合われる。

うちの学校では基本金稼ぎが許可されている。

将来役にたつからだとかなんとか……

しかし金稼ぎが許可されているので文化祭実行委員のチェックは厳

しい。

このお化け屋敷は本当に値段に見合ったものなのかとか、飲食店は衛生面で本当に大丈夫なのかとか、そんな感じだ。

「じゃあなにか意見ある人」

文化祭の出し物といったら……

プロレス劇（とら ラー！）、ご奉仕喫茶（IS インフィット・ストラトス 他）、メイド喫茶（多数作品）、アニマル喫茶（Tolive）、三国志劇（アホ ズム）、お化け屋敷（魔法先生 他）、ゴスロリ喫茶（Mx 他）、文学作品劇（文学 女シリーズ）、中華喫茶（バカとテス と召喚獣）、劇（スールランブル他）etc…

etcって作者思い出すのめんどくさかったただけだろ……

基本喫茶店が多いよな

前作だって喫茶店だったし……

そして多分今回も……

「お前たち！！よく聞け！！」

彰が立ち上がる。

あいつどうしたんだ……？

「普通なら喫茶店とかそんなこと言い出すだろう！だが！それじゃあダメなんだ！喫茶店でも十分女の子たちはかわいくなくなるうー！しかしお前たちはそのかわいさで満足できるのか！？否！断じて否！！俺たちが目指すのはそんな人工的なかわいさじゃない！！」

「「「おお……！」「」」

男子達から感嘆の声が漏れる。

「つてことで演劇をやるう」

「「「なんでだよ！！」「」」

クラスメイト全員からのツッコミ。

なんてチームワークだ……

「ふつ……お前らわかってないな……演劇と言ってもただの演劇じゃあねえぜ？」

「「「なっ……」「」」

「アドリブで演劇だ！！みんなが知っているお話をアドリブでやってもらおう！！そうすればちょっとした仕草があら不思議！すごくかわいくなる！！」

ここまで力説されるとすごくいい案に聞こえてくるが……

みんなよく考えてほしい……

アドリブってことはグダグダになるに決まってるだろ……

しかも1回だけしか劇をやらないうつていうのなら1000歩譲っていいかもしれない。」

だが、演^ゃるのは1回じゃない……

そこを考えて否定を……

「いいじゃねえかそれ!!」

「佐々木君すごい!!」

「お前のこと見直したぜ!!」

ええ……

女子まで賛成してるよ……

もうこうなったら言いにくいな……

だれか言ってくれないかな……

「あ、でも佐々木君。演劇何回もやってたらみんなセリフが固定してこない?」

「そこはこのクラスの人をローテーションで回していく。このクラスは42人だから14人のチームを3つつくる。その3つが回ったら今度は14人を5、5、4にわけてまた14人のチームをつくる。」

そうすれば毎回違う演劇が楽しめるってことだー!」

「「「「すげー!」」」」

彰が……彰が輝いてる……

「まあとりあえずなにを演^やるかだよな」

彰が言う。

「無難にシンデレラとかでいいんじゃない?」

誰かが言う。

「シンデレラ! 私もやりたい!」

円が元気よく手を挙げる。

「まああまり難しいのにできないしな」

「でもそれだと型にはまった演技になっちゃわない? このアドリブ
活かせないよ」

決まったらすぐに意見を出し合っ……

うちのクラスってけっこうすごいよな……

「だったらシンデレラでいいんじゃない? 黒板にもそう書かれてるし」

『シ』の字がきたなくて『ツ』に見える。

「なんか難しそうだけどアドリブできそう!」

「それで決定だあああああああ!」

そしてうちのクラスはアドリブ演劇『シンデレラ』をやることになった……

第77話 女の子たちとツンデレラ？（前書き）

次話の都合で今回の話はちょっと短いです…

まあ長くする前と比べたらいつも通りなのですが…

とりあえず次話に期待してくださいね！

俺達の戦いはこれからだ！ これは打ち切りでの『次回作に期待してください』か…

第77話 女の子たちとシンデレラ？

文化祭準備期間。

この期間は基本授業はない。

俺たちのクラスは演劇の練習が必要ないためとりあえず役決めをしていた。

「そもそもシンデレラって役誰がいるんだ？」

クラスの男子の一言で静かになる。

「と……とりあえず王子は必要だろ」

シンデレラ発案者の彰が口を開く。

「その前にシンデレラも必要ですう」

彰に続いて結衣が口を開く。

「じゃあ魔女も必要だよね？」

円が口を開く。

「本物の馬を用意するわけにはいかないから馬も必要じゃない？」

優里も口を開いた。

そしてクラスメイトはその流れにのってどんどん案を出していく。

「でもそんなに人数いないよな」

俺の一言でまた静かになる。

「よし……よしこれから絞ろっ……」

彰がなんとか口を開いた。

ってことで役は……

ツンデレラ、王子、馬（1人）、魔女、ツンデレラの姉妹、王子の執事（馬役からだす）

となった。

まあこれならなんとか回せるだろう。

「よし！まずツンデレラ役やりたい人！！」

彰が前にでてクラスメイトに訊く。

「ツンデレラってツンデレなんでしょ？ちょっと恥ずかしいかな……」

クラスメイトの女子が恥ずかしがってる。

「優里やれば？」

「へっ?」

「ほら、優里ってちょっとシンデレラ入ってるじゃない」

「い、いやよ!」

クラスメイトの女子が優里にシンデレラ役を勧めているらしい。

「じゃあ私やるよ!」

円が立候補する。

「円、身長的に演劇というよりお遊戯か……いたっ!」

俺はセリフの途中で円に消しゴムを投げられた。

「なんか言ってたかな亮くん?」

「い……いえ……なにも……」

「円がやるなら私もやるですっ」

続いて結衣も立候補する。

「ほら、優里2人とも立候補してるよ?」

「うう……」

「優里」

「わ……わかつたわよ！やるわよ！」

ってことでツンデレラ役が決まった。

「次王子役か……亮やらないか？」

「彰。俺はお前に興味なんてないぞ？」

「そのやらないか？じゃねえよ！！王子役をやらないか？って意味だよー！！」

「えー。俺裏方やるうとしてるし……」

「そっか……王子役やりたいやついる？」

彰がそう言うと男子からいつせいに手が挙がった。

「こ……これは一体……」

彰が俺のそばにやってくる。

「いいのか亮？優里ちゃんたちがとられちゃっぞぞ？」

「それはないだろ」

「いや、わからないぜ？王子とツンデレラと一緒に練習 それから仲良く そして……」

彰のその言葉を聞いて俺も手を挙げる。

「ツンデレラ役に3人選んでもらうか」

そして俺は王子役になった。

彰も王子役だった。

あと1人は名前ももらえないクラスメイトだった。

まあそんな感じで適当に配役は決まっていた。

「あ、亮」

彰が俺の席に来る。

「さっき王子役と練習って言ったけどこの劇練習なんてないぞ?」

彰にだまされた……

この時点で文化祭まで後3日。

第78話 女の子の辛い過去？ ～円編～（前書き）

明けましておめでとうございます。
今年もよろしくおねがいます。

今年は年賀状全部手書きで描きました……
大変だった……
でもうさぎの擬人……ごほんごほん！うさぎを描くのは楽しかった
ですね～

とりあえず今年の目標（この小説での）としては2日1話更新の復活ですかね。
応援よろしくおねがいます！

第78話 女の子の辛い過去？ ～円編～

文化祭まであと2日。

俺たちはとりあえずセットの準備をしていた。

衣装作りは演劇部の衣装担当している人が作ってくれてくれることになった。

放課後になっても準備は続いた。

俺は一応自分の仕事が終わったので他のところを手伝おうと思った。

しかしここで俺は思い出す。

あれ？今日ってAmazonで注文した商品が届くんじゃなかったっけ？

「俺、先に帰るわ」

クラスメイトにそう伝え俺は学校を後にした。

家に帰りAmazonから届いた商品を部屋に持っていく。

Amazonって佐川急便になっちゃったんだよな……

俺はそんなことを思いながらリビングに戻りテレビを点ける。

あれ？そういえば優里たちが俺の家に居候してから一緒に帰らない

のって初めてじゃないか？

「ただいま」

玄関から詩織の音がする。

「おかえり詩織」

「あれ？お兄ちゃん早いね？」

「ああ。早く作業が終わったから早く帰ってきたんだ」

「優里お姉ちゃんたちは？」

「まだみたいだ」

「そうなんだ」

詩織はすぐに俺の隣に座る。

「着替えないと制服汚れるぞ？」

「もうちょっとだけ」

そう言っつて詩織は俺に身体を預ける。

「で？勉強は進んでるのか？」

「それ今言っつことかな」

「詩織が心配なだけだよ」

「心配してくれてるの?」

「もちろん。で?勉強は?」

「ふっふっふ……お兄ちゃん聞いて驚きなさい。橘学園には余裕で入れそうだよ。でも……」

「ん?俺たちと同じ高校じゃ嫌なのか?」

「私立なんかに行ってもいいのかな……って……」

「別に大丈夫だろ。遠慮しちゃだめだぞ?」

「うん」

「「ただいま(ですう)」「」

優里と結衣が帰ってくる。

「あれ!?亮さん帰ってきてたんですか!?」

「あれ?円は?」

「私たち買い物があったから先に帰ったのよ……亮がまだ学校にいたと思ったから……」

「ん?円だって1人で帰ってこれるだろ?」

「それは……そうです……でも……」

結衣の歯切れが悪い。

「とりあえず亮！今すぐ学校に戻って！！」

優里の真剣さに圧倒されてしまい俺は自転車を使って学校に戻る。

教室にはまだ何人が作業していたが円の姿はなかった。

「円しらないか!？」

「さっき帰ったよ?」

俺はいつも学校の登下校につきかう道を通ってきたからすれ違ったと
いうことはないはずだった。

俺は携帯で円に電話をかける。

つながらない……

俺は不安になってきた。

優里たちはなにか知っている?

1人にしちやいけない……

優里たちが知っているということとはもしかしたら円の過去と関係し
ているのかもしれない……

俺はとりあえず円を探すことにした。

クラスメイトにメールをして、駅前を探し、コンビニを見て、近所を自転車で走った。

自転車で走っていると公園のベンチに座っている円を見つけた。

「円」

俺の声に円は反応しない。

俺は円のもとへ向かう。

円はゆっくりと顔をあげる。

円の目は絶望したような目だった。

「円、帰ろう」

俺は円に手を伸ばす。

円はゆっくりと俺の手をとった。

俺の手を握った瞬間円の目に生気が戻る。

「亮……くん……?」

「ん?」

「あれ?亮くん……なんでここにいるの?」

「円を探してたんだよ」

「だって亮くんは私を捨てたんじゃないの？」

「捨てる？なに言ってるんだよ。俺はそんなことしないよ」

「だって……！だって……！一人になったらもう会えない……！そうだったもん……！」

円の目から涙が出る。

俺は円の横に座る。

「私はね……ここに来る前……」

円はゆっくりと口を開いた。

第79話 女の子の辛い過去？ ～ 円編 ～ (前書き)

この小説のあらすじ？説明？を変えてみました。
これで物語伝わりますかね？

第79話 女の子の辛い過去？ ～円編～

小学3年生の夏休み、私は親に捨てられた。

捨てられた日、私は公園で遊んでいた。

その日はいつもけんばかりしてるお父さんとお母さんが一緒にいた。

いつも1人でおとなしくしていた私にとって両親と一緒に公園で遊べるということは嬉しいことだった。

夕方になり、気がついたら2人ともいなかった……

家に帰ってみたけど誰もいなかった。

私は走って町中を探した。

何度も何度も「お父さん、お母さん」と叫んだ。

でも小学3年生の私には行ける範囲は限られてた。

「仕事かな？」と何度も思った。

でも現実はそんな甘くなかった。

3日経っても家には誰も帰ってこなかった。

食べ物冷蔵庫にあるものを食べてしのいだ。

でもその食べ物も無くなってしまった。

まず私は貯金箱に入っているお金を出した。

そのお金でなんとか2日はもった。

その2日間で家の中に他のお金はないか探したがなにもなかった。

それから3日、私は水だけでしのいだ。

次の試練がやってきた電気代と水道代の滞納による配給のストップ

……

これで水もなくなってしまった。

だから私は近所の公園の水を飲んだ。

飲んでいる時、私は一点に目がとまった。

テレビで草を食べている人がいた……

本当に食べられるか心配だったけどお腹がすいていた私は草を食べた……

次の日私はお腹を壊した。

当たり前なんだけどね……

それでもお腹がすいてたから……

「お前昨日ここで草食ってただろ？」

「え！？マジかよ」

「汚ねー」

公園でクラスの男子に馬鹿にされたこともあった。

石だって投げられた。

私はもうなにもかもが嫌だった。

「お嬢ちゃんどうしたの？」

優しいそうなおじさんが声をかけてくれた。

「お父さんと……お母さんが……いなくなったの……」

「それは大変だねえ。よし、おじさんについておいで」

私は疑わずについていった。

でもついていくにつれてだんだん怪しくなってきた。

「どこに行くの？」

「いいところだよ」

おじさんは笑顔でそう言った。

だんだん怖くなった私は走って逃げ出した。

「あ!!おい!!」

おじさんは当然のように追ってきた。

私は身体が小さいからその特性をいかして狭いところを逃げ回った。

そして私は逃げ切った。

それでも私には行く場所が限られているからまた公園に戻ってきた。

公園におじさんは現れなくなった。

きっと警察に通報されるのがこわかったのだろう。

私にそんな体力ないのに……

公園のベンチで1人で座っている時間が長くなった。

家にいたら寂しくなるから……

だったらまだ誰かがいる公園にいたほうがマシだった。

私は日に日に弱っていった。

私はもともと身体が小さいから少し痩せてても誰も気がつかなかったんだろうね……

警察も来なかった。

公園ベンチに座っているのがやっとだった。

「いつそこで倒れたほうが楽なのではないか?と考えたこともあった。」

その時私の目に生氣は宿ってなかった。

でも手を差し伸べてくれた人がいた。

「帰ろう」

その人は温かい笑顔でそう言った。

私は無意識に差し出された手を握っていた。

前のおじさんみたいに怖い人かもしれないのに手を握っていた。

「私おにぎりつくってきたのみんなで食べましょう?」

手を差し伸べてくれた人の隣にいたおばさ……じゃなくてお姉さんがそう言った。

すごくおいしかった。

食べてたら涙がでてきた。

「そんなに焦らなくてもいいよ」

そう言いながらおじさんは私のほっぺについたご飯を取ってくれた。
食べ終わるとおじさんは携帯を取り出した。

そしてどこかに電話をかけた。

「今、君のお父さんとお母さんに電話がつながってるけど話すかい？」

おじさんはそう言った。

「それとも一緒に帰るかい？」

「帰る？」

「とっても温かい場所だ。でも私はまだ一緒に暮らせない。だからもうちょっとだけ待っていてくれるかな？その間は優しい人がめんどろ見てくれるから」

私は無言でうなずいた。

お父さんとお母さんとは話してもなにもない。

だったら私はこの人についていこうと思った。

それから私は施設に預けられた。

でも私が中学1年生の頃本当におじさんは迎えにきてくれた。

「それから何年か経って私はここに来たの」

「優里よりも先に親父たちに会ってたのか」

「私が一番最初だったんだよ」

「優里にも同じようなこと聞いたけど………円、俺は円に温かい場所を提供できてるか？」

「もちろん！」

円は笑った。

「そっか。なら帰ろう」

俺は立って円に手を差し伸べる。

「うん！」

円は俺の手をとって一緒に歩きだした。

第79話 女の子の辛い過去？ ～円編～（後書き）

優里編よりも1話少ないですが文字数的には一緒だと思います。
多分……

第80話 女の子たちと文化祭？ ～ツンデレラ円～（前書き）

そつえば前にリトバスアニメ化の噂を聞いてとある人（会ったことないので一応こつう明記で…）がこつ語つてました。

鈴 リフレインでおくつて人いるけどさ…ゲームやつた？

まずハルカ は家族などのつらい現状を切り抜ける、転じて現状維持を打破する強さ

クド は離れていても信じればつながつていくつこと、転じて願えば叶つ心、諦めない心

美魚 は「俺たちを信じるな、自分を信じて進め」転じて信じる心
来ヶ谷 はさまざま異常現象によりこつが虚構の世界であるつことの示唆

そして小毬 は「あなたの目がもつ少し、ほんのちよつとだけみえるつようになりますよつに」転じてこつの全てである

これだけ大事なこつをカットするのは無理がある故、小毬がなんだかんだ言つて一番のキーパーソンなのでせめて小毬 は入れるよ…

リトバスをやつたこつある人は感動するはず…

第80話 女の子たちと文化祭？ 〜ツンデレラ円〜

円の過去も聞いた。

円の過去も酷いものだった。

親父たちはなにを思って優里たちをたすけたのだろう……

世界には優里たちみたいな生活をしている人がたくさんいるはずだ。

日本に絞ったとしても数え切れなくらい。

助けたのは優里たちだけなのだろうか？

他にも助けた人がいたんじゃないだろうか？

親父たちはどこにそんな力を持っていたのだろう。

普通の人にはできないことを簡単にやっつけてのけている。

親父たちは何者だったのだろう……

俺はまったく親父たちのことを知らなかったと痛感させられる。

とりあえず結衣と詩織の過去を聞いてから考えればいいかな……

まずは……

「上園君王子の格好似合うよー！」

「お姫様も似合いそうな感じもするよ」

「文化祭終わったら着せてみよう！」

王子の格好をした俺になぜか集まる女子をなんとかしなければ……

え？これで男子は嫉妬しないのかって？

男子は優里たちのツンデレラの衣装で興奮してるから大丈夫なんだよ。

文化祭当日です。

準備期間なんて読んでもつまらないでしょ？

だから飛ばしてみました。

って誰に説明してるんだ……

教室には簡易ステージが用意されている。

「ほら、たしか亮が一番最初の組だろ？行ってこいよ」

彰が笑顔で言ってくる。

なんかバカにされてる気がする……

「俺の迫真の演技にビビるなよ？」

劇が始まる。

最初のツンデレラ役は円だった。

「私たちは舞踏会に行くから掃除しておきなさいよねツンデレラ」

「え？私掃除できないよ？」

うわ……初っ端から……

観客も啞然としてるよ……

「い……いいからしておきなさい!!」

そう言ってツンデレラの姉妹役の人が顔を赤くさせてステージから出て行く。

「どうしようかな……掃除かぁ……箒でそのへん掃いておけばいいかな？それよりも王子様に会いたいなあ……」

円が目を輝かせながら言う。

「その願い叶えてみせましょう」

魔女登場。

「ほんとー!？」

円が小さい女の子みたいにはしゃぐ。

「本当ですとも。私は大魔法使いですよ？『必要悪ネセサの教会リウス』のステルにも勝てます」

これがアドリブの力か……

「私舞踏会に行きたいの！」

あ、スルー。

「いいでしょう。それ！」

魔女が掛け声とともに杖を振る。

どうやってドレスに着替えるんだ？

あ、なんかアメリカ映画とかに出てきそうなカーテンがついてて周りを囲むやつ。

なんだっけ名前……知ってる人いるー？

誰も知らないか……

円柱状になってて真ん中が空洞で側面がカーテンのやつだよ。

知ってる人がいたら教えてネ。

そこで生着替えが始まった。

しかもライトアップして影だけ見えてるよ……

「「「おおおおおおお？」「」」

男子たちのテンションが一瞬上がったかと思っただけで、すぐに冷めた。

まあ円の裸だもんな……

スコーン！

ステージから靴が飛んできて頭に直撃。

痛い……

「わあ！素敵なドレス」

「「「おおおおおおおおおおお！」「」」

円のドレス姿に男子たちが興奮する。

「これで舞踏会に行ける！」

「馬も用意しましたよ。さあこの鞭で叩いてあげてください」

「はあはあ」

馬役大丈夫か……？

クラスメイトなだけに心配だ。

「ちょっと気持ち悪いから歩いていくよ」

「あ、あと魔法にはタイムリミットがあります。気をつけてくださいね」

「大魔法使いなのにそんなのつくの？」

「も……物事に永遠などないのですよ」

「そうなんだ！」

そう言っつて円はステージから消える。

っつてか円全然ツンツンしてないし……

これじゃあただのシンデレラだ……

そして俺の出番。

ステージにいる円に声をかける。

「そこのかわいいお嬢ちゃん。飴あげるからおじさんについてこない？」

「……不審者か……！」

しまった……初っ端からふざけてしまった……

観客がツッコんでくれなかったらどうなってたんだ……

「わあ！王子様！好き好き好き好き」

円が抱きついてくる。

「あ、声かける人間達えました」

俺は円をどかさうとする。

「なんで？なんで私じゃだめなの？王子様が他の女に声をかけるくらいなら王子様を殺して私も死ぬ！！」

「ヤンデレかよ！？」

「いいえ！私はツンデレラ！！」

「もうグダグダじゃねえか！！」

「さあ！王子様！私と踊って！」

「しょうがないですね」

俺はクラスの女子に叩き込まれたから踊りは大丈夫だった。

ちよつと身長差がすごいかな？

リンゴーン！

城の鐘の音がする。

それでも円は踊り続ける。

「ツンデレラ。時間は大丈夫ですか？」

「王子様といられるのならいつまでだって大丈夫です」

くそ……せつかく俺が教えてやったのに……

「あ、私ちょっと時間がまずいので退席させていただきます」

仕方ないので俺が消えることにする。

しかし……

「どうして？どうして王子様はそんなこと言うのかな？かな？」

やばい……怖くて動けない……

「ツンデレラ。結婚しましょう」

「嬉しいー！」

そこで無理やり劇を終わらせる。

もうやだ……

第81話 女の子たちと文化祭？ ～ツンデレラ結衣～（前書き）

学生のみなさんは今日から学校ですかね？

自分もそうです……

しかも始業式終わったらすぐ授業が始まります……

今日も6限まであります……

嫌ですね……

冬休みの大半がバイトだったな……

あー…アナザーセンチュリーズエピソードポータブル買おうか迷う
なー

第81話 女の子たちと文化祭？ ～ツンデレラ結衣～

本日2回目の劇の相手は結衣だった。

劇が始まる。

なんとなく俺と円がやったときよりも客が入っている気がする。

きつと次の人が頑張ってくれたのだろう。

それともあの着替えが客を呼んだか……

「おーっほっほー！ 私たちは舞踏会に行くてくるわー！ 私たちが帰ってくるまでに掃除をやっておきなさいー！ 埃1つ残すんじゃないよー！ わかったかい！？」

「わかりました……」

お？ 結衣が真面目だぞ？

ツンデレラの姉妹役の人がステージから出る。

「なんでこんな……」

結衣がうつむいている。

「願いはないかね。今ならセール期間中だから安くしておくよ」

魔女が入ってきた。

ってかなんだよこのセリフ……

「あんだ願い事をいってみんさい。私が叶えてみせるよ」

「本当ですか！？なら王子様とベットで【自主規制】」

「……。うーん……。そ……。その願いは難しいかなあ……。……。！ほら！魔法で人の心とか操るの禁止されてるし！！」

「じゃあ舞踏会に行ってみたいです」

「それくらいならお安い御用さ！」

生着替え中。

男子たち大興奮。

そりゃ結衣はすごいもんな……

着替え終了。

結衣は胸元がけっこう開いているドレスを着ている。

製作者曰く『使えるものは使っておく』だそうだ。

「さあ！行っておいで！」

「ありがとうございます！」

そして舞踏会のシーン。

「お嬢さん一緒に踊りませんか？」

俺は結衣に声をかける。

「ベットでなら大よろこびです」

「ここで踊りましょう」

「王子様って野外がいいんですか？」

結衣が頬を染めながら言う。

「違うからね！？なんで頬染めてるの!？」

「まあ……踊ってやらないこともないです」

俺は結衣と一応踊る。

そして鐘が鳴る。

「そういえば魔女さんタイムリミットのこと話してませんでしたね」

魔女役の娘がしまったという顔になる。

「お嬢さん私そろそろ……」

すかさず俺がフォローする。

「あ！待ってください！私のガラスの靴を持っておいってください。必ず道標になりますから！」

そう言っつて結衣は消える。

「じいやー！あの美しいお嬢さんを私の妻にするー！！着いて来いー！！」

そして俺はツンデレラ探しを始める。

「このガラスの靴のサイズが合った人が王子の妻になれます」

じいや役の人が説明する。

まつツンデレラの姉妹役の人たちが足を入れる。

「んー？あれ！？入らない！？私の足はそんなに太くないからね！？」

誰に言っつているのだろう……

「んー。大きすぎるかな？」

次の人は最初に履いた人を見ながらそう言っつ。

っつてか足の太さ関係ないんじゃ……

そして結衣の番。

「おお！あなたがツンデレラでしたか！」

「王子様！」

結衣が俺にキスをする。

「「「ヒュー—————!!」」」

「結衣!?!なにを!?!」

「亮さん。いいじゃないですか」

「よくねえよ!?!」

「まあまあ」

そして劇は終わる。

シンデレラって名前なのにまったくシンデレレじゃないな……

まあ優里ならしっかりとシンデレレ役を演じきってくれるだろう。

第82話 女の子たちと文化祭？ ～シンデレラ優里～

ついに……ついに最強のシンデレラ優里の登場だ……

作者もこれを書きたいがためにシンデレラなんかにしたんだ……

ここで頑張ってもらわないと。

そして劇は始まる。

「シンデレラ！！しっかりと掃除をやっれ！……やっておきなさい
！！！」

あ、噛んだ。

まあ練習してないから当たり前だが……

今までがすごすぎた。

このクラスのノリのよさとかがよくわかる。

「な、なんで私が掃除しておかなきゃいけないのよ！！！」

お？一瞬頭に釘宮さんボイスが……

あれ？釘宮さん知ってるよね？有名だよな？シ ナ（灼眼の ヤナ）
とかア サ（魔法少女リリカル のは）とかルズ（ゼロの使 魔）
とかナ（ハヤ のごとく！）とか大（と ドラ！）とかの釘宮
さんですよ？

「いいからやっておきなさい！」

ツンデレラの姉妹役が出て行く。

「もう！なんでわたしがやるのよー！」

優里はぶつぶつ言いながら掃除をする。

「舞踏会か……はっ！違う！別に行きたいなんて思っていない！」

「行きたいんじゃない？」

魔女登場。

「べ、別に行きたくなんか……！」

「顔にそう書いてあるぞ？」

「うっ……」

「大丈夫。心配なさんな。私の魔法さえあれば王子様もメロメロ。ムフフな展開になれるぞ？」

「いや、私舞踏会に行きたいんだけど……」

「お？素直になりましたな？」

魔女がにやにやする。

「うう……」

優里の顔が赤くなる。

やばい……かわいいぞ……

これが彰の言っていた力が……

「ではお着替えタイム！」

「ま、またやるの！？もう嫌よ！！」

「ほらほらほら〜」

魔女が無理やり……

「うう……もうお嫁に行けない……」

優里は涙目だ。

「ではお城に行くための馬車を用意しましょう」

スモークがたかれる。

そして出てきたのは。

「はあはあ」

またお前か！！

「いや、遠慮しておくわ」

「そうですか……魔法のタイムリミットをお忘れなく」

「わかった」

そして場面は変わってお城に。

さて、俺も出るか。

「お嬢さん一緒に踊りませんか？」

「なっ！なんであんななんと踊らなきゃいけないのよ！！」

「そうですか……」

まさか断られるとは思わなかった……

俺は肩を落とす。

「ま……まあ？どうしてもって言うなら特別に踊ってあげるわよ？」

「本当ですか？」

優里は無言で手を出してくる。

俺はその手を握ろうと……

「ちょっと待った！」

いきなり客席から声が……

「王子様と踊るのは私よ!!」

そしてステージに上ってくる。

「ゆき!？」

「さあ!王子様!私と踊って!」

「なんでお前がここにいるんだよ!」

「高校見学よ!!いいから踊って!」

「王子!私と踊るんじゃないの?」

優里が上目遣いで見てくる。

観客はどっちを選ぶかわくわくしながら見ている。

「よし……そんなに踊りたいなら2人で仲良く踊りなさい」

俺は2人の手をとってその手をつなぐ。

俺はステージから降りる。

「な、なんで私がこんなことを……」

「亮……帰ったら覚えておきなさいよ……」

2人はちゃんと最後まで踊りきった。

「で？なんでゆきがここにいるんだよ」

「だから高校見学だって」

「ゆきの家からだところ遠いだろ」

「でもここに来たかったの。亮君がいるから」

「ついに現れましたね……作者がつくって一番失敗だったと思ってるキャラNo.1!」

「そうなのか!？」

俺はいきなり現れた結衣のセリフに驚く。

「そのことについては否定できない……!」

「お兄ちゃん」

「詩織も来てたのか!？」

いきなり詩織登場。

「だって……この場所教えないとお兄ちゃんの命はないってゆきちゃんが……」

「ゆき!!詩織になんてこと言ってるんだ!」

「ごめんなさい……」

あれ？素直……

「だって来たかったんだもん……」

「あー……強く言ったりしてごめん……」

「一緒にまわってくれ……？」

「そのくらいならべつに……」

「まあ作者は文化祭のことはこれ以上書く気ないですけどね」

結衣の一言に場がたまる。

みんなと一緒に文化祭をまわったよ！

クオリティが高いところが多かった！

この高校って実はすごいのではないだろうか……？

第83話 女の子たちと温泉旅行？（前書き）

投票結果です。

『猫』の方が票が多かったので『猫』にさせていただきます。

投票して下さった方々ありがとうございました。

まさか1票差になるとは……

両方はだめなのか？という意見がありましたが、両方だどちらも面白くなくなってしまふ可能性があるので両方同時掲載はしません。でも『死神』のほうもいつかは掲載します。

せっかく思いついたのを捨てるわけにはいきませんから……

なので『死神』に投票してくれた方々も待っていてくれると助かります。

とりあえずこの小説が終わったら『猫』のほうを掲載していきますのでよろしくおねがいします。

さて……削除方法がわからないぞ……

誰か教えてくれるとたすかります。

自分が投稿しているサイトは『小説を読もう』です。

まあ話の内容を編集すればいいんですが……

第83話 女の子たちと温泉旅行？

みなさんは覚えているだろうか？

つてか覚えてますよね。

夏祭りの日、結衣が『悪魔の運喰らい』を使って手に入れた温泉旅行。

俺たちは9月にある3連休をつかって群馬県の草津温泉に来ています。

「硫黄の匂いが……」

「亮くん！亮くん！温泉まんじゅう食べようよ！」

「いや！ここは温泉卵でしょう！」

「お姉ちゃんたちずるい！」

居候している方々がすっごくはしゃいでいます。

俺はとなりにいる優里を見てみる。

行動にはうつさないがうつずうずしているのはわかる。

まあせっかくの温泉旅行だし、楽しまないとな。

俺は優里の手をひき、円たちのもとへと向かう。

「1泊2日なんだからもう少し落ち着いてもいいだろ？」

「……1泊2日しかないんだよ（！）ですよ（！）？」「」「」

みんなが声をそろえて言ってきた。

「でもまず宿に行こうぜ？な？」

俺はみんなに言う。

「たしかに荷物重いしね」

「亮くんが言うなら……」

「宿にもいろいろありますしね」

「お兄ちゃんについてく！」

宿に行く方向で話はまとまった。

しかし問題が1つある。

「宿に行ったら絶対に宿の人は変な目で見てくるはずだ。どうにかできる案ある人いるか？」

結衣がすぐに手を挙げる。

「はい、結衣」

「亮さんがこう言えば完璧です。『こいつら全員俺の愛人だから』」

「いや、だめだろ!?!」

「けっこう自信あったんですが……けっこう、キリッみたいな感じで」

「俺が嫌だから!?!」

今度は詩織が手を挙げる。

「はい、詩織」

「ちょうど5人いるんだし、『○○戦隊○○ンジャー』みたいな感じに……」

「詩織って基本馬鹿だよな」

「ひどいよ!?!」

「他」

俺は詩織を無視して意見を聞く。

「普通に家族でいいんじゃないの?」

優里が言う。

「こんな歳近い家族か?」

「じゃあ!私が妻で亮くんが夫!そうすればいいんだよ!」

円がすこし興奮気味に言う。

「いや、円はむしろ子ど……」

「なにかな？」

「いえ……」

なにも言えない……

「まあ家族でいっか。どうせ家族みたいなもんだしな」

俺がそう言つとみんな笑顔になる。

旅館に到着。

「ようこそいらっしやいました」

受付でチェックインを済ます。

とくになにも言われなかった……

考えるだけ無駄だったな……

「さっそく温泉に行くです！」

結衣がさっそく立ち上がる。

「私浴衣着たいんだけど」

「私も着てみたい！」

「お姉ちゃんたちが着るなら私も！」

優里、円、詩織が言う。

「確かに私も着てみたいですね……じゃあ着ましょう！」

そう言うと結衣はいきなり脱ぎ始める。

「ちょ！？結衣！？」

「亮さん。私の裸見たくないんですか？」

「そうじゃなくて！恥じらいをもて！恥じらいを！」

「恥じらい？そんなの私の辞書にはありません」

「いや、持とうよ！」

俺がそう言ってる間に優里たちも脱ぎ始める。

「亮には「うう」のを見せなきゃだめだからね」

「優里！？」

「うう……結べない……」

円が困っている。

「やってやるから」

俺は円の帯を結んであげる。

「お兄ちゃん私も！」

今度は詩織。

「はいはい」

詩織のも結ぶ。

「じつじつとじろが亮さんのいとこです」

「そりゃどうも」

そして俺たちは温泉へと向かう。

作者は温泉村なんて行ったことないので旅館にある温泉に入ろうとする。

「右が『男』。左が『女』」

結衣がつぶやく。

「そして奥が家族用の『混浴』」

「は?。」

結衣のセリフに俺は啞然とする。

たしかにそこには混浴があった。

まあ小説ですもんね……

「じゃあ俺は『男湯』に入ってくるから。出たら好きにしてい
ぞ」

俺はすぐに男湯に逃げ込もうとする。

「亮。私たちって家族よね？」

「お兄ちゃん！1人じゃ寂しいな！」

「お父さん！」

「あなた……」

「待て！！最後の円と結衣おかしいだろ！？ってかなんでこんなと
きだけ円はそうなるんだよ！？」

そして……

「逃げないように帯で結んじやいましたけどどうしましょう……」

「ちよつとやりすぎたかしら？」

「とりあえず亮くんを脱がしたらいいんじゃないかな？」

「ええ！？脱がすの！？」

結衣、優里、円、詩織の順番でしゃべった。

そんなことはどうでもいい。

下着姿できみたちは恥ずかしくないの？

なんでこの娘たちは恥じらいをもってないの？

これって俺のせい？

俺が悪いの？

それとも恥じらいをもってるのって2次元だけなの？

俺、悲しい……

「まあ、このままだと入れないのでやっぱり脱がしましょう」

「え？結衣さん？」

俺は後ずさる。

「うう……純情が……」

「亮、隠してるなんて本当に男？」

「普通隠すからね！？」

「私たちはこんなに解放的なのに！」

「まあ円のは別に……」

「ん？」

「セクシーすぎるので隠してください……」

「うん」

円は笑顔になってタオルを巻いてくれる。

「お兄ちゃん背中洗ってー」

「詩織ももう中学3年だろ？恥じらいってものをな？」

「お兄ちゃんだけだよ……？」

「う……」

結局詩織の背中を洗う。

洗ってる間周りがるさかった。

なんとか風呂イベントが終わり部屋に戻る。

「亮くん！亮くん！トランプしようー！トランプ」

「いつもしてるだろ……」

「こんなときってトランプするもんだって言った！」

「まあどうせすることないしするか」

トランプ開始。

トランプだけでよく3時間もったと思う……

夕食を食べておみやげを見に……

そして適当におみやげを買う。

テレビを見て寝ることにする。

「いや〜。亮さんと一緒に寝ると寝れませんね」

「いや、お前らいつも俺のベッドに入ってるじゃん……」

「それだけ亮のことが好きってことよ」

「まあ……俺も……好きだぞ」

そう言った瞬間全員俺の布団に。

「さっそく子作りしましょうー！」

「いらー！そういつごとじゃねえよ！家族としてだよー！」

「まあそれでも私は嬉しいわよ」

「私も」

「お兄ちゃんに好きって言ってもらえたからね」

「まあ1歩前進ですかね。いや、異性として見られてないところは後退……?」

「ほら、寝ようぜ」

そして俺たちは眠りにつく。

次の日、俺たちは無事に帰宅した。

第83話 女の子たちと温泉旅行？（後書き）

削除方法がわからなかったらこの3日後の14日の0時にその話を編集して新しい話として掲載します。

なのでお気に入り登録している人のところには掲載したという情報がないかもしれないのでそのつもりでよろしくおねがいします。

第84話 女の子たちと体育祭？（前書き）

ちよつと予想外のことが起こりました……

割り込み投稿すると更新されたことにならなかった……

なので前話を読んでいない人は前話をちゃんと読んでください。

まあこの話とまったく関係ありませんが……

でも……！前書きに投票結果が書いてあるので……

次の更新日時を一応言っておきます。

次は2日後の0時、つまり16日0時の更新予定です。

次のこそ編集して投稿しますので更新されたことにならないかもしれません。よろしくおねがいます。

第84話 女の子たちと体育祭？

「暑い……」

10月になり、ある程度気温が下がったかなって思い始めてきた頃。

俺たちの高校では体育祭が行われた。

なぜか体育祭当日は気温37度を観測。

なんでこんな日だけ……

暑い……

「体育祭！体育祭！」

こんな暑いにはしゃいでいる彰^{バカ}。

とりあえず開会式が終わり、競技に移る。

第一種目『応援合戦』。

一番最初に応援合戦ってどうよ？

まあ士気を高めるって意味ではいいのかもしれないけど……

暑いのによく叫ぶ……

第二種目『100メートル走』

これには結衣がでるはずだ。

「結衣！がんばれ！」

隣で円と優里が応援する。

そして競技がスタート。

結衣は3レース目。

結衣の番になる。

『よいい』

パン！

いっせいに走り出す。

男子の目が結衣の一部に……

まあ走ればそうなりますよね？

「あれ？」

結衣が一位だ。

あの運動だめそうな結衣が？

結衣が戻ってきた。

「結衣すごかったな」

「ふっふっふ……寝ないで造ったかいました」

そう言つて結衣が靴を見せる。

普通の靴だ。

「これは普通の靴ではないのですよ！地球の磁力を利用して早く走れる代物です！」

またすごいもの造りやがって……

第三種目『男女別、紅白綱引き大会』

そーれ！そーれ！

第四種目『女子による棒引き』

連続で引くのかよ……

俺は競技を見てみる。

「さあ！始まりました！女子による棒引き！実況は私、佐々木がやらせていただきます！さあ、棒引き。紅白に分かれて行われているわけですが正直どちらが勝つと思えますか？解説の上園さん」

「……そうですね。これは力というよりもチームワークが試される

わけですからね。正直うちのクラスはチームワークいいでしょうが他のクラスとの連携がきちんとできるかが問題ですね。なのでいまのところはまだどちらが勝つとも言い難い状態です」

「そうですか。おおっと！今！戦いの火蓋が切って落とされました！！我がチーム白組が早い！とんでもないスピードで棒にたどり着きます！！これはどういうことでしょうか？」

「これは最初に誰がどの棒を取るか決めておいたのでしょうか。なので迷うことなく棒にダッシュすることが出来たのだと思います」

「こっで見ると女子が怖いですね……」

「そうですね……」

俺たちの熱が冷めてくる。

本当にこっで見ていると女子って怖い……

第五種目『ムカデ競争』

これには円と彰が出るはずだな。

円ちっちゃいけど大丈夫か？

うちのクラスはすごかった。

うん。

周りが転んだり止まったりしちゃってたのにまったくそんなこと

なくすごいスピードでやってた。

さすがうちのクラス……

第六種目『借り物競争』

これは俺だな。

俺は第五レースだった。

早くも俺のレースになってしまっ。

パン！

走り出す。

俺は借り物が書かれているカードをめくる。

『図書室の本5冊』

え……ちよ……

「ドラゴンボール全部！？無理だろ！？」

まだ俺のほうがマシだ……

「校長のツラって！あの人そもそもツラでもねえよ！？」

本当にこれでよかった。

「まてまてまて！ゴール・D・ジャーの財宝って！俺に海賊王でも目指せって言うのかよ！？」

周りを同情するぜ。

「お、クラスの女子だって。ラッキー」

羨ましい……

「あー……」

俺の隣で知らない男子生徒が困った顔を浮かべてる。

「無理なものでも当たったか？」

俺は話しかける。

「いや……普通は無理ではないんだけど……その、俺は無理みたいな……」

「ん？交換するか？」

「え？マジ？」

俺はカードを受け取る。

そこに書かれていたのは『母親』。

ってか高校の体育祭に普通母親なんてきてないぞ？

「あー……このお題だと俺も無理だわ……すまん！」

俺は頭を下げる。

「いや！いいって！俺も無理言っただし！」

「だから俺もなにも持たないでゴールする！」

「え？」

「まあいいからさー！」

俺はなにも持たないでゴールに向かって走る。

もともと無理なお題ばかりだったので持たないでも普通に何も言われなかった。

「そういえば母親を連れてくるの無理って言ってたけど」

俺は不意に聞いてみる。

「ほら死んじゃったから」

「あー……来てないとかじゃないのか……そうなると俺と一緒にか」

「お前もか」。世の中って狭いな。あれ？使い方あってる？」

「まあ間違っただけじゃないか？」

「まあいつか。俺の名前竹中な。竹中優輝」

「俺は上園。上園亮」

なんか新しいフラグが立った気がする……

第85話 女の子たちと体育祭？（前書き）

なんで前作の最終話で夏希の性格を変えてしまったんだ……

第85話 女の子たちと体育祭？

「いや〜。なにも持っていないかなくてもゴールできたよ〜」

俺と竹中は応援席に戻る。

「優輝！！あなたなんでなにも持っていないかったの!？」

知らない女子生徒がやってきた。

「いや、無理なお題だったし」

「どうせ『母親』とかだったんでしょ？私のこと連れて行けばいいじゃない」

「姉ちゃんは母ちゃんじゃないだろ!？」

「お母さんみたいなものよ!」

「うるさいな……ごめんな？うるさくて」

竹中が俺にむかって言うてくる。

「いや、別に大丈夫だ。うちの家族もうるさいし。姉ちゃん?」

「俺たち双子なんだ」

「竹中夏希です。上園亮さん」

「俺の名前知ってるの?」

「有名ですからね」

有名なのか……初めて知った……

「テストではいつも上位ですから」

俺の顔を見て気づいたのか竹中（姉）は言ってくる。

「ああ。そういうことが」

「亮……私たちに内緒で新しい女の子?」

「ひっ……」

いきなりうしろから声がした。

「亮くんは酷いな」

「おしおきですかね?」

振り返ると優里たちだった。

「ちょっと待て!!俺は別になにもしてないだろ!??」

「浮気してるじゃない」

「浮気なんてしてない!?!」

「こ……この娘たちは……！」

竹中（弟）が反応する。

「知ってるのか？」

「知ってるも何も有名じゃん！！美少女が転校してきたって！！俺、竹中優輝！！よろしく！！」

「……よ……よろしく（です）……？」「」

急に話しかけてきたから優里たちは困惑している。

「優輝！困らせてるじゃないの！」

竹中（姉）が竹中（弟）を叩く。

「姉ちゃん酷い……」

「ご迷惑かけてすみません」

「いや！迷惑なんて！ねえ？」

優里が円と結衣に同意を求める。

「そ……そうだよ！」

「私たちなら大丈夫ですう」

「本当ですか？でも、すみません！ほら！優輝も謝りなさい！」

「別に迷惑なんて思ってないって言って……痛っ！」

話している途中で竹中（姉）に竹中（弟）は叩かれていた。

「すみません……」

「仲がいいんだな」

「上園……このどろが仲がいいように見えるんだよ……」

「見えるさ」

「眼科に行ったほうがいいな」

「ん？」

話している途中で視界になにか入ったような気がしたのでそっちに目を向ける。

「彰？」

「いや……俺なんか疎外感が……」

「お前いたのか……」

「酷いな!？」

「ん？彰って佐々木彰!？」

「あれ？彰のことも知ってるのか？」

「同士だあああ！！」

竹中（弟）が彰と肩をくむ。

「竹中？」

俺は半分呆れ気味に竹中（弟）に声をかける。

「ん？亮。今竹中って言ったか？」

彰が訊いてくる。

「あ……ああ……」

「同士よ！！」

彰も竹中（弟）の肩に腕をまわす。

「どづいうことだ……？」

「ふっ……亮には一生わからないものだよ……実はな……竹中とはテストで順位が下から10番目の仲なのだよ！！」

うわぁ……

「こんなところで会えるなんて！！」

「俺も嬉しいぞ！！」

変な友情が……

それから竹中姉弟とは別れて自分の席にもどった。

体育祭の競技はどんどん進み、閉会式も終わって体育祭は終了した。

第86話 女の子たちと催眠術？（前書き）

今から頑張って準備すれば『猫』と『死神』どちらも連載できるよ
うな気が……

第86話 女の子たちと催眠術？

とある休日。

俺は家の物置にいた。

なぜ物置にいたのかといううちにいる居候約4名が野球をしたいなどと言ってきたのでその野球のための道具を探している途中だった。

別に俺じゃなくてもいいんじゃないかって？

ジャンケンって知ってるか？

……ということであれが物置でその道具を探しているのだった。

「物置が汚すぎる……」

俺はダンボールなどをどかす。

その拍子にダンボールが倒れて中身が出てきてしまった。

「あー……」

なんかこういうときってイライラするよね？

「ん……？」

俺はダンボールの中から出てきた一冊の本を手にとってみる。

「俺……こんなの買ったっけ……？」

『誰にでもできる催眠術』

親父か……？

でも催眠術ってすごいよな！

なんか普段は人間の身体って100%の力をだせないけど催眠術つかえばそれに近くなるんだもんな！

俺はそんなことを思いながら中に目を通す。

「やってみようかな……」

俺は物置から出てリビングに向かう。

「野球道具あったのっ？」

円が真っ先に駆けてくる。

「いや、それよりもさ」

俺はみんなを集める。

あらかじめ用意してあった5円玉に糸をつけたものをたらず。

「なに？催眠術でもやるの？」

優里が最初から気づく。

「あなたたちは野球がしたくなくなってる」

俺は5円玉を揺らしながら言う。

「……なんてあるわけないよな」

「野球なんてやめない？」

野球をしようと言っていた円がいきなりそう言う。

「そうです。野球なんて疲れるだけです」

「そこまでやりたいものでもないしね」

「私も受験前だし」

ま……まさか……

俺って天才……？

いや！待て！ここで調子にのると絶対に失敗する……！

もうちょっと実験だ……

まず結衣に……

「あなたはエロくなくなる」

そして……

「結衣、やらないか？」

「亮さん？なに言ってるんですか？」

これは……

ギ スにも匹敵する力！？

「あなたたちは猫になる」

「にゃ……にゃくん」

まず優里が擦り寄ってくる。

「……！にゃー！」

今度は円が。

そして結衣と詩織もやってくる。

やべえ……

これすげえ……

男の夢のアイテムやん……

男の夢のアイテムっていったら『透視ゴーグル』とかだけどそんなの比にならねえ……

これで世界征服だって夢じゃない……

俺は優里の頭を撫でる。

「ひゃうー！」

「ん？」

「じゃ……じゃー」

「優里……？」

「いきなり頭撫でるから……」

優里の顔は真っ赤になっていた。

「あー。優里のせいだよー」

今度は円が普通にしゃべった。

「まあおもしろかったしいんじやないですか？」

「うん！おもしろかった！」

あれ……

「み……みなさん……？」

「そついえばさつき亮さん『やらないか？』って言いましたよね？

やりましょう！今すぐ！」

「や……やめ……」

本日私の貞操はなんとか守られましたがとても恥ずかしい思いをしました。

第86話 女の子たちと催眠術？（後書き）

なんかすいません……

催眠術って言ったらもっとエロいことできるはずなのに……

……じゃなくて！

こんなグダグダな話ですいません。

え？いつもグダグダだった？

今回は特にグダグダですいません。

第87話 女の子たちと修学旅行？（前書き）

『とりあえず今年の目標（この小説での）としては2日1話更新の復活ですかね。』1月1日の前書きより。

……………すみません。

今年の目標早くもだめでした……………

まあそんなことは置いておいてピンチです！

2月に出る本の量が多すぎて買いきれるかどうか……………

ゲームも買ったばかりだし……………

ちよっとバイトの量を増やさなければ……………

第87話 女の子たちと修学旅行？

「終わったあああああああ！！」

「長かった……長かったです……5日間のテストデイズ……！」

「もう結果なんてどうでもいいよ！」

テストが終わってよろこんでいる3人。

まあ言わなくてもわかるだろうが彰と結衣と円だ。

今回は俺もテストが終わってちょっとうれしかったりする。

なぜならテストが終われば修学旅行があるから。

しかし修学旅行に行くにあたって問題がある。

詩織だ。

詩織を家に1人放置するわけにはいかない。

多分1人でも生活には支障はないだろうけど心配だ。

俺はそのことについて考えてみる。

なにかいい手は……

「彰」

「ん？なんだ？」

顔がにやけてる。

そんなにテストが終わったのがうれしかったのか……

「修学旅行行かない気はないか？」

あ、泣きそう。

「ごめん。なんでもない」

俺はまた考える。

やっぱり俺が行かないって手段しかないか……

「困ってる？」

「困ってる……っつてっわっ！？」

いつのまにか後ろに会長がいた。

「にしし」

「なんですかいきなり」

「いや〜。なんか難しい顔してたからね〜。せっかくの顔が台無しだよ？」

「せつかくの顔って……」

「まあ困ってるんでしょ？会長に話してみなさいよ。もうすぐ会長じゃなくなるけどね」

もうすぐ会長が会長じゃなくなるっていうのは生徒会選挙がもうすぐあるからだ。

まあ今はこんな話はどうでもいい。

「それがですね……」

とりあえず俺は詩織のことを話す。

「よし！会長が亮くんの家においてあげよう！」

「へっ？」

「まあ会長に任せなさいって。その代わりに今日から住ませてもらっしょっ？」

「なんで今日からなんですか……」

「ほら、いろいろ慣れないといけないからね？」

「うーん……そういってことなら……でも本当におねがいしていいんですか？」

「いっていいっていいって」

「じゃあおねがいします」

これで詩織のことはどうにかなった。

修学旅行か……

楽しみだな……

第87話 女の子たちと修学旅行？（後書き）

諸事情で1ヶ月ほど更新休みます。

本当に申し訳ありません。

え？バイト増やすから休むんじゃないのかって？

そ……そんなことありませんよ……？

まあ冗談は置いておいて。

2月はいろいろと忙しいので……

これからもよろしくおねがいします。

第88話（番外編）女の子たちとバレンタイン？（前書き）

皆さんお久しぶりです。

え？1ヶ月更新しないとかが言ってなかったか？って？

いや、せつかくのバレンタインなんで更新しようかな？なんて・・・
続き？まあそれはまた今度ってことで見てやってくださいよ。

千葉県では明日受験ですね。

明日受験の方は頑張ってください。

あ、さすがに見てないか・・・

ちなみにうちの高校は定員割れしてました。

なんででしょうね・・・

偏差値50越えてるのに・・・

第88話（番外編）女の子たちとバレンタイン？

「亮にチョコあげるわよ」

「え？マジで？」

優里が唐突にそんなことを言ってきた。

バレンタインなんて俺には関係ないイベントだったが今年はどうやらもらえるらしい。

いや、去年会長からもらったか……

あのかきは大変だった……

口にいれた瞬間に会長がお返しはキスがいいとずっと言っていた。

……まあ市販のマシュマロを返したんだが。

あれ？ホワイトデーのお返しって飴かマシュマロであってるよな？

「あ！私も亮くんにあげるよー！」

「私もあげるですう」

「お兄ちゃんのために頑張って作るから！」

「え？手作りなのか？」

「手作りじゃないと意味ないでしょ」

優里に冷たく言われる。

「いや、優里はともかくこの3人に作れるのかなって……」

「亮くん……それは聞き捨てならないね……」

「私たちをなめると痛い目見ますよ？」

「私は優里お姉ちゃんに教えてもらうから大丈夫だもん」

「……まあ楽しみにしてるよ」

〈優里&詩織〉

「お姉ちゃん、私クッキー作りたいたんだけど……」

「まずは材料買いに行かないとね」

優里と詩織は買い物に行き、材料を買う。

「お姉ちゃんはなに作るの？」

「生チョコでも作ろうかなって……亮って甘いのが苦手じゃなかったよね？」

「お兄ちゃんがチョコ食べてる姿結構見かけるから大丈夫じゃない

かな？」

「じゃあ早く帰って作るっか」

「うん！」

家に帰りお菓子作りが始まる。

「ここを……こうして……」

「焦らなくていいからね？」

「うん！」

優里は詩織に教えながら自分のこともやっていく。

そっつと……

「亮？覗きはよくないと思っけど」

「ばれたか……」

後ろから覗いた亮が優里に見つかる。

「だめだよお兄ちゃん！完成するまで部屋にいて！」

詩織に怒られてしまったので亮は渋谷部屋に戻る。

「完成！」

「おいしそうにできてるよ」

優里は優しい笑顔を詩織にむける。

「ほんと!？」

「うん」

「やった!」

これで優里と詩織のバレンタイン用のお菓子は完成した。

く
円

「確かチョコレートはチョコを湯煎?するんだったよね?私だけの味みたいなの作りたいけど……そうすると失敗するような気がするからやめておこう……」

とりあえず本屋に行ってみる円。

本屋で適当に立ち読みをしてレシピを覚える。

「はあ……英語の単語とかもこれくらい頭に入るといいんだけどな……」

そして材料を買って家に帰る。

「なかなか溶けないな……」

チョコを湯煎している円だがなかなかチョコが溶けない。

「でも頑張らなくちゃ」

ちよつと危ないところもあったがなんとかチョコが完成する。

「できた……できたよ！ちよつと不恰好になっちゃったけど……」

これで円のバレンタイン用のお菓子は完成した。

（結衣）

「とりあえずすごいのを造りたいですね」

もうすでに『作る』という漢字が違う時点で危ない結衣。

「まずこれを……そしてこうして……」

なにかを造り始める結衣。

「ん？これってチョコと言えるのでしょうか……？そもそもチョコってなにをどうするとチョコなんでしょう……」

考えて……そして思いつく。

「まあ甘ければそれでよしとしましょ」

砂糖を適当に入れる。

「なんか私だけ行数が少ない気がしますけど気にしないことにする
ですう」

そして結衣の何かが完成した。

「お兄ちゃん！食べて！」

「はい、亮」

バレンタイン当日俺は詩織と優里にチョコとクッキーをもらった。

「ありがとな」

俺はどっちも1つ食べる。

「おいしいよ」

「やった！」

「当たり前でしょう？」

さて……この2人はいい……

「はい！亮くん！」

俺は円からもらった箱を開ける。

「……形は……不恰好だけどおいしいはずだから!」
俺は1つ食べてみる。

「あ、普通にうまい」

「ほんと!?!」

「ああ」

「よかった!」

円が笑顔になる。

これだと結衣のやつも普通に大丈夫なんじゃないか?

……そう考えていた時が俺にもありました。

「なんだこれ……」

「チョコです。ん?チョコ?」

「自分でもわからなくなってるじゃねえか……」

「まあいいから食べてくださいよ」

だって紫みたいな感じなんですよ?

「お前……味見したか?」

「いや〜うまくいったのがそれだけだったので……」

「うまくいったって……」

「他は爆発しました」

「は!?!」

「発明に爆発は付き物です」

「いやいやいや。チョコ作るのに爆発はしませんからね!?!」

「もつとにかく食べてみてください!」

「うぐっ!」

無理やり口に押し込まれる。

「なんだこの味……っ!?!?声が!?!」

「成功です!」

「これどういことだよ!声が女じゃねえか!」

「声変わりチョコです!」

「戻せ!」

「えー」

「いいから戻せ！」

「じゃあその逆バージョンを開発してくるですっ……」

俺は元の声に戻りバレンタインは終わった。

第88話(番外編)女の子たちとバレンタイン?(後書き)

詩織は受験が終わった設定です。

レシピとか書いてないから作者はお菓子作れないんじゃないの? みたいにも思ってる人もいるかもしれないので一応言っておきます……
生チョコくらい作れるわ!!

第89話 女の子たちと修学旅行？（前書き）

この話と同時に『猫』と『死神』とあついでカットとなってやったもう1作品掲載します。

本当は『猫』は『女の子たちは居候？』が終わってからにしようと思っていたのですがめんどくさいから（なにがだ……）いいかという事で掲載します。

今回載せるのは前にここで投票してもらったときと同じ話になります。

前見てなかった人もいると思うので一応解説を……

『猫』はまあラブコメですね。

一応終わり方はほんやりとは思いつかんでいます。

今までの作品と違い非現実的なお話です。

今までも結構非現実的だったけど……

タイトルがなかなか思い浮かびません……

掲載するまでに考えなければ……

『死神』もラブコメです。

これも非現実的ですね。

タイトルは『俺に憑いた死神がこんなに可愛いわけが……』パクリになっちゃいますね……

これも掲載するまでに考えなければ……

あと1つの作品は超能力系ですね。

まあこれは結構自己満足な作品だと思います。

『ついカットとなってやった』それしか言えません。

その衝動を絵に描いてもよかったです絵だと時間がかかってしまうので……

一応ラブコメ風にしようと思っています。

なんかこれはもうどうなるか自分でもわかりません……

みなさんほかの作品もよろしくおねがいします。

第89話 女の子たちと修学旅行？

「な…………なあ亮」

「ん？」

「俺飛行機初めてなんだけど……………」

修学旅行当日。

「へえ、墜ちるかもな」

「怖いこと言うなよ!？」

「飛行機に乗った時点で墜ちるといって可能性は出てくるんだぞ?」

「もうやめて……………」

彰が涙目だ。

やめてやるつ。

それから飛行機に乗り修学旅行先の京都へ。

「おお…………まだふわふわしてる……………」

彰がなんかおかしい…………

「ふわふわ…………ふわふわ……………」

円が壊れた!?

「ほら円、そっちじゃないわよ」

優里が円の手を引く。

これじゃクラスメイトというより姉妹だ……

まずは金閣寺。

「すっげええええええええええ!!金だ!!金だよ!!光ってる!!」

彰がおおはしゃぎ。

「ちょっとくらい持って帰ってもバレないかな……」

「よし警察だ」

「冗談ですからやめてください」

彰が必死に訴えてくるのでやめることにする。

次は銀閣寺。

「ん?銀でできてないような……」

彰が気づく。

「え？死にますよね？」

「大丈夫だ。結構死亡率低いらしいから」

「いやいやいや。そんな問題じゃないような……」

「ちっ……ノリ悪いやつめ」

「え……ちよ……」

「彰がそんなやつだとは思わなかったぜ」

「急になんか飛びたくなってきたなあ！」

泣きながら言う彰。

「よし飛べ」

「ごめんなさい。許してください。なにかおごりますから」

かわいそうなやつだった。

そして清水寺に隣接してる恋がどこのどのの言つ寺？神社？まあどつちでもいいか。

クラスの女子はおおはしゃぎ。

大変だな……

そして他にもなんか京都タワーとか行って宿に着く。

「夜がやってきたぜ……」

誰かがそんな不穏なセリフを残しながら次回に続く。

第90話 女の子たちと修学旅行？（前書き）

なんか最近辛いです……

第90話 女の子たちと修学旅行？

宿についた俺たち。

部屋は4人部屋。

俺たちの部屋には彰と名もないクラスメイト。

だが、なぜか俺の部屋には結構な人数の男子がいる。

「お前らなにやってんの？」

俺はそいつらにむかってそう言い放つ。

「なんかこの部屋に集まわって言われてさ」

「は？」

俺はすぐに彰を見る。

彰は首を横に振る。

「すまないな上園！」

いきなり扉のほうからそんな声が……

「あれ？竹中？」

やってきたのは竹中（弟）だった。

まあ姉が来るわけない。

「ちょっと俺の部屋だとだめです」

「なにが？」

「人生で1度しかない修学旅行なんだぜ？楽しまなきゃいけないだろ？つまり……覗きだ」

竹中がそう言うのと周りのテンションが上がる。

「今から作戦を発表する。みんなとりあえず班をつくってくれ」

竹中がそう言うすとすごい速さで班ができていく。

なぜか俺も入れられた……

ってかなんで俺が班長なわけ？

「ここにこの旅館の地図がある」

そう言うって竹中は教師に配布された紙を広げる。

「そしてこれが風呂の見取り図」

「なんで持ってんだよ！！」

「ふっ……何事も前準備というものが大切なのだよ」

おかしいって……

まあとりあえず言われた作戦はこうだ。

女子の風呂場に行くには渡り廊下を渡らなければいけない。

しかし絶対に教師は渡り廊下を張っている。

だからまずはいくつかの班が3階の渡り廊下を攻める。

そうすれば教師は自然と3階に行く。

その間に残りの班は1階の渡り廊下を堂々と渡る。

タイミングを見計らって3階を攻めていたやつらは退却。

以上が作戦内容だ。

「そつうまくいくかね……」

「各班長は携帯を本部にある携帯につないでおいてくれ。作戦開始時刻はこれより10分後だ。解散！」

そう言っつて男子たちは解散する。

「竹中はここにいるんだな」

「ここが本部だからな」

「もし失敗したら竹中のせいにするぞ？」

「じゃあ副隊長は上園だな」

「なんでだよ!？」

「散る時は一緒だろ？」

「そんな爽やかな笑顔で言われても……」

10分後……

誰から借りたのか携帯が6個くらいある。

そしてその全ての携帯を竹中は口に近づける。

「ミッションスタート
任務開始!」

一瞬リト スの沙耶を思い出した……

第91話 女の子たちと修学旅行？（前書き）

お久しぶりです。

久しぶりにお気に入り登録件数を見たらかなり増えてました。
ありがとうございます。

……これって更新しないほうが増えるのでは？

まどか マギカがおもしろすぎて生きるのが辛いです。

そんなことより地震大変でしたね……

ねんどろいどのパーツの1つがまだ行方不明です……

第91話 女の子たちと修学旅行？

ここは戦場だ。

やられたやつは見捨てなくてはいけない……

俺は自分にそう言い聞かせる。

「助けて……助けて……」

俺は耳をふさぐ。

こんなやつてねえよ……

こんな戦場になったのには訳がある。

『任務開始』

上園がそう宣言して男子たちはすぐに行動にでた。

いくつかの班が3階を攻めた。

しかしそこで異変が起きる。

『3階に教師がいません!!』

まあ3階に教師をおく理由があまりないからな……

『なら1階を攻める!!全軍突撃!!』

もう作戦なんてどうでもいいんじゃないか……

とりあえず1階を攻める。

しかし1階の廊下にも教師はいない。

「これってラッキーじゃね？」

誰かがそつつぶやいたときだった。

「助けてくれ！」

先行していたやつ悲鳴が聞こえる。

もうそこからは戦場だった。

どンドン先生に拘束され、先生たちの部屋に連れて行かれる生徒たち。

「しまった!!」

彰がつかまってしまつ。

「助けて……助けて……」

ここは戦場だ……

すまないな……彰……

『俺も出撃する!』

上園の声が聞こえる。

あいつきつと……

『この乱闘騒ぎに乗じて風呂を覗こう』って魂胆だな。

そんなことより俺も早急に避難しなければ!

俺は近くにあった扉を開けて中に入る。

普通だったらここは女子風呂っていうオチなんだろう……?

ふっ……怖くて目を開けられねえぜ……

……声が聞こえない。

なら大丈夫か……?

俺は恐る恐る目を開ける。

「ボイラー室?」

なんで鍵開いてんだよ……

普通閉めておくだろ……

外ではまだ乱闘騒ぎが聞こえる。

「1111に隠れとくか……」

俺はその場でじっとしている。

ん？ボイラー室なら風呂とつながってるんじゃない？

なんか男としての本能が目覚めた気がした。

そっと入ってきたほうとは違う扉に近づく。

そしてそっと開けるとそこには……

円がいた。

目が合った。

「……………」

「あーりよ……………」

すぐに俺は扉をしめる。

なんであいつボイラー室の扉の前にいるんだよ！

このままではまずい気がしたのですぐに入ってきた扉に移動する。

しかしまだ乱闘騒ぎが……

社会的に死ぬか or 社会的に死ぬか。

どっちも社会的に死ぬのかよ……

ん？待てよ？

円なら大丈夫な気が……

「さつき亮くんがいたんだけどなー」

風呂につながる扉が開かれ円の声がする。

「上園君が？」

死んだ……

他のクラスメイトまで来るとは……

俺は頭の中で必死に考える。

女風呂につながってる。

つまり男風呂にもつながってる。

これだ！

俺は女風呂と反対側の扉を円たちに見つからないように目指す。

たどり着いた俺はそっとその扉に手を伸ばす。

「（亮さん）」

ビクッ！

いきなり声をかけられる。

俺は即座に土下座。

「（亮さん落ち着いてください）」

「（結衣……？）」

ちゃんとタオルで身体を隠してくれていた結衣がいた。

「（亮さんにはいつもお世話になってるんで逃がしてあげます）」

「（え！？マジで！？）」

「（私が円たちの視線をこの扉からはずしますからその間に）」

「（助かる！）」

結衣は円たちのほうに向かう。

「Gがいるです！」

「！！？」

Gとは黒い彗星と言われ通常の虫の3倍で動ける黒光りしたやつである。

円たちが騒いでる間に俺は男風呂につながる扉を開け、そこから脱出した。

第92話 女の子たちと修学旅行？（前書き）

臨時休校で遊びまくってたら金がいつのまにかなくなっていました

……

恐ろしい……

第92話 女の子たちと修学旅行？

任務失敗から2時間後。

「とりあえず班長だけで反省会をしようと思う」

竹中……もつめんどくさいから優輝でいいや。

優輝がそんなことを言い出す。

反省会をするのはもちろん俺たちの部屋。

なので班長じゃないやつ……彰もいる。

「なんで俺たちの部屋でやるのかを教えてください」

「俺の部屋先生たちの部屋の横なんだ」

可哀想なやつめ……

「はい！」

「はい、彰」

「とりあえず亮が先生たちの部屋にいなかった件について話し合いたいのですが！」

「チクろうとしても先生たち話聞いてくれなかったもんな……」

「上園の野朗……」

「お前らすぐに逃げないで頑張つて突入しようとするからじゃねえか」

俺はとりあえず反論する。

「幻想郷が目の前にあるのになんで逃げなきゃいけないんだよ！」

「その幻想郷の前に悪魔たちがいたんじゃねえか」

「「「う……」」」

「反省点といえば優輝の作戦が悪いんじゃないか」

「なんだと!？」

「なにが3階で先生たちを足止めするだよ」

「俺の頭だとそれが限界だったんだ……」

コンコン……

部屋の扉がノックされる。

とりあえず俺が立ち上がって扉を開ける。

「寂しくなつて遊びにきたよ!」

そこにはうちに居候している3人と杏奈がいた。

「「キター――――！！！！」」

「お前らうるせえー！」

「やっと私が学校生活で登場できるのね……」

杏奈がなんか悲しいことを言っていた。

とりあえず優里たちを部屋にいれる。

狭い……

「お前らそろそろ部屋から出て行けよ」

俺は集まった班長たちに言う。

「上園……お前は悪魔か？」

「出てけー！」

彰までそんなことを言い出す。

「酷い……」

班長たちは出て行く。

「優輝はどうした？」

俺は彰に訊いてみる。

「ん？なんかこの部屋にいられる権利を持つてくるって言って消えたぞ？」

「ただいま！」

言った矢先すぐに優輝は帰ってきた。

「お前の部屋ここじゃねえだろ……ん？優輝の姉と……誰？」

優輝の後ろに女子が2人いた。

「村田奈々。性格はきわめて凶暴……ぐふっ！」

優輝が腹にいいパンチをくらっていた。

「いひゃい……」

「うるさい」

「優輝の自業自得よ」

かわいそうなやつめ。

「とりあえず村田奈々です。敬語は苦手です」

杏奈みたいなやつだった。

「敬語も使えないなんて奈々はだめだ……ぐふっ！」

「何か言った？」

「ごめんなさい……………」

「2人は付き合ってたりするの？」

円がいきなりそんなことを聞き出す。

「えっ！？それは……………」

村田はもじもじします。

ほう……………優輝のことが好きなのか。

「幼馴染だ！いたっ！」

優輝がまた殴られてた。

「幼馴染は優輝のことが好きで双子の姉も優輝のことが好きで……………」

彰がそうつぶやくと……………」

「そんなことない！」

「全否定っすか……………」

なんか優輝が涙目になっていた。

とりあえず……………」

キャラ増えすぎだろ……

第93話 女の子たちと修学旅行？（前書き）

キャラが増えすぎてもうカオスに……

最近東京ESPとさよならピアノソナタを読みました。

東京ESPはさすが瀬川はじめさん。

続きが気になりました。

さよならピアノソナタは2巻までしか読んでないのですが……

最近金がないもので……買えないのですよ。

これは正直アニメ化してほしいw

神様のメモ帳も結構好きですが声のイメージが崩れるのが怖いんですよね……

でもこれは声のイメージが特定しやすい？のでアニメ化してもそこまで崩れはしないだろう……そんな感じです。

まあ音楽系の作品だからということもありますが……

音楽系だったらハレルヤオーバードライブもアニメ化してほしいですね。

まあハル先輩が動いてるのを見ただけですが……

わからない人にはつまらない話になってしまいました。すみません。

第93話 女の子たちと修学旅行？

特に問題もなく修学旅行は2日目になる。

え？昨日優里たちが来てなにもなかったのかって？

なにもありませんでしたよ。

ただしゃべって終わり。

もうそれだけ。

まあモラルは守りますよ。

まあバカは王様ゲームをやるうとか言ってたけど……

王様ゲーム夏休みからトラウマなんだよ……

2日目は自由行動。

別に誰とまわってもいいのだが結局いつも通りのメンバー。

まあ一番落ち着くしな。

「亮」

「ん？」

彰から声をかけられる。

「なんで俺たち迷子なんだ？」

「お前のせいだろ」

「すみません」

俺たちは駅にむかっていたはずだった。

出発するとき彰が「俺に任せる！」とか言うから一応任せてみた。

「彰かつこわるい……」

杏奈にそう言われた彰は涙目。

「しょうがないですねえ……私に任せるです」

結衣に案内をバトンタッチ。

10分後。

「こつちに行けば大通りに出れると思っただけですけど」

なんかなにもない。

ただただ空き地が広がっていた。

「私に任せて！」

もうどうだっていいよ……

ってことで円にバトンタッチ。

10分後。

「公園があるだけ結衣よりはマシじゃない？」

住宅街に出た。

「じゃあ次は杏奈かな？」

彰が言う。

「私地図とか無理だし」

「大丈夫。地図なんか必要ないよ」

「どうして？」

「現在地もわかってないから」

もうだめだ……

「こんなのも楽しかったけどそろそろちゃんとしたいわよね」

「どうするんだ？」

「GPSがあるでしょ」

「あ」「あ」「あ」

とりあえずGPSを使って大通りに。

「さて、どこ行くところか？」

優里がそう言う。

確かに最初から道に迷ったので予定なんてもう意味をもたない。

「神社なんか行ってもつまらないしなー」

「じゃあ嵐山でも行くか？河下りの的なのもやってさ。高いけど……」

俺はそう提案する。

「河下りやろっよー！」

円がはしゃぐ。

とりあえず河下って嵐山に行き買い物を楽しんだ。

これは正直作者よりも京都満喫してないか？

作者缶蹴りやってたし……

第93話 女の子たちと修学旅行？（後書き）

これ書いてるときに前作（俺があの子と同棲）と修学旅行の話被らないようにしないとーと思って前作を見直していたのですが……

あれ？いくら探しても修学旅行の話がないよ？

そっか……

過去の自分は修学旅行の話を書かなかったのか……

第94話 (番外編) 女の子たちと修学旅行? (前書き)

真冬がかわいくて生きるのが辛いカレーライスです。

久しぶりに二次元に行きたいと思いました。

最近はそういう気持ちにはならなかったのに。

ちなみに真冬は生徒会の一存とかの真冬じゃありませんよ?

前話の前書きに書いたさよならピアノソナタの真冬ですよ?

まあそろそろ本題に入りましょう。

ん? 本題? むしろ真冬がすごくかわいいというのが本題なのでは?

まあいいか... とりあえず今回の話を番外編にしたのは優輝のお話だからです。

前作を見てない人でもわかるようにするつもりなのでよろしくおねがいします。

第94話 (番外編) 女の子たちと修学旅行？

「優輝写真撮るよ」

「また？」

「お父さんが楽しんでこいって言うてくれたんだからその楽しんでる姿をちゃんと見せなきゃだめでしょ？」

「まあそれ言われちゃうと何も言い返せないんだけどさ……」

母ちゃんが俺たちが5歳の時に死んじゃったから俺たちは父ちゃん1人にここまで育ててもらった。

まあ途中から姉ちゃんが家事を結構やってたけど……

それで俺も何もしないのは悪いと思って料理以外の家事をできるよ
うに頑張った。

料理は一度作ったら姉ちゃんに2度と台所に立たせてもらえなかつた。

まあ奈々も料理できないしいいか。

でも父ちゃんはできるんだよな……

なんか納得いかない……

「ほら！優輝！」

姉ちゃんが俺のことを引き寄せろ。

「姉ちゃん近いつて……」

「別にいいでしょ」

そう言つて姉ちゃんはシャッターをきる。

「なんで奈々はついてこなかったんだろっなー」

俺は歩きながらそう言つ。

「ナンデダロウネ」

「姉ちゃんなんか話し方変だぞ」

実際奈々が来なかったのは夏希が奈々との勝負に勝ったからである。

夏希はそのことを優輝には話していない。

まあなんで勝負なんかしたのかは言うまでもないので言わないが……

「話し方と言えば姉ちゃん」

「なに？」

「あの話し方にはもどらないの？」

「あの話し方って？」

「今の姉ちゃんしか知らない人が聞いたら『ありえない』って言う話し方」

姉ちゃんの顔が赤くなる。

「なんでこのタイミングで言うかなあ……………」

「いや、このタイミングって特に変なタイミングでもなかったよ
うな……………」

「修学旅行中でしょ……………もお……………」

「あの静かそうな姉ちゃんかわいかったなあ……………それが今じゃ……………」

「なにか言った?」

「ごめんなさい」

俺は素直に謝る。

家の中でのランクで最下位の俺は逆らったら負けなのだ。

「そついえば姉ちゃん」

「今度はなに?」

「また断ったんだって?」

「なにが?」

「告白」

「だって好きじゃない人と付き合っても意味ないじゃない」

「もしかしたら好きになるかもしれないじゃん」

「その前に手のかかる弟の面倒見なくちゃいけないからね」

「俺ならもう大丈夫だって」

「面倒見るのが私は好きなの」

「じゃあ俺も誰とも付き合えないわけか」

「どうして？」

「だって付き合ったらその相手に面倒見てもらうだろ？そしたら姉ちゃん俺の面倒見れないじゃん」

姉ちゃんの顔が赤くなる。

「い、いつまで面倒見てもらうつもりよ」

「姉ちゃんが飽きるまで」

「じゃあずっとね」

「マジで？」

「マジで」

「俺将来は魔法使いかな」

「ゲームのしすぎて頭がおかしくなっちゃった？」

「そういう意味の魔法使いじゃないよ……」

「？」

でもずっと姉ちゃんと暮らすのもいいかなと思ってしまっ自分もいるわけで……

でも面倒見てもらっただけじゃなくて支えあえたらなーみたいな……

「優輝！」

「ん？」

「写真撮るよ！」

「また……」

母ちゃん、とりあえず俺たちは仲良くやっています。

第94話 (番外編) 女の子たちと修学旅行? (後書き)

姉弟で恋愛みたいな話って正直好きじゃないんですけどまあしょうがない。

だってネタ不足なもの。

第95話 女の子たちと修学旅行？（前書き）

お久しぶりです。

さて、まずは言い訳をさせてください。

更新できなかった理由はパソコン様が逝ってしまったためです。

この更新だって家のパソコンじゃなくてネカフェの使ってます……

パソコン様……うっ……

つてことで次の更新は新しいPC買うまで待つてください……

まあ直しに行くかもしれませんがね。

これでrewriteができるぜ……

第95話 女の子たちと修学旅行？

「ちょっと遅くなったな」

修学旅行から帰って俺たちはいま家の前にいます。

「おみやげもちゃんと買ったし大丈夫よね？」

「ただいまー！」

円が真つ先に家に入る。

そして俺たちも後に続く。

リビングに行くとき……

「よいではないか、よいではないか」

「だめだよお……」

「ふふふふ……」

なぜか詩織が会長に襲われかけていた。

「会長なにやってるんですか……」

「おっ！亮くん帰ってきたね？」

「お兄ちゃん……見ちゃ……ダメ……」

なぜか着崩れている服……涙目……上目遣い……

「かわええ……」

はっ！つい口に出してしまった！

「ほんと……？」

「ああ。ほんとほんと」

「詩織だけかわいって言われてずるいです……」

「最近私たちには言ってくれないのにね」

「亮くんは着崩れてるのがいいのか」

居候してる3人が怖いです。

「おかえりお兄ちゃん！」

急に笑顔で抱きついてくる詩織。

「ただいま」

俺は詩織の頭を撫でてあげる。

「亮くん私にも」

「あなたはさっき詩織のこと襲ってたでしょ」

「それはそれ、これはこれ」

「なんで襲ってたんですか？」

「あまりにかわいくてつい」

「ついつて……」

「ほら、亮くんもあるでしょ？」

「俺の理性はそんなに弱くありません」

「これだからいつまで経っても童て……」

「会長キャラ変わってません？」

「3ヶ月ぶりの登場だからね」

「え？」

「現実で」

「ああ……」

納得。

キャラ忘れちゃったわけですね。

「どうだった？修学旅行」

詩織が訊いてくる。抱きついたまま。

「楽しかったよ」

「いいな〜……なんでか私行った記憶ないんだよね……」

「」「」「」

その場にいた全員が固まった。

「まあきつと気のせいだよね！」

「そ……そうだよ！気のせいだよ！」

「詩織ったら忘れやすいのね」

「きつとここでの生活が楽しかったせいです！」

居候メンバーがフォローしてる……

とりあえず修学旅行は終了した。

第95話 女の子たちと修学旅行？（後書き）

詩織……ごめん……忘れてた……

なんか自分の名前がアニメででてきてその名前が声優さんと呼ばれると嬉しい気持ちになりますね。

まあ恥ずかしい気持ちもあるんですが……

え？ならない？

そうですか……

第96話 女の子たちと期末テスト？（前書き）

パソコン様復活！

買おうと思ったんですがパソコン買うための貯金がいつの間にか10万になってて諦めました。

さて…なにも思いつかない…

なに書けばいいんだ…

参考に前作見てみたら96話の時点でまだ夏休みだし…

修学旅行終わったらなにがあるかな

冬休みくらいしか思い浮かばないな

「だって私ちゃんと亮くんと2人きりでお風呂入ったことないし」

「そうだったけ？」

「多分」

「でもご褒美はあげる気ないぞ？」

「なんで！」

「勉強するのは自分のためだろ？冬休みに補修受けたいなら別だけど」

「しまった……私頑張る！」

「おう、頑張れ」

さて、俺も頑張らないと。

触れなかったけど前回のテストで優里に負けたからな……

ピンポン

「俺が出るよ」

そうやって俺は玄関に向かう。

「はいはい」

「勉強教えてくれ」

「おねがいします」

バカ2人が頭下げて玄関にいた。

「えっと……これってなに？」

俺は杏奈に聞いてみる。

「彰が勉強教えてもらいたくて来たんでしょ」

「じゃあこっちの会長は？」

「偶然会ったのよ」

とりあえず俺はリビングに通す。

「「「おじやまします」「「「

「あれ？どうしたの？」

優里が聞く。

「ちょっと勉強教えてもらいにね」

とりあえず勉強再開。

「なあ亮」

「ん？」

「虚数ってなんだ？」

「学園都市にあるだろ？虚数学区」

「ああ、じゃあAIM拡散力場か」

「そうそう」

「ってそれをどうやって利用するんだよ！？」

お、ちょっと成長してる。

「だから土 門さんが言っただろ？魔術を消すんだよ」

「お、そっか！」

だめだなこいつ……

「ねえもう高校生終わっちゃうんだけど処女って正直どうよ？」

「会長はいきなりなに言ってるんですか……」

「いや〜。いつまでも処女でいいのかな〜って」

「あんた勉強しに来たんじゃないんですか……」

「うん。一般常識の勉強を」

「俺頑張って教えます」

「だからまずは華の女子高生が終わっても処女は許されるのかという件についてからね」

「よし、一般常識の勉強で一番最初にそれが出てくるのは間違っているということから教えましょう」

「男性は30歳まで童貞を守りぬいたら魔法使いになれるっていうのがあるじゃない？じゃあ女性は？処女を30歳まで守りぬいたらなにかあるの？」

「まず一般常識としては女の子がそんな下品な言葉使わないで下さい」

「むう……」

「それと会長は美人なんできつと30歳まで処女ってことはないですよ」

「わーい！じゃあ亮くんがもらってー！」

「なんでそうなるんですか……」

「亮くん。私も勉強しないでお話がしたい」

「うるさくてごめんな田。もうすこし頑張ろうかな？」

「……」

俺は会長に一般常識を頑張っ
て教えた。

結果。テストは優里に負け、
彰は赤点をとる始末となつた。

すまん彰。

第96話 女の子たちと期末テスト？（後書き）

これ書くのに1時間もかかった……
初めてだよこんなにかかったのは……

第97話 女の子の辛い過去？ 〈結衣編〉（前書き）

しょうがなかったんだよ…

もう何も思いつかなかったんだよ…

でも正直結衣の過去も思いついてないんだよ…

はぁ……

第97話 女の子の辛い過去？ 〈結衣編〉

「おつかれさまです」

「はぁ……亮くんがやってくればよかったのに……」

「俺なんかに会長なんて仕事できませんって」

生徒会選挙が終り、会長が会長ではなくなった。

「さて……会長じゃなくなったけどなんて呼ぼう……」

「真美って呼び捨てでもいいんだよ？」

「もうそのまま会長でいいか」

「自己完結された!？」

「いやそもそも会長の呼び方会長に考えてもらおうなんて思いませ
んし」

「ひどいな〜……まあとりあえずお祝いでもしよっ」

「勝手にしてください」

「亮くんの家だね」

「なんでだよ!？」

「亮くんはなにくれるのかな」

「自分でせがまないでくださいよ……」

つてことでデパート。

そこにはちゃんと居候メンバー＋彰と杏奈がいる。

「会長の会長終了祝いのためににか買わなければいけません。でも俺は今金を持ち合わせておりません」

「ほうほう」

彰が反応する。

「つてことで彰金貸して」

「だめです!」

「ん?」

彰じゃなくて結衣が反応した。

「結衣?」

「あ……えーっと……私が貸しますよ」

「?」

まあ貸してもらえるのならそれでいい。

ちなみにうちではお小遣い制となっている。

というより最近した。

そっちのほうで優里たちも使いやすかったからな。

とりあえず会長への贈り物を買って終え俺たちは帰宅する。

「いきなりだったんでそれらしいものは作れませんが……」

そう言いながら優里は料理を運んでくる。

「おいしければなんでもいいの！」

一騒ぎして会長と彰と杏奈が帰り、片付けを済ませ、そろそろ寝るか……って頃。

結衣が部屋にやってきた。

「もう優里も円も話しました。詩織はまだわかりませんがそろそろ私も話さないといけない頃かなーって思ってますね」

「辛い過去ってやつか？」

「まあ優里、円に比べたらそこまで辛くないですけどね」

「……………」

結衣が話すと思って俺は黙っていた。

「本当に聞きたいですか？」

「話して結衣が楽になるなら」

「む……ちょっと恥ずかしいですね……なんかいつでも私のこと思ってくれてるみたいじゃないですか」

「ちゃんとお前らのことは考えてるよ。家主だからな」

「むう……」

結衣はなぜか赤くなる。

「しょうがない。話してあげましょう」

なんで上から目線なんだ……

「あれは13歳の頃です……ってあれ！？次話に続くんじゃないんですか！？」

「いや続くけど」

「安心しました。あれは13歳の頃です……」

そう言って結衣は自分の過去を語りだした。

第97話 女の子の辛い過去？ 〈結衣編〉（後書き）

あれ？会長の名前久しぶりに書いたけどまどマギのマミさんと一緒

……？

くそ……なんか使いにくくなったな……

第98話 女の子の辛い過去？ 〈結衣編〉（前書き）

本当はこんな前書き書くつもりなかったんですよ？

でもこれを書かずにいられなくて…

このお話を書いていて過去編って毎回どんな感じに語りから終わってたっけ？と確認しようと思いきや新しいタブを開いたときのことでした。パソコンフリーズ。

えwwちょwwもうこれ書き終わるところだよ？

タスクマネージャー開いている確認してみたところインターネット応答なし。

涙を惜しんで再起動させました…

あんなに頑張って書いてたのに……はあ……

第98話 女の子の辛い過去？ 〈結衣編〉

あれは13歳の頃のことです……

私はどこかの綾崎 ヤテ君みたいに借金を置いて両親に逃げられてしまいました。

「……………」

俺は黙って結衣の話を聞く。

「あ、これで終わりです」

「え？」

え？もう終わり？

「あれ？これってこれから辛くなるんじゃないの？」

「この事実だけで十分辛いじゃないですか」

「それはそうだけど優里も田も詳しく語ってくれたよ？」

「人は人。私は私です。個性があっていいですね」

「でもその事実だけ聞くと結衣が言っていた優里と田の話より辛くないってなんかおかしくないか？」

「どうしてですか？」

「だって円は捨てられたただけだけど……なんか捨てられたただけって表現もおかしいな……円は捨てられたけど、結衣はそれに加えて借金もだろ？」

「年齢を考えてくださいです」

「それもそうか」

「まあ亮さんがどうしても聞きたいっていうならもうちょっと詳しく話してあげましょう」

そう言っつて結衣はまた語りだす。

正直うちに借金があったことが驚きでした。

でも綾崎八　テ君みたいに1億5000万とかいうおかしな数字じゃなかったんですよ。

でも約500万。

500万なら頑張っつて働けば返せると思っつたんですけどね……

それでも私は置いていかれた。

その事実は動きません。

私は世界をうらみました。

なんでこんな家庭に私を生まれたのか。

なんで私がこんな目にあわなくちゃいけないのか。

借金取りの怖い人たちになんで借りたんでしょっね……

私はその人たちに返す方法がないならその身体で払ってもらおうと言われました。

そのときはまだ私の胸はそんなに成長してなかったんですけど中学生ってのが売れるんでしょっね。

なので私は学校に行くのをやめて働くことにしました。

でも中学生なんか雇ってくれる場所はない。

私は頑張って探しました。

その間にも借金は増えていく。

利息はもちろんなんですけど生活費のためにも借りちゃいましたからね。

ある時私は年齢をごまかすことを覚えました。

それまで思いつかなかった私に腹が立ちます。

そして私は働けることになりました。

自営業の店だったのでそこまで審査が厳しくなかったんです。

私は必死に働きました。

でも私は気づいてしまったんです。

これは無理だ、と。

結局今返せているのは利息分だけ。

正直両親がいなくなったときよりも借金は多くなっていました。

そして私は逃げようと決心したんです。

両親と同じことをするのは嫌でした。

嫌でしたけどもう私に選択する権利なんてなかったんですよ。

ある日の深夜2時。

私はそつとアパートの扉を閉めて外に出ました。

私は甘かったんです。

アパートの前で私は借金取りの男の人たちに捕まってしまいました。

なんで捕まったのか、私は尋ねました。

そしたらそろそろ逃げ出すことがわかっていたそうです。

さすがプロですね。

そんな時期がわかるなんて敬意に値しますよ。

逃げ出すことがわかっていたのになにもしなかったのは私に絶望を
植え付けるため。

「お前が逃げようとしても捕まえられる」そう言われているみたい
でした。

悔しかった。

しかしその感情よりも大きな感情がありました。

『恐怖』。

私はきつとこのまま売られてしまう。

涙がとまりませんでした。

でも私に救世主が現れます。

あ、もちろん亮さんのお父さんとお母さんですよ？

「女の子に乱暴はよくないな」。嫌がってるよ？」

「」「あ？」「」

プロのくせにちっちゃい不良みたいなやつらでした。

「だから女の子に乱暴はいけないって」

「こっちも仕事なんですよ？なにか文句でも？」

「仕事って言ったって結局これさえ手に入れば終了でしょ？」

そう言っただけで亮さんのお父さんは旅行かばんを借金取りに渡しました。

その中にはお金が入っていました。

「ほらぴったり入ってるから。領収書だして。女の子離して」

借金取りの男の人は納得していないようでしたがお金は払われたので私のことを離しました。

「遅くなってごめんね」

亮さんのお母さんが私に優しく話しかけてくれました。

「お金集めるのにちょっと手間取っちゃってね」

「どうして助けてくれたんですか……？」

「助けるのに理由なんているか？」

亮さんのお父さんは私にそう言いました。

その時私はちょっとかっこいいと思ったんですが、

「どの漫画にそのセリフ載ってたの？」

亮さんのお母さんの一言でそんな気持ちなくなりました。

「そ……そんなことないですよ……？」

「まったく……影響されやすいんだから……これだって……」

「うるせーな」

「ぶっ」

私は2人のやり取りがおもしろくてつい笑ってしまいました。

「よし。じゃあ結衣。俺たちと一緒に来い」

「どこにですか？」

「内緒だ」

亮さんのお父さんは子供のように笑いました。

ついていけない理由も私にはなかったので2人についていきました。

「それで優里たちに会って私はここに來たってわけです」

「大変だったんだな」

「もうそれはそれは大変でしたよ。本当に……大変だった……」

「俺が彰に金借りるのを止めたのもこれがあったからか。よく頑張ったな」

俺は結衣の頭を撫でてあげる。

「うっ……うわあああん！」

結衣は泣き出してしまった。

「よく頑張ったよ結衣は」

「亮さん……ひっく……」

結衣は泣き疲れてそのまま寝てしまった。

「あれ……俺どこで寝よう……」

いつもは俺が寝た後に勝手に入ってくるから俺は気づかないけどなんか寝てるところで寝るのもな……

ソファで寝るか……

翌日。

なんで自分のベットで寝てないのかとすごく文句言われた。

第99話 女の子たちと冬休み？ 12月23日（前書き）

やっと冬休みですねー

前作では冬休みで1章が終わりましたがこれはまだまだ続きますよー
続けられるかな…？

とりあえず本日テストが終了しました。

古典とかなくなればいいのに……

古典の勉強をしていたらなぜか涙が出てきました。

ライオンに素手で戦いを挑むようなもの。これが古典を勉強した感想です。

第99話 女の子たちと冬休み？ 12月23日

「冬休みです！」

「冬休みは宿題が無くていいね〜」

「う〜……私は書初めがあるよ……」

冬休みに入って浮かれている居候メンバー（優里を除く）

「詩織はもうすぐ受験だからな。頑張れよ？」

「うん！絶対お兄ちゃんの後輩になるから！」

「おう、頑張れ」

「もうすぐクリスマスですね〜」

「そうだね！優里はケーキでも作ってくれるのかな？」

「別にいいわよ」

「今年もサンタさんは来てくれるかな〜」

「「「「！？」」「」」

詩織の発言に全員が驚く。

緊急会議開始。

「なあ、これって冗談だよな？」

「さすがに詩織でもサンタの正体くらいは知ってるでしょ」

「（友達が教えてくれたりするもんね普通）」

「（でも詩織が純粹すぎて教えてあげられなかったっていう可能性も……）」

「そしてもうすぐ私は15歳！」

「「「!?」「」」

またしても詩織の発言。

「あれ？詩織の誕生日はいつ……？」

「12月25日！これで15禁ゲームもできるよ！」

「（また予想外な……）」

「（誕生日と被ってるのにサンタの正体知らないの？）」

「（普通クリスマスに近い誕生日の人は誕生日プレゼントがないかクリスマスプレゼントがないかですからね……詩織はおそらく前者なのでしょう）」

「（詩織に正直に話す？）」

「（なんかあんな純粹に信じてると話していくいよな……）」

「（まあサンタ役は亮で決定ね）」

「（衣装とかは私に任せてくださいです）」

「（亮くん頑張って!）」

「お兄ちゃんたちどうしたの?」

「な、なんでもないぞ!」

「クリスマス楽しみね詩織」

「うん!」

とりあえずクリスマスが大変そうだ……

「（亮）」

小声で優里に話しかけられる。

「（どうした?）」

「（ちょっとクリスマスの買出しに行かない?）」

「（まあ詩織のプレゼントも必要だしな）」

俺と優里は3人に声をかけてから家を出る。

円と結衣は詩織を連れて誕生日プレゼントを買いに行った。

〈亮・優里〉

「なんか亮と2人で出掛けるの久しぶりね」

「そうだったか？」

「そうよ」

「もしかして2人きりになるのを楽しみにしてたとか？……なんてあるわけ」

「なっ……なっ……」

優里の顔が真っ赤だ。

「冗談のつもりだったんだけどな」

「楽しみだったわよ！悪い！？」

「いや、悪くはないけど……」

「ないけど？」

「なんか面と向かって言われると恥ずかしいな」

俺は頬をかきながら言う。

多分俺の顔も赤いだろう。

「亮」

「ん？」

「好きよ」

もつと顔が赤くなつたのを感じた。

「亮にからかわれたから仕返し」

「とか言ってる自分も顔赤いけどな」

「こ……これはっ！しょうがないじゃない……恥ずかしいんだもん」

「なら言わなきゃいいのに」

「なんかやられっぱなしは自分に合わないのよ」

「そついうもんかね」

俺たちはそのまま適当に会話しながら買い物を買わせていく。

「詩織のクリスマスプレゼントってなにがいいんだろうっ」

「ぬいぐるみとか？」

「もう中々だぞ？」

あれ？優里さんがなぜか頬を膨らませてますよ？

「悪かったわね！高2にもなってぬいぐるみが好きで！」

「そっいえばゲーセンでぬいぐるみとってあげた記憶が……」

「よしぬいぐるみにしよう」

「別に亮が好きなのでいいんじゃない？私は知らない」

「そんな怒らないでくれよ……」

「とりあえずぬいぐるみを買おう。」

「ちょっと大きくないか……？」

「大きいと嬉しいじゃない」

「まあそりゃそうだけど……」

「持ち運びが辛い……」

「それに個人的に買いたいものもあるのに……」

「ちょっと優里先に帰っててくれないか？」

「どっしして？」

「ちょっと買いたいものがあったな」

「付き合うわよ？」

「なんで優里は18禁商品を買うのに着いてきてくれるのか？」

「バカ！変態！先に帰る！！」

なんか好感度が下がった気がするがまあ修正可能だろう。

なぜなら今からその修正アイテムを買いに行くんだからな。

第99話 女の子たちと冬休み？ 12月23日（後書き）

個人的に修羅場って嫌いなんですけど皆さんはどうでしょう？
あまり書きたくないんですけどよね

でもなんか最近全然ラブコメっぽくなくね？って思ってますよ……
どうしようか……

第100話 女の子たちと冬休み？12月24日～12月25日（前書き）

ついに100話目です。いままで読んでくれたかたありがとうございます。

これからもまだまだ（？）続きます。続く予定です。

100話目だからアクセス解析でもしてみようかな～なんて思い、クリックしたら554件待ち……

え？なにこれ？どうなってるの？こんな数字初めて見るよ？

いつの間にか作品が増えてるんだな～と実感しました。

まあそんなことはおいといて……

昨日電撃文庫の5月の新タイトルの5作品のうち3作品買いました。

『雨の日のアイリス』

すごくおもしろい……

なんだこれ……この希望と絶望？破壊と再生？みたいな感じ……

正直表紙の娘がかわいかったから買ったんですけどね（笑）

その娘第1章でいなくなっちゃうし……

とりあえずすごくおもしろかったです……

この本は続編はないかな？

『ストライク・ザ・ブラッド』

ヒロインがアマガミの七咲みたいでした。

アスラクラインの作者だからちよつと厨2くさいですがまあおもしろかったかな？

アスラクラインは途中で読むのやめちゃったから最後まで読める自信はないんですがとりあえず買い続けてみようと思います。

『魔王なあの娘と村人A』幼なじみは勇者です～

なんか差別つていうか違う人間？なんて表現したらいいかわからないな……

特別な人間が普通の人間を人間と認識しない。そんな感じなのは個

人的に好きじゃないんですがその特別な人間が普通の人間のことを好きになるっていうのは大好物ですね（笑）

とりあえず魔王がかわええ……

勇者は知らん。

これも次の巻からおもしろくなりそうだし買い続けるつもりです。

第100話 女の子たちと冬休み？12月24日～12月25日

「ジングルベル！ジングルベル！すっずがなっるー！ー！ー！」

玄関にうるさいの（彰）がいた。

「パーティーだ！」

「なんでお前がいるんだよ。お前を呼んだ覚えはないんだけど？」

俺は彰にそう言い放つ。

「そんなつれないこと言うなよ」

「いや、お前彼女と2人きりで過ごすとかさ、そうゆうのないわけ？」

「その彼女がこのパーティーに来てるんですけど！？」

「じゃあ1人で過ごしてるよ」

「じゃあお前も道連れだ！」

「なんでだよ！そんな寂しい思いするのはお前だけで十分だ！」

「俺だけじゃないぞ！全国の非リア充の人たちに謝れ！」

「玄関でそんな大声だすなよ！」

「うるせえ！俺だってパーティーに参加したいんだよ！」

「ちっ……しょうがないな……」

「さすが亮！」

俺はとりあえず彰を和室に通す。

「ん？なんで和室？」

俺は無言で彰にろうそくを渡して電気を消した。

「一人でそのろうそくでも見ながらパーティーでもしてろ」

「どんだけ俺をいじめれば気が済むんだよお前は！？」

俺はその言葉を見殺してリビングに向かう。

「杏奈も大変だな、あんな甲斐性なしと付き合って」

「あはは……」

杏奈苦笑い。

「それでも……好きだから」

杏奈は顔をすこし赤くさせながら言う。

俺たちはにやにやしながら、

「ノロケですな」

「もう付き合って半年くらい経つのにノロケですね」

「羨ましいなあ」

「私もお兄ちゃんのこと自慢したいなあ」

「できたよー」

優里が料理を運んでくる。

「すごいですう！」

「さすが優里だね！」

「お姉ちゃんすごい！」

「優里に料理習おうかな……」

「優里ちゃんの料理おいしそうだね」

結衣、円、詩織、杏奈、会長。会長？

「いつの間に入ったんですか……」

「亮くんが佐々木くと話してるときかな」

「そうですね……」

「それでも酷いな。私を差し置いてこんなことしてるなんて」

「差し置いてたわけじゃないんですけどね」

「じゃああなたによ？」

「忘れてまし……」

殴られた。

無言で殴られた。

その後普通に騒いで普通に解散することになった。

「亮くんこれからホテルでも……」

「会長はきちんと家まで帰るんですよ？いいですね？」

「送ってくれたりしないの？」

「いや、迎えが来てるじゃないですか」

「むう……」

会長は残念そうに帰っていった。

「私は彰の家にも行くのかな？」

「そして2人は大人になるんですね」

「結衣ったらもう!」

でも杏奈の顔はまんざらでもない感じだ。

「そついえば彰のこと忘れてた」

俺は和室を覗いてみる。

「それでは!最後となりました!みなさん『きよしこの夜』でお別れしましょう!」

本当に1人でパーティーしてた。

ろうそくオンリーで。

悲しい……

久しぶりにこんな悲しいものを見た気がする。

「ごめん彰……」

「おっ!亮!お前も歌おうぜ!」

「杏奈が待ってるぞ」

彰と杏奈も帰る。

「さあ……私たちのクリスマスの開始です」

第101話 女の子たちと冬休み？12月24日～12月25日（前書き）

お久しぶりです。

久しぶりに書くので2週間前に思い浮かべていた物語がまったく思
い出せません。

さて、ガンダムの新シリーズについてですが……

なんだあれ…

敵がなんでMSじゃないんだよ…

子供向けアニメか…

これでガンダムを知る子達がかわいそうだよ…
以上です。

あ、生徒会長になったので更新が遅れるかもしれません。
それでもこれからもよろしくおねがいます。

第101話 女の子たちと冬休み？12月24日～12月25日

「さあ……私たちのクリスマスの開始です」

結衣がそう宣言する。

「結衣なに言ってるの？ほら片付け手伝って」

「あ、はいです」

結衣は素直に優里の言葉に従う。

「ってそうじゃなくて！」

「」「？」

結衣がいきなり大声をあげる。

「どうしたんだ結衣？」

「私たちのクリスマスは！？亮さんとの甘いクリスマスは！？」

「いや、もう十分やったじゃん」

「いやだ！いやだ！」

結衣が駄々をこねる。

むう……ちょっと早いけど渡すか。

「ほら、結衣」

俺は結衣にプレゼントを渡す。

「これは？」

「クリスマスプレゼント」

「ほんとですか！？」

「おう」

「開けてもいいですか！」

「どうぞ」

結衣は俺が渡したプレゼントを開ける。

「ネックレスです！亮さんつけてください！」

「はいよ」

俺は結衣にネックレスをつけてあげる。

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

「亮くん私たちは？」

「もちろんあるよ」

俺は円たちにも同じものを渡す。

「詩織には1日早い誕生日プレゼントだな」

「ありがとう！」

「亮、これいつ買ったの？」

「優里に先帰ってもらったとき」

「え！？Hな本買いに行ったんじゃないの!？」

「あれを信じてたのか!？」

「亮も男の子だからしょうがないと思って……」

「なんか心外だ……」

とりあえず俺は全員にネックレスをつけてあげる。

「つけたのはいいんだけどこの後風呂入って寝るだけじゃないか？」

「もらってすぐにつけるってのが大切なんだよ亮くん」

「そついつものなのかね」

まあよろこんでくれてるみたいだし、よかったよかった。

それから就寝時。

「おやすみ……」

詩織がねむそうに目をこすりながら2階に行く。

「おう、おやすみ」

詩織が部屋に入ったのを確認してから俺たちは話し合う。

「なあ、俺別にサンタの格好しなくていいんじゃないか？」

「もし見つかったらどうするつもりですか？」

「しょうがないな……着るよ」

俺は結衣が用意したサンタ衣装を着る。

「似合ってるわよ亮。ぶっ」

「亮くんかわいいよ」

「なあ結衣」

「はい」

「俺が着たときは普通のサンタ衣装だったんだけど？」

「そう。それが私の発明」

なぜか俺は女性用のコスプレサンタ衣装を着ている。

「発明でなんでも済ますのはよくないと思うんだ」

「私は罪な発明家……」

「もどしてくれないか？」

「えー」

「もどしてください」

「わかりましたよう」

結衣はしびしび俺の服をもどしてくれる。

これ原理どうなってるんだろう……

これあれば服買う必要ないんじゃない……

それから数分後。

「そろそろ寝たかね？」

「大丈夫じゃない？」

「亮くん頑張っつて！」

「さあ！トランシーバーを持って！」

俺はトランシーバーとぬいぐるみを持って詩織の部屋の前にいく。

「ターゲットの部屋の前に到着した。オーバー」

『亮さんノリノリですう。オーバー』

「うるさい。オーバー」

『じゃあ突入。オーバー』

「了解。オーバー」

俺は扉を静かに開ける。

静かに部屋にはいる。

これを置けばミッション終了だ。

俺はそっとぬいぐるみを置こうとするが……

むくっ

いきなり詩織が上半身を起こした。

そしてうつろな目で部屋を出て行ってしまった。

「本部。至急応答願う。オーバー」

『どうしましたか？オーバー』

「詩織が起きて部屋を出て行った。オーバー」

『それは亮さんの部屋に行っただんですね。オーバー』

「この場合どうすれば。オーバー」

『詩織のベットに置いてても意味ありませんし……至急会議を開きます。指示があるまでそこで待機してください。オーバー』

「了解。オーバー」

さて、待機だけど……

俺が今いる場所って女の子の部屋なんだよな。

詩織と結衣の部屋だけど……

まず匂いからなんか違うんだよな。

これ本当に自分の家か？

『亮さんは匂いフエチと……』

「おい！」

『あ……通信入ったままでした』

「とつとと指示だせ。オーバー」

『オーバー』

「なんにも言わずにそっちに通信返しますよって意味か!？」

『オーバー』

「指示下さい……これからどうしたらいいんでしょう……女の部屋にサンタの格好した男1人ってかなりシユールな光景だと思うんですよ……オーバー」

『もう亮さんの部屋に置いていいんじゃないですか？オーバー』

「なんて適当な返事！オーバー」

『私としては亮さんにいつまでもその部屋にいてもらいたかったですけどね。オーバー』

「通信切るぞ。オーバー」

俺はトランシーバーを切る。

そして詩織の近くにぬいぐるみを置いて任務は終わった。

「なんかすごく疲れた……」

第102話 女の子たちと冬休み? 12月31日(前書き)

どうもお久しぶりです。

本当は16日に更新しようと思ってたんですが・・・

なぜ16日に更新しようとしたかわかります?

この小説を掲載し始めてから16日がちょうど1年なんですよ。つまり前作が終わってもうすぐ1年ってことですね。早いんですね? ごまかそうとしても無駄だつて? なんで更新がこんなに遅いか言えつて?

い、意外に生徒会が忙しかつたんですよ・・・? 本当ですよ・・・? 久しぶりにG線上の魔王とかあかね色に染まる坂とかアマガミとかがやりたくなつたわけじゃないんですよ・・・?

そりゃRewriteやろうとしましたよ? そのためにパソコンだつて買いましたよ?

いまからRewriteをとてもやりたいんですがちゃんと更新しておかなきゃなつて思つて更新するんですよ?

さて・・・前話つてどんな話だつたけ・・・?

第102話 女の子たちと冬休み? 12月31日

「1年ももう終わりか……」

12月31日。大晦日。

俺たちはのんびりしていた。

大晦日はのんびりするのが一番だよな。

友達に誘われて出かけたら結局年越しそば食べられなかったもんな

……

おっとこれは作者か……

「こつちの世界では大晦日なのにあつちでは梅雨明けですもんね」

「結衣さん?なにをおっしゃっているのでしょうか?」

「なになに……あつちの関東のことですよ?」

「あつちとはどつちでしょうか……?」

「なに言ってるんですか亮さん。あつちって言ったら……」

「結衣。亮のこといじめるのやめなさい」

「優里はわからないんですか?自分たちが物語の中の存在か確認する術はないんですよ?もしかしたら作者は物語の中の人間かもしれ

ない。もしかしたらこれを読んでくれる人も物語の中の人間かもしれない。不思議ですよね。」

「まあ私たちは物語の中の人間だけだね！」

結衣がなんか哲学的なこと言ったのに円が台無しにした。

「そしてちょっと考えたんですけど……」

みんな結衣を見る。

「そんなに見られると興奮します……」

「いいから話せよ……」

「普通3次元の人は2次元萌え〜とかいいますよね？」

「それ普通じゃないと思うんだけど……」

「つまり4次元から見たら3次元萌え〜ってなるわけじゃないですか？」

「てことは次元が大きくなればなるほど不細工になると？」

「そういうことです！」

「まあそんなの確認のしようがないけどね！」

今日の円はなんか厳しい気がする。

「てか俺たち大晦日にどんな話してるんだ……」
なんかむなしくなってきた。

「だって大晦日って言ったってなにするのよ？」

「王様ゲームしよう！」

詩織のこの一言からなにかが始まってしまった気がした。

まあ始まったのは王様ゲームなんだけどね。

第1ラウンド

「……王様だ〜れ？」

「あ、私ね」

優里が王様か。

「じゃあ亮が……」

「そういうゲームじゃないからね!？」

「むう……」

優里がすねてる。

これが大晦日の力か……

かわええ……

「じゃあ3番が腕立て伏せ10回」

結局俺なのね……

俺はとりあえず腕立てを終わらせる。

第5ラウンド

「王様だれ？」

「私ですう！」

今思えばここから狂ったんだと思う。

「とりあえず2番の人上の服を脱ぐです！」

「ちょ！結衣それはまずい！」

「なにがまずいんですか？私たち家族でしょう？」

「う……」

「あ、私だ」

詩織はそう言って服を脱ぎだす。

詩織さん……もうすこし恥じらいを持ってほしいんですよ……

ブラがなかったら大変だったな……

ブラって素晴らしい。そう思った。

第10ラウンド

なぜか全員上半身下着になっていた。ちなみに俺は裸だからね？

なんかもうテンションが深夜のテンションになり始めていたのは言うまでもない。

「……王様だ〜れ?」「……」

「私だよ!」「」

円が王様だった。

「じゃあね〜……3番の人が4番の人のブラを外す!」「

「俺3番キターーーーーー!」「」

「私だ……亮……優しくしてね……?」「

顔を赤くしている優里。

「まかせとけ」「」

俺はブラに手を伸ばし……そして……

「……ってなんだよこのテンション!!」

俺はツッコミをいれた。

「ねえいつからこんなピンクのオーラながれ始めたの!?!いつからこんなR指定がかかりそうなながれになってるの!?!」

優里はそれを聞いて我に返ったのか顔をさらに赤くした。

でもこんな風に騒げるのっていいな、と思った。

第103話 女の子たちと冬休み？ 12月31日～1月1日（前書き）

Rewriteの進行状況が遅くて心配になっているカレライスです。

本日での小説も1周年を迎えることができました。これもみなさんのおかげです。（みなさんが読んでくれていなければなら確実に自分を書くのをやめていたため）

最初は目標お気に入り登録件数が200件だったのにもかかわらず今ではその2倍のお気に入り登録件数です。

ありがとうございます。これからも更新は遅れるとは思いますがよろしくおねがいします。

PS・生徒会長がつらいです…

第103話 女の子たちと冬休み? 12月31日〜1月1日

「眠いよお兄ちゃん……」

「もうすこしだ。もうすこし耐えるんだ……」

「円が寝てるです!」

「叩き起こせ!」

大晦日。

年越しそばも食べて某歌合戦を見るか〇〇の使いを見るか討論もし、あとは年を迎えるだけ。

せつかくだから年越しはちゃんと起きていようという話になった。

だからみんな必死に起きている。

ここまでする必要あるのか?と思っただがしょうがない。

このメンバーでの初めての年越しだ。

「あと5分だ!あと5分がんばれ!なんかテンションあがってきた
!」

「くう……」

「詩織——————!!結衣!詩織が!」

「起きてますよー。私は起きてますよー」

「録音音声じゃねえか！なんでお前も寝てるんだよ！徹夜にはなれてるだろ！？円！……は寝てるよな……」

俺は最後の希望優里を見る。

……座ったまま寝ていた。

それはもうとてもいい姿勢で。

「なんか起きてるの馬鹿らしくなってきた……」

しかしいざ寝ようとしてもあがってしまったテンションのせいではなかなか寝れない。

しょうがない一人で年越すか……

12時になった。

新年だ。

俺は一人で

「あけましておめでとございます」

年を越した。

まあ年を越したからと言って眠れるわけでもなく意味もなく起きて

いた。

「はっ！」

いつのまにか寝ていた。

よくあるよくある。

他のみんなはまだ寝ているようだった。

「ヤバ……暖房つけっぱなしだった……だれか風邪ひかないといいけど……」

そしてみんな順々に起き、初もうでに行った。

「すごい人ですねえ……」

「俺も久しぶりにきたからこんなに人がいるなんて思ってなかった」

「あんた背信的ね……」

「あまり神様たよらないようにしてるし」

「なんか厨2病っばいね！」

詩織にグサツとくる一言を言われた。

俺立ち直れないかも……

「おみくじしない？」

円が提案してくる。

とりあえずおみくじを購入。

まあおみくじなんてものは言い回しでなんとかなるもので……

「やった大吉ですう！」

「幸先いいなー」

「凶だ……受験だいじょうぶかなあ……」

「大丈夫だぞ詩織。凶なんて逆にラッキーじゃないか？大吉みたい
に先に運をつかわないであとにのこしておけるんだぞ？しかも今凶
ってことはあとともうあがるだけじゃないか」

「亮、さっきと言ったこと矛盾してない？」

「はっはっは。気のせい気のせい」

物は言いようなのだ。

とりあえず帰宅。

年賀状が届いていた。

「彰から……」

読みたくない……

『今年は俺、年男なんだぜ?』

おかしくね?

俺は早生まれだからあいつと干支が違つとしてもいっこ違つだけだろ?

あいつ来年のはずなんだけど……

あいつ留年してたっけ?

留年して俺と同じ学年になつたんだっけ?

彰の年賀状をよく見てみると所々絵がかかっている。

「なんだこのモンスター……」

でも注意して見てみると犬に見えなくもない。

あいつ干支間違えてやがる……

今年は酉年だ。

決して戌年ではない。

「会長からもきてる」

『留年しようかなあ……』

まだ言ってたのかよ！

しかも新年1発目からこれかよ！

……でもこれを見て思った。

会長といられるのもあと3か月しかない。

けっこう一緒にいた。

そりゃ出会いがある分だけ別れがある。

もしかしたら俺ら家族も別れないといけない日がくるかもしれない。

会長はその日があと3か月できてしまう。

やっぱり別れはさみしいものだ。

つらい。

会長と別れたくない。

俺は会長のことが……

「好きだ」

「勝手に人の心アテレコしないでください」

「もう。亮くんだったら本当はそんなこと思ってたくせに。ツンデ

しだな」

「たしかに思ってたかもしれませんか」

ぼんっ

そんな音が聞こえるくらい会長の顔が赤くなった。

「えっ！えっ！？なに言ってるの!？」

「いや、別れはさみしいな」ってことを言っただけですけど？」

「私との別れも？」

「もちろん」

「あの……亮さん……久しぶりのラブコメ展開中もうしわけないんですが私たちが空気です。どうかしてください」

「どうにもならんな」

「亮さんひどい！」

「亮くんが私との別れもさみしいなんて思ってくれてたんだ。なら私は亮くんにさみしい思いなんてさせちゃいけないよね？」

「へ？」

「まあとりあえずあけましておめでとっ」

「おそいよ!?!」

「じゃあ私今日は帰るね」

そう言っただけで会長は帰ってしまった。

「なんだったんだ……?」

「亮さん……来ますよきっと……」

「なにが?」

「3か月後にあの人は必ず来ます……」

「あの人って会長?」

「きっと……」

結衣の言ったことによってフラグがたった気がした。

「いや私のせいじゃないでしょう!?!」

「人の心読むなよ!」

第104話 女の子たちと冬休み？ 1月2日（前書き）

Rewriteがもうすぐ終わるのでやる気がかなりでてきてる今日この頃。

最近思ってたんですが自分のユーザー名カレーライスなんですけど正直カレーライスあまり好きじゃないんですよね…

第104話 女の子たちと冬休み? 1月2日

「ぐはっ……」

俺は床に手をついた。

いつもだったらこの姿にすぐにツッコミがはいるところだがツッコミが入らない。

それはみんなが俺のこの行動が演技なんかではないと知っていたからかもしれない。

「亮さん！」

結衣が俺のことを切羽詰まった声で呼ぶ。

「大丈夫だ結衣……男にはやらなきゃいけないときがあるんだ……」

俺は結衣を片手で制しながら言う。

俺は何度倒れそうになってもその強大な敵に挑む。

「なんで……そこまでしてっ……」

優里が泣きそうだ。

泣かないでくれよ優里。

俺はお前らの涙が見たくないからこうして戦ってるんだ……

ちよつとくさいかもしれないがこれが本心だ。

「俺は……！守りたい世界があるんだあああああああああ！
」

時は2時間くらい前にさかのぼると思う。

そう…… たった2時間前だ。

たった2時間で俺たちの平和なお正月が崩れた。

「あけおめー」

彰と杏奈がうちに来た。

ちなみに彰。それもう死語になりつつあるぞ……

今思えばこの二人が来なければこんなことは起こらなかったのではないだろうか？

いや、起こったのは決まりだったのかもしれない。

今話題の某アニメ風に言うところ『神様のメモ帳に書かれていた』ということだ。

あれ原作とちよつと進み方違うけど大丈夫かね？

まあそんなことはどうでもいい。

とりあえず続きを話そう。

「今日も寒いわね」

杏奈が言う。

「お前らの周りはいろんな意味であつたかそうだけどな」

彰と杏奈は寄り添っていた。

一部の人が見たら全員口をそろえて『爆発しろ！』と言っているだろう。

「寒いのはたしかですう。なにかあつたまることありませんかね？」

「あつたまるっていったら鍋でしょ！」

「鍋はたしかにあつたまるよね」

正直この流れはまずいと思った。

円から詩織の同調。

この流れだと絶対に彰が馬鹿なことを言う。

むしろ流れというか『鍋』という単語がまずいのだ。

最近のいろんな作品は普通に鍋をやることが極端にすくない。

なにかしら変なことになる。

たとえば『闇鍋』とか。

「鍋もあつたまるけどほか……」

「闇鍋をしよう!」

止められなかった……

彰が俺の言葉にかぶせてきた。

絶対にこの単語を聞いてうちの馬鹿たちは食いつかないわけがない。

だから闇鍋という単語が出てきた時点で俺の負けだった。

「闇鍋……なんだか強そうだね!」

円が食いつく。

「強くなれるの!？」

詩織も食いついた。

「闇鍋とは……またおもしろそうなことを提案するですう」

結衣までも食いつく。

うちの唯一の良心優里は……

「闇鍋って材料どうしよう……」

やる気満々でした。

「材料なんてあるものでおっけー！」

もうみんなやる気だ。

ここでこの流れに乗らなかつたらただの空気読めない男だ。

「じゃあやるうぜー！闇鍋！」

なんかそのままのテンションで夜になってしまった。

もうちょっとテンションが下がって頭を冷やしたら闇鍋なんて開催されなかつただろう。

コンロに火をつけて電気を消す。

これでもうほぼ何も見えない。

「じゃあ一人ずつなにか持って来よう」

まずは俺がとりに行く。

「さて……なにを持っていくか……」

闇鍋が開始されてしまった以上まずくて食べられないという事態は避けなければいけない。

『すべて食べきる』

これが俺たちが自分たちに課したルール。

ここで何を持っていくかという選択はすごく重要なものになる。

なにか味が濃いものなんてどうだろう？

もしまぶくなってもその味に書き換えられるのではないだろうか？

そうと決まれば味が濃そうなものを探す。

タバスコor塩

辛いのは苦手だ。

塩を多めに入ればなんとかなるんじゃないか？

俺は塩を持ち出した。

それからみんな順に食材をとりに行った。

「じゃあ入れるぞ？」

一人ずつ入れていく。

俺は塩を。

あとのみんなはなにをいれたのだろうか？

ここでアイスなんかいれられていたらシャレにならない。

「食べよう!」

「」「」いただきます」「」

みんなが食べようとする。

「ちょっと待ってくれ!」

俺はあわててみんなを止める。

「どじしたの亮?」

「まず俺が毒見をする」

俺はそつと箸を鍋にいれる。

そして具をとろつとする。

「ん?」

「どじしたんですか亮さん?」

固形物がない……

これはまずい気がする。

「ッ……」

箸がなにかにあたった感触。

俺はそれをつかむ。

そして自分の取り皿に。

『あたり！ガリ　リ君一本おまけ！』

冷や汗がでた。

ガ　ガリ君のあたりを見たのは初めてだったがそんなことはどうでもよかった。

鍋にガリガ　君をいれるやつがどこにいる……

こいつはヤバイ……

「お兄ちゃん！？なんか焦ってるように見えるよ！？」

暗い中でも俺の動揺が伝わったらしい。

今度は俺はおたまをつかってスープをすくう。

「う……」

匂いだけで逆流リバースしそうだった。

それでも俺はスープを口に運ぶ。

なんか懐かしい人に会った気がした。

「第1級危険物に指定！」

俺はとりあえずそう言っておく。

「そんなにヤバいんですか!？」

「一瞬違う世界が見えるほどヤバかった」

「閻鍋憲法第1条」どれだけ不味くてもすべて食べきらなければならぬ!」

そう言いながら彰はスープをいつきに口に運ぶ。

「……………」

「……………彰?」

杏奈が心配そうにする。

彰は無言のまま後ろに倒れる。

「みんな……………彰に敬礼だ」

みんなで敬礼する。

あいつは先に逝けて幸せだったのかもしれない。

なぜならこの先の地獄を見なくても済むのだから。

「私も一口……」

「だめだ円！俺はこれ以上死人を見たくない！」

俺は円に気をとられすぎていた。

「彰がない世界なんて……！」

杏奈が一気にスープを飲む。

俺は杏奈の行動に反応できなかった。

「彰……そんなところにいたんだね……」

そう言っつて杏奈も倒れた。

「杏奈あああああああああああああああ……！」

誰かが言った。

生きているのは辛いことだと。

たしかに辛いことばかりだ。

でもその分幸せなことがある。

しかしこの闇鍋には幸せ要素なんてない。

俺ができることは俺一人でこのスープを飲み干してみんなの笑顔を

俺 塩

優里 塩

円 ガリ リ君

結衣 ??? (なんか鍋に閻属性を加えるものらしい)

詩織 チョコ

彰 タバスコ

杏奈 マシユマロ

第105話 女の子たちと冬休み？ 1月3日（前書き）

最近の自分の更新の遅さに腹がたつたので更新です。

Rewrite 飽きてきた……

ちはやとルチアと静流はあんなに可愛いのに……

やっぱりポリユームがありすぎるっていうのも考え物ですよね。
マッピーとかいらなすぎ（笑）

第105話 女の子たちと冬休み? 1月3日

なんか朝早く起こされた。

まだ俺のお正月は終わってないんだぜ? もう少し寝たっていいじゃない。

というより俺が起こされたのは目が覚めて暇だったからとりあえず起こしてみたというだけなのかもしれない。

「亮くん」

「ZZZZ……寝てないぞ」

「すごく信憑性のない嘘ありがとう」

起こしたのは円だった。

「で? こんな朝早くにどうしたんだ? まだみんな寝てるぞ?」

「最近私存在感なくない?」

これは痛いところをついてくる。

しかも無表情で言うところがまた怖い。

「き……気のせいじゃないか?」

「気のせいなんかじゃないよ! なんかキャラはどんどん増えていく

し！最近私のセリフが極端に減って優里と結衣ばっか話してるし！」

まあ結衣はキャラが濃いからな……

優里は……作者が好きただけだろう。うん。

「てことで私が空気にならない方法を考えてみました」

「ほう？」

俺は眠いながらも聞く。

「胸が大きくなればいいと思う」

「2度寝してくる」

「亮くん待つてよお」

円が涙目になりながら縋り付いてくる。

「……一応訊くがなんで胸が大きくなれば空気にならなくなるんだ？」

「胸大きい　なんかそれだけで亮くんと絡みが多くなりそう」

「安直！」

「ひどい……」

「そんなんで変わらないでしょ。むしろそのままのほうが存在感は

あると思っけど」

「じゃあ存在感なんてこのさい無視」

「無視しちゃったよ！？この娘根本の部分を全否定しちゃったよ！？」

「私ももうすぐ18歳だよ」

「うん」

「もう成長しないのではないかと心配に……」

「いや別にそのままでも」

「亮くと歩いたら『あの人口リコンだ』とか亮くんが思われたり……」

「よし。すぐに解決策を考えよう」

それから円の胸がどうやったたら大きくなるのか考えた。

その時に『円の胸だけが大きくなって意味がない』と考えられなかった俺が馬鹿だった。

胸だけ大きくなっても結局身長とか顔立ちとかはかわらないんだからやっぱり俺は口リコンというレッテルをはられてしまうのだ。

だがそれに俺は気づかなかった。

「とりあえず牛乳とかカルシウムをとればいいんじゃないのか？」

「そんなの前からやってるよー！」

「ですよねー」

却下。

「キャベツは？」

「だーから！それももうやってるのー！」

「俺にはもう協力できないようだ……」

「諦めるの早いよ！？」

「俺の頭では限界だ……」

「誰も亮くんの頭に期待なんてしてないけどね」

グサツとくる一言だった。

「じゃあ俺はなにをすればいいんだよ」

「えっと……それは……」

円が顔を赤らめる。

「それは？」

「亮くんの手を貸してくれれば……」

「手？」

「揉まれるとおっきくなるらしいの……」

「……！自分じゃだめなのか……？」

「好きな相手に揉んでもらってドキドキするのが大切らしいの」

「マジで？」

「マジで」

円の胸を揉む？

どこに揉むほどある……

「亮くん？」

ええありますね。

鳥肌がたった。

それも一瞬で。

「お願い！人助けだと思って！」

「すごく恥ずかしいんですが……」

「こんなイベント滅多にないよ！」

「それもそうだけど……」

「亮くんいつでも助けしてくれるって言ったのに……」

言っただけ……

そう言われると言ったような気がするから困る……

「わかったよ……」

「ほんと!?!」

「ちょっとだけだからな」

「うん！」

なんでこんな立場が逆な会話してるんだろう。

普通男が頼みこむんじゃないのか？

「い……いくぞ……?」

「うん……うん」

ふにゅ

「あ……」

たしかな柔らかさ。

これが……円の……

「ねえ亮くん……」

「はい」

「なんでほっぺ触ってるの？」

「いやきれいな肌だと思って」

「それはありがとう」

「ああ」

「で？本当は？」

「急に恥ずかしくなって」

「チキン」

「やるぞおー！」

再チャレンジ……

「朝からなにやってんのよあんたたち」

……なほほ。

優里が呆れた目で見ていた。

「いやちよつと挑戦を……」

「ほら、邪魔だからどいたどいた」

そう言っつて優里は朝食を作り始める。

「亮くんがチキンだから」

「反論できません……」

「また今度やってもらおうからね」

「はい……」

第105話 女の子たちと冬休み？ 1月3日（後書き）

そつえばあらずじを変えようと思ってみたらなんか時事ネタが多いなと思いました。

時事ネタって結構つらいものがありますよね。

第106話 女の子たちと3学期？（前書き）

やっとRewriteが先日終わりました。

ええ遅いですよ。まあ始めたのも遅かったですししょうがないかな

…なんて思ったりしています。

さて…あと一枚のCGはいつたどこにあるんだ……

第106話 女の子たちと3学期？

「冬休みってすぐ終わるよな……」

教室に入ると彰がそんなことをぼやいていた。

「まあ冬休みだしな」

「しかも今学期が終わったら俺たちも3年だろー？どうすればいいんだよー」

「今を楽しむしかないんじゃないか？」

「俺将来なにやるんだろー……」

将来……

俺はいつたいどうなってるんだ？

今の世の中大学にはいかないといけない……

でも優里たちは？

さすがに優里たちまで大学に通わせるとなると奨学金をもらっても働かないとまずい……

バイト？

バイト程度でどうにかなる問題か？

「難しそうな顔してどうしたのよ？」

優里が話しかけてくる。

「いや、俺この未来みらいどうなるのかなーって思ってた」

「あんたはきつとなるようになるわよ」

「うわ……適当……」

「とりあえず未来のことなんか考えないで現在いまのこと考えましょう」

「そっだよな」

3学期……

それは生徒たちにとって特になにも行事がない学期……

3年はセンター試験とかで大変だろうけど1、2年にとっては特になにもない。

卒業式なんてめんどくさいだけ。

てか3学期って意味あるの？

「何事にも意味はあるんですよ亮さん」

結衣がそんなことを語っていた。

「じゃあ亮くん私とまた胸を大きくする方法を……」

それはもういい。

「受験がんばるよ！」

がんばれ。

そっか詩織の受験があつたな。

詩織は余裕とか言ってたけどそれ完全に死亡フラグじゃね？

とりあえず詩織の試験だけやったら3学期は終わりかな……

「私のこと忘れてない？ねえ？」

あ、会長の卒業式もあつたか……

第106話 女の子たちと3学期？（後書き）

本当にもうしわけない。

3学期つてもうなにも書くことがなさすぎて……

すぐに3学期終わらせて春休みに入りますのでもう2話だけ待って
ください……

第107話 女の子たちと冬のプール？（前書き）

ネタ切れを指摘されたカレーライスです。

まあ事実なんですけどね（笑）

そこでハヤブサさんがネタ提供をしてくれました。

提供されたときは『ああ、その手もあったか……今の時代なかなかそのネタって見かけないから見落としてたぜ……』って状態でした。ハヤブサさん使わせてもらいます！

（本当はよくないんでしょうねこういうの……でもネタ切れなんです……見逃してください……）

第107話 女の子たちと冬のプール？

「寒い……」

つい50話くらい前まではあんなに暑い中彰と歩いたっていつの間に今はもうこんなに寒い……

てかなんで冬なのにプールなんだろう……

なぜか今俺たちはプールにいます。

温水？そんな甘ったれたもんじゃないんだよ……

学校の外にある普通のプールなんだよ……

私立ならせめて屋内プールにしようぜ……

どれもこれも会長が悪かった……

「もうすぐ私も卒業だよね？」

「そうですねー」

完全に聞き流す体制で聞く。

「思い出づいくりとかしないといけないうねっ」

「そうですねー」

「聞き流してない？」

「そうですねー」

「プールに入りたくない？」

「そうですねー」

こうなった……

え？聞き流してた俺も悪い？

いや……まあそうなんだけどね……

でもまさか冬なのにプールなんて提案してくるのおかしいじゃん……

そんな提案だとは思ってなかったんだよう。

てことでプール。

でも俺だけが被害を被るなんてイラツとくるわけですよ。

そこで彰召喚。

簡単だった。

『会長の思い出づくりに協力してほしい』

って言ったら一瞬だった。

人がよすぎるのも損だよな……

まあ彰が杏奈と付き合ってたかったら人がよすぎるってよりも下心がある変態だったけど。

「なあ亮」

「なんだ？」

「会長の思い出づくりなんだよな？」

「もちろん」

「なんで会長は思い出づくりでプールを選択したのだろう」

「それは会長にしかわからない……」

「ほーら！来て来て！」

「さーむーいー！」

会長に引っ張られて円登場。

そこに優里も続く。

スク水で……

「おおおおおおお！？」

彰が目ざとく反応。

「会長」

「なあに？」

「なんでスク水なんですか……」

「だって学校じゃない」

「あ、そうですか」

変に律儀な人である。

だからこそ会長だったのかもしれないが……

「あれ？結衣は？」

俺は優里に尋ねる。

円は寒くて震えている。

「なんか今日見かけてないのよね……」

あいつもしかして逃げた？

まあ寒中水泳なんてやるタイプじゃないけど……

逃げるなんて……

俺も逃げたかったよ！チクシヨウ！

「さあ！体操しよ！」

「いよっしゃあああああああああ！」

会長の無駄に高いテンションにがんばってついていく彰。

でも声だしてたほうがまだ寒くないかもしれない。

そう思い俺も声を張り上げながら体操する。

「さあ！入ろう！」

会長はそう言うがすこしためらってしまう。

「亮から入らない？」

「亮くん先どうぞ」

俺のことをグイグイ押ししながらそう言うてくる。

うちの居候二人はなんとも強引だった。

だけど俺も男だ。

入ってやる。

俺は一気に入る！

「あれ？」

「冷たく……ないの……？」

「まあ水に浸かってないよりは寒くない……」

「だってあっちのほう氷はってるよ？」

「寒いっ！」

情報一つでこんなにも変わるものだとは思ってなかった。

「亮くん！」

いきなり会長に水をかけられる。

ところどころ硬いものが混ざっていたのは気にしないでおうっ。

「亮！これが思い出づくりか！」

「そっただぞ彰！」

俺は彰のことをとりあえず氷の近くに追いやっていた。

「だんだん冷たくなってるのはなんでだ亮！」

「それはお前の体から魂が抜けてる証拠だ！」

「え！？マジで！？？」

ここで信じてしまつ彰はとことん馬鹿だと思つ。

とりあえず一通り遊ぶ。

「さて、ほかになにしようか……」

なんかだんだん飽きていたころ。

「ねえ、みんな私一つ言つてなかったことがあるの」

会長がいきなりシリアスなムードで語る。

……寒空の下のプールの中で。

いきなりシリアスじゃなくなった！不思議！

「実は……」

みんな息をのむ。

「プールの使用許可とつてないんだよね」

と会長が言った途端会長はプールから出て駆け出した！

「ちょ！会長！？」

「誰かいるのか！？」

人が来た！

ここで俺は考える。

これって潜ってたほうが安全じゃね？と。

それをみんなに小声で伝える。

みんなそれに従い潜る。

そのおかげで見つかることはなかった。

俺たちは……

「うう〜いっぱい怒られたよ……」

「自業自得です」

「まあ楽しかったからいいや!」

次の日俺たちは風邪をひいた。

「この看病のために私は行かなかったんですよ?」

「へえ結衣はそこまで計算してたのか」

「もちろんです」

「で?本当の理由は?」

「こんな寒空の下プールに入る馬鹿がどこにいるんでしょ？」

「じじじじるよ……」

今日はまだ絶対に寒中水泳なんて危険なことやめようと思った日でもあり、会長の卒業ももうすぐだなと実感させられる日でもあった。

第108話 女の子と入学試験？（前書き）

俺：高校生クイズが終わったら結婚するんだ…

てことで今日？明日？

お台場に思い出づくりにいってきます

第108話 女の子と入学試験？

「ハンカチ持った？生徒手帳は？忘れ物ない？」

「だいじょうぶだよ優里お姉ちゃん」

今日は詩織の受験日だったりする。

なので俺たちは休み。

見送りは優里と俺だけ。

あと二人は寝ている。

「頑張つてこいよ」

「うん！」

「本当に忘れ物ない？」

母親みたいな優里だった。

「大丈夫だって。行ってくるね」

「「いつてらっしやい」」

詩織を見送って俺たちはリビングに戻る。

「ねえ亮」

「ん？」

「これって詩織のカバンじゃない？」

「……………」

俺猛ダツシユ。

「詩織！」

「どうしたのお兄ちゃん」

「忘れ物……………」

「あ！忘れてた！」

「もう忘れ物ないよな？」

「優里お姉ちゃんみたいなこと言うね。大丈夫だよ」

信用できない……………」

「行ってくるね」

「なあ詩織」

「？」

「緊張してないか？」

「シ、シテナイヨー？」

「大丈夫だよ、詩織。きっと合格できるって」

「ほんと？」

「ああ、あんなに受験勉強がんばって……た？」

「お兄ちゃん？」

「詩織が勉強してる姿ちょっとしか見てないような……？」

「い……行ってくるね！」

そう言って詩織は走って行ってしまった。

さて、俺も帰るか。

家に帰り優里とテレビを見たりしながら過ごす。

まだ二人は起きてこない。

「うー詩織の試験終わったかな？大丈夫かな？」

「詩織を信じなさい」

「そつだよね……ちょっと迎えに行かない？」

「別にいいぞ？」

俺たちは家を出た。

（詩織）

大丈夫。いつもやってたことを今日の試験でもやるだけ……

いつもやってたこと……

受験の天王山って言われる夏休み。

みんなで海に行ったなー

遊園地も行ったなー

あと優里お姉ちゃんの誕生日会でしょー

勉強は……少ししたな……うん……やった。

2学期。

私あまりこの小説で出なかつたな……

でもここで合格すれば私の出演率は上がるはず……！

冬休み。

ここでラストスパートをかけなきゃいけないんだよね。

お兄ちゃんからの誕生日プレゼントうれしかったなー

……あれ？私全然勉強してくない？

でもここで合格しないといろいろとアウトな気がするよ！（小説的に）

大丈夫……某熱い人も言ってた……

やればできる、と

試験用紙が配られる。

マークシート式。

こりゃ合格もらったね！

私には湯島天神の鉛筆がついてる！

……4択じゃない。

これは自分の実力でやれという神様のお導きだね。

神様もツンデレだなー

しょうがない……見せてあげよう……私の本気を……！

お兄ちゃん……ごめん……私……同じ学校に行けないかも……

く亮く

「お、ちょうど終わったんじゃないか？」

そろそろと学校から人が出てくる。

「あ！詩織！」

「本当だ。あれ？なんか様子が変わらないか？」

「詩織ー？」

詩織がこつちに気がつく。

そして詩織と合流。

「どうしたんだ？様子が変だぞ？」

「ちょっと本気を出しちゃったからね……あはは」

「どうだった？」

「う……」

詩織が涙目になる。

そして俺に抱き着く。

「詩織……？」

「だめだったかもしれない……！」

「大丈夫だよ詩織。まだ最後までわからないじゃないか」

「うん……」

本当……受験って合格発表までわからないもので……

合格発表の日。

「合格してた」

「おめでとう」

「なんか主席合格だからあいさつ文考えてきてねって言われた」

第108話 女の子と入学試験？（後書き）

そつえば今日誕生日だ……

第109話 女の子たちと卒業式？（前書き）

どうして人って人を好きになるんでしょうね？

2次元のほうがいい、それはわかっているはずなのになぜか好きになっちゃうんですよね。

やっぱり本能なんでしょうかね？

このゲームおもしろいといいなーと思ってやったゲームが抜きゲーで泣きそうになりました。

そういえばフォルテシモが18禁ゲーム化するらしいですね。

かなり前から発表されてたらしいんですが先日初めて知りました。いつ発売なんだろうなー

第109話 女の子たちと卒業式？

卒業式前日。

会長が家に来た。

「どうしたんですか？その荷物」

「フラグの回収に来たよ」

おっと。話がかみ合っていないようだ。

「フラグの回収？なに言ってるんですか？」

「お正月に亮くんと結衣ちゃんがフラグ建ててくれたじゃん。その回収をね」

「会長。よく聞いてください」

「うん」

「なんでそこで素直なんですか！なんかやりにくいな……」

「ほらほら話すことがあるならさっさと話す」

「いや、ね。女の子が男の家に住むってどっかと思っんですよ」

「優里ちゃんたちだってそうじゃない？」

「優里たちには特別な事情があるし……それについて忘れがちですけど会長はお嬢様でしょ？なにかと危ないじゃないですか」

「亮くんがボディーガードになれば全部解決するんじゃないかな」

「俺にそんなこと期待しないでください」

「ほら、暁 護衛みたいにさー」

「なんで会長が暁の護 知ってるんですか……」

「G線上 魔王も知ってるよ？」

「だめだこいつ……早くなんとかしないと……」

「それよりも、その辺は大丈夫だって」

「しょうがない……会長。正直に話します」

「うん」

「本当はこんな話するのはどうかと思うんですけどこの際仕方ありません」

「うんうん」

「実は……」

「実は？」

「金銭面で会長を養える自信がありません」

「養うだなんて。プロポーズみたいだね」

「プロポーズとかはどうでもいいですから。とりあえず金銭面で無理です」

「しょうがない……」

「？」

「私ここに毎月お金入れる」

「いや……それもどうかと……」

「ほら、なんか部屋を借りるみたいな感じで？」

「そういえば会長の部屋もありませんよ？」

さすがに6人も住むとなるとちょっとキツイものがある。

「亮くんは私と一緒に暮らしたくないの!？」

「できれば」

「こつなつたら意地でもここに住んでやる」

「どうするんですか?一応この家の家主は現在俺ですけど」

「あ、もしもし?亮くんの叔父様の電話番号調べて」

最悪な相手に電話をかけようとしていた。

みんな忘れているかもしれないが『上園ゆき』の父親な。

「ちょっと待ってください。会長」

「なあに？」

「話し合いましょう」

「そうだね。平和的解決が一番だもんね」

てことで会長がうちに住むことになった。

そして卒業式。

知り合いつていっても会長くらいなもので……

爆睡していた。

第110話 女の子たちと出会いの物語？（前書き）

神様のメモ帳で早く黒つぐみのライブをやってくれないかとうずうずして待っているカレーライスです。

さよならピアノソナタの音楽がアニメで聴けると思っているとなんか感激ですよね。

第110話 女の子たちと出会いの物語？

「亮さん。あなたはついにすべての鍵をそろえました」

「は？なに言ってるんだ結衣」

「よって新しい話を聞くことになります」

「え？円まで？なに？なんなの！？この空気！？」

「こ……心して聞くように……」

「優里は恥ずかしがってるのな」

優里顔赤いし。

とりあえずなんか居候している3人がいきなりこんなこと言い始めた。

「まあ亮さん。聞いてくださいいな私たちの過去を」

「いや3人のは聞いたでしょ。詩織の聞かないと」

俺は詩織を探す。

「詩織はちゃんと部屋で勉強してるよ」

受験が終わったのにえらいな。

まあ受験前あまり勉強してるところなんて見なかったが……

「円と結衣もそれを見習おうな？」

「「う……」」

「このままじゃ話進まないでしょ……」

「じゃあ優里が話してくださいよ」

「わ……私……？」

「ほらほら〜」

「わかったわよ……」

優里は咳払いをする。

「今から話すのは私たちが出会ったお話。まあ辛い話じゃないから軽い気持ちで聞いてくれればいいわ」

私たちが出会ったのは私が中学2年生のときだったの。

児童養護施設に円と結衣はいた。

「ねえ、ちょっと待って」

「どうしたんですか優里？」

「私が出会う頃もう円と結衣って出会ってるじゃない」

「そういえばそうだね」

「確か私たちは児童養護施設で出会ったんです」

「結局みんな児童養護施設にいたんじゃないか……」

「あれ？もしかしてこれって別に語らなくてもいいんじゃない……」

「だめです優里！優里が変なフラグたてたせいで語ることは必須になっっています！」

「私のせいなの!？」

「なんか秀困氣的にまずい……」

「ここは流れを変えて……」

「優里たち以外に親父はだれもたすけなかったのか？」

「私たち亮のお父さんたちがなにをしたらたかも知らないし、むしろ詩織が来たことで私たちのほかにもたすけられた子がいたんだな……
……って思ったもん」

「そういえば亮くんのお父さんってなにしてる人なんだろうね？」

「私の借金も簡単に返してましたです」

そう言われるとなにも答えられない。

正直親父たちの仕事なんてむしろ親父たちに興味なかった。

でも親父たちのおかげで優里たちと出会えた。

そこは感謝するべきなのか……？

でも一人でいるさみしさとかはなくなった。

時間が経つのが早くなった。

それだけ優里たちと一緒にいることが楽しいということになる。

「もうこれ結婚するしかないんじゃないですか？」

「なんでお前は勝手に人の考えに入ってくる……」

「一夫多妻とか亮さんかつこよすぎます。非リア充から見たら『お前みたいのがいるから俺たちは女の子に見向きもされないんだ』と言われますね」

「それあかん」

「まあとにかく！私たちは児童養護施設で出会って亮くんの家に来た、それでいいんじゃないかな？」

「ストップ」

「「「?」「」」

締めようとした刃を俺は制する。

「そついえばなんでお前らはあのタイミングでうちに来たんだ?」

「亮さんのお父さんに『俺、帰ったら結婚するんだ』って言われて

「ごめん。まったくわからない」

「なんか『俺はもうすぐ死んじゃうから、そしたら息子が悲しむから行ってあげてくれない?』って言われたのよ」

もうすぐ死ぬ……?」

死ぬことがわかった?

なんで?

「あのときは冗談だと思ってたんだけどね……」

「亮のお父さん優しかったもんね……」

「お母さんは……うん怖かったよね……」

「怖かった……」

「私たち中学生なのに叱られましたもんね……」

「でも叱ってくれてっていうものはいいものよね」

「そつですね」

とりあえず謎がまた増えた。

第111話 女の子たちと春休み？ 3月26日（前書き）

きつと今日keyの出張購買部に行くだろう……

ソフマップも行かなければ……

金は大丈夫かな……

第111話 女の子たちと春休み? 3月26日

「春休みです!」

「思えば長かった1年間……」

「そういえば亮と一緒に住み始めてもうすぐ1年ね」

「私はお姉ちゃんたちの1か月後かな」

「私は始めたばっかね」

居候が5人もいる……

会長なんてもう普通にうちの住人だよ……

タオル1枚で風呂から出てきたときは本当に焦った。

まあ円と結衣もタオル1枚で出てきたことはあるが……

それにしたってなじみすぎだろう……

「人生ゲームやろう」

なんでそうなる……

「今亮くんが『なんでそうなる……』って顔したから説明してあげる」

「丁寧にどうも。それより会長」

「まずなんで人生ゲームかっていうとねやっぱりこの先の人生はゲームみたいにはいかないぞっていう……」

俺のこと無視してません？

これしてるよね？

俺のこと『亮くん』って呼ぶのはいいけどそれじゃあ田とかぶるって言おうとしたのに……

人生ゲーム開始。

「やっぱり人生って最初からお金持ってるのはおかしいと思うのよ」

「あんたは持ってるでしょうが」

「まあまあ。生まれた時はみんなお金なんてもってないから」

「これ大学卒業くらいの設定です」

「それでも3000ドル最初から持ってるっておかしいよね？」

「それは、まあ」

「てことで最初はお金持っていないってことだし……」

最初から横暴だった。

最初に入ろうか悩んでた自動車保険もそれで入れないことに。

「他の4人はそれでいいのか？」

「真美さんの言うことにも一理あるしそれでいいんじゃない？」

「お金なんて自分で貯めてなんぼです」

「さあ！やるよ！」

「円お姉ちゃんやる気だね……」

今度こそ開始。

「無難にサラリーマンで行くか……それとも挑戦するか……」

最初にスポーツマン等とても儲かる仕事か、サラリーマンみたいに堅実な仕事。どちらかを選ぶことができる。

しかしスポーツマン等はルーレットの数が大きすぎると就職できない可能性がある。

「亮くん」

「またですか……」

「最初にルーレット回してからコース決めるのなしね」

「う……」

悩む……

でも俺だって男だ。誰だって夢は大きいものを持たないとな。

「いざ！」

職業決定。

優里 サラリーマン

円 スポーツ選手

結衣 科学者

詩織 アイドル

会長 弁護士

俺 フリーター

ええ。読めてましたよこの展開……

わかってたよ俺がフリーターになることくらい……

「亮さん。将来は私たちが養ってあげますね」

この一言が胸に刺さる。

「フリーターだってやればできるってところ見せてやる！」

さっそく借金。

「婚約指輪ってさ……3か月分の給料じゃないの……？こんなのか月分の給料じゃ買えないよ……？」

「借金も利子をつけよう」

「なんですと!?!」

「ルーレット5回につき2倍で」

「ひどい!」

「まあそれが現実よね」

「亮くんがんばって」

「亮さんも借金ですか……お金を借りるのはよくないですよ」

「お兄ちゃん!私がんばるから!」

なにをがんばるんだ……

「あ、結婚だ」

ここで結婚するかしないかを選ぶ。

「亮……結婚しちゃうの……?」

優里が切なそうに訊いてくる。

「亮くん私たちを見捨てるなんてしないよね?」

円の目が笑ってない。

「お、お前たち？これはゲームであってだな……」

「浮気ですか！亮さん！」

「ちげえよ！わかったよ！結婚なんてしねえよ！」

俺はいま株に手を出している。

結婚なんて必要ない。

これは絶対未来で化けるぞ。

それを一人で大豪遊してやる……

今に見てる……

「なになに……株が大暴落？一株につき5万払う（全員）」

「私は株やってないわ」

「株に手出してるの亮さんだけじゃないですか？」

「なんですとおおおおおおおおおお！」

もうだめだ……

「亮くん……臓器売るしか道は残されてないんじゃないかな？」

会長が怖いことを言ってきた。

そっか俺の人生なんてこんな最悪な道をたどるのか……

人生ゲームでとても憂鬱になった1日だった。

第111話 女の子たちと春休み？ 3月26日（後書き）

進路どうしよう……

第112話 女の子たちと春休み？ 3月29日（前書き）

明日から学校なのにもかかわらず宿題が半分しか終わってないカレ
ーライスです。

最近ボクラノキセキという漫画を買いました。

結構おもしろい…（まだ1巻しか読んでませんが）

なんか顔は長いんですが魔法とか前世とかの厨2臭さがけっこういいです。

フォルテシモほど厨2臭くはないので普通の人でも大丈夫かと

なんとなく絵がアホリズムに似てる気がする……

知らない人はつまらないですねこんな話

第112話 女の子たちと春休み? 3月29日

『春。バカが活気付く季節だ』と誰かが言った。

実際その通りだ。

「なんでこんなことになってるんだよ……」

「声までかわいい!？」

「結衣すごいね!」

「ふっふっふ……私がやればこんなのちよろいちよろい」

「お兄ちゃ……お姉ちゃんかわいいね」

「詩織!？なんでわざわざ言い直したの!？」

「その見た目でお兄ちゃんはないでしょ」

優里の言うとおりだった。

鏡の前には美少女がいた。

俺が手を動かすとその美少女も手を動かした。

てか俺だった。

会長が今日いなくてよかった……

絶対にからかわれてた……

そもそも事の発端は彰のせいだった。

『世の中に男の娘は存在するのか？』

そんなことを彰が言いだし、結衣と討論していた。

そこで結衣が『いる』と言い、彰が『いない』と言った。

『私がちゃんと見つけてきます！』

そしてこうなった。

「亮さんは女の子になったわけじゃありません。ちゃんと男の娘ですよ」

「たしかに俺の息子が小さくなったけどあるもんな」

「真昼間から下ネタなんて、亮くんも変わってるね」

「円に変態扱いされた!？」

「でもこれはなに？」

詩織が俺の胸を触る。

「硬い……」

「胸筋ですね」

「なあ結衣。お前のその技術売れば高く売れるんじゃない……」

「亮さん……私はお金に興味なんてない……とは言い切れませんが自由にやりたいんですよ。私は私の道を行くのです」

「厨2……」

「誰ですか！今不名誉なこと言ったの！！性別変えますよ！？」

「冗談に聞こえない……」

「で、結。これどうやって戻るんだ？」

「ここにある薬をもう一回飲めば……おっと手が滑った」

結衣が薬を円に投げる。

「ちよつと結衣危ないじゃない……手が勝手に動く！？」

円が薬をそのまま排水溝に。

「なんか手洗いたいわね」

優里が水を流す。

「お姉ちゃんたちすごい……」

「すぐくないからね！？どうすればいいんだよ……」

「なくなっちゃったもんはしょうがないです。効果が切れるのを待ちましよう」

「ごめんねー亮くん」

「なんか手が急に洗いたくなっちゃってねー」

「しょうがない今日は家を出ないようによしよ……」

「せっかくの春休みなんだしどこかに出かけない？」

「優里さん……？完全に顔がにやけてますよ？」

「いいね！それ！デパート行こうよ！」

「賛成です！」

「すぐに行こう！」

みんなノリノリだ……

「俺は留守番しておくよ」

「亮！」

「な………なんでしょうか………」

「その声で俺なんて言わないで！そんなスタイル抜群のくせして…」

優里の視線が俺の腹回りに……

「（ジー）」

「なんでしようか円さん……？」

円の視線が俺の胸に……

「うがーーーーー！！！！」

「うおっ！？」

なんかとびかかってきた！？

「うらめしい……このなにも苦労しないで手に入れたであるうこの
お腹回りがうらめしい……」

「なんの努力もしてないのにこの胸を手に入れるなんてうらめしい
……」

「二人とも落ち着いて！」

「なんか口調がだんだん女の子っぽくなってきましたね」

「にやにやしながらそんなこと言ってないで早く助けて！」

救出された俺。

「外では口調に気を付けないと変人扱いされますよ?」

「善処する……」

「じゃあ行きましょ」

そのままデパートに連れて行かれる俺。

「さて、まずは洋服でもみましょうか(にやにや)」

「それがいいね(にやにや)」

「じゃあ早く行くです(にやにや)」

「お姉ちゃん早く!」

みんな俺を見ながら言うてくる。

詩織はにやにやしてない。

それからかわれてないってことだよな?本気にされてるってことだよな?

「亮あきこれ着てみれば?」

「ちよつと待って。亮あきってだれ?」

「あんたでしょ?亮あきを他の読み方で亮あきでしょう?そもそもその格好のあんたを亮あきって呼ぶのもなんかね……」

「亮ちゃんかもしれないじゃないか！」

「亮ちゃんていいの？」

「亮でお願いします」

「で？着てみない？」

「お………私はいいよ（否定）」

「そんなこと言わずに、ね？似合うから」

「優里さん？目が笑ってませんよ？」

「ほじっ？ね？」

「似合うっ」

「亮ちゃん買ったちゃえば？」

「買ってあげるのよ」

「（亮さんすっかり言葉遣いが女の子です……）」

「お姉ちゃんかわいい」

「涙でてきた」

「優里ちゃんたちじゃん！」

「彰くんだ」

ほう？彰……

そういえばあいつのせいで……

「お？そっちのかわいい娘だれ？」

「亮あきです。あなたが彰さんですか？聞いていたよりかっこいい方です
ね」

俺はすかさず笑顔をつくる。

「え？ほんと？」

「ええ。もう付き合いたいくらい」

俺は彰に身体をよせる。

そしてすかさず関節技をきめる。

「杏奈！浮気だ！」

そう言ったとたんに杏奈がすぐにでてくる。

「彰？覚悟はいい？」

「え？ちよ……わけがわからないんですが……」

第113話 女の子たちと春休み? 4月1日(前書き)

パソコンのデータが3分の1くらい消えてしまったカレーライスです。

なんで消えたんだ……せつかくやったゲームのデータも全部消えた

……

普通入学式っていつでしたっけ?春休みをいつ終わりにすればいいか正直わからなくなってきたる自分がいます。

詩織が入学辺りに詩織の過去編やりたいんですよねー

だんだん過去編をやる間隔?が狭まってきたるような……最初優里

は約40話目で過去編 円が約80話目 結衣が約100話目 3

人の出会いが約110話目 そして詩織が120話目(予定)

これはネタがきれてるってことでは……

第113話 女の子たちと春休み? 4月1日

世の中はエイプリルフルである。

しかし我が家ではエイプリルフルにあえて本当のことしかしゃべれないようにするのはどうか? みたいなことになった。

正直なことを言っているかどうかの判定は結衣が作った嘘発見器を使う。

本当は嘘発見器ってまだ正確に測定できるものは開発できてないらしいね。

人間って不思議。

本当に人間のすべてがわかる日はくるのかね?

「嘘を言ったらどうしましょう?」

「某使いじゃない番組みたいに〇〇アウトー的な感じにすればいいんじゃないかな?」

「痛いのはちょっと」

「私も優里ちゃんに同意で痛いのはいやかなー」

なんか女性陣が盛り上がってる。

てかこれ本当にやらないとだめなの?

「お兄ちゃん」

「どうした詩織？」

「いま本当にやらないとだめなの？って顔したでしょ？」

「あ、わかる？」

「ふふん。もう1年間も一緒にいるからね」

詩織が勝ち誇ったように胸をはる。

円ほどじゃないにしろ胸無いよな……

「お兄ちゃん今失礼なこと考えてる」

詩織がジト目で見てくる。

「大丈夫だ。いつか成長する」

「お兄ちゃんのバカ！！」

詩織はそう言って女性陣に混ざった。

「じゃあそろそろ始めるです！」

結衣が1人1人になにか機械をつけていく。

「結局罰ゲームはどうなったんだ？」

「恥ずかしい過去を暴露」

嘘を言えないときならではの罰ゲームだ……

嘘を言えたらこんな罰ゲーム適当に嘘ついてしまえばいいからな。

嘘を言えない戦いが始まった。

「」「」……「」「」

無言。

「なにかして遊びましょうか！ねっ！」

結衣がこの空気に耐えかねたのかそう提案してくる。

「なにして遊ぶ？」

それに優里ものる。

「ダウトなんてどうかな？」

「絶対楽しめないダウトになるぞ？」

「というよりカードゲーム系は全部だめじゃないかな？」

「真美さんの言う通りだよ円お姉ちゃん」

「むっ……」

そしてまた無言。

どうにもならないな……

「優里。今の体重は？」

「」「つ！」「」

無言を打破するために俺は何気なく聞く。

「……45キロ」

「優里アウトです」

「亮のバカ！！」

「じゃあさっそく恥ずかしい過去でも暴露してもらいましょうかね？」

「恥ずかしい過去……学校の先生をおか

「おかあさんって呼んじゃったとかベタですよね」

「ベタで悪かったわね」

それからもこの辛い戦いは続いた。

俺の恥ずかしい過去も聞かれた。（主に厨2病の話とか）

「これ来年は絶対やらないようにしよう……」

「亮さん知ってました？」

「なにを？」

「私って今日誕生日なんですよ？」

「結衣それはさすがにアウトだろ」

「いやこれは本当なんですけどね」

「マジで？」

「マジです。まあ今日楽しかったんでそれでいいです。誕生日教えてなった私も悪いですしね」

「今度プレゼント買ってくるよ」

「期待してるです」

第113話 女の子たちと春休み？ 4月1日（後書き）

居候が5人もいるとめんどくさい……

ちなみに誕生日系基本忘れてました……

詩織の思い出したときにはいろいろと手遅れだった……

だから亮の誕生日もやってないんですよね……

第114話 女の子たちと新年度？（前書き）

文化祭で忙しくて更新できませんでした。

まあそれでもはやたとねぎまの映画は見てきたんですけどね。

9：1ではやての勝ちですね。

ねぎまの1は絶望先生に笑ったからって感じですかね。

第114話 女の子たちと新年度？

「いいな。詩織……」

「ほら、円文句言っていないで行くわよ」

春休みも終了し、今日から新学年となる。

詩織に関しては新入生なので1日春休みが長い。

てか俺進路どうするよ……

まだ決まっていってやばくない？

まあなるようになる……

「って言っていると絶対に失敗しますよね」

「結衣はたまに人の心と会話するよな」

「それほどでも」

「ほめてないから」

とりあえず学校。

クラス替えか……

どうなった？

「「……………」」

「2人とも？」

「結衣……これが作者に気に入られたキャラの特権なんだね……」

「作者には失望したです……使いやすさでは私が一番だと思ってたのに……」

結衣と円と彰と杏子は違うクラスになりました。

「よろしくな！上園！」

優里と優輝と夏希は同じクラスになった。

知り合いはこんなもんか……

うん……まあびっくりだな違うクラスになったのは。

作者本当に大丈夫か？

ちゃんとできるのか？

毎年ある安定の自己紹介。

俺はまあ当たり障りのないことを言うておく。

どうせみんなそんなもんだろ。

「俺は義妹が大好きです。妹じゃありませんよ？義妹です！」

自分の好きなものをここまでカミングアウトしてる人初めて見た……

もう結構引かれてるよ……

かわいそうだよ……

でも自分の好きなものをここまで堂々とと言えるなんてすごいやつだな……

なんとなく彼とは後でかわる気がする……

「それお前の厨2病が言ってるのか？」

「なんで優輝まで心と会話できるんだよ……」

「サブキャラではその力はデフォだからな」

そうだったのか……

とりあえず家に帰る。

会長の姿が見当たらない。

まあ大学にでも行ってるんだろう。

ちゃんと彼氏見つけて居候生活やめてもらいたいんだけど……

優里たちは仕方ないとして会長はな……

「納得いきません……これは納得いきません……」

結衣がなにかぶつぶつ言っている。

「これはタイムマシンを開発するしかないんですか……？でもそれは4次元に手をだすということ……そんな神をも恐れぬ行為をしてしまっているんですかね……？」

「やめなさい」

優里が結衣の頭をたたく。

「なにをするんですか！」

「そんなことしないで自分の運命を受け入れなさい」

「せめて今の記憶を春休み中の私に飛ばすことの許可を！過去に行つてうまくやってくるです！」

「あなた……今それやったら春休み中のお話少し変えなきゃいけなくなるわよ？」

「そんなの作者にやらせればいいです！」

「だめだつて」

「優里」

「え？」

「顔がにやけてるです。優里は同じクラスになれたからって……」

「に、にやけてなんかないわよ!？」

「優里のばかあああああああ!」

そう言って結衣は部屋に閉じこもってしまった」

「今日は結衣の好きなものでもつくろっかしらね」

そう言って優里は台所に立つ。

まあ新学年がんばりましょうか。

第115話（番外編？）女の子たちと緊急会議？（前書き）

まずはじめに。

ごめんなさい。正直今回のお話かなりひどいです。

いつもよりひどいってことは相当なものになつてはるはずですよ。

まあまだ書いてないのでどうなるかわかりませんが…

あ、最近『間違つた言葉』とかあるじゃないですか？

たとえば「姑息（漢字これであつてますかね？）」「卑怯なこととかではなくその場しのぎみたいな意味らしいですね。

そんな間違つた言葉ですが正直思ふんですよ……

言葉なんてしょせんは道具。

時代とともに意味も変わつていくんじゃないかって。

結局言いたいことが伝わればそれでいいと思ふんですよ……

実際そんなこと言つてたらこの小説たぶん間違つた意味だらけだと思ふんですよ。

思ふんですよ。

みなさんはどう思いますか？

第115話（番外編？）女の子たちと緊急会議？

「緊急会議です！」

「私の入学式は！？」

「どうせ新人生挨拶考えてないんだから次の話にまわしてもらいなさいです！」

「あ、そっか」

詩織が納得しちゃったよ……

考えてなかったのかよ……

「結衣、会議ってなにをするの？」

「いい質問です円！あ、ちょっと待ってください……」

なんか結衣が考え込んでる。

「そんなのもわからないのですか円！」

「ええー……」

いきなり円が怒られてる。

てかなんだこの結衣のテンション。

あ、結衣のテンションと言えば最近結衣ちょっと放送コードにひっかかりそうなこと言わなくなったな。

いいことだ。

「どつせくだらないことでしょ？そんな暇があるなら勉強でもしておきなさいよ」

「優里！これはくだらないことなんかじゃないです！」

「へえ」

「私たちの世界ではもう時が早1年経とうとしています」

「」「うんうん」「」

みんなうなづく。

「そろそろ新要素とかほしくね？って」

「さて、勉強でもしようかな」

「私入学式の挨拶文考えてくるね」

「私の胸が大きくなるなら考えてもいいかな」

「俺は部屋の掃除でもしようかな」

「待ってください！調子乗りました！」

結衣が必死に引き止める。

「わざわざこんな別空間まで用意したんですよ!?!真美さんもいないんですよ!?!」

「あ、ここ別空間だったんだ」

優里あっさりしすぎ。

「なにそれすごいね」

円棒読み……

「新要素!新要素がほしいです!」

「例えば?」

俺は結衣にたずねる。

「それを今から考えるんですよ!」

てことで会議開始。

「さあみんなどんどん出してくださいね」

「はい!」

「はい。円」

「亮くんが彰くんの借金の保証人になったんだけど彰くんが逃げちゃってそれで亮くんが彰くんの借金を肩代わり、でもそんな借金払えるわけがない。そんなときに借金取りの人が借金の返済方法を教えてくれる……豪華客船に乗ってじゃんけんして勝負したり、ビルとビルの間を鉄柱一本で渡ったり……」

「円。どこかで聞いたことある設定なので却下です」

「ええ〜」

円に電流走る。

なんかごめんなさい。

「じゃあ……はい！」

「はい。詩織」

「超能力要素を追加！」

「ほうほう」

「ここは超能力者が集まる街……そこでお兄ちゃんはレベル5の超能力者に追われていた。お兄ちゃんの持つ能力は相手の超能力を消す程度の力……」

「詩織……なんかそれ魔法もできそうなので却下で」

「じゃあお兄ちゃんの能力は手から和菓子を出す能力で！」
ちから

「それは亮さんがいろんな人と付き合いそうになるのでそれも却下です」

「じゃあ今度はお兄ちゃんが前世でお姫様やってて学校でそのお姫様に仕えてた人を前世にもつ人が出てくるってのは!？」

「なんか私たちに奇跡が起こりそうですね。ってさつきからなんで詩織はそんな厨2要素ばっかなんですか……」

「1年遅れた厨2病？」

「はあ……もつとパクリじゃないのだから……」

「じゃあ……」

「詩織……今度は厨2くさくないですよね？」

「いける!」

「じゃあどござ」

「漢字を使って戦う……」

「結局パクリじゃないですか!」

「むう……」

もうこの会議聞きたくないんだけど……

「優里? なにかありませんか？」

「亮が私たちの護衛する。しかもけっこう強い。その強さの秘密は禁止区域ってところでお父さんに……」

「なんで優里がその作品を知っているのかはつつこまないでおきます。てか優里もこの流れにのるとは思いませんでしたよ!」

「しょうがない俺がマシなのだしてやろう」

「おお!亮さん!期待してますよ!」

「麻雀のルールもしらない俺が代打ちの人に勝ってしまうお話なんてどうだ?」

「なんかどつかで聞いたことある話なんですけど……」

「倍プツシュだ……」

「アウトオオオオオオオオオオオ!」

「ちっ……ならこれならどうだ?」

「なんです?」

「俺が麻雀を打つと自分の点数が±0で終わってしまうお話」

「さつきからなんで麻雀……」

「嶺上開花!」

「かつてに咲いててください」

「じゃあそう言う結衣はなにかあるのか？」

「私ですか？もちろん」

「なにに？」

「教えて」

他のメンバーも興味津々だ。

ここまで俺たちのを批判したんだ。すごいんだろう。

「まず修学旅行が舞台です」

「修学旅行終わってるぞ？」

「時なんて簡単に戻せます」

「そうですね……」

「修学旅行の帰りのバスが急に崖から落ちてしまい……あ、これネタばれになっちゃっ……」

「どこかで聞いたことのある設定だけど話さない」

「やっぱり世界の秘密を知るお話なんてどうでしょうっ？」

「結衣だってパクリじゃねえか……」

「お前らには敵わねえな……サヨナラホームランだ」

「全然似てない……」

「あなたの目がもう少し、ほんのちょっとだけ見えますように……」

「泣きそう」

結局この会議なんのためにやったんだ？

第115話（番外編？）女の子たちと緊急会議？（後書き）

これ元ネタわからない人たちにはけっこうキツイですよね……

まず一番最初は『賭博黙示録（黙示録だけじゃありませんけど……）

カジ』

次は『とある魔術の書目録』その次の手から和菓子は『D .?』

前世のやつは『ボクラノセキ』漢字を使うのは『アホズム』

護衛は『暁の衛』倍プツシユは『アギ』闇に降り立った天才』

嶺上開花は『咲（まずい伏字にする部分がない……）』

てか嶺上開花って打つとちゃんと出るんですね。初めて知りました。

最後は『リトバスターズ』ですね。

なんかごめんなさい……

第116話 女の子の入学式？（前書き）

そろそろ長編でもやってみようかと思えます。

きつと明確な目的があればくだ感拭えるはず……

まあそれやるならまずは大きく流れたてなきやいけないんですけど

……

自分正直苦手っす……なんか書いてて適当に浮かんだのぼんぼんいれてるだけなんで……むしろキャラたちが勝手になんかやってくれるんで……（なんだその妄想……）まあちよつと頑張ってみます。でももし長編やるとしたらどんなのがいいですかね？

異世界に行っちゃうとかも正直ありだと思っんですよ（主に結衣のせい）

まあ一番最初に考えたのは亮のお父さんのことかだったんですけどそれやっちゃうとこの作品終わっちゃうんですよね（笑）

亮が記憶喪失になるのもありかなって思ったんですけど前作でも記憶喪失ネタはやったし……しかもそんな長編にできる自信がない……

みなさん参考程度にきかせてください……これ切実に……

さすがにこのくだくだ感はなくさないとヤバいんで……

第116話 女の子の入学式？

「どじする……」

俺は真剣に悩んでいた。いや、考えていた。

「わかった……グーを買占めだ!!」

「亮さん！なにやってるんですか!?!」

「ほら！結衣!!グーの買占めだよ!!」

「なに前回のネタ引きずってるんですか!?!」

「いや新しい風をいれようと……ね?」

「知りませんよ!?!」

「だって詩織の入学式だよ?」

「関係ないんですけど……」

「俺たち休みだよ?」

「まあ、入学式ですからね」

「なにすればいいんだよ!?!」

「そんなの自分で考えてくださいよ!?!」

むづ……自分で考えるのか……

「今回俺なにもしなくてよくね？」

「自分がそれでいいと思うんならそれでいいんじゃないですか？」

「よし！なにもしない！！」

「あ、どうせなら私とえっちいことします？」

「最近そんなこと言わなくなったなって思った矢先！？」

「もう高3ですし、大丈夫な年齢ですよ？」

「まあ確かに」

「亮さんだって魔法使い目指してるわけじゃないでしょ？」

「そりゃそつだ」

「じゃあいますぐやりましょう」

「いや……でも……」

「あ、全員一緒がいいですか？私はそれでもかまいませんよ？」

「もうやだ……」

「詩織」

「もう……せつかく私が新入生挨拶なのにお兄ちゃん見に来ないなんて……」

朝、詩織が亮に来るのか訊いたところ「さすがに保護者席に座れない」と断られてしまった。

「保護者席に座るのくらいいいじゃん」

「なにがいいの？」

いきなり後ろから声がした。

「ふえ！？」

「なに驚いてるの詩織？」

「なんでゆきちゃんがいるの……」

詩織が振り返るとそこには上園ゆきがいた。

「あ、ゆきちゃんはお兄ちゃんの従妹だよ？」

「ご丁寧に説明どうも。で、いる理由ね。この辺で出てこないと私空気だし。そろそろ攻撃に、ね？」

「？」

「まあまあ。そんな細かいこと気にしないの」

「よく合格できたね」

「あんた失礼なこと言ってるわよ……」

「でも知り合いがいてよかったなー。同じ中学校からここに来る人いなかったし」

「え？さっき仲良さそうに話してなかった？」

「え？そんなことないよ？だって私今来たばっかだし」

「うーん……気のせいかな？」

「気のせいだよ」

「まずは自分のクラス見るんだっけ？」

ゆきが話を変えるように言ってくる。

「たぶんそうだと思うよ？」

「じゃあ早く見に行きましょう」

「あれ？まだ見てないの？」

「詩織が来るまで待ってたの」

「私が入学すること知ってたの!？」

「入学の説明のとき見かけたからね」

「なんで声かけてくれなかったの……」

「いや、入学式の時に出会ったほうが衝撃的でしょ？」

「それだけの理由で……」

「さっ！見にいこっ」

詩織はゆきに手を引かれながらクラス分けを見に行く。

「神はきつとこつならないと困るのね」

「ゆきちゃんなに言ってるかわからないよ……」

詩織とゆきは同じクラスだった。

「教室行こっ」

ゆきと詩織は自分たちの教室を目指す。

自分たちの教室でHRがあり、そして体育館に移動。

式はなにも問題なく進んでいく。

そして新入生挨拶。

『新入生代表。山崎詩織』

「はい」

詩織が前に出る。

途端に新人生の一部からざわめき。

それでも詩織は気にせず続ける。

「本日は私たちのためにこのような盛大な入学式を……」

「いや〜詩織かつこよかったよ」

「緊張したよお……」

「でもあのざわめきなんだったんだらうね？」

「確かにそうだね〜」

「やっと……見つけた……」

「「？」」「」

後ろから声が聞こえたので2人は振り返る。

無音……

「え？え？」

まず一番最初に声をあげたのはゆきだった。

「なんで……詩織が2人？」

「さあ、帰ろう」

声をかけてきた詩織はそう言った。

第117話 女の子の忘れたかった過去? 〔詩織編〕(前書き)

最近更新できなかつた理由を正直に話そうと思います。
まずひとつ目……コードギアスの一番くじのC賞アーニヤのフィギュアがなかなか当たらなくてイライラしてできませんでした。6400円でなんとか手に入りました。

ふたつ目はゲームがなかなか終わらなくて……

PSPでなにかおすすめのゲームありませんかね?

RPGがやりたいですね。RPGで好きなのはペルソナ3とかでしょうか

PSPでやったゲームは少ないですが(シリーズと書いてあるのは出てるのは全部やったと思ってください)

ペルソナ3

ペルソナ2 罪

ラチエクラ5?

勇者のくせになまいきだ

CLANNAD

光見守る坂道で上下

AIR

リトバス

シャイニングハーツ

空の軌跡シリーズ

ダンボール戦記

桃鉄

エヴァ(パチンコ)

ととの

パタポン1

なのは

あかね色に染まる坂

太鼓の達人シリーズ

初音ミクシリーズ

B R S

A K I B A、S T R I P

コープスパーティーシリーズ

塊魂

メタルギアシリーズ

グラセフシリーズ

ガンダムシリーズ

アナザーセンチュリーエピソードP

シュタインズゲート

アマガミエビコレ+

このくらいでしょうか……？（思い出せてないのもあるはず）
なにか面白いゲームあったら教えてください。

第117話 女の子の忘れてかった過去？ 〈詩織編〉

「詩織知り合い……？」

ゆきがたずねる。

「知り合いじゃないわけないよね」

たずねたがすぐに訂正する。

「……誰？」

「へ？」

「え？」

詩織の発言にゆきだけではなくもう一人の詩織も驚く。

「鏡？それとも立体映像？」

「なに言ってるの詩織……？ほら、沙織だよ？」

「結衣お姉ちゃんの発明かな？すごいなー」

「詩織、本当に知り合いじゃないの？」

「うん。知らないよ？」

「そっか。じゃあ帰ろう」

「そうだね。入学式来てくれなかったお兄ちゃんに文句言わなきゃ」
「……………よそれ」

「「？」」

帰ろうとして沙織に背を向けた二人だったが沙織から声が聞こえたので振り返る。

「なによそれ……………なんで詩織が私以外に『お姉ちゃん』なんて言うてるの？」

ゆきは沙織に恐怖を覚える。

沙織から出ているのは嫉妬。

いや、むしろ自分の子供を誘拐されたときみたいな殺気を感じる。

「聡ちゆう！！」

「はいよ」

いきなり沙織のそばに一人の男子生徒が現れる。

「詩織を連れて帰る。多少強引でもかまわない。できる？」

「それが命令なら」

「行って」

ゆきは詩織をかばうように前にでる。

「ごめんね。義妹のおねがいだから」

そう言った瞬間、聡と呼ばれていた男子生徒が視界から消える。

「きゃっ!」

ゆきは後ろにいる詩織の短い悲鳴に振り返る。

見ると詩織は聡に抱えられていた。

「詩織!？」

すでに詩織は気絶しているようだった。

「聡。そのまま帰るよ」

「え？俺このまま?」

「そのまま」

「他の人の目とかは?」

「気にするの?」

「気にするよ!?!」

「じゃあ車だしましよ」

「了解っ」

ゆきはこの会話中詩織を助けようと隙をつかっていたが、聡にはまったく隙がなかった。

二人が去った後ゆきはすぐに行動する。

「（はやく亮くに伝えないと……！）」

ゆきは走って亮の家に向かった。

（亮）

「それダウト！億！」

「甘いですよ亮さん」

「ノオオオオオオオオオオオ！」

「亮弱いわね……」

「亮くん！！」

「円なんか言っただか？」

「私じゃないよ？」

「こっちこっち！」

「……………」

「なんでそんな嫌そうな顔してるの……………」

「ごめんごめん。なんかうちの学校の制服着てるからめんどくさくなりそうだなって思ったただけだ」

「丁寧に説明ありがとう。それよりも亮くん！」

「どうした？」

「詩織が攫われた」

「「「な……………なんだってー」「」」

「うわ……………棒読みでそろって言われるととても腹立つ……………」

「それよりもゆきそれ本当か？」

「本当だって！！詩織が詩織にそっくりな沙織って娘に誘拐されたんだってー！」

「ふむ……………ゆき？エイプリルフルは終わったぞ？」

「だから嘘じゃないって言うてるでしょうー！？」

「どう思っ結衣？」

「嘘ついてるようには思えないんですけどちょっと信じられないで

すよね……どこで攫われたんですか？」

「学校」

「あ、もうないわー」

「冗談にしても笑えませんね」

「もう！！なんで信じてくれないの!？」

「あ、電話だ」

俺は携帯が着信したので携帯を取り出す。

「詩織からだ」

俺は電話に出る。

「詩織？なんでまだ帰ってこないんだ？」

『あんた誰』

「詩織にそんなこと言われるなんて俺泣きそう」

『あんたが詩織にお兄ちゃんなんて呼ばれてる人？』

詩織じゃない……？

でも声は似てる……

「あれー？もしかして詩織じゃないかなー？」

『もしかしくなくても詩織じゃないわよ』

「お前誰だ」

俺は一気に声のトーンを落として訊く。

『私は……』

『ねえ！？俺にもお兄ちゃんって言うてみてくれない！？ねえ！？』

『聴つるさい！ー！』

『しめんなさい……』

さっきの声どっかで聞いたな……どこだ……？

『私は山崎沙織。詩織の双子の姉よ』

第117話 女の子の忘れてかった過去？ 〈詩織編〉（後書き）

我ながら詩織ときたから沙織とは名前のセンスがないと思う……
まあもともと姉なんて登場させる気なかったからしょうがない……
か？

第118話 女の子の忘れたかった過去？ 〈詩織編〉（前書き）

久しぶりにきしめんを聴いて『そういえばやってないエロゲがあったな……』と思いやつてないエロゲを見てみたらかなりの数あって驚いたカレーライスです。

ラノベ消費もできてないし……

なんか2週間後にはテストだし……

だめだ……もうだめだ……

「せっかくの登場の機会を自分で無にしたか……」

「でもどうしよっか？詩織の居場所なんてわからないよ？」

「てててててて〜ん……GPS〜」

なんかド えもんみたいに結衣が言いだした。

「詩織の携帯のGPSで場所を調べればいいんですよ」

結衣はすぐに行動。

「……でたです！」

「二駅くらい離れてるな……」

「さっそく行きましょ」

「そつだな。とりあえず行動だ。なにをするのかは後で考えればいい」

俺たちはすぐに家を出る。

「あ、ゆき」

「なに？」

「お前は帰っていいぞ？知らせてくれてありがとう。でもここから先は俺たちの問題だ。お前になにかあったら大変だからな」

そう言われたらゆきはなにも言えなかった。

（沙織）

「ここまで言えば大丈夫でしょ」

電話を終えた沙織はそう言う。

「うーん？むしろ来るんじゃないか？」

聡は答える。

「大丈夫大丈夫。どうせ場所なんてわからないはずだし」

「GPS」

「へ？」

「携帯の電源きったか？GPSで場所調べられるぞ？」

「あああああああああ！」

沙織は慌てる。

「これがいろいろ天才だもんな……天然さえなければきつともっとすごいんだろうな……」

聡はあきれながらも慌てる沙織を見て微笑んだ。

く亮く

「さて……まずは行ってどうするか……」

目的の駅につき、詩織がいるであろう場所に向かう途中俺たちは悩んでいた。

「詩織を返してくださいじゃどうせ門前払いがオチだもんね」

「力押しでいいんじゃない？」

「それも難しいと思いますよ？GPSで表示されたところ高級住宅街なんですよね……」

「お金持ちってこと？」

「だからちょっと力押しはまずいかなって思うんですよ」

「なんだかんだやってる間についてしまった……」

俺たちは目的地についてしまう。

「まずはあれだ。インターフォンを押そう」

ピンポン。

『詩織は返さないわよっ？』

「第一声がそれ!？」

『ほかになに言えばいいのよ?』

『俺に「お兄ちゃん」とか』

『だからあんたは黙ってなさい!』

「返してもらえないとなると力押ししかないな……」

『あんた捕まるわよ?』

「それでも詩織は俺たちの家族だからな」

『だったら詩織を助けてみなさいよ。家族なんですよ?』

「やってやるさ。絶対に」

門が開く。

『どうせあんたなんか助けられない……血のつながった私でも無理だったんだから……』

第119話 女の子の忘れてかった過去？ 〈詩織編〉（前書き）

どうもお久しぶりです……

何回か更新しようとして投稿画面開いたんですよ？

でもインターネット接続が切れたりしてせっかく書いたものが消え
たんですよ……

まあ単純に思い浮かばなかったってときのほうが多いですけど……

まあまた頑張らせていただきます。

第119話 女の子の忘れてかった過去? 〈詩織編〉

「助けると言ったのはいいものの……これは勝手に入っていいものなのか？」

「一応あっちも了承してるんだしいんじゃないの？」

「なんかこんな大変なことが起こってるのに緊張感がないのがこの小説のダメなところです」

「今回の話間空きすぎて作者もなにがどうなってるか思い出せてないもんね」

「……とりあえず行こうか」

俺たちは門をくぐる。

「これ本当に入って大丈夫かな？警備会社とか来ないかな？」

「亮……さっきあんなに堂々としてたんだから今も堂々としてようよ」
「……」

「『やってやるさ。絶対に』キリッっていうのは嘘ですか!？」

「ちょっと言い直さないでくれない？なんか恥ずかしいから……」

「ほら早く行こうよ。詩織のこと助けるんでしょ？」

「それはそうだけど……これドアとか勝手に開けていいのか……?」

「「「……………」」」

俺たちが迷っているとドアが勝手に開いた。

いや、誰かが内側から開けた。

「いらっしやい」

ドアを開いた人物はそう言った。

そしてその顔に俺と優里は見覚えがあった。

「「うちのクラスの変態!?!」」

「え!?!俺ってそういう立ち位置なの!?!」

「亮さん、優里知ってるですか?」

「うちのクラスの自己紹介で『俺は義妹が好きです!』とか言ってた人」

「「「つわ……………」」」

結衣と円が引いている。

「でもどうして…………えっと…………名前なんだっけな…………」

俺はそいつの名前が思い出せない。

沙織から家の中に誰も入れるなどの命令で来た」

いきなり雰囲気が変わった。

何人も近づかせようとしないまるで剣のように鋭い雰囲気。

「な、なあ聡？ロボットの三大原則ってわかるか？」

俺はなんとか声をしぼりだす。

「そんなのもう古いと誰かが言っていた」

え？あれって古いの？初めて知った。

「ロボットですか……それはすごい。ちょっと構造とか気になりますね。どうしてそんなに人間らしい反応ができるのか、とか。その体を動かすエネルギーはどこからきてるのか、とか。気になります。思わず解体したくなるです」

「結衣？」

結衣の雰囲気も変わったように思えた。

「私はね、亮さん。みんなが笑顔になってほしいからいるんなものをつくるんです。だからみんなが笑顔になるためならこのロボットの解体だつてしてみせますよ？」

「結衣怒ってる？」

円がおそろおそろ訊く。

「もちろん。私たちの笑顔の生活を壊したんですからあたりまえでしょう？ここは私にまかせて先にいくです」

「なんとなく死亡フラグな気もするが……じゃあ結衣任せた！」

俺たちは走って屋敷の中に入ろうとする。

しかしすぐに聡が回り込んでくる。

「俺は誰も入れるなと命令されていると言ったはずだが？」

感情のない目。

やはりロボットなのかもしれないと本気で思わせる目だ。

聡はそう言いながら回し蹴りを放とうとするが、

「私もここは私に任せてくださいと言ったんです。だからあなたの相手は私ですよ？」

結衣は聡の回し蹴りを軽々と受け止める。

その隙に俺たちは屋敷の中に入った。

「さて、これで屋敷の中に3人も入ってしまいましたね。とりあえず私の一勝でしょうか？」

「お前本当に人間か？」

「ええ。人間ですよ？むしろあなたは本当にロボットですか？そんなに感情を出せるなんて」

「……………」

聡は無言で亮たちを追いに行こうとした。

「だから、ここは私に任せてくださいと亮さんたちに宣言したんですから。あなたは逃がせませんよ？」

いつのまにか結衣は聡の進行方向に回り込んでいた。

「さて、じっくり研究させてくださいね」

第119話 女の子の忘れたかった過去？
く詩織編く（後書き）

なんか全然違う話に……

ロボットってなによ？なにこのバトル展開？

あかん収集つかなくなりそう……

第120話 女の子の忘れたかった過去? 〈詩織編〉(前書き)

この過去編長くないかな?と思っているカレライスです。ちなみにまだまだ終わる気がしません…最低あと3話はほしい……

今日はグリザイアの果実について話そうかと…

フロントウイングの10周年作品としてつくられたグリザイアシリーズの1作目にあたる作品ですね。

PSPでの発売も決定。アニメ化も検討されてるらしいです。

これ18禁じゃなかったら蒔菜のキャラどうするんだ……あの娘しやべれなくなるぞ……それに天音だってビッチキャラだからなにも目立たなく……

まあそんな話は置いておいて正直2011年に発売したエロゲで最高の出来ではないかと思えます(個人的に)

まだ2011年は残ってますからね、最高と言うには早いかもしれませんがね。

もしかしたら妹が365人でてくるゲームが最高になるかもしれないね。

2012年の2月24日には2作目のグリザイアの迷宮も発売します。

そして2012年内にグリザイアの楽園が発売するわけですが……いったい2作目以降どうなるんだ……

暁の護衛みたいな感じになるんですかね?

でも天音ルート最後……なんでもありません。

公式のCG見ると一姫のエロもあるんですね……(まあ女同士のですが)

今から楽しみでしょうがないです。

Rewriteのファンディスクのタイトルはやっぱり『Rewr

i t e エクスタシー』ですかね？（笑）

第120話 女の子の忘れたかった過去？ 〈詩織編〉

結衣との出会ってからいろいろあった。

遊んだり、喧嘩したり、笑ったり、怒ったり、泣いたり……

その結衣ももういない。

もう……いない。

「なにその結衣が死んだみたいな語り」

「一応シリアスな雰囲気だしておこうかと」

「亮くんそれすごく無駄な気遣いだね！」

「うん。笑顔で言われるとすごく傷つくぞー？」

とりあえず屋敷内に入った俺たち。

ここから詩織を探さないといけないのだが……

とにかく部屋数が多い。

まあだからといって見つからないわけでもなかった。

「なあこれ罫か？」

「いやもしかしたらただのバカかもよ？」

「円。見られてるかもしれないんだからそんな失礼なこと言ったらだめでしょ？」

俺たちの目の前には『詩織の部屋』と書かれた扉。

「まあ入ってみるか」

俺はドアノブに手をかけた。

「「え？」」

後ろの二人の「「え？」」という声を聞いて振り向いたときにはもう二人の姿はなかった。

よくみると床に穴があいている。

「落とし穴？」

すべりだいみたいな要領で落ちるっばいからげの心配はないだろう。

でもどうしてこんなところで開くんだけ？侵入者を排除したいのならもっとドアの前 shouldn't 意味ないだろ……

く優里・円く

「落ちたわね」

「そつだね」

「おもしろい屋敷ね」

「まあ亮くんがこの先はなんとかしてくれるよ」

「そつね。じゃあ私たちは私たちががんばりますか」

「うん」

「どうして私たちをここに呼んだの？」

優里が言葉を投げかける先には山崎沙織がいた。

「どうしてって言われても……本当は3人落とすつもりだったけど落とし穴の位置を間違えた……じゃなくて……あの男が詩織を助けるんでしょ？ だったらあなたたちがいなくても大丈夫じゃない」

「まあ確かにそつだね」

「じゃあお話でもしない？ 山崎沙織さん？」

「お話？ 質問の間違いじゃないの？」

沙織は作ったような笑顔で優里たちと向かいあった。

〈結衣〉

結衣と聡は向かい合っていた。

「別に降参してもかまいませんよ？私もこんなすばらしいロボット壊すなんてもつたいたいと思いますし」

「壊されても沙織が直すから大丈夫だ。それよりも自分の体が壊されないか心配しなくていいのか？」

「体なんて自分で直せるです」

「俺は早く屋敷に入った3人を追いたい。でもお前は追わせたくない。それで合ってるか？」

「ええ」

「じゃあ行動不能にして追うしかないな」

「私はあなたのことを足止めできればいいわけですからね。でも行動不能にしたほうがなにかと楽そうです」

先に動いたのは聡だった。

人間ではありえない突進。

スピードが桁違い。

普通このスピードで突進されたら驚いて身を一瞬硬直させてしまう。

その時を狙うのが聡の狙いだった。

が、結衣はそれをなんとも思わず冷静に対処する。

冷静にそして最低限の動きでその突進をかわすと結衣が反撃に入る。
跳躍してからの踵落とし。

そんなの普通の人間、ましてや結衣になどできるはずのない行為。
しかし結衣はそれを平然と聡に当てる。

聡は一瞬なにが起きたか理解できない。

いきなり結衣が消えたかとおもつとすぐに右肩に衝撃。

そして聡は体勢を崩す。

その体勢を崩したところに結衣は容赦なく回し蹴りをいれる。

十分な遠心力を加えた回し蹴りは聡に脇腹をえぐる。

そしてそのまま壁までぶつとばす。

「いつつ……」

「痛覚まであるんですか？本当にロボットなのか疑いたくなります
ね……」

「わかってきたぞ……そのトリック……」

第121話 女の子の忘れてかった過去? 〈詩織編〉(前書き)

テストまで一週間きりました。

今回赤点とるとさすがにまずいです。

さて、セブンスドラゴン2020ですが……

なんて声優の無駄使い……全部の声聴くために頑張らなくちゃいけないと思うと憂鬱です……

恋と選挙とチヨコレートアニメ化おめでとございます。

思えば63話あたりに恋チヨコやっていたんですが……

あの時は輝いてたなあ……

第121話 女の子の忘れたかった過去? 〈詩織編〉

〈結衣〉

「わかってきたぞ……そのトリック……おかしかったんだ。やけに体温が高すぎる。お前、自分の血の流れ早くしてるな?」

「ええ。その通りです」

結衣は聡を見据えながら言う。

「でもそんなことしたら自分の体が壊れる。だから自分の体も弄つてやがるな?本当に人間か?」

「私は自分の家族を守るためならなんだってするです。たとえその生活から自分が外れることになっても……っ!」

結衣は走り出す。

かかと落としと見せかけて落としした足を軸に回し蹴り。

渾身の一撃。

入った!

そう確信した。

しかし、

「!?!」

回し蹴りは止められる。

「いや〜。動きが常人離れしてるから解析に手間取った。ここからは俺の独壇場だ」

結衣はとっさに聡から離れる。

聡はそれを追撃。

「顎を守るために顔をガード。なら俺は腹に叩き込む」

「っ!」

結衣が行動する前に結衣の動きを予測したかのようなつぶやき。

実際結衣は顔を守っていた。

掌底。

結衣は宙に飛ばされる。

そしてそのまま落下し、地面にたたきつけられてしまう。

「まだ……です……っ」

結衣は必死に立ち上がる。

「結構本気の一撃だったんだが……」

「私は……守るんです……」じほっ！じほっ！

結衣は咽る。

口から出てきたのは血。

「副作用。そんなドーピングしといて副作用がないほうがおかしい。外から打たれ弱くなってたか？」

「はあ……はあ……守る……んです」

「もうやめとけ。俺にあいつらを追われたくないなら一言言えばいい」

「……？」

「『お義兄ちゃん』と」

「へ？」

く優里・田く

「いや〜調べた調べた」

「なかなか興味深かったね優里」

「うんうん。顔があんなにそっくりだからね」

「もうお嫁にいけない……」

満足そうな優里と円。そしてなぜか顔を赤くしてぐったりしている沙織。

「じゃあお話でもしない？山崎沙織さん？」

「お話？質問の間違いじゃないの？」

沙織は作ったような笑顔で優里たちと向かいあった。

「質問じゃなくて調査、かな？」

「へ？」

優里がいじわるそうな顔をした後沙織は円に後ろに回り込まれていることを知る。

そして、

「ひゃん！？」

「おお～なかなかいい声だね～」

「円ちゃんと測りなさいよ？」

「わかってるって」

「ちょ～！なにして……」

「私はこっちのほうも……」

「あっ！……だめえ……そこさわっちゃ……」

「なかなか感度は良好と」

「隊長！」

「どうした田隊長」

「詩織のほうが大きいであります！」

「ふむ。そうかそうか。顔は同じでも違うのか」

「あなたなんで……あっ！……人の……そこ……こすりながら話せるの！？」

「女同士なら恥ずかしくない！って思わないとやっていけないのよ！このバカ！」

「いきなり……んっ……バカ呼ばわりって……」

「結衣が……結衣があ……」

「いきなり泣き始めた！？泣きたいのはこっちよ！妹よりも小さいって言われるし！ずっとこすってくるし！」

く
亮く

「詩織？」

「お兄ちゃん」

部屋に入ると詩織がなんか大層な格好をして座っていた。

「うお！すげえな」

「かわいい？」

「ああ、かわいいよ」

俺は詩織の頭を撫でてやる。

「私ね、全部思い出したよ」

第122話 女の子の忘れたかった過去？ 〈詩織編〉（前書き）

昨日初めてギルティクラウンを見たんですがおもしろいですね。
ヴァイス買おうか悩んでるくらいです。

テスト？まだ明日もありますよ……

セブンスドラゴンとりあえず終わりました。

裏ボスが意外に楽に倒せた……

さて、次はなにしましょうかね

フォルシモが発売延期だそうですね……

クリスマスは紗雪とすごす予定だったのに……

OPは相変わらずよかったです。今回も妖精さんはうたってくれる
んでしょうか？

第122話 女の子の忘れてかった過去？ 〈詩織編〉

目が覚めたらそこにはお兄ちゃんのおとうさんとおかあさんがいた。

「君は詩織っていうんだ」

お兄ちゃんのおとうさんは優しい笑顔で私の目を見てそう言った。

「しおり?」

「そう詩織だ。山崎詩織。それが君の名前だよ」

「私の……名前……」

「私が今日からあなたのお母さん。で、こいつが」

「え?俺ってそんな扱いなの?」

「で、こいつは……やっぱりいつか」

「あれ?俺って妻に嫌われてる?」

「詩織。お腹空いてない?」

私は首を縦に振る。

「ご飯にしようか」

お兄ちゃんのおかあさんはあったかいごはんを作ってくれた。

おとうさんはいっぱい遊んでくれた。

でもそれは……私の辛い記憶の後のこと。

思い出さないように深いところで蓋をした記憶の後。

とても幸せだった記憶ととても幸せだった記憶の間の記憶。

「私の本当のおとうさんとおかあさんは殺されていた」

「……………」

俺は無言で詩織の話を聞く。

なんとなく詩織の両親が殺されていたことはわかっていた。

夏休みのお化け屋敷のとき詩織の様子がおかしかった。

あのお化け屋敷でなにかを思い出してあんなった。

そして自分でそのなにかに蓋をしてまた忘れたんだ。

詩織の両親はどちらも孤児だった。

二人とも親に捨てられた子供だった。

小さいころからその二人は仲が良くそしてそのまま成長していった。

二人が結婚するのはみんなわかっていた。

そしてその二人の間に産まれた双子。

二人は沙織と詩織。そう双子に名づけた。

その4人は普通の生活をした。

裕福でもなく貧しくでもない。

普通の生活。

その4人の生活が始まって13年。

事件が起きる。

その日は両親の仕事が休みで双子が学校から帰ってきたらみんなで購入物に行く予定だった。

双子が学校から帰るとそこには血まみれの両親の姿。

両親は孤児のため親戚等はおらず双子は孤児院に預けられた。

沙織は詩織と二人暮らしをするために自分たちを守ってくれる存在を作り出すことをがんばるようになった。

一方詩織は記憶と、そして感情を失った。

詩織はいつもただぼーっとしているだけの生活を送っていた。

そこに二人は現れる。

上園亮介。 上園美鈴。

二人は詩織を引き取った。

詩織が引き取られる時沙織はなにも行動を起こさなかった。

いや、起こせなかった。

今の自分では詩織を幸せにできない。

ならいつか幸せにできるだけの力を持って迎えに行こう。

そう決意した。

亮介と美鈴の二人は詩織の感情を取り戻させることに成功。

そして今に至る。

「私は一度死んでるんだ。でもパパたちのおかげで私はいまこうして笑っていられる」

「そっか」

「お兄ちゃん」

「ん？」

「好きだよ」

「へ？」

「パパたちのおかげでお兄ちゃんのことを好きって感情を持てるようになった。感謝しないとね」

「そうか」

俺は詩織の頭をなでてやる。

「詩織はこれからどうするんだ？このままうちで暮らすか？それともここに住むか？」

「お兄ちゃんはどうしてほしい？」

「いや、俺は詩織に任せるよ」

「むう……お兄ちゃんは女心がわかってないね。いいもん。みんなで話し合って決めるから」

俺たちは部屋を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6005m/>

女の子たちは居候？

2011年12月11日02時52分発行